

ライブラ秘書嬢の異世 界渡航

一星

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——ただあてどなく彷徨う漂泊ではなく、あの場所に還るための旅路と、そう信じて
今日を歩むのだ。

血界戦線×ヒロアカのクロスオーバー「人魚姫は英雄の夢を見るか?」(https://syosetu.org/novel/203924/)の番外編・外伝です。

話によつては本編より恋愛傾向の強いものなどがございますので、各話の注意事項を
読んでからお読み下さい。

外伝はほぼパラレル時間軸のため、本編とは別物としてお考え下さい。

目次

人魚姫は英雄の夢を見るか？

Extra 01・銀の弾丸（×名探偵コナ
ン）

ゆく年くる年								
青年Lの手記								
深淵螢石								
ダイヤモンドは青い化け物								
途上にて瞬く								
番外編一窒息しても生きたい(未来IF)								
15cmの未来の余白								
49。4542, N.	11。	07	52	48	37	26	19	1
5, E								
土曜日の君に似合いの花束を	—	93	75	163	139	たくさんの名前とひとつ的心臓	陽溜まる幽靈	タブラ・ラサで構わない
炉には白いアザレアをくべてくれ								
頭上の星をひとつきみに帰す	—							
貫かれた鼓動を数えて	—							
▼After Word								
199	189	184		152		126	118	

グツドエンドの逆算

215

施しの英雄と天秤の淑女（×FGO）

施しの英雄と天秤の淑女

236

望む未来に星は落ちない

258

朽ちゆく献身の宛名

277

秘書嬢チーム紹介

283

L e r • v e n o c t u r n e

323

292

夢幻召喚

330

21グラムの無限大

341

言霊幸ふ森

345

光輝救済聖典クルクシエートラムの神

323

M a t e r i a l

363

蒼穹のヴァリアシオン（×グラブル）

星屑めいた絶対零度の花びら

415

肌になじむ懊惱

437

竜殺しと不死殺し

458

Anamnesis is over

415

t h e r o s e.

463

マテリアル in グラブル

466

—

463

人魚姫は英雄の夢を見るか？

番外編

ゆく年くる年

【年の瀬】

「もう今年もあと2日やねえ」

「そうだね」

「今年は本当に色々なことがあつたな！」

「まさか年末を皆と寮で過ごすことになるなんてね……」

「上半期が特に怒涛だったからな」

「U.S.J襲撃事件にヒーロー殺しとの交戦、合宿前はイズクが死柄木とエンカウント、合宿は強襲……うわあ、思い返せばホントに事件に事欠かなかつた年だな……」

【掃除】

「皆部屋の掃除は済んだかい？」 明日は全員で一斉に共用フロアの掃除になるから、と
いうことだつたが……」

「窓拭きとかは終わつたんだけど、途中でまとめて途中のヒーローノートを見つけちゃつ

てついつい……」

「分かるわ～そういうんつて脱線するとなかなか戻つて来れんよね」

【掃除②】

「私も途中から洋書読み返してて気づいたら日が暮れてた」

「轟くんはどうだい？」

「元々あんまり荷物ねえから、畳上げて掃除したりするくらいで済んだな」

「あれ取り外しできるやつなんだ……」

「どうかあの改造をどうやつて一人で完成させたのか未だに疑問なんだけど」

【クリスマス】

「砂藤くんが焼いてくれたケーキめっちゃ美味しかった!!」

「男子高校生がまさかブツシユドノエル作るとは思わなかつた……将来レシピ本出せそ

う

「大量にオードブルとかメイン料理黙々と同時進行で作つてた星合さんも凄かつたよ

……」

「途中から何人か料理の方に参加してたな」

「寮生活がはじまつて、バースデーとかハロウインみたいなイベント事の度に飾り付けが本格的になつてつてるそつちも凄いと思うけどね……」

【クリスマス②】

「とはいって、量がとにかく多いから梅雨ちゃんとか爆豪が手伝ってくれて助かつた……」「爆豪くんが料理班に合流した時はびっくりした」

「あのかつちやんが……」

「最近はそんな突つかかられなくなつたから、話すのは楽になつたかな」

「お前らいつの間にか仲良くなつたよな」

「うむ、良いことだ！」

※ちなみに 秘書嬢シリーズメシウマ3 銃士

嬢（洋食中心に世界各国の家庭料理）

砂藤くん（スイーツ専門だがプロレベル）

梅雨ちゃん（ザ・日本の食卓。得意ジャンルはないが色々なコツを知つてるので家庭料理が美味）

番外編：爆豪（基本レシピを見れば初見で作れるがあんまり作ろうという気にならない）

【聖夜の知らない話】

「……ちなみにここだけの話。料理の一部は日頃のお札を込めて相澤先生達に献上した。クリスマスで羽目を外した生徒が出た時、すぐ駆けつけられるように外に飲みに行けない先生方に、おつまみになりそうな物をと思つて。そしたらまあそれなりに先生方も酔つてたんだ。…………良いなあお酒飲みたい。……おつと本音が出た。まあ案の定絡まれてマイク先生と英語でクリスマスキヤロル歌つたり、好きな子居ないのつてミッドナイトに迫られたりした。そこはまあ、苦笑いで乗り切つたんだけど。

……不意にさ、青春してる？ 楽しい？ つて、素面の心配した声で訊かれてさ。先生方、皆こっち見てるんだよ」

「ハツとしたよね。先生方は、入学前から私があんまり良い子ども時代を送つてないことを知つてるから。勿論、それが全てまことではないけど、少なくともこの姿だった時の私は、とても幸せとはいえないなかつた。でも、最近の私は、ふとした瞬間本当の子どもみたいに振る舞つてる。少し怖いけど。

でもそれは、きっとすごいことだ。私が取りこぼしたまま大人になつてしまつたものを、彼らが取り戻させてくれた。不可能を可能にした。無自覚で無邪氣で、だからこそ愛おしい。それだけで、私はここに来れて良かったって思えるんだ。……その点につい

ては、堕落王には感謝しても良いかな。

だから、楽しくて幸せですって、青春してますって自然に笑えたよ。……怖いぐらいだ、とは流石に言えなかつたけど。また心配かけるのは本意じやないから。その後先生方に揉みくちゃにされて、寮に戻るのが遅くなつたのは、ご愛嬌かな。共有スペースに残つてた常闇くんや障子くん、轟とお茶飲んで部屋に戻つたよ」

「……生きていて良かつたなつて思える時が来るなんて、きつと一年と少し前の私は思いもよらないだろう。H.Lでは、いつ死んでも良いように懸命に生きるだけだつたら。目が覚めて、1日の始まりを噛み締めたいほど喜ばしく思えるのは、彼らのお陰だ。いつか帰つても、思い出を抱いて生きていける」

「……んん、ちょっとした独り言のつもりだつたのに、長くなつちやつたな。ごめん、あまり気にしなくて良い。日付も変わつたね。2016年、最後の日だ。明日はまた大掃除だし、夕飯は大量に蕎麦を湯がいて、梅雨ちゃんに天ぷらの手ほどきをしてもらう予定なんだ。蕎麦だから轟が喜びそうだ。去年の暮れと正月は、あんまりそれらしいことしていないから、2度目の今回は皆に日本の年越しとお正月を教えてもらうつもり。
……その逆もいつか、出来たら楽しいだろうな。

夜も遅いし、今夜はそろそろやめにしよう。起きたら、また皆と私のお喋りに付き合つてほしい。それじや、おやすみなさい」

【大晦日——大掃除】

千晶「おはよう。……って言つても、もうこんな時間だけどね」（朝10時頃）

梅雨「今は相澤先生の監督のもと、皆で共有スペースのお掃除中よ」

砂「キッチンをよく使う俺たち三人がキッチン担当だ」

「とはいへ、キッチンは使うメンバーがメンバーだから、普段からこまめに汚れが溜まらないよう掃除してるし、IHコンロだし、普段掃除できていない所をするくらいかな。それに他の場所を担当してるメンバーからヘルプ来るんだよね」

「障子と星合くらいだからな、脚立なしで天井近くまで掃除できんの」

「障子ちゃんは複製腕で、千晶ちゃんは血の糸を操つて皆が届かない所を掃除してくれるから助かるわ」

「一家に一台とか便利な家電扱いした声が聞こえたんだけどあれ本当に誰かな？」

（ニッコリ）

「おーい発言した奴早めに自首しろー」

【大晦日——夜】

「紅白始まつたねえ」

「タオル回して踊り狂つてた上鳴くんとミナとトオルがかわいかつた」

「みかんうめえ」

「ちゅーか千晶ちゃんが溶けとる」

「おこたは良い文明だよね……疲れた……」

「全員分のお蕎麦を湯がいたり天ぷら揚げてたものね、お疲れ様」

「梅雨ちゃんくん」

「梅雨ちゃんもお疲れ様！」

「轟ちゃん、お邪魔するわね」

「おう」

「ちなみに説明すると、皆観たい番組が違うから、晩御飯が終わつてからはそれぞれ番組ごとにテレビを置いてる子の部屋に固まつてるんだ」

「ガキ使が圧倒的多数やつたからそつちは共有スペースのおつきいテレビで、私たちは畳とコタツのある轟くんの部屋にお邪魔してるんよ。畳落ち着く！」

「緑谷と麗日は何してんだアレ？」

「あーうんまあ、気にしない気にしない」

【除夜の鐘】

「あ、除夜の鐘や」

「紅白が終わつてこれに切り替わると、年末だつて気になるわね、ケロ」「鳴らす回数は煩惱の数、だつけ？」

「うん。108回」

「……人間の煩惱つてその程度に収まるもんなのかな……」「星合さんの顔がうららかじやなくなつてる……！」

千晶「明けましておめでとうございます!!!! 中の人気がFGOアニメ見てたせいで結局年末の様子をお伝えできず年明けのご挨拶となりますが、本年も中の人とライブラ秘書嬢シリーズを宜しくお願ひ申し上げます！」

一同『よろしくお願ひします!!』

【初詣】

「さて、年も越えたことだしそろそろお暇しようか」

「さすがに安全の為に初詣は夜が明けたら、つてことになつてるもんね」「朝方に行くくん、何気に初めてかもしれん……」

「そこはお家によつてそれぞれだもんね」

「そもそも初詣 자체初めてなのがここにいる」

「そうなのか！ ではきちんと初詣の作法を責任もつて教えねば！」

「よろしく。じゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

〔初詣②〕

「千晶ちゃんは何お願ひした？」

「む、麗日くん、初詣はお願ひ事ではなく神様へのごあいさむぐつ」

〔委員長ちよい黙ろう〕

「うーん……神様に何お願ひしていいか分からなくなつたから、今年も皆、大怪我や病気

もなく過ごせるようお見守りくださいって。こういうのがアリかは分からぬけど」「そういうお願ひ事はありますわ！」

「（いい子や……）」

「（良い子だ……）」

〔アルコール（偽）の気配を察知〕

「あ、甘酒配つてる！」

「あまざけ?」

「子どもが飲んでも酔わんお酒みたいなもんやよ」

「日本酒を造るときに出来る酒粕で作った甘めの飲み物つて感じかな」

「へえ……(キラキラ)」

「さみいし、貰いに行くか」

「行く」

「即答」

【A組格付けチェック】

「最初は皆思い思いに見てたんだ……けど途中から共有スペースのソファーアをA Bのゾーンに分けて問題ごとに各自移動して、A組格付けチェックが始まつたのであつた……」

「マイク持つて誰に喋つてんだ峰田?」

(中の人格付けチェック全く未視聴でD A S Hの方見てたのほぼ空想です)

【格付け①——ワイン】

「毎回思うけどすげーの持つてくるよな」

「ぶつちやけ今回もG○cktの連勝記録のが気になる」

「（ブリオンの90年物ヴィンテージ……良いなあチーズと一緒に呑みたい……呑めないことだけが残念……）」

「（何でだろう……星合さんの目が据わってる……真剣だ……ゴクリ）」「（チエインは勿論、ステイーブンやクラウスだつて喜んで飲むだらうなあ……ザップにはワインテージなんて勿体無い、絶対これやらせても安酒と違ひ分かんないだらうなあ、素面なら野生の勘で当てられても、酩酊すると手がつけられないから……レオツエットはあんまり飲まなかつたなあ……）」

【三重奏】

「28億v s 80万て……：（呆れ）

「ここまで差があると分かりそうなものですぐ……」

「そういえば今年のウイーンフィルニューイヤーコンサートの指揮者はドウダメル氏だそうだな。後で録画を観るのが楽しみだ」

「そうちらしいですわね。母も楽しみにしてましたわ」

「あそここの会話の格調高さよ」

【個人レッスン in ラインヘルツ家】

「八百万さんはやつぱピアノとか習つたりした?」

「ええ、楽器はピアノとヴァイオリンのお稽古をしてましたわ」

「ザ・お嬢様つて感じだ!」

「千晶もオルガン得意だけど、誰かに習つたりした?」

「いや、オルガンは見様見真似だつたかな……習つたのはヴァイオリンの方かなあ」

「ヴァイオリン……」

「毎回思うけど星合も実はお嬢じやねえの?」

(なお教師はクラウス母)

【格付け——結果】

「テレビじや分からぬ味覚を除いて全問正解は八百万と星合、一問×だつたのは飯田と轟と爆豪と緑谷、あとはまちまちだつたぜ」

「途中から八百万達の正解率がヤバい事に気付いて公平のために二人は直前に着席ルールにしたら、座らなかつた方の絶望感がテレビの中とリンクしてた」

「あいつらが次世代のG O c k t だつたんだ……」

「ちなみにこちらは味覚が採点基準に入つてたら速攻で映す価値無しになるところだつ

た峰田です」

「八百万は分かるとしてやつぱ星合も隠れセレブだろ」「隠れセレブとは」

【帰省ラツシユ】

「んじや、俺らも行つてくるわ」

「お互いい良い正月を、だな！」

「うん。皆気を付けて」

「行つてくるねー！」

「……」

「……」

「……何人かは残つているとはいえ、皆実家に帰ると、静かだねえ」

「そうだな」

「轟は冬美さんに顔見せに帰らないの？」

「帰らねえよ。どうせ帰つたつて親父にしごかれるか、面倒な親戚づきあいか仕事の得

意先の挨拶回りに引きずり回されるだけだ。お前こそ帰らねえのか？」

「私は帰つてもなあ…………（待つてる人いないし、オールマイトは教師寮だし）」

「……なら、お母さんの見舞いでも行くか？」

「あ、いいね。……というか、一緒に行つてもいいの？ 新年だしゆつくり二人で過（）してきた方が良くなないかい？」

「駄目だつたらそもそも誘つてねえ。お母さんも、きつと喜ぶ」「そつか」

【てのひら】

「ハンドクリーム？」

「うん。料理とか皿洗いとかで手荒れするから（ぬりぬり）」

「千晶ちやんて手えちよつと大きくない？」

「そう？」

「ほらやつぱちよつと大きい！」

「ほんとだ。手といえば、イズクは去年ですつかり様変わりしたね」

「あはは……これ以上傷が増えないようにしないと……」

「俺も、ハンドクラッシャーにこれ以上ならねえように気をつけねえと……」

「ハンドクラッシャー？」

「あはは、懐かしい」

「……未だに不思議なんだけど」

「うん？」

「轟とか爆豪とか、個性使つてよく手のひら火傷しないなと」

「まあ……個性が発動したての頃はコントロールしきれなくて怪我することはあるぞ」

「かつちやんもほんの一時期だけ、手のひらの皮剥けたかなんかで包帯巻いてたなあ……すぐコツ掴んでたけど」

「そう言う星合の手はよく見ると緑谷に近いな」

「皮ちょい厚めで胼胝多いね（ふにふに」

「意外だな、星合くんは足技中心だろう？」

「まあ、足以外にも弓とか槍とか、たまに剣も使うからねえ。白兵戦も出来て損はないか

ら」

「ハイスペック……！」

【感動の再会とかなかつた】（オールマイトと千晶）

「ちなみに元の世界に帰つたらまず何がしたい？」

「酒」

「エツ」

「おさけのみみたい」

「つていうのは冗談で」

「いや絶対今の本音だつた……」

「正直向こうに帰つた時どれだけ机に仕事積んであるかと考えるだけで微妙に胃が痛いそもそも義兄と同僚が過労死して無いか心配でいつそ現実逃避したい（ノンプレス）」

「緑谷少年が感染つてるよ千晶くん……」

「……仲間が無事なら、それだけで十分です。それだけで良い。私は今ここで、一生分のボーナスを貰つてるようなものですから」

（……人並みの幸せなんて、叶えられない夢を味わえている。なんたる僥倖。それだけで、私はまた戦える。命を擦り減らしても、霧の街に骨を埋めることになつても、頑張れる）

【1／14】（リクエストボックスより秘書嬢からのエール）

千晶「寒い中、最後の追い込みお疲れ様。……明日センター試験だつて聞いたよ。上手く実力が發揮できるか、今すごく不安だと思う。しかも明日大雪だつて予報されてるし。自分のなりたい将来が掴めるかどうか、明日明後日で決まるつて考えたら、緊張すると思う。

でも、そんな時は今までの努力を思い浮かべて。やりたいこと楽しいことを我慢して、模試の連続だつたりして大変だつたと思う。友達と勉強したり、模試の判定で一喜一憂したり。それらは、確かに今の君の血肉になつてゐるはずだから。落ち着いて一つ着実に解いていけば、きっと実力を出せるよ。私も上手くいくよう、お祈りしているね。ささやかだけど。

さ、今日は早めに寝ること。万全の態勢で臨まないとね。明日の持ち物が揃つてるとか、もう一度確かめるのも大事だよ。あと、寒がりさんならカイロとか防寒対策も忘れずにね。うん、じやあおやすみ。がんばれ、受験生さん

【もし風邪を引いたら i n 療】（麗日）

「具合悪い？ 何か欲しいものある？」

「（寒、……） …… 酒」（頭回つてない）

「さけ？」

「（しまつた口が滑つた）」

「鮭かあ／＼でも体調悪いんならほぐしたのをおかゆにちよつと混ぜたほうがええよね、ちよつと聞いてくるから待つてて！」

「…………英語圏じやなくてよかつた」

(お昼ご飯は梅雨ちゃん特製卵がゆ on 鮭フレークのせでした)

青年Lの手記

「クリスのこと？ なんだい少年、藪から棒に……そうだな」

実はね、最初から僕らは仲が良かつたわけではないんだ。ハハハ、意外かい？ おいクラウス、君までそう驚くことは無いだろ。……まあ、君と出会った頃にはもう、僕らは今の僕らみたいな関係だつたからね、仕方がないか。

そう、最初はほんとうに、沢山いる中のちようど偶然、師匠の下での修行時期が被つただけの兄弟弟子だつたんだ。

エスマーラルダ流は牙狩りの数ある流派の例に洩れず、才能さえあれば出自の貴賤を問わなくてね。クリスも適性検査で引っかかつて、エスマーラルダ流の家にやつてきた子だつた。

エスマーラルダは修行中は基本的に同じ一つ屋根の下で暮らすのが伝統でね、ああまた兄弟弟子が増えたのかと思つたくらいだつた。だつて僕以外は師匠含め全員女性だし。女流流派なんだよ、エスマーラルダつて。男の適合者は一世代に出るかないかくらいのレアで、しかも途中で脱落せず一人前になればかなり強力な使い手になるつてことが

過去の経験から分かつてた。僕は三世代ぶり……ようは一世紀ぶりに現れた適合者だつたんだ。当然上は師匠に特に僕に目を掛けるよう圧力を掛けて、まあ師匠は上層部の言うことを素直に聞くようなタマジやないから同じように扱われるわけだけど、たまに連れていかれる支部や本部では甘やかされたりしたわけだよ。可愛くない子どもだつたと思うよ、我ながら。

最初はお互いにあんまりお互いの事を認識してなかつたと思う。修行の段階が違うから別々の行動だし、他にも兄弟弟子がいるんだ、入れ替わりが激しい新入りの世話を焼くタイプでもなかつたしね。

でも、よく一緒に行動してた妹弟子がいうんだよ、あの新入りの子、あなたと似てるわね、つて。その時は反抗期真っ最中で、似てるもんかつてつっぱねまくつてた。

……なんでつて？ うーん……なんだかね、その時のクリスは生きることを諦めてる節があつたんだよ。生氣の死んだ赤い眼で、虚ろに世界を眺めてるようみえた。それでも、歌と料理が上手かつたから、他の兄弟弟子には受け入れられてたけどね。

そこからどうやつて今みたく、一つ屋根の下で暮らすようになつたかつていうと……うんまあ、僕とクリスの名譽のためにも、詳細は伏せておくよ。ははは、ごめんつて。散々引つ張つておいてそれはない？ いやでもね、ほんとにありふれた顛末だよ？

ちよつとばかし、盛大すぎる兄妹げんかをしただけさ。

そう言つて、氷の副官は懐かしそうに目を細めた。

……ああ、レオ。そろそろ來るのではないかと思つていた。そこに掛けたまえ。ギルベルト、お茶を。

ああ、気にせずとも良い。今日の水遣りは完了しているし、少しばかり緑を愛でていただけだ。邪魔などでは全くなき。クリスティアナの事が聞きたいのだろう？ 皆に聞いて回つているのは知つていた。こちらにはいつ聞きに来るのかと、密かに楽しみにしていたのだ。かねてからの友人のことを話すのは、楽しいものだ。

さて、何が聞きたいのかね？ 私が知つている限りなら、彼女の誇りを汚さぬ範囲で答えよう。

彼女との出会いか。あれは、キプロスでの任務のことだつた。その時の私は、^{二年生}師からようやく一人前として、支部での任務に就いても良いと許しを得たばかりの新人だつた。修業とは違う戦場の厳しさを知り、戦場での同胞たちとの語らい、彼らの習いを少

しずつ教わっていた頃に、かの地での任務を言い渡された。その中のメンバーには、既に友であつたステイーブンではないエスメラルダの精銳が居ると聞き、不謹慎ながら期待に胸を躍らせたものだ。少し早く現地入りしてしまったほどに。

なにせ、そのエスメラルダとは、彼が数居る兄弟弟子の中で事あるごとに優秀だと太鼓判を押す妹君だったのだから。

目を灼くほどの大日光に熱せられた白い街並みの中で、ほんの少しの建物の陰に佇む彼女を見て、戦場でもないのに、ありふれた日常の一風景の中で、彼女がそうだとすぐに分かつた。癖のある黒髪に赤目、真夏の日中に履くには、血法を使つても暑いだろうに、鉄板入りの皮のブーツを履いていた。日陰で涼んでいる野良猫の腹を、愛でるように撫でていたのを今でも鮮明に憶えている。

彼女もステイーブンから話を聞いていたのか、私の容貌をみてすぐに誰か思い当たつたらしい。少し話をした後、彼女のお勧めだという地元のレストランで昼食を取り、そしてそこから出る頃にはすっかり私は彼女を信頼していた。義兄であるステイーブンと同様、彼女もまた背中を預けるに足る人物だと思ったのだ。今も、それは変わらない。あの時の、この女性との付き合いは長くなるだろうという直感は外れていなかつたのだと時折思ふほどだ。

だから——牙狩り上層部によつて、彼女が惨い実験の被検体になつてゐると聞いた時

は、目の前が真っ赤に染まるほど、かつてなく激昂してしまった。いくらなんでもやり過ぎだと、実験施設を破壊した時に瓦礫のただなかで、ステイブンや叔父上に窘められたほどに。

血界の眷属への牙を研ぐため、人類の進歩のためといえ、どうして彼女が害されなければならなかつたのかと。彼女の血が秘める可能性がどれほど魅力的であつたとしても、あの所業だけは、私は永遠に許せそうにない。……それほどに、惨憺たる光景だつた。彼女の性格も、あの事件の前後で少々変わつているほどだ。

それでも、徐々に立ち上がつた彼女の強さを、私は心から尊敬している。正確に変化があつたとしても、彼女は昔も今も、彼女であることに変わりはなかつたのだから。

クリスティアナ・I・スターフェイズ。

魔封街結社ライブラが誇る、かの敏腕秘書を、アジア系の幼さが残る美貌をもつ不可視の人狼は、親友、と何の迷いもなく形容してみせた。斗流の炎操る兄弟子は妙に縁のある悪友、風を操る弟弟子は頼もしい先達だと語る。隻眼の狙撃手は可愛い、色々な意味で目の離せない後輩と称し、包帯でその容貌を隠している老執事は心優しい、己が主人に欠かせぬひとだと頬鬚をそよがせた。副官は頼もしい相棒で家族だと、リーダー

は背中を預けるに足る友人だと、そう。

随分前に、ふと思いつてクリスのことを聞いて回った時のメモを見直し、レオナルド・ウォツチは溜息を吐いた。

掛け替えのないひとなのだ。ライブラ秘書という役職が担う仕事は誰かが代わりに出来ても、クリスティアナという人物の穴を埋めることは出来ない。だからこんなにもさみしい。埃が積もらぬよう定期的に老執事バトラーの手によつて掃除はされているものの、彼女のデスクは彼女が忽然と姿を消したあの日のまま、誰かがそこへ居座ることなく、そのままに保たれている。主の帰りを待つように。

そんな空席を見るたびに、ああ大事なものが欠けている、と思うのだ。胸にぽつかりと風穴が空いたような、寒風が吹きこむようなうすら寒い空虚だ。

はやく見つかればいいと思う。非力なレオナルドにはどうすることもできないけれど、白い闇の人込みにまぎれいやしないかと、面影を搜すことはままあるから。

メモの最後は、実はレオナルド自身の当時の印象を語った時のことが綴られている。メンバーから聞き取った話をまとめ上げ、こんなもんかとボールペンの尻でこりこりとこめかみのあたりを搔いたレオナルドの挙動を、コーヒーの入ったマグを手に眺めて

いたステイブンは、前々から胸に秘めていたクエスチョンを口にした。

クリスのことを纏めてるけど、少年的にはクリスはどう見えてるんだい？
俺ですか？

うーん、そうつすね、チエインさんとは違うベクトルで不思議な人だなつて。距離感が独特つていうか。中心人物なのに真ん中にいなくて、でも欠かせない感じ。個人的には、飴と鞭が的確で、もし姉がいたらこういう感じかなとか、思つたり……はは。

深淵螢石

「はい、おーしまい」

自分の足元から数メートル先、今この瞬間にヒトであつたものがただの蛋白質の塊になつたところで青年が声を上げれば、背後で抜き出した情報を上へ伝えている上司が「八つ当たりはやめなさい」と、通信中のスマホの画面から目を離さないまま呟いた。

散々な言われよう、表情はへらへらと笑つたまま、青年は内心憮然としながら振り返る。

「えー、どこがですか？ いつも通り、綺麗さっぱり血も体液も零さず、証拠になりそうなものの後始末が撤去作業以外ないスマートな掃除っぷりでしょ？」

「いえ、八つ当たりです。『彼女^{ネーヴエ}』がいらつしやらない時の貴方は、情報を絞り切つてから、何の感慨もなく、殺し方だけこだわつて、ゴミ屑を丸めるように殺しますから」

「えー、ヒドーイ。俺のこと何だと思つてんですか」「棒読みで言われても」

「アハハ」

数秒、文字を打ち込んでいた指が止まつて、意味ありげな視線を頂戴した。

「アストラ、『プロスト』が、彼女に関する情報収集も含め、しばらく諜報は控えろと」

「——」

その言葉に、その場に数秒沈黙が下りた。青年は胸の内が急速に冷えるのを自覚して、笑みの形に固定していた表情筋をほどいて無に戻す。

何度も狂騒の煽りを受け、ところどころ崩れた廃ビルに電気が通つているはずもなく、光源は持参した古めかしいランプ一つだけだ。闇と^{オハナシ}共存し、同化して生きている青年や上司には特に光源がなくとも夜目は十分に利くが、拷問相手から効率よく必要な情報を聞き出すには、恐怖や自己保身の感情を適度に利用するのが一番だ。不安定な炎の揺らめきと、逆光に隠される表情。まれにいる、クラウスのような強靭な鋼鉄の信念を持つ人間には通用しない手だが、大体の人間は拷問に耐性など無い。敵対組織から送り込まれたスペイは少々手ごわいが、ここは百戦錬磨の軍人すらあつさり死ぬ魔境、ヘルサレムズ・ロット。「外」でのホラー・やスプラッタのジャンルで語られるモノより、死よりもっとむごいことなど山ほどある。むしろ毎日がバーゲンセールだ。

ガラスで覆われたランプの中の炎が、風もないのにジジジ、と音を立てて激しく揺らめく。オレンジの光を受けて、上司の長い前髪の間から覗いている切れ長の銀の眼が静かにこちらを見据えている。その中にいる青年は、能面のような無表情だった。

「……嬢さんに関しては、断るつて返しといてくれます?」

「アストラ」

「……俺が動く理由は、全て嬢さんのため。私設部隊にいる以上、番頭の指示は聞きますけど命令は聞くつもりないんで。まーライブラや部隊に迷惑は掛けませんし? これでもキチンと休んでるんで無駄な心配ですよ」

平坦な声が、軽薄な口調で紡がれる。口調だけはいつも通りに、しかし表情はその軽さに見合わないほど何も感情を映さない。……もとより、青年が笑みを向ける相手は限られている。機械のような青年にまつとうな心を注いで足したのは彼女だ。それが欠けている今、恐怖を煽る手段としても必要が無くなれば、たちまち鉄は温度を喪う。

「行方探しから手工引いた、多忙で薄情などつかの誰かさんと違つて。こつちは行方の手がかりでも探してなきや、氣イ狂いそうなんで」

物言いたげな視線から逃れるように、青年は背を向けたまま気だるげに手を一度ひらりと振る。そしてそのまま、窓ガラスの割れた廃ビルの窓辺から外へ飛び降りた。

一瞬の浮遊感の後、重力に従つて身体は落下する。随分な高度があつたが、落下の勢いを殺して、青年は慌てずに猫のような身のこなしで着地した。

今夜も霧が一段と濃い。

光を透さない泥のような瞳で周囲を一瞥し、立ち上がった青年は迷うことなく大通り

へ向かう道ではなく、暗闇と霧が濃い方へと擦り切れたスニーカーの爪先を向けた。屋根や電柱といった道なき道を足掛かりに、大きく跳躍する。

墮落王のはた迷惑な騒動を終息させるため出動し、そのさなか、墮落王の魔導生物に仕込まれていた魔術に巻き込まれ、魔法陣の強烈な光に呑み込まれた後、ライブラの欠かせない核の一つ、秘書・クリスティアナ・I・スターフェイズは行方不明となつた。忽然と姿は消え、連絡はつかず、GPSはエラーばかりを示した。

ライブラの人海戦術、情報網をもつてしても、彼女の安否どころか生死すら分からないままで、半年が過ぎようとしている。「二段階属性変換」唯一の遣い手を失つてなるものかと、牙狩り本部までもが腰を上げ、すべての支部に発見次第すぐさま伝達せよと連絡を回し、世界中を捜しても、結果は芳しくなかつた。

女々しい未練だ。往生際の悪い願望だ。

世界の均衡を保つライブラとそれを裏側から支えるステイーブンの私設部隊が持つ、ありとあらゆる情報網とツテを駆使しても行方が掴めないというのなら、「行方不明」は「死亡の確認は出来ないが生存は絶望的」に近いことを。私設部隊でも諜報を担う一人であり、情報屋の側面をもつ青年は、理性の内では重々承知していた。

行方知れずになつて半年。それだけの時間があれば、たとえ数千キロ離れた地球の裏

側であろうと、どんなに劣悪な環境にいたとしても、連絡を取れる状況を整える、もしくは世界中に散らばる支部からライブラへと連絡をつけることだつて出来るはずなのだ。どんな劣勢、不利な条件下であろうと、それを持ち前の頭脳と行動力でひっくり返すのがクリスティアナという女性だ。あの辣腕をもつてして打つ手が無い状況下にいるとしたら――それこそ、人智の及ばない領域、堕落王の手許か、異界に繋がる「永遠の虚」^(ウロ)の中か、だ。

不意に視界が曇り、揺らいだ。身を切るような夜風に目を凝らしても滲んだ視界は明瞭さを失つたまま、にわかに熱を帯びる。息を吹き返した胸が軋みを上げている。唇をしつかりと結んでいなければ、喉奥の熱の塊が、たちまち水気を帶びた嗚咽に変わつて空気を震わせてしまいそうだった。

——嗚呼、まだ自分は認められないでいる。億が一にも、かの人が生きている僅かな可能性だけを妄信している。
だつて仕方がない。

彼女が居ない世界など耐えられない。
彼女が消えた世界など意味がない。
生きる意味が、見いだせない。

アストラ。

出来損ないだと、化け物だと、そんな風に蔑まれ見下され虐げられていた青年を、暗くてじめついた、黴臭い牢屋から連れ出してくれたのは彼女だった。識別のために機械的に割り当てられた無機質なナンバーしか持たなかつた己に、温かい名をくれた。生きる意味をくれた。

この命は貰いものだ。彼女が慈しんでくれたもの。たとえそれが、同族意識や憐憫をはらんだ感情だつたとして、一体何の問題があるだろう。人でなしを人として扱つてくれた、名前を、温かい食事を、生きるための知恵を与えて世界を見せてくれた、たつたそれだけの恩義があれば、自分はどんな汚れ仕事だつて喜んで引き受けられる。あの日、この命は彼女の為に使うと決めた。

「……無事に帰つてきてくださいよ、嬢さん……」

宙に身を躍らせながら青年はぼやく。

ライブラは、クリスティアナ・I・スター・フェイズを諦めていない。行方探しからは手を引いたが、それと諦めることはイコールでは結ばれない。

世界を幾度となく救ってきたライブラの思考は非常に柔軟だ。そしてなにより、とても諦めが悪い。

ライブラでもほんの一握りの人物にしか知られていない、情報を得る最後の手段。そのカードを切つたりーダー・クラウスと付き人のK・Kが先日、とある異空間、時間すら操れる異界の顔役の元を訪れた。本来なら、神性存在にすら並び立つという影響力の大きさから、人間がおいそれと謁見できない存在。叶える願いに応じて、それに見合う時間の間、将棋とチエスが融合した異界でもつとも有名な盤上遊戯ボードゲーム・プロスフェアードで勝利するか逃げ切るかすれば、相応の望みが叶えられる。負ければ永劫にアルルエルの脳に取り込まれ、脳味噌だけの無残な姿で、ずっとプロスフェアを差し続ける悲惨な運命を辿る。

願いを賭けることによつて緊張感を与え、奇跡の遊戯を実現するための崇高なる儀式。そのためのギブアンドテイクの契約。

だが、顔役——ドン・アルルエルは願いを聞いたとたん、駒を並べ終えようとしていた遊戯盤を消した。それは、叶えられない願いだから、と。

——「クリスティアナ君の居場所が知りたい」という願いを、私は叶えることができない。なぜなら、彼女が消えたという情報を耳にした時点で私も探したが、全く足取りがつかめなかつたからだ。魔法陣が発動した瞬間から後、彼女はこの人界のどこにも存在していない。空間と時間を操れる私だが、この私でも認識できない次元——「人界」でも「異界」でも、その狭間に点在する小さな異空間、そのどれでもない場所。

おそらく世界の層が違う場所に、彼女が居るからだろう。世界を跨ぐとなれば取り戻すのは難しいだろうけど、頑張ってくれよ。

そう答えたドン・アルルエルに、二人は驚いたに違いない。次元を跨いだ場所にいるかもしれないという、やつと得られた手がかりそのものもそうだが、本来ならその情報すら対価になるべきものだろう、と。対価なしにヒントを与えてくれた彼が何か企んでいるのではと踏んで、剣呑に真意を問うたK・Kに、彼は笑つて言つたという。

「クラウス君に匹敵するプロスフエアーの指し手だ、喪うのは世界的損失だからね」と。

それでも、かの人の生存が確約されたわけではない。人界にも異界にも居ない、さらに遠い次元に居るかもしれない。広大だった捜索範囲が狭まつた程度で、状況が好転したわけではない。そもそも、遙か人類史の始まりから現在に至るまでの織物の中で、人界と異界が寄り添つていることさえ、3年前に大崩落が起つて大穴が空いてようやく確定したほどだ。異界に自力で渡るすべき持たない今の人類に、世界の層を飛び越える技術力は未だない。

けれど、あともう一つだけ。彼女の存在に到達できる方法があるとしたら。

「……絶対に見つけてやる」

——堕落王、フェムト。

千年を生き、魔導を極めたと云われる稀代の怪人。これまで幾度となく、H L構築前から人界にしばしば危険極まりない魔獣を思い付きで放つては迷惑な大騒ぎを起こす、世界中の保険会社に超弩級の人災指定された人物。今回の件を引き起こした張本人ならば、何かしら知っているのではないか。そんなほんのわずかな希望は、話だけならば、事件直後からずつと話題に上っていた。

しかし、十三王にまつわる情報は極めて少なく、噂や都市伝説ならともかく、正確性を求めるとなれば皆無に等しい。そもそも、ヘルサレムズ・ロットにすら滅多に実体を現さず、ライブラの面々でさえも直接顔を合わせた回数は少ない。ライブラの天井に設置した吊り下げ式の小型テレビや街中の巨大ディスプレイなどをハッキングし、突然画面越しに一方的に宣言してくるのが常だからだ。首根っこを掴んで問い合わせたくとも、十三王の居所が知れないのであれば、突撃することもできない。

では向こうから接触してきた時に聞き出すしかない、という方針になるのは当然の節理だろう。しかし、そう決めたのと同時に、週に一度や二度、少なくとも一カ月に数回は起きていた堕落王の暇つぶしがぱつたりと途絶えたのである。急に顔を見せなくなつた堕落王に、一部界隈では堕落王は他の地域に移動したのでは、と憶測が飛び交つたほどに。時折偏執王アリギュラらしい人物の目撃情報もライブラに寄せられたが、ただの人間に神出鬼没な彼女の足取りを追えるわけもない。正直、八方塞がりの手詰まり

状態に陥っていた。

世界の均衡を護るべく、日夜暗躍する魔封街結社・ライブラに、秘書役一人を捜すためだけにすべてのリソースを割けるほど、この境界都市に蠢く欲は甘くない。どれだけ潰してもキリのないゴキブリの如く、野望のために「外」の均衡をひっくり返しかねない事をしでかそうとする連中はひつきりなしに現れる。けれども、その騒動に対処できる手練れの数は限られている。クリステイアナが担っていた仕事は、自分がいつ死んでも大丈夫なようにと、用意周到な彼女が書き残していた引き継ぎの手引きによつてしまるべき人員に割り振られた。^{ストレス}それでも赤毛のリーダーと人狼の諜報員、番頭役の疲労と胃痛が日ごとに増しているのを、不可視の人狼にも気付かれないほど磨き上げた諜報スキルで青年は知つていた。

ならば、自由に動ける自分が手がかりを見つけ出す。そう青年が躍起になるのは無理もないことだつたし、ステイレブンもそれを黙認している。今日の忠告は、自棄になりはじめた青年への諫言だ。十三王相手にコソコソと嗅ぎ回り続け、下手に不興を買つて破滅に追いやられぬよう気をつけろという警告。……勿論、本当に言葉そのままの意味も含まれているかもしれないが、素直に従う気は毛頭なかつた。

これはただの、自分の意地なのだから。

足がかりにした電柱を強く足裏で踏み切つて、青年は道なき空の道を飛び跳ねた。

ダイヤモンドは青い化け物

死んだらひとつだけ、たつたひとつだけ、叶えたいことがある。

とある昼下がり、とあるヴィランを追うための作戦会議のため、複数事務所の看板ヒーローが一堂に会した顔合わせの意味が強い作戦会議を終え、ヒーロースーツから普通の私服に着替えた緑谷出久と星合千晶は会議があつた建物から少し離れた場所にあるカフェに来ていた。

雄英を卒業してから数年。未だ決着のつかない敵連合との戦いを在学中から繰り広げていたお陰か、普通の卒業生より経験値の多かつた元A組の面々は、早くも事務所でそれなりの地位を確立する者、在学中に縁が出来た事務所のサイドキックとして華々しく活躍する者、あるいは独立して個人事務所を経営している者、それぞれがそれぞれのペースで前進していた。

在学中からの活躍から、「黄金世代」と世間から呼ばれている元A・B組の中でも、抜きんでて立身出世していたのが千晶だった。卒業後、どこの事務所に就くこともなく、

ふらりと旅行にでも出るような気軽さで、誰に知らせるでもなく海外に渡った彼女に、すわ失踪かとクラスメイト達は焦つたものだ。しばらくして、向こうでのコネクションを作つて帰つてきた時には女性陣に飛びつかれて、もみくちゃに潰されていた。

現在ヒーロー“ネレイド”は事務所もサイドキックも持たず、フリーのヒーローとして活動している。7カ国語を話せるマルチリンガルとその年齢に見合わない判断力と多彩な能力を買われ、塚内やオールマイト、グラントリノ経由で警察や国家からの依頼を受けて、要人の警護や災害時の向こうのヒーローとの調整役として海外出張することが多く、日本に居る時間はほんのわずか。今回こうして日本に長めに留まっているのは、今迫つている敵が監視の目を搔い潜つて日本に潜伏していることを掴んだからだ。オールマイトの愛弟子と被後見人、尊敬する人物と同じくする友人でもある二人はひとしきり近況報告に花を咲かせていたが、ふと千晶が世間話でもするような軽い口調で、「話は変わるけど、前から考へることがあって」と呟いた。

「考へること？」

何の話かときよとりと丸い目を瞬かせながら、それでも居住まいを正して聴こうとする緑谷の態度に、うん、と好ましげに、満足げに頷いた千晶はアイスコーヒーをマドラーでかき混ぜる手を止め、目を伏せて微苦笑を唇に乗せた。睫毛の向こうからちらりちらり

りと蘇芳が覗く。

何人かには話してあることなんだけれど。

そう前置きする涼やかな声の静かさに、ひやりとしたものが突然背筋を撫でた。必要以上にもつたいぶることを、滅多に彼女はしないのに。

それ以上彼女に言わせてはならないと、何かしらの剣呑さを直感的に感じ取った緑谷は、それでもその声に籠められた真剣さに話を無理に遮ることも出来ず、ガンガンと頭の中で鳴る警鐘に表情をわずかに強張らせた。

「もし、何かの拍子でこっちで死んでしまつたら」

嫌な予感は的中した。――想像よりももつと悪い方向へ。

ひゆ、と喉が空気を捉え損ねて間抜けな音を鳴らす。

「焼いた骨は、ダイヤに変えてほしい」

氷を飲み干し、水と冷氣と遊び、氷に埋もれて眠る。生きとし生けるもの、あらゆる生命の時間をたちまちのうちに停めてしまう、氷の死神。

しばしばそのように謳われるエスマラルダ流に属する者は、実は戦争孤児やストリー
トチルドレン、身寄りのない者がほとんどだ。なぜなら、彼らは牙狩りが慈善活動と称

して子供たちに手を差し伸べる際、健康診断で行う血液検査の結果、エスマラルダを与されるにふさわしい血液を持つと判断され、牙狩りになることを選ぶという形で見出されているからだ。

だから、そのほとんどが帰る家を、還る場所を持たない。

——激闘の末、惨たらしく冷たい身体になつたあの、墓さえも。

牙狩りに老衰という穩やかな死はありえない。運よく支部や本部でのデスクワーク勤務やお偉いの座についていたとしても、血氣盛んなブラッドブリードに襲撃されて死ぬ、という話ではない。特にルーマニア支部などは、吸血鬼伝説のメツカであることもあつてか、腕試し感覚で転化したての吸血鬼に襲われることは日常茶飯事だ。牙狩り的には、襲撃頻度で言えばヘルサレムズ・ロットの次に危険地帯かもしれない。

そんな裏稼業だ、遺体の一部でも回収してもらえれば御の字、回収不可能と判断してやむを得ず、仲間の遺体を置き去りに離脱せねばならない事態など、数えるのもばかりしいほどゴロゴロと転がっている。

それほどの凄惨な世界だ。戦友の死を丁重に弔うことすらままならない絶望的な世界と知りながら、牙狩りは生死の狭間で足搔いている。たつた一步でも、自らの献身が、人類が仇敵に牙を剥くための礎になればと、程度の差こそあれ、みつともなく生き足搔いて。

そんな彼らも、こんな形で死ねたら本望だという、淡い夢は見る。叶わないと知りながら、それでも。

エスマラルダ流派の人間が、遺骨をうつくしいダイヤに変え始めたのは、一体いつからだつたのか。おそらく正確に事を知っているのは師だけだと、千晶は思つていて。

牙狩りは、死後どのように処理を望むかは個々人の裁量に委ねられている。国籍も人種も、下手をすれば種族も問わない巨大組織だ。信仰する宗教や個々人の価値観がぶつ飛んだ方向にバラエティ豊かなのだから、死後の扱いをマニュアル化すること 자체が難しい。そもそも、一定期間で遺書の更新を義務付けているような奇特な組織であるからして。

牙狩り所属員の共同墓所は世界各地にあるものの、流派によつてはそこへ遺骨や遺品を埋めず、人種や宗教に依らない、流派独自の葬儀方法に則ることも多い。エスマラルダ式血凍道の「遺骨が残つており、本人が希望する場合、ダイヤモンドに変えて遺された世代に役立てる」という流儀もその一つだつた。

もとは同胞を悼むためのただの儀式だつた。しかし、遺骨をダイヤに変えたものを使用した装飾品が、血法発動の術式を組むための伝導性を上げると発覚してからは、積極

的に戦うための道具にも利用されることとなつた。……生前に、ダイヤになる前の当人が許可を出せば、だが。さすがに勝手に遺骨たるダイヤを、死後も吸血鬼との戦いに駆り出すほどの不道徳さはエスマラルダには無かつた。

当然千晶も、そのダイヤを所持していた。そう、クラウスとステイーブンがオーダーメイドで作つてくれた、あの出血針入りの指輪に付けられていたダイヤだ。

生前から世話になつていた姉弟子たちから、あなたの手許に残るなら、あなたの助けになるなら嬉しいわと、死の悲愴さなどかけらも見せない、晴れやかな笑顔で乞われたのを、今でも鮮明に憶えている。

遺灰や遺骨に含まれる炭素によつて、無色透明からサファイアに近い濃い青色まで、出来上がるまでどんな色になるかは全く分からぬメモリー・ダイヤモンドが一人分、あの指輪に使われている。

千晶……クリスティアナも、死後はダイヤモンド加工を施してもらうことに賛成だつた。遺骨をダイヤに、というとネガティブに捉えがちだが、エスマラルダ流派内ではむしろ自分自身が自在に操つていた氷に近い姿に成ることも相まつて、希望者は多い。ステイーブンは、下手にダイヤとして自分の証を遺すと、特にクリスとクラウスが自分の死を無駄に引きずりそうだから、もし僕が死んだら遺灰をすべてバルセロナの海に撒いてくれと、酔っ払つた果てにぼそぼそと事あるごとにこぼしていたが。

その時の義兄の表情を思いだして懐かしんでいた千晶は、顔を上げた先に見えた弟分のような友人が表情を悲愴に染めて口の端を強張らせてているのを見て、苦笑した。

「……オールマイトに話した時と、おんなじ顔してる」

「え？」

突如出てきた師匠の名に、緑谷は驚きに肩を跳ねさせる。蒼褪めた顔が驚愕に変わるのを見てとつて、後見人には真っ先に話さないといけないでしよう？ と千晶は言った。

完全にワン・フォー・オールを緑谷へ譲渡し、神野の悪夢と云われる近代ヒーロー史の大きいなる転換点となつた戦いで、宿敵オール・フォー・ワンに残り火全てを使い切つたオールマイトは既に前線を退いて久しい。とはいえ、ナンバー・ワンヒーローを長年背負つてきたその根っからのヒーロー気質、そして敵連合のリーダー、死柄木との複雑に絡まつた因縁ゆえに、完全に隠居したわけではなく、後方支援と雄英高校での後進育成に現在も喜々として励んでいる。

ねえイズク。大人びて艶やかさを増した、麗しの女性はただただ穏やかに笑いかけてた。

「悲しい話に聞こえるかもしれないけど、私にとつてはそう悲しいことでもないの。ずっと、それが望みだった。一切日の差きない土の中で眠るより、誰かの生を、静かに

傍らで見てみたいつて。この指輪も、そうやつて師匠たちから受け継いできた他のひとの歴史だ』

自分の身体の組織が、末端から凍りついていくのを聞きながら眠るように死ねたら、と思うこともあつた。けれどそれは牙狩りの宿命上叶わないことで、こちらの世界に来て、きっとそんな結末は望めない。誰かの嘆きを聞きながら、戦場か薬品の匂いのする病院で死ぬのだろうと。だから、その後の始末で、ダイヤに変わるというもう一つの死後願望で満足することにしたのだ。

自分という存在を、確固たるものとして後世に遺すことは、良いことも悪いこともあります。遺された者たちへ、死んだという事実を受け入れる手助けとなるか、妨げになるか。或いは、死者への無用な執着を生むかもしれない。けれど、千晶はあまり心配していなかつた。

「君に話したのは、オールマイト以外にも私の気持ちを知つてもらいたかつたからだよ」「……え？」

「ヒーローは命懸け。まして、敵連合との戦いもまだ残つている。どんな結末になつても、早いにしろ遅いにしろ人は死ぬ。家族のいない私は、こうして親しい人たちに後を託すしかない」

だから伝えておきたかつたと彼女は笑う。故国・スペインは多民族が混じる国家、キ

リスト教信者が多いため伝統的に土葬が多いが、近年は火葬も増えてきている。だが、千晶が望むのはそういういた慣例からかなり外れた流儀だ。火葬の後、遺骨の一部を鉱石に変えてほしいなど、生前に伝えておかなければまず思いつくまい。

そう話す千晶の表情に、意外なことに見た者を哀しくさせるような悲愴さは無かつた。それを見て、緑谷は友人がいざれ来る最期と真正面から向き合っているのだと理解した。悲哀でも苦悩でも諦念でもなく、生命の定めそのものをそういうものだと飲み込んで。

緑谷にも、形こそ違えど似たような想いがあつた。師から受け継いだ、聖火の如き大いなる個性。無個性だった自分をヒーローにしてくれた力を、自分が力尽きるまでに自分やこれまでのワン・フォー・オールの継承者たちの意志を継いでくれる誰かへ譲渡したいという想いが。

だからこそ、緑谷はその想いを託されたことを嬉しく、それでいて少しだけ淋しく思つた。

「分かった」

しっかりと瑪瑙色アガットの瞳を見て頷いた緑谷に、千晶はほつと息をついてから、ありがとうと少女のように素直に笑つた。

「ちなみに、ダイヤに変えた後はどうするの？」

「ああ……正直言つてその後のことはあまりこだわりが無くて……本当は兄妹や弟子に譲り渡すものだけど、そういう相手もいないしね。そうだな、渡してもいいと思えて、相手も受け取ってくれる人が出来なければバルセロナの海にでも沈めてくれないか？」

「指輪も、ダイヤも、残りの骨も」

「物騒！ というかそれでいいの!?」

「別に死体遺棄じやなくて、散骨に近いから物騒では無いと思うけれど……うん。それが良いんだ」

ギヨツとした緑谷に、千晶は穏やかに微笑みを浮かべて窓の外に視線を向けた。午後の穏やかな日差しを受けて、空はやわらかな青色をしている。故郷とはまた違った空の蒼だ。

「氷に近い姿に変わつて、残りの骨も水に、それも故郷の海に還れるなら、私にとつてはこれ以上ない弔いだよ」

それに良い友人たちに恵まれた。そんな彼らに送つてもらえるなんて、これ以上何を望めというのだ。……ああ、義兄たちに会えないまま死ぬことだけは、心残りになるかもしれないが。

それはその時だろう、とドライな思考回路の千晶は脳の隅にさつさとその思考を放り投げた。たらればのことを考え込みすぎるのは、精神衛生上よろしくない。

「ちなみにこの話、オールマイトと僕以外は誰かにしたの？」

「日本じやオールマイトとイズクだけ。後は海外の知り合いばかりかな」

「あれ、轟くんや麗日さんはいいの？」

「あの二人は……なんか、内容的に罪悪感を感じて……」

「ああ……うん……轟くんとか止めてきそう……（でも話さなかつたらそれはそれで後で怒りそうな気がする……）」

途上にて瞬く

俺の友人は、いつだつて余裕に満ちている。

けれど、ただ余裕に満ちているのではなくて、表情を取り繕うことが得意なだけだと気づいてから、ふとした時に見つける“無理”的欠片を拾い上げるようになつた。人当たりの良い貌の下で、無理はしていないかと、ひそかに目を配ることが多くなつた。視野狭窄に陥つていたことを指摘してくれた恩を、ひとつひとつ返すように。

だからだろうか。

斜め前、窓際の列の3番目。少し前かがみでノートに板書を書き込む緑谷の前の席に座る、シャツとカーディガン越しにも身体の厚みの無さが良く分かるひょろりとした背中を眺める。

中間服に衣替えしても、周りが長袖シャツの裾をまくりあげたりしている中、星合はブレザーを脱いだだけだった。個性が個性だから寒がりではないはずなのに、グレーのカーディガンを羽織っている姿は少し目立つ。

午後の思わず眠たくなりそうな陽気と一緒に教室内に吹き込むやわらかな風が、カーテンと一緒に肩口で切り揃えられた黒髪を揺らす光景に、思わず目を細めた。

体育祭、俺との対戦で髪を焦がした星合は、背中まであつた髪をばつさりと肩につかない程度にまで切り落として登校してきた。急に印象が変わりすぎて目を瞠っていた俺は、その後の麗日の発言で、星合が髪を切らざるを得ない理由を作ったのが自分だと知らされて愕然とした。

本人は全く気にしていないそぶりだったが、気にしていないからといって俺の罪悪感が消えるわけもなく。その日の授業中、ろくに集中も出来ず、悩みに悩んで姉さんに責任の取り方をメールで尋ねた俺は、半ば強引に普段行きもしないショッピングモールまで星合を引きずつていった。

そこで詫びの品として星合が選んだのが、白い花のバレッタだつた。

それを、台に並べられた色とりどりのアクセサリーの中から吸い寄せられるようにして見つけ、手のひらに乗せた時の星合の表情を、鮮明におぼえている。

さざめく長い睫毛にふちどられた真つ赤な瞳をとろかせて、つぼみがほころんで花開くように、白い頬をさくら色に上気させてやわらかく微笑む姿が、これ以上なく焼き付いている。

場所が場所で無ければ、ああ、と溜息さえ漏れてしまいそうだった。

きれいだと、素直にそう思えた。

表情を取り繕う事が多かつたから、かえつて色鮮やかなその表情に目を奪われたのだろう。

俺はようやく、こいつの本質を垣間見れたのだと思った。

あの時すでに、俺はすっかりとこいつに魅了されていたのだと、思う。

少しだけ伸びた、波打つ黒髪を纏める白い花のバレッタ。それを身に付けているのを見たびに、胸のあたりがむず痒いような、落ち着かない気分になる。

それでも自然と口角が上がってしまうのはやめられなくて、表情を元に戻そうと顔を触つたり口元を手で覆つたりして、緑谷たちや星合本人に不思議がられている。ついでに言えば、あの日から姉さんには妙にニヤニヤ顔をされることが多くなった。

「轟、最近表情がやわらかくなつたね。良い顔になつた」

「そうか」

休み時間や授業中、放課後の帰り道。いろんな場面で、雰囲気がやわらかくなつた、前よりとつつきやすくなつたと周囲に言われることが多くなつた。

良い傾向だね、と自分の事のように晴れやかに笑うのを見下ろしながら、そうつと目を伏せた。口元がほんの少し緩む。伏せた三日月の視界の中で、艶めく黒を彩る花がちらついた。

ならそれはおまえのお陰だと、面と向かつて言える日は、きっとそう遠くない。

番外編—窒息しても生きたい（未来IF）

15cmの未来の余白

Vivir bien es la mejor venganza.
最高の復讐とは、幸せに生きることだ。

＊＊

『ヒーロービルボードチャートJP、3位は氷と炎の貴公子ショート！』

白く煙ぶり、凍りついた空気が、常に鉄の鳥と人々、多くの荷物を受け入れ飛び立てるこの建物の外を席巻している。

とはいえ空のダイヤに遅れや離着陸の見合せができるほどの悪天候でもない。この時期にはよくあることだ。空路は海路や陸路と比べ、天候ひとつで大きく行動の変更を余儀なくされる。急な天候の変化で帰国が遅くなることを憂慮していた男が、朝の時点では問題なさそうだと安堵したのも当然だった。本来なら彼の相棒^{パティ}が真っ先に確認するところでもあるのだが、今日ばかりは全て上の空だった。

セットした紫の癖毛を崩さない程度に、男はため息交じりに指先で弄った。学生時代は逆立てていたが、今は撫でつけるような形にセットし、前髪は分けて左右に流している。切り損ねて長くなってしまったそれを弄るのが、悩んでいる時の癖になってしまつた。ちらり、と横目で隣の相棒を盗み見る。

手元のスマートフォンで日本で発表中のヒーロー番付を視聴している彼女は、ようやく読み上げられたトップ10の中に待ちかねた名が読み上げられ、嬉しそうに真っ赤なルージュで彩った唇を吊り上げている。満足そうではないのがポイントだ。欲の薄い彼女とはいえ、「あいつ」がトップを期待していた部分も多少なりはあつただろう。

まあ、今期のトップヒーローに選ばれたのが、かつての旧友で現在の“平和の象徴”を最も体現する男なので、折り合いをつけているのだろう。平和の象徴たれと望まれ、それまでのたつた一つの強烈な光が全てを背負うものではなく、クラスメイト達と共に多数のヒーローを先導し協力しての新しい“象徴”となつた、そばかすに癖毛で、平凡そうに見えて非凡な英雄。

自分が登場しない番付に見知った面々が登場するのを見るためにずつとそわそわと落ち着かなかつた彼女を、どうにか荷物検査やら関税チエツクやらでポカをやらかさないか見張り——案外彼女がこういう時、普段なら間違つてもやらない間抜けをやらかすことを見つたのはここ数年のことだ——利用予定の航空会社が構えるラウンジのソ

ファーより、硬い待合椅子に座らせてさつさと番組を見る体勢に入らせた方が良いと判断したのは間違つていなかつた。途中で男がイギリスの有名な紅茶老舗メーカーを銘打つたシャンパンバーでテイクアウトしてきた紅茶のカップは手を付けられないまま冷めきつてゐる。紅茶と珈琲にはうるさい彼女なら一口は飲みそなものなのに。勿体ないので男がそれも呑み切つてダストボックスに捨てる頃には、時計の針はもう少しで搭乗開始になることを告げていた。

「星合、そろそろ搭乗時間だぞ」

いよいよ半目になつて肩を叩いた男に、弾かれるようにして顔を上げた彼女は瞬きで問う前に時計を確認し、苦笑交じりに立ち上がつた。それまでの腑抜けたポンコツぶりは見る影もない。

「ああ、ゴメン。随分夢中になつてたみたい」「全くだ。行くぞ」

搭乗開始のアナウンスが繰り返され、先ほどまでそれなりに航空機を待つ人々で埋

まつていたはずの待合椅子は、随分がらんとしている。忘れ物が無いか振り返つて一度確認した二人は、搭乗ゲートへ足を向けた。

『ブリティッシュ・エアウェイズ、成田行き、14時30分発、123便は只今より搭乗のご案内を開始します、○番搭乗口よりご搭乗ください』――

ざわめきに包まれる中でも聞き取りやすくするために機械的なまでに抑揚のついたクイーンズイングリッシュが、クリスマスソングをバックにアナウンスを投げかけている。搭乗ゲート前の待機列に加わりながら、顔を隠すためのサングラス越しに、彼女は壁一面を覆う大きな窓ガラスへと顔を向けた。

淡いヴェールを青白く沈んだ空と街に掛けるような、ささやかな粉雪が降りしきつている。その合間を縫うように、無数の飛行機が離陸と着陸を繰り返していた。灰色の雲に覆いつくされ、冷気で白く曇った窓にうつすらと映る女の姿は、十数年前のあの日とほとんど変わり映えしなかつた。

星合千晶、ほしゃい ちあき 28歳。

クリスティアナ・I・スターフェイズが「星合千晶」になつて、十三年を迎えると

していた。

＊＊

思えばあつという間のようで、とても長かつたような気もする十三年間だつた。

雄英を卒業し、これ以上留まつていては自分が自分で無くなつてしまふ気がして、オールマイトにも、イズクにも、お茶子にも、誰にも行先を告げずに、失踪するよう日本から消えた。「思考の怪物」と呼ばれた元の世界の自分のように、世界を渡り歩いて、様々な人々と出会い、時折敵連合のヴィランと戦つたりして。一生帰れないのではという絶望に身も心もボロボロになつて、比喩ではなく文字通り死にかけた時期もあつた。そういつた堂々巡りの果てに、ついに、私は本当の意味で星合千晶を受け入れた。三年の放浪の果てに、ようやく答えを得たのだつた。

日本に戻つてからは、学生時代に塚内さんを始め、警察関係者や何人かプロヒーローにも人脈を広げていたこと、放浪中も色んな分野の人脈が出来ていたこと、そして7カ国語を話せるマルチリンガルを買われ、ベテランヒーローの海外派遣時の通訳や要人警護などといったフリーランスのヒーローとして働いている。事務所も持たず、サイドキックも雇つてはいないが、心理学を大学で修め、メンタリストヒーローとして活動す

るシン……心操人使とバデイを組んで海外を飛び回ることが一年の殆どだつた。

若手ヒーローがフリーランスで食つていけるなどごくわずかだが、私にはむしろ事務所所属の方が窮屈に感じるだらうことは明白だつた。名声も地位も大して興味は無かつた。むしろマスコミの視線などわざわざいだけとすら思う。マネーロンダリングはライブラ時代から得意だつたし、株取引は思考分析のいい訓練になる。イズクや爆豪たちのようにトツプヒーローとして脚光を浴びるのは、長く裏社会でヴァンパイアハンターをしてきた身としては、あまりにむず痒くて居心地が悪い。政府や警察の依頼を受けて極秘裏に動くシーケレットヒーローというのは、非常に性に合つていた。

日本での知名度は元クラスメイト達に比べれば微々たるものだが、時には国家を跨いで暗躍するヴィランや犯罪シンジゲートを潰すための対策会議に呼ばれたりなど、世界のヒーロー界隈では名が売れていると自負している。

仕事は至つて順調で、シンとのバデイも結成以来良好なままだ。日本に帰つた時にはお茶子やモモたち友人とお茶をすることがあるし、マイクやミッドナイトと買い物に行つたりオールマイトと映画鑑賞をしたりとオフも充実している。海外にいる時間が長すぎて、日本のセーフハウスが自宅なのかアメリカの方が自宅なのか分からなくなりつつあるが、それはさておき。

「……」

じつとりと隣から注がれる視線に、私は素知らぬ顔を決め込みながら内心ひくつきそ
うになる顔を鉄面皮にするのに非常に苦労していた。

クリスマスに年越し、そして新年とイベント続きで浮つく時期こそ、悪はこぞつて暗
躍するものだ。比例してヒーローが出動する案件も多いこの時期。フリーランスゆえ
に急な呼び出しあり、不定期だが仕事が入らない時期はまとめて休みが取れる自分と
違い、毎年ビルボードチャートトップ5に入る人気ヒーローである恋人こと轟焦凍とオ
フが被つたのは、ここ数年の経験を考えれば奇跡的なことだつた。

なにしろ、恋人らしいクリスマスなど過ごせたためしがない。レストランの予約だつ
たり、いつもより手の込んだご馳走の下ごしらえだつたり。折角準備をしても、轟が急
に事務所から出勤要請で呼び出されたり、はたまた自分がその時期に急な海外での仕事
が入つてしまつたり。帰宅と出勤ですれ違うこともあつた。

今年もきつとそうだろうと、どちらも根が淡白なものだからあまり期待しないでいよ
うと話していたものだから、クリスマス直前のこの時期にレストランの予約など取れる
わけもなく。長期のロンドン出張を終えて疲労困憊、ファンからはおっぱいのついたイ
ケメン、スペダリと囁かれる自らが、自分では当たり前のことをしているつもりなので

あまり良く分からぬが、ラテン系のそつのない根回しをする余裕もなく。

ならばせめて、とパパラツチの目を気にしなくていい轟の家でのんびり過ごそう、ということになつたのだ。共にキッチンに並んで料理を作り、たわいもない話をぽつぽつと交わしながら食事を楽しんだあと、大きなソファーアーに身を預けながら二人並んで食後のコーヒーブレイクを楽しんでいた。

年末となれば人気映画の放映や特番がテレビ表を埋め尽くすが、自分も轟もさしてテレビに熱中する性質ではない。オールマイトの影響で若干新旧問わず映画に詳しくなつてしまつた自覚はあるが、元々仕事のためにニュースぐらいしかまともに見なかつた人間だ。身に染みついた習慣は中々変えられるものではない。由緒正しい日本家屋の屋敷に住んでいたお坊ちやまの轟は厳しくエンデヴァーに躊躇られたせいで世俗に疎い。BGMにするならテレビよりもクラシック音楽、映画よりも読書。こういうところで趣味嗜好、好む雰囲気が似通つてるのは気楽でいい。数年間に及ぶ交際の中で、『前』の25歳の自分なら決して許さなかつただろう距離感にもすつかりと慣れた。根気強い恋人に慣れさせられた、の方が正しいだろうか。セーターオンにも鍛えた筋肉を感じる肩に頭の側面を預けて軽く寄り掛かりながら、隣を気にしそうなこともなくタブレット操作に集中するだなんて、10年前の自分なら誰にも許さなかつたに違ひなかつた。

国家レベルの機密を扱うことも多い職務上、メディアへの露出が少ない自分と違つて、轟は母親譲りの美形と父譲りの実力を兼ね備えたヒーローとしてテレビ出演も多い。世俗慣れしていない天然ボケの発言もウケたのだろう。ほつておけば美術スタッフに衣装を丸投げしがちな恋人のために、年明けに控えている人気ヒーローが一堂に集う新春ヒーロー特番や新年会で轟が身に纏う服を選ぶのは楽しい。義兄や黙つていれば素材だけは良いザップ、ファッショனに疎いレオを着飾るのは、ライブラ時代からの自分の少ない楽しみでもあつた。

楽しい、のだが……先程からじつ、と自分の手許に注がれる視線に、気付かないふりを続けるのも正直限界だつた。

(わ、わかりやすい……)

あの常に肌が焦げそうなほどの緊張が張りつめるヘルサレムズ・ロットという街、吸血鬼との対決に感じる生と死の瀬戸際。命をチップに凌ぎ合う、人間の領域を凌駕した戦場の最前線から遠く離れ、ヒーローとして似たような職務に就きながらも、どこか物足りなさを感じる自分は、かつての獣のような気配探知は最早持ちえない。この世界で少しづつ融け込み生きるには、不要な鋭さだったからだ。それでも、人の視線には特に

敏感なのは変わりない事実だつた。轟が何を思つて、どこに視線を向けているのかを、すぐに察した。

(指……薬指か？ 中指も……しまつた、クラウスからの指輪は外してくるべきだつたな)

視線に物理的な攻撃力が備わつていたなら穴が開きそうなほど、じつくりと視線を落としている恋人の虹彩の違う双眸に揺らめく感情は、人を緑眼の怪物たらしめるもの——嫉妬だ。

自分の両の手の中指それぞれに嵌つてゐる、女性が身に付けるにしては幅広の銀のダブルリング。小粒ながら変わらぬ輝きを放ち続けるダイヤモンド、エメラルド、アクアマリン、アメジストといつた宝石類が配列されたその指輪は、もう二度と会うことはないだろう、自らを救つてくれた救世主にして最も尊敬する同胞ともが贈つてくれた、今や形見となつたれつきとした武器だ。戦士であれど、美しく着飾るべきだと。ドイツ公爵位を持つラインヘルツ家がその長い歴史の中愛用してきた武器工房が手掛けた、二つとなり自分の為に設計された出血針入りの指輪。激しい戦闘で欠けたり壊れたりすることのないよう、聖銀に聖水で清めた宝石類のあしらわれた指輪には、幾重もの魔術的な防御が働いてゐる。

仕事中だけでなく、警戒心の強い自らがほぼ四六時中、肌身離さず身に付ける護身武器。自分が誇り高い牙狩りであり、今となつてはあの高潔な赤毛の紳士との繋がりを感じさせる唯一となつた一品を、轟は以前からあまり良くは思つていなかつた。自分の感情を切り離して、彼の立場で考えれば、それも当然とは思う——恋人の自分ではない、他の男が贈つた指輪が常に両手に輝いているなど、男として許せまい。

轟家の遺伝子なのか、育つた環境の中で育んだ本人の根本的な気質なのか、轟は表面的には淡白なように人の目に映るが、その本質はこちらを嫉妬の先の相手ごと飲み込んで、骨の一片も残さず焼き尽くしかねない灼熱の溶岩のようにどろりと重く、苛烈だ。個性とはその人間の本質がカタチになつたもの——何の根拠もない通説を馬鹿にはできないものだ。轟焦凍は氷点下の静謐と冷静、焦土を生む情熱と苛烈という矛盾を内包する男だ。意外にも情熱的で、タールのように重い独占欲は、時々空恐ろしくもなるが——愛を知らぬ自分には、むしろ安心できる重石だと思う自分もまた、愛が重く、狂つていると思う。

それでも轟がクラウスの指輪を外せと言つてこないのは、この指輪が私の最高のコンディションを担う一つだからと知つてゐるからだ。

血法は牙狩りの技術。こちらの世界のサポート会社の技術がいかに優れても、科

学では異世界の魔術をカバーできない。指輪に仕込まれた術式は企業秘密で再現不可能なために新しい指輪に流用することもできない。プライベートならまだしも、戦場でも外せなんて言う戯言は、明日の命も分からぬ職業に就いている身としては言えない台詞だろうから。外せ、ではなく気に食わない、とこちらを強制せずに、自分の感情だけハツキリ言うあたり彼らしいが。そんなものを着けるくらい警戒しなくとも、俺が護る————思いだすだけで、血流操作しなければすぐに顔が熱を持ちそうになる睦言は恐らく永遠に忘れられない。

それ以降、轟と二人きりで過ごす時は出来る限り——特にベッドの上では絶対に外すようになつたが、うつかり外し忘れていた自分に舌打ちしたくなつた。折角の逢瀬をぶち壊したくないという程度の乙女心は残つてゐる。たとえ、精神年齢がもうすぐアラフォーに届こうかというおばさんであろうとも。

(……左の、薬指か)

左の薬指が示すものが何かわからないほど鈍感ではない。けれど、自分に訪れるかもしれない「結婚」の言葉は、口の中で何度も転がそうと実感は少しも湧かず、捕らえどころのない霧を頭に生んで思考をふやかすだけだった。

ダイヤモンドの指輪を取り交わす永遠の儀式など、自らから最も遠い行いだと思つていた。……今も、その認識は変わらない。

表向き名乗つている肉体の推定年齢は28だが、実際に精神的に生きた年数は38年間だ。ヒーローとしては脂が乗つてくる時期、ようやく軌道に乗つてきた中堅といつたところだが、牙狩りであれば、20年前後も死線を潜り抜けてきたベテランの域に入る。そろそろ戦場で部隊長クラスになつて指揮や後進指導、流派の後継者なら師匠から流派を継承するか、はたまた幕僚として前線を離れ、上層部の一員となるかといった選択肢を考えなければならない時期もある。

……つまり、それだけ35歳のデッドラインを超えてなお生きていられる牙狩りが少ないという証でもあつた。牙狩りはみな短命だ。血界の眷属との戦闘における生還率の低さもその理由だが―――血法という吸血鬼への対抗法は、自らにも向く牙であり、その寿命を削るものだからだ。

その原因は、ほとんどの牙狩りが修業期間を成長期においていることに由来する。

属性の血液に、常人には理解しがたいほど難解な數式と科学と魔術が複雑に織り交ざり融合した術式を加えることで、血法は出来てゐる。血液だけで氷や炎には変わらない。さりとて術式を完璧に理解したとて、属性の血液が無ければ意味がない。千年に及

ぶ牙狩りの遺産であり、過去の牙たちの血と屍で積み上げてきた研鑽だ。その血液を最も効率よく運用する器を作るには、成熟してからでは遅い。骨や筋肉、内臓が大人へと成長していく時期に術式を理解し修行を行うことで、術式は細胞のひとかけらにまで馴染み、各流派の血法に相応しい肉体を醸造する。対吸血鬼のためのサイボーグ。口さがない若い牙狩りが自らの境遇を皮肉る決まりのフレーズだ。

血界の眷属がDNAに直接極小の術式を上位存在に好き勝手に直接書き込まれた人間の突然変異体ならば、牙狩りもまた、似たような業に足を突つ込まなければ到底同じ土俵に上がる事すら許されない。不死者を殺すため、人間の枠から外れた身体能力を形成させるための、肉体の魔改造。

ブレンギリード流ならその戦いに必要な大量の血液を保有し、近接戦闘を行つても耐えうる巨大で屈強な肉体を。

エスマーラルダ式なら鋭い蹴りを叩き込むための、しなやかで長い脚を。

そして全流派に共通して、命を繋ぐための肉体再生能力と血液生産能力は、人間の平均値を遥かに凌駕している。

それゆえに―――酷使され続けた骨髄が、筋肉が、細胞が、肉体が限界を迎えるのもまた、常人より早い。血法の達人であれば細胞活動の活性を抑えるために消費血液量

を絞つても技の威力を維持し、老化現象を遅らせることが可能だが——それでも、前線に居る時間が長いほど、肉体の限界は早く訪れ、魂が削られていく。ザップの師匠が「血闘神」と呼ばれ畏れ崇められるのは火と風の二重属性使いで、その長老級エルダーフラスを単独で滅殺できる技量だけでなく、その長命さもまた、理由の一つだつた。

HLに渡ると決めた時、おそらく自分はデッドラインは越えられず、あの霧の街が死地になるだろうと予感していた。不明な点だらけの無属性の血液、あらゆる流派の術式を理解し駆使する自分は、多くの流派の術を受け継ぎ記憶する者であると同時に、それだけ早く命を削るだろうと水晶宮式血濤道を編む際に覚悟した。クラウスやステイブンにそれを明かしたことはないが、様々な流派を学びたいとエスマーラルダの師匠とクラウスの両親に頭を下げた時、止められこそしなかつたが良い顔もされなかつたのが良い証拠だ。いつまで経つても老け込む様子を見せないエスマーラルダの師の魔女めいた余裕綽々の美貌が、あの時ばかりはとてもなく酸っぱいシチリアレモンを生で齧つたかのように崩れていたさまは忘れられない。

代を重ねて洗練されていない血法は無駄も多く消費が激しい。戦場で死ぬか、老衰で死ぬか、どちらにしろ、その場所はHLの内側だろうと思つていた。……結局のところ、堕落王のうつかり事故のせいで、霧の結界の中の前線どころか次元と世界線を跨いでしまうという奇妙な現実があるが。

それだけが、結婚が自分に無縁だと切り捨てていた理由ではない。

……結婚のその先に待つだろう、子を為すという行為が、あまりに恐ろしかったのだ。おぞましい人体実験を経ても、結局無属性の血液の継承法は分からず仕舞いだつた。ただ一つ、諦めの悪い上層部が狙つているとすれば——当時、まだローティーンだつた年齢の関係で試されなかつた方法、人間としては一番まつとうで自然な血の繋ぎ方である、子どもを産むことだつた。

けれど、牙狩り同士が結婚しても、今までの歴史上から算出されたデータから見ても、属性の血液が発現する確率は低い。ましてや無属性という突然変異的な希少血液が引き継がれる可能性なんて、天文学的な確率の宝くじを引き当てるに等しい無謀さだとうのに——それを頑なに信じ込む頭の能天気さ^{アホ}が、私を世界中の支部を飛び回らせ、果てにHLという連中の手出しできない魔境に飛ぶ決意を固めさせた。

無属性の血液を引き継ごうと引き継がなかろうと、自分の子に待つのは陰惨な未来だけだ。引き継げば牙狩り以外の将来の選択肢は与えられず、引き継がなくとも途中で属性が発現しないかと、その遺伝子を次代に期待して人生全てに牙狩りが纏わりついてくる。悲願の為の必要な犠牲だと綺麗ごとを盾に、牙狩りの業にすたずたにされるのは自分だけでもう十分だつた。それに、生まれてすぐに教会に捨てられた自分が、愛情も家

族も良く分からぬ自分が、子どもを育て、まともな母親になれるとは、到底思えなかつたのだ。

もし、結婚して家族もできたとしよう。それでも、いつかまた全て失うのではという疑念は付き纏う。突然この世界に来たように、ようやくこちらに骨を埋める決意をしたというのに、また何かの運命の悪戯で、やつと得たもの全てを失い、置いていくことになれば——二度と立ち上がれない、そんな予感があつた。

答えは得た。美しいものを見た。

永遠に欠損するはずだつた足りないものは、温かい思い出と体温で補われ満たされた。

これまでの不幸と絶望に値する人生の報酬のような奇跡の渦中に——未だ私は存在している。

深く深く沈み込んでいた思考が、そろりと触れてきた体温に引き上げられる。見れば、骨ばつた指先がつつ、と白い皮膚の上を滑つていた。掌と指の継ぎ目の関節から指の先まで、かさついて熱い指が丁寧に撫でてくる。触れている部分に注がれていたはずの視線は、今は自分の横顔に注がれているようだつた。体重を預けていた肩が不意に引

かれる。支えを失くし、傾く身体に咄嗟にバランスを取ろうとする前に、手を絡めとられて抱き留められた。つるりと温度の無い金属が指先でもたつく。うつかり取り落としけれそうになつたタブレットを掴み直したが、ホツと息をつく間もない。熱い息がうなじに掛かつて、ぶわりと全身の毛穴が開くような興奮をおぼえた。

「……ツ」

「千晶」

息を詰めた私の肩を抱くように太い腕が回る。強張った肩から力を抜けと言わんばかりの、あやすような口調。けれど普段の冷静で平坦な声色ではない。自分しか知らない、耳から流し込まれる度に内側から灼かれるのではないかと思うほどの、ぞつとするくらいに艶を帯びた低い声だ。この時ばかりは全身が性感帯になつたかと錯覚する。……そろそろ慣れるべきだと思うのだが、道のりは長そうだ。この声に名前を呼ばれるのが弱いと知っていて、耳朶に直接吹き込んでくるのだから、タチが悪い。こちらの方が随分年上だというのに、こういつた場面では良いように振り回される。年上の威厳もクソもなかつた。

恐る恐る見上げた黒曜と翡翠には、酒精で赤らみ潤んだだけではない、あの時には無かつた、雄の本能がちらちらと双眸の奥で焰のように揺らめいていた。
(ああ、きれいだ)

歳を重ねた分だけ学生時代とは見違えるように幼さが抜けて、随分精悍さを増した整つた容貌はやはり、溜息が出るほど美しい。西洋人は成長と共に厳つくなりやすいが、東洋人は人種的にベビーフエイスで、筋肉が付きづらい。恋人もその例にもれず、鍛え上げられた肢体は固く引き締まっているが、幅や大きさは変わらない。学生の頃に比べれば、少々身長差は増えたが。

「……良いか？」

相変わらず言葉は足りないが、それが何への合意なのか聞くまでもない。止める気など無いくせに、一応こちらの意志を訊いてくるあたり、可愛げがある。彼の場合、男が好き勝手に女を甚振ることにトラウマめいた恐怖があるからこそなのだろうが……おのれエンデヴァー。

最近顔を合わせていない元トップヒーローに心の中で怨嗟を零しながら、とつくのとうに画面の電源がオフになつたタブレットを、指輪から出した血の腕でロー・テーブルに置き、ついでに指輪も脱ぎ捨てる。それが答えた。靴も指輪も脱ぎ捨てたなら、皮膚かくちびるでも噛み切らない限り、私はただの女でしかない。

「馬鹿ね」

いちいち聞かなくても、解るでしょう？

くちびるに浮かぶのは、意地の悪い笑みだ。28歳とは思えない色気だよなあとよく知り合いに言われるが、育ちの悪さゆえにどこかしらスレしていく、ニヒルで婀娜っぽい38歳がたまに顔を覗かせているのだろう。言葉と顔とは裏腹に、心の中では、ああ、と何度も洩らしたか分からぬ溜息が落ちる。

……私にはとうてい勿体ないひと。明かせない秘密を良しとして、話すまで辛抱強く隣にいてくれた、唯一無二。己の本質が化け物殺しで人殺しの咎を負う穢れだらけだと知つても、手を離さないでいてくれた。

——前の世界での自分は、誰かの為に費やすことを是とした人生だった。魂の一片が全て擦り切れるまで、尊いものの為に献身するために奔走した。

だが、この世界には、今まで己に無意識に科していだしがらみは、最早無い。

(それなら)

腕を伸ばして、太い首に絡みつかせる。猫のように首筋に額を擦り付けると、ふわりと嗅ぎ慣れたしやほんの匂いがした。同じ洗剤でも、汗が混じると少し違った風に感じるのだから不思議だ。心臓側の半身は少し熱っぽくて、生きているのだと安心を与えて

くれる。皮膚とやわらかなニット越しに聞こえる心音は心地よくて、これからすることさえなければ、このまま眠れてしまいそうなほど。神経質すぎてクラウスやステイーブン以外の気配が近くに在つたら、とても熟睡できなかつた頃とは大違ひだ。それほどまで時間をかけてぐずぐずに防壁を融かしてきた彼の熱量には、恐れ入る。

別の人間のことちらりとも考えたのが空氣で伝わつたのか、ガブリと耳朶を甘噛みされた。

——しがらみがないのなら、この世界では、自分の為の幸せを求めて、良いのだろうか。

何も持たない人生に、様々な彩りを与えてくれた。

何もないなら、今から少しづつ得れば良いのだと、ちつとも遅くは無いのだと諭してくれた。重ねてきた年月の中で、交わした言葉で、分け合つた触れ合いで、何度彼に救われてきたか、わからない。

いつも泣きたくなるほどの優しさで愛してくれる轟を、もう自分は、たとえ轟が望んだとしても、離してあげられそうになかつた。彼でなくては駄目だ。もはや彼なくしては、息すら出来ないくらいの自分が嫌で、怖かつた。

全部作り変えられたのだ、身体も、心も、なにもかも。

此処にいるのは、ヒーローで、ただの女の、星合千晶だ。

(幸せになつてもいいのかな)

ぽつり、疑問が頭の中で生まれる。肩口に額を押し付け、膝に乗り上げて凭れかかる
ような体勢で密着しながら、とりとめのない疑問符が浮かんだ。

世界と仲間を免罪符に切り捨ててきた元友人たちや、未だ前線にいるだろうクラウス
やステイーブンを差し置いて、のうのうと幸せを享受しても良いものか。救つた人間よ
り殺した人間の方が多いのでは? 守つたと思ったものは本当に守っていたのか?

溜め込みに溜め込んだ自己否定と罪悪感と絶望が、今になつて酷く重苦しく圧し掛け
かつてくる。

うなじに差し込まれた長い指が、癖毛のブルネットの生え際を撫でる。ひどく淫靡な
手つきだというのに、慈しみすら感じるから、ことあるごとに泣きたくなるのだ。反対
側の自由な手が、一つ一つの指を確かめるように合間に差し込まれ、握りこまれる。血
の通う温度。生きてここにいることを、確かに感じる。

「全部あなたのものだから」

だから涙が出る前に、何も考えられなくなるぐらいぐちやぐちやに溶かして溺れさせ
てほしい。失くして窒息するくらいなら、肺を水に浸して息が出来ずに溺死するほう

が、よほど良い。

生唾を呑み込んだ喉仏が動いて、言葉の端々を食われるようになんと唇を食まれる。

——私は貴方に幸せにできるだろうか。

脳裏で浮かんだ一抹の不安を、背筋を走る電流が搔き消した。

4 9。 4 5 4 2, N. 1 1。 0 7 7 5, E

星合千晶にとつて、否、クリスティアナにとつて、バレエとアイススケートは切つても離せないライフワークだ。どちらも頭から足のつま先まで神経をとがらせ、バランスと柔軟性、姿勢制御を高度に要求される芸術だ。革靴やヒールで不安定極まりない氷の上で戦う必要性が出てくるエスマーラルダ式の修行に、これら二つが組み込まれるのは、何も不思議な事では無かつた。

放浪中に仲良くなつた行きずりの旅人が、実は小さなスケートリンクの管理者で、仕事でドイツに寄ると、営業時間後にリンクを貸し切りにいくらでも滑らせてくれるようになつたのはありがたかつた。元の世界でのベルギー支部にいた、気のいいオネエの同僚に少し似ている。こちらの旅人はヘテロだが。

思う存分に、むしろ八つ当たり氣味に自分の煩悶やら葛藤やらをぶつけるように氷の上で飛んで跳ねて滑つてを繰り返していたその時、先にドイツに幾つか所持しているセーフハウスに帰つていたはずのシンが息せき切つてリンクサイドに駆け込んできた。

「星合!!」

「うわ、何、どうしたの」

休憩も挟まずに踊り狂つていたせいで、氷の上で気温は寒いはずなのに、汗だくになるほど身体は火照つていた。鬼気迫る表情のバディに何事かと、氷の上を歩くようにはいすいと滑り、サイドとリンクを隔てる柵の元まで移動する。途端、鼻先に勢いよく突き付けられたのは黒いカバーの掛けられたスマホの一面だつた。

『人気ヒーロー・ショート、年上女性と熱愛発覚か』

ウワア。

その見出しが写真を見てまず口からぽろりと出たのは、そんな気の抜けた声だつた。あつ多分今のわたし笑えてないぞ、中途半端な笑顔で目が死んでるアルカイックスマイル、レオの言葉を借りるならスターフエイズ伝家の宝刀・春風の微笑み（激おこ）である。

ゴシップ記事に添えられている写真は腕を組んだ女性がにこやかに轟の腕を引つ張つてどこかに行こうとしているものだ。轟の表情も普段メディアで見るそれより穏やかで、うつすら笑みを浮かべているのもゴシップの餌としては十分に破壊力があるだろう。また見事にすっぱ抜かれたこと、というのが自分の感想だつた。完全に他人事だ。記事を見た瞬間、吐いた声は自分でもどうかと思うほど傍観者のそれだつた。

リンクの皮膚がひりつくほどの冷気を通して鼓膜を振るさせて、神経を通じて脳に入

力される電気信号で自分の声を捉えてもそう思ったのだ、シンが呆れかえるのも当然だつた。

「うわあ、つてそれだけか!? あの野郎、お前が居ながら浮氣してたかもしれないんだぞ!?

「シン、どうどう」

「いやお前が焦れよ!?」

「いやあ……だつて、ねえ」

完全に自分以上にブチ切れている相棒を若干引きつつも宥めようとするが、火にウオツカを注ぐようなものだつたらしい。だが、何と言われても怒りの一つも湧かないのだから仕方がない。

曖昧な笑みで言葉を濁しながら、ちらり、と再び視点を合わせた写真の女性を見やる。流石にプライバシー保護でその顔は黒く塗りつぶされているが、見間違いようがなかつた。

「その女性、轟のお姉さんだもの」
「は?」

私が爆弾発言を投下した瞬間、二人しかいないリングに本日最大の叫び声が響いた。あまりの大声に、管理室でのんびりしていた友人が何事かと飛び出してくるほどだ。耳を劈くような大声に思わず、肩を竦めた。

「あー、そんな大声上げて……喉、商売道具なんだから大事にしないと」「オイオイどうした、今の声、事務所まで聞こえてきたぞ」

「悪いテオ、なんでもねえよ……」

「ならないけど、静かにな」

「最員のサッカーの試合を観るため再び友人が引っ込むと、静かなリングサイドに長い溜め息が響いた。

「……間違いないのか?」

「うん。仲良くさせてもらつてる身としては見間違いないと思う」

「……確かに白髪に赤メツシユ……言われてみりや血縁ありそうな頭だな……」

「ついでに言えばプライバシー保護で台無しになつてるけど、顔も結構似てる」

「ネタ欲しさかよマスゴミ……」

「シン、スマホが割れる割れる」

「…………でも、良かつたな。誤報で」

「…………うん」

「ガチの浮気現場だつたらあの紅白頭締め上げるところだつた」

「あははは」

「あははつて、お前な」

「そういうことはしない人だから、心配してない」

そんな器用さはない人だ。クラウスと同様、一途で真っ直ぐで、男女間の不誠実さを何より嫌う人だからこそ、安心していられる。そんなもしもある人なら、きっと私はほだされなかつた。心の数パーセントでも、完全にゆるして、預けたりはしなかつただろう。

そっぽを向いているシンがどんな表情をしているかは、私からは見えなかつたけれど。自分の事のように心配して、怒つてくれる相棒のありがたさに、私は目を細めた。

普通の靴ではまともに立つてゐることすら難しい、平らに均された氷の上も、エスマラルダにとつては地面と変わりない。氷の上で片足を思い切り振り上げ、軸足にしつかり体重を乗せて重い一撃を振り抜くためにバランス感覚は必須項目で、スケートは氷の上が地面とそう変わらなくなるまでの練習場なのだ。スピンドステップを飛びぬけて

いる体力と脚力に物言わせて、難度も労力も度外視した、競技のプログラムとしてはとても認められない内容で滑る今の私は、プロが見れば無茶苦茶だと頭を抱えることだろう。

ジャンプでは身体に芯が通つたように直線を意識し、 спинはむしろ柔軟を最大限に生かす。ステップは軽やかに。身体に染みついた教えに沿つて忠実に飛び、着氷。氷の破片を巻き上げて、エッジが銀盤を鋭く抉る。全身の筋肉とめぐる血流がいつもより鮮明に知覚できる。指先、爪先まで鋭敏に神経を張りつめさせるような感覚。走るようなフォームで軽快にステップを踏むが、身体は鉛のように重かつた。心と体はバラバラ、目は虚ろを映して、笑顔どころか無表情でブツブツ呟いている私のスケーティングは正面見られたものではない。だからわざわざ営業時間外のリンクを貸してもらつているというのに、誤解が解けた後もリンクサイドで頬杖をついてこちらを眺めるシンの視線が、少々居心地が悪い。

「シン……律儀に残つてなくとも、先帰つていいよ？」

「俺のことは気にすんな、背景ぐらいに思つといてくれ」

「そんな無茶苦茶な……」

一旦クールダウンの為にリンクをぐるりと周回する。バックステップでの滑走も慣れたものだ。周囲に人がいないと分かつていれば、気を張らずに悠々と氷の上を泳げ

る。ヒラヒラと手を振った相棒はまた頬杖をついて、表情の読めない顔でじつとこちらを見てくる。落ち着かない。

(心配させてるんだろうな)

数年バディを組んで、あちこちを旅したのだ。面と向かつて会つたことの無い人間でも行動分析できるのだ、身近な人間の思考を推測するのは容易い。サイコメトリーでも無ければ千里眼持ちでもないから、表情や仕草で読み取れる領域までで、心の細部や押し込めたものまで知ることはできない。集団に潜もうとする犯罪者、仲間の内に潜むスパイや裏切り者をあぶりだすには十分有効だが。

今回も、この観察眼を買つての依頼だつた。

エンジエルスケイルや発火快楽^{アグニの角質}ドラッグに似た、肉体改造系危険ドラッグの売人と胴元の確保と流通ルート、顧客リストの奪取。地元ヒーローとP.D.の地道な聞き込み、張り込み調査で、とあるパーティと見せかけ、売人から顧客へドラッグの受け渡しが行われるのを掴んだ。後はそのパーティで一網打尽にして、胴元から製造工場を吐かせる。HLで飽きるほど処理した手合いだ。

私とシンに来た依頼は、会場から万一でも脱走者が出てないよう、予測できる逃走ルートの絞り込み、あとは会場内に潜入するチームに入つて、私は警部と共に現場指揮、シ

ンは「洗脳」で暴動になるだろう会場内の鎮圧だ。まだ（見た目は）若造でしかも海外ヒーローだというのに、最近こうして陣頭指揮を任されることも多くなってきた。多分H-N^{ビーローネットワーク}での活動報告と口コミで広まつたんだろう。向こうの世界で作つた超高性能AIの「ムネーモシユネー」をこちらの技術レベルまで更新した電腦魔でのホワイトハツカ一という一面は流石に外聞が悪いので、警察の一部しか知らないが。

パーティは明日。最終ブリーフィングを終えたその足で、リンクまで来た。自分の身体の最終調整と、一斉捕縛に動いた後予想される流れの確認。アスリートが念入りにウォーミングアップをして集中するように、私にとってはスケートが精神安定剤のようなものだつた。バレエも同様だ。氷の上だと目が醒めるような心地がする。身体の調整と頭の整理にはびつたりだつた。ここなら、余計な雜念も雜音も入らない。

流れる汗を服で拭うように見せかけて、耳に意識を傾ける。

（……やつぱり、どんどん聞こえづらくなつてるな）

スマホから流しているはずのクラシックはどこか遠い。ぼわんと水を隔てて音を聞いているような奇妙な感覚に、小さくスラングを吐き出す。

ここ最近の私の世界は、少々静かすぎる。

「ああ、うん……大丈夫だよ、問題ない。ニューライターはこっちで過ごす羽目になりそ
うだけど、松の内の間には帰れると思う。お土産買って帰るよ」

冬ともなれば、日暮れは地球の何処にあつても早いものだ。ハンドルに重ねた手の上
に顎を乗せ、心操人使は遠くの紺と紫と橙が滲んで混じり合うサンセットを眺めてい
た。隣のシートに身を預けてスマホ片手に淡く微笑む相棒の後ろ、車のフレームの向こ
うで、切り取られた大西洋が波立つのが見える。赤レンガの屋根と石造りの中世の雰囲
気が残る街並みを染める夕暮れ時、今となつてはすっかり見慣れた光景だが、時折故郷
の街並みが恋しくなる。西洋の街並みに違和感なく溶け込む相棒と、どこかしら浮きが
ちな自分との差異を思い知る。なにもかもを。

画面をタップして通話を打ち切つた星合に、麗日か、と彼女の一番の女友達の名前を
挙げる。昨日の自分が不本意だが、星合千晶と連れ添う唯一として認めていた男の痛烈
な裏切りに憤り、卒倒しそうなほどの眩暈に襲われたように、漏れ聞こえた関西訛りの
声もまた焦りに満ちていた。高額になりがちな国際電話をかけてでも、心ないゴシップ
に傷ついてはいないかと案じたのだろう。浮気相手と目された相手が微塵も恋愛対象
に含まれようのない関係性だったとしても、焦りの一つも見せず、世間話でもするかの
ように落ち着いて対応する星合もどうかと思うが。

頷いて見せた星合は、微笑みの中に苦みを添えた。日本人より濃い眉が、ほんの少し
だけ下がる。

「心配されてしまった」

「だろうな。むしろ帰国したら知り合い全員に問い合わせられると思うぞ」

「う、それは嫌だな……」

類い稀な思考能力でほんの一瞬で色々予測したのだろう、スマホを握ったままの手の
甲を額に押し当て、聞こえた声はため息交じりにくぐもっていた。

「それは置いといて……土産を買うならマルクト寄つていくか？ クリスマスマーケッ
トも明日の昼で終わりだろ」

「渡す頃にはクリスマスどころかお正月過ぎてるけどね……オーナメントで良いのがな
いか見繕つて、レープクーヘンなら日持ちするし買つていこうか」

「だな。こないだ飲んだグリューワインの屋台も寄ろうぜ、あれは美味かつた」

「車だから家までお預けだけどね」

　気が滅入るだけの話題はさつさと流すと、彼女もまたさつさと思考を切り替えたらし
い。

現在仕事で滞在中のニュルンベルクは、ドイツ各地で開かれる2500近くのクリスマスマーケットの中でも観光客に人気な「世界最古のドレスデン」「世界最大のシュー

トウツトガルト」と並んで、世界一有名なクリスマスマーケットだ。金色の天使がシンボルのこのマーケットは毎年多くの観光客が詰め掛ける。赤レンガと石畳が美しい旧市街の市庁舎広場に「美しの泉」と呼ばれる金色の噴水塔がそびえ立ち、赤と白のボーダー柄の天幕を張った屋台が立ち並ぶ。クリスマスツリーに飾る精緻なオーナメントや、蜂蜜とスペイス、柑橘類の皮やナツツを使つたレープクーヘンという、ツリーのオーナメントにも使われるクツキーが売り場に並び、シナモンやオレンジの輪切りを浮かべたホットワインが靴下型のマグカップに入れられて売りに出される。

この街での依頼は早々に終わつたので、こうして次に入れている仕事までマーケットを巡る余裕があるくらい、次への移動時間含めて数日空きが出たのは喜ばしい。違法ドラッグをバラまいていた売人は洗脳で停止、洗脳にひつかからずパニックを起こした参加者はまとめて星合に氷漬けにされた。後処理にむしろ手こずつたが、所詮国外のヒーローにできることなんて限られている。引継ぎを済ませ、つかの間の休息を楽しんでいた。お次は他の国のヒーローとチームを組んでの要人警護だ。ぎりぎりまで張りつめなければならない任務前に一息つけるか否かで、パフォーマンスはともかく、気持ちが違う。

広場で色々買い物を終え、車に戻る道すがら。俺はここ数日ずっと引っかかつっていた

ことをついに口にした。

「……帰国したら、すぐに病院行くぞ」

「え」

悪戯を見咎められた猫のように、表情は変えないままびしりと凍りつく星合に、俺は額を押さえた。

「やつぱりほつておくつもりだつたな……：単純に聴力が落ちてるのか精神的なもんかだけでもハツキリさせといたほうが、後々良いだろ。対策立てやすいし、いざつて時に周囲に説明すんのにも役に立つ」

「うつ」

「診断下りりや、サポート会社に補助アイテム作成申請もできる。まだ症状が軽いのに轟や緑谷を心配させたくないってのも分かるが、バディとしては看過できねえよ」
バディだから。何度繰り返したか分からぬ免罪符を盾にする。こう言えど、星合の性格上無視できないのを承知で、ずるい言い方をする。

本当ならすぐに病院に引つ張つていきたいところだが、海外じや保険適用外だつたりして高額になりがちだ。国際的に活躍するヒーロー向けの保険にも勿論入つているが、通院の利便性を考えれば日本の方が良い。

常人よりも能力のピークが早い分、落ちるのも早いと事前に聞いていなければ、ここ

のところ彼女の聴力が低下していることにすら気付かなかつただろう。個性が身体能力の延長線上でしか無い以上、老化と共に能力に陰りが見えるのは当たり前だ。ヒーローの宿命でもある。……でも、ヒーロー業もプライベートもこれから、という時にその兆候が見え始めたのだ。心配しない訳がない。

しかも星合の個性は人間の生命線である血液そのものを資本とする。使いすぎは死にそのまま直結するし、もし彼女の話の通りなら、酷使しすぎた造血細胞によつて産生量がガクンと落ちて、血が薄まつたり、総血液量が低下して諸臓器や筋肉の維持に関わつてくるとなると、放置は危険だ。四肢や臓器の壊死にもつながりかねない。

「……分かつた」

「よし」

言質は取つた。後はリカバリーガールや医療系個性の信用できるツテに受診の根回しをしておけば、こつそりサボることもないだろう。

いろいろとマーケットで買い込んで、戦利品を詰めた紙袋が振動でガサガサと音を立てる。拠点のサーフハウスに戻る道すがら、運転を交代し、ハンドルを黒の皮手袋越しに握る相棒を見やる。何でもないありふれたレンタカーだが、きりりとした気の強そうな横顔で運転するさまは映画のワンシーンのようだ。時々ヴィランとびつくりするほ

どのカーチェイスを繰り広げるが、その度に思う。お前どこでそんな技術身に付けたんだ、と。

色々とミステリアスで、問題ごとを抱え込みがちなバディ。耳の事、轟の浮気誤報道、未だ勢力の衰えないヴィラン連合のこと……問題ばかりが山積みになつて、いつかこいつが一人で抱え込み切れなくなつて潰れてしまわないか、それが俺は心配でならない。

「何度も言つたと思うけどさ」

「うん？」

「何があつても、俺はお前の味方だからな」

まだ暖まり切つていな車内に、一瞬沈黙が下りた。少しの照れくささをこまかすために、窓の外を勢いよく流れていく街並みに視線を向けているから、今星合が、……クリステイアナ・I・スターフェイズがどんな表情をしているのか分からぬ。ただ、かすかに息を呑む音だけが、耳朶を震わせた。

星合千晶が抱える秘密の一端を、俺は明かされていた。

雄英卒業直後、ヒーロー科トップクラスの技量と人望の持ち主が、どこのヒーロー事務所にも就職せず、はたまた進学もせず、全ての連絡手段を絶つて失踪したのは、たちまちのうちに彼女を知る全関係者の知るところとなつた。後見人であるオールマイティにすら悟らせずに、雄英高校卒業式を最後に行方を眩ました彼女に、敵連合が拉致したのかとか、もつと巨大な犯罪シンジゲートに目を付けられたかと騒然となる中、その数日前に、県内最大級のショッピングモールで、明らかに長期旅行としか思えないスースケースを購入するところに出くわせたのは幸運だつた。どこか出かけるのかと訊いた俺に、探し物をしに、と抽象的に答えた星合の寂しげな横顔が今でも焼き付いて離れない。その後失踪したのを見て、騒然とする周囲の中でひとり、ああ、あいつは自分の意志でどこかに飛び立つたのだと腑に落ちた。恐らくしばらくは帰つてこないだろうとも。新人で色々余裕のない時期だというのに、時間の合間を縫つて血眼で探し出そうとする元クラスメイト達に、俺はそのことは告げずにいた。不義理だとは思うが、あの横顔を思いだすとどうにも口が重くなつて、最後まで俺の中の秘密として仕舞いこまれた。

数年後、見覚えのないメールアドレスから送られてきた「そろそろ帰るよ」の一言の通り、再び星合は日本に戻ってきた。すぐに約束を取り付けて再会した星合は、高1の

体育祭後に髪を切った時よりずっと髪を短くしていた。疲れの滲む頬骨はあまり健康的ではなかつたけれど、強靭な意思を秘めた赤い瞳は変わらず、むしろどこかすつきりと、何かを吹つ切つたような面持ちだった。何をしていたのか、何を捜していたのかを訊かない俺に、星合は今後どうするかを語つて聞かせてくれた。事務所もサイドキックも持たない、フリーランスのヒーローとして活躍する。表舞台は緑谷や爆豪といつた面々に任せ、イレイザーヘッドのようなアングラ系の仕事をメインに暗躍すると。

バディの話を持ち掛けたのは俺だ。心理学の大学と非常勤のサイドキックを掛け持ちして、個性の「洗脳」の幅がさらに広がつていた。政府や警察から俺個人に依頼が舞い込むようになつてきていて、俺の現状は星合のヒーロー観に沿うものだつた。こいつの隣に立ちたい、背中を預け合う相棒でありたい。それは学生からずつと抱き続けてきた望みだつた。このチャンスを逃せば、次は無いだろうと予感していた。だが——断られた。にべもなく。緑谷なみの頑固さで。安定した事務所でのサイドキックを捨てる必要はない、と。そこから今のバディ関係までこぎつけるのにどれだけかかったことか。

秘密を打ち明けられたのは、バディで動くようになつて数年、スペインのバルセロナの海辺でだつた。他言無用で、と前置きされて語られたのは、彼女の血液に由来する「個性」が「個性」でないこと、学生時代は上手く誤魔化していたが、相澤先生の抹消も物

間のコピーも、「個性」に干渉する個性が無意味なこと、血液を用いた技は異世界由来で、実は実際の年齢は10歳年上だとか、そういった耳を疑うような、それでいて不思議と納得してしまうような秘密の数々だつた。

「……何で俺に明かしたんだ？」おいそれと明かせるようなもんじやないだろう」と言いたい様々な言葉を呑み込んだ末に尋ねると、星合は海に視線を投げたまま、夕日に染まつた顔に穏やかな微笑みを浮かべた。

「君に何も返せない私が出来る、唯一の誠実だからだよ」

一瞬、最後の最後まで明かさずにいようと決めた気持ちを悟られているのかと、ぎくりとした。けれどそんな意味が含まれていないのを、次の一言で思い知る。

たぶん、私は皆を置いて早死にするだろうから。

海風に混じつて辛うじて聞こえた小さな呟きに、頭を殴られたような衝撃を覚えた。何も返せないなんて、そんなことはないと、むしろ貰つたものを返せていないのはこちらの台詞だと言い返してやりたかった。なのに開いた口から零れるのは、言葉どころか音にすらなり損ねた空気ばかりで。

死への恐怖も苦悩も無かつた。悲愴さも諦念も無く、ただ誰もが迎える生命の定めと

ばかりに、揺るがない確定事項として受け入れていた。

通り過ぎる街頭の光が、血の氣の薄い横顔を照らし出す。泣くのを我慢しようと/or>する子供のような、見ているこちらが胸を衝かれるような小さな微苦笑が浮かんでいた。

「……ありがとう」

頼むから、星合から幸せを奪ってくれるなど、切に願う。たとえそれが、自分が与えるものでは無かつたとしても。

土曜日の君に似合いの花束を

先日の日本版ヒーロービルボードで3位にランクインした、絶対的な人気を誇るヒーロー・ショートこと轟焦凍の機嫌は絶不調だつた。日頃から無表情気味だが、ここ最近は完全に目も表情も死んでいる。

まさか自分の姉の買い物に引きずられるような形で付きあつたら、いつの間にかパパラッチされて熱愛だのなんだの好き放題に書かれるとは誰が予想するだろうか。テレビも新聞も連日飽きもせずに年の瀬のお茶の間に必ずその話題を引きずり出してくるだけでなく、現場でもその話題をぶつ込まれるのだからたちが悪い。

新春の特別番組として、トップヒーローをゲストに多数呼んだ豪華な人気トーク番組の収録後、記者やカメラマンに押しかけられ、あげく「今日の衣裳も先日の買い物に付き添つた彼女を選んでもらつたんですか?」と最悪極まりない質問を投げかけられた時、心底生放送が終わつた後で良かつたと思つた。ただでさえ学生時代に比べればずつとマシになつたとはいえ、周囲に比べて愛想が良いとはお世辞でも言えない自分の顔

が、とてもじゃないが放送事故レベルに至んだままではスポンサーや番組スタッフに迷惑が掛かっただろう。

下卑た好奇心を隠しもしない声で厭らしく揶揄するインタビュアーに、今期はトップを逃したものの、ナンバースリーヒーローである自分を誇りに思ってくれ、今日の晴れ姿を楽しみにしてくれていた姉と恋人を間接的に侮辱されたような心境だつた。その場は颯爽と現れたオールマイトに注目が集まつたお陰で、なし崩しにその質問は流れた。だが記者へのサービス精神と見せかけ、輝かしい笑顔と力強いサムズアップを送られたことで、意図的に助け舟を出してくれたのだと気付き、深々と頭を下げてその場を後にした。

だが、その程度で興味を失くすことはないらしく、更なる特ダネを求め、自宅まで特定して押しかけてくる者まで出てくる事態に、轟は自分より輪をかけてメディア嫌いの恋人の気持ちが分かる気がした。やましいことなど微塵もないが、言葉一つを都合のいい方に捻じ曲げ切り取つて、報道の自由を盾にこれみよがしに掲げるのがゴシップだ。恋人ほど角が立たない言いくるめ方が出来るほど弁が立つわけでもないので、轟はひたすら無言を貫き通して、取材を断り続けるしかない。運よく元同級生と現場が被ることが多く、誰もが皆轟と千晶の交際を知っているからこそ同情的で、ここはいいから帰りなよ、と率先してマスコミを引き受けてくれるのは有難かつた。

……ただ気掛かりなのは、あの報道以来、ドイツに出張中の恋人と連絡が取れないことだ。写真を見れば、聰明な彼女なら取り乱す前に、すぐに相手が自分の姉・冬美だと気づいてくれるだろう。何しろ、二人が学生だった頃から、姉と千晶は本当の姉妹のように仲が良かつたのだ。彼女の秘密を知つた今になつて思えば、千晶の中身が姉とほぼ同年代だつたのに由来する親しみだつたのだが。

けれど、全く繋がらない電話に焦れて、最終手段だと千晶の相棒（サイドキックではなくバディだ）である心操人使にどんな様子か探りを入れるべく連絡を取つてみたが、「二度目は無いと思え、帰つたらとりあえず一回殴らせろ」とすこぶる不機嫌な声で一方的に通話を切られた。

ある意味当然だつた。

心操人使は、星合千晶に焦がれながら、ずっとその隣に立つために、轟とは違う相棒という形を選んだ男だからだ。

己の恋心に堅く蓋をして押し殺してでも、さよならの一言で断ち切れる恋慕での繋がりではなく、背中を預け合い、信頼で結びついた友愛の立場を取つたのだ。男同士だから

ら分かるが、根底ではまだ吹つ切れていないのが良く分かる。下手をすれば自分よりも長い時間、共に世界を駆けまわりながら、それでも轟の目を盗んで不貞行為を働くかなのには、轟への義理というよりは、ただただ千晶との関係を壊したくないという想いと、心操がネレイドというヒーローの在り方を心底尊敬し、それに相応しくあろうとしているからだ。そういった立場を貫こうとする姿勢に関しては、轟は心操を評価しているし、邪推することも無かつた。……その一種の信頼と嫉妬をするしないという心情的な問題とは、また話は別だが。

そういうやまた声量上がつてたな、とどうでもいい感想が頭に浮かんでくる。

「と、轟くん大丈夫……？」

「おう……大丈夫じやねえ……」

「み、みたいだね……（思つたよりダメージデカかつた……）」

心配そうに声を掛けてきた緑谷にも疲労感三割増しでおざなりに返事をすれば、今や日本の平和の象徴の代表たる男は、目に見えておろおろと挙動不審になつた。しまつた、とデカデカと考えていることが顔に出ていた友人に苦笑を滲ませて指摘する気力もなかつた。敵と相対すれば誰よりも頼もしいというのに、平常が氣弱で普通じみて見えるところは学生時代から変わらなかつた。

あの頃から大きく変化したものは多い。歳を経るにつれて見えてくるものもあれば、

当たり前だつた純粹なものを見失つていく感覚もあつた。けれど、自分の人生のターニングポイントは間違いなく高校一年生の春と夏の境目だつた。

何の根拠もないが、轟にはただ年月を経ただけではこうはならなかつただろうという予感があつた。妄執に取り憑かれていた自分の世界を広げてくれたのは、目の前の男と尊敬する恋人、そしてこれまで出会つてきたかけがえのない知人たちとの出会いがあつたからこそだつた。

未だ確執は残つているものの、十年前とは接し方も互いに随分軟化したエング^{親父}デヴアーラーもその顔の広さを遺憾なく發揮して、自分の娘と息子をネタにあることないこと書き立てようとしていたマスコミに圧力を掛けているらしいと、母づてに聞いた。父の話題を出しているのに、心底おかしそうにころころと笑い声を上げるようになった母は、数日後に帰国予定の千晶と轟の三人、欲を言えば家族全員で実家のリビングで例の特番での晴れ姿を早く見たいと、年賀状を今か今かと待ちかねる少女のような様子で指折り帰国予定日を待ち続けている。

不安がらせたり、泣かせたりしてはいないうだろうか。気丈に振る舞うのが得意で、プライドが勝つて負の感情を他人の前で曝け出すのを良しとしない恋人が自分の知らない所で心を痛めているのではないか。そんな想像が轟の胃を重くする。

国内と海外、仕事の場が異なる以上会えない時間が長い。だが、愛想をつかされていいのかとか、浮気されているんじゃないかと疑念を抱いてギスギスしたりとか、そういうつた世の恋人が一度は通るだろう道を、二人は今まで経験しないままだつた。抱いたとしても、それを相手にぶつけようとはしなかつた。会えない時間が多いからこそ、会える時間が一分一秒でも惜しい。轟も千晶もそう考えるタイプだつた。つい欲望のままに抱き潰してしまうことも多いが、家庭環境がお世辞にも良いとは言えなかつた二人にとって、くだらない話をしたり、料理をしたり、そういうつた何気ない日常の中に相手が穏やかに暮らしていることそのものが幸せなのだ。

(次会つた時に渡そうつて決めてたのにな)

あまりのタイミングの悪さ、時勢の悪さに、出るため息も深い。轟はマスコミのせいで自宅の机の抽斗に仕舞いっぱなしの小箱を思つた。

青いベルベット地の外箱に収めた、ハードプラチナの指輪。六つの爪がダイヤモンドを指先に留まつた雪の結晶のように見せるデザインに、店員が並べた婚約指輪のサンプルの中で雷に打たれたように「これだ」と即決した。デザインの方向性は今まで何度もアクセサリーを贈ってきた中で把握している。指輪は流石に初めてだったが、情事の後

の疲れて一番無防備な時にこつそり指のサイズを測つたので問題ない。

……だが、こんなことになるなら、最後に共に過ごしたクリスマス直前の夜に渡しておけば、とも思つてしまふ。シンプルなデザインだからこそ色々とダイヤモンドの質をこだわつて、裏面へのイニシャル刻印もつけたオーダーだったため、あの夜にはまだ届いていなかつたのだ。

明らかに誤報と分かるニュースとはい、浮氣騒動の矢先にプロポーズというのもどうなのか。パパラツチされた姉との買い物では、プロポーズの仕方に既婚者としてのアドバイスをもらつていた。その時の会話の内容までは聞かれていなかつたのか、記事にされていなかつたのは不幸中の幸いだろうか。元クラスメイトで既にゴールインしている面々に恥を忍んで話を訊いたり、千晶の親友である麗日や蛙吹といった面々との相談の時にパパラツチされていたら、心操に本気で締め上げられていただろう。

とりあえずきちんと話し合つて、世間が落ち着いてからでなければ婚約話もしづらい。なにしろ、プロポーズとなると二人にとつて、結婚以上の大きな意味をもつのだから。

高校卒業から十年。戸籍上と肉体年齢では28歳だが、千晶の精神年齢は38歳。アラフオーダ。いくら肉体が若からうと精神的に10歳も年上なのだ、ただでさえナイ

普な結婚やその先に待つ子どもの問題を考えれば、これ以上先延ばしにはできない。

自分以上に愛を知らず、人との確固とした結びつきを信じることができない、何もかも与えられず、自分から「ほしい」と乞うこともできずに「私にはなにもない」と自嘲の笑みを浮かべるばかりだった彼女と恋人になるのにも、それはもう大変だつたのだ。

失踪事件でヒーローになつたのが遅かつた千晶の活躍が安定し、尚且つ自分がトップヒーローになり、この世界に彼女を繋ぎ止めるに相応しい、力と立場と甲斐性を得るまでプロポーズしないと自分で誓いを立てていたために少し遅くなつたが、星合千晶という一人の女性の過去も現在も未来も、幸せも不安も丸ごと迎え入れる準備がやつと、ようやく整つたのだ。指輪のオーダーを終えた時、長かつた、と小さく感慨深く息を吐くぐらいには。

指輪を渡す時、初めて高校生の時に千晶にバレッタを贈つた時のように、小さく歓声を上げてうつとりと微笑んでくれるだろうか、それともほろほろとうれし涙を流すのか。ほつそりした指に指輪を嵌めてプロポーズした後のこと、悩んだり想像したりしながら帰国を待つはずが、これほど悶々とする羽目にならうとは思いもしなかつた。浮かれた気分に水を差された気分だつた。

「会いてえな……」

あと数日なんてとても待てそうにない。ため息交じりに呟くと、隣で周囲を警戒していた緑谷が苦笑した。

——その時。

「うわあああああ!! たつ、助けてくれえええ!!」

「！ 行こう轟くん」

「おう」

数ブロツク先から聞こえた悲鳴に、一瞬で頭の中が切り替わる。顔を引き締め、二人して勢いよく駆け出す。角を曲がつて現場に目を向けた瞬間、聞き慣れた声が響いた。

「——水晶宮式血濤道」

天を衝くような数メートルに及ぶ巨体の男が、無造作に市民に手を掛けようとしているその場面。その丁度後ろに、ひらりとベランダの手すりから舞い降りる人影。その手慣れたパルクールの動きには見覚えがあつた。不敵な笑みを浮かべた人物の赤く塗られたくちびるが動き、凜とした声が不思議とよく通つた。

「『天網恢恢』」

瞬間、ヴィランの男の巨体が一切の動きを止めた。石化の魔眼に掛かつたような不自

キューベレイ

然な停止の仕方に一瞬周囲の一般人たちは一様に疑問符を浮かべたが、すぐにその場からわっと逃げ去つていく。その場に残つたのは動きを止められた男と、動きを止めたであらう人物——星合千晶が、片手をポケットに突つ込んだ立ち姿で警察に携帯で通報していた。

「ち……ネレイド！」

「や、ひさしぶり」

思わず本名で呼びそうになるのをぐつとこらえ、ヒーローネームで呼べば、こちらに気付いた彼女は目を丸くして、すぐににかりとわらつた。通報を終えてひらひらと手を振る様子はいつも通りに見える。にんまりと弓なりにしなる真紅の瞳は悪戯っ子のようでいて、チエシャ猫のような食えなさも同居していた。透明で沼底のように濁つ正在る、老鑑な赤色。

「おま……帰国は3日後じや……」

「そのつもりだつたんだけど、思いのほか仕事が早く終わつたから帰つてきちゃつたよ。何か大変なことになつてるみたいだし」

改めて見れば、千晶は鞄ひとつ持たない手ぶらだつた。彼女の長い脚と変わらないくらい大きいスースケースは見当たらない。きっといつも通り空港から自宅への宅配を頼んだのだろう。仕立てのいいイタリアスースによりもほつれも汚れもなく、女性的な

曲線を引き立てながら、すとんと縦に落ちるデザインが長い脚を強調していた。膝丈のチエスター・フィールドコートは目の醒めるアイスブルーで、光源の色によつてはごく明るいライトグレーにも見える。

外であることと、俺がヒーロー活動中のものもあいまつて、千晶の態度はあくまでヒーローとしてのものだ。線引きがしつかりしているのは今に始まつたことじやない。トップヒーローになるまで、スキヤンダルの類いは好ましくない。そんな気遣いがあつて、滅多にないヒーローの彼女と共同戦線を張れても、恋人関係を匂わす態度の一切を削ぎ落として彼女は振る舞つていた。それがどこか寂しいと感じるあたり、重症だと思う。どう声を掛けていいものか迷つた末に、思わず、手のひらで口元を覆つた。

「……その。解つてるとは思うんだが、あの記事は誤報だ」

「そりやそうでしょ、君のお姉さんだもん。見間違えようがない」

一瞬虚を突かれたような顔をして、ふ、と千晶が笑つた。どうしたものかと対処に困つて思案するような苦笑だつた。通話を終えた後からずつと両手をポケットに突っ込んだままのラフな立ち姿が、きりりとした美貌を引き立てるコートとスーツの潔癖なほどの威厳とちぐはぐで、どこか一種の気安さと近寄りがたさを同居させていた。

数秒、二人の間に居心地の悪い沈黙が落ちた。
うなじをかりかりと搔く切り揃えられた指先は艶やかに紅い。

「まいったな、本当は、きちんとした本物を渡すつもりだつたんだけど」

おもむろに首元を引っかいていた手を胸の前に掲げた彼女の中指から、シーツがこすれ合うような音を立てて細い血の紐が射出され、宙を揺蕩つた。それを綾取りのように指に引っかけ、手繰り寄せて、するすると複雑な形を編み上げる。茫然と見守る俺と緑谷の前で、千晶の指が血を織り上げるのを止めた瞬間、パキン、と水が凍つてひび割れる音とともに、冷やされた空気が急激な温度変化で白い蒸気を生み出した。温かくは無いから、むしろドライアイスのような霧が千晶の手許を隠す。

「まさかこんなところで会うと思つてなかつたから……急ぎしらえで申し訳ないのだけど」

撒いていたストールを首から引き抜き、浅葱から白に溶けるような色合いの薄絹を冷氣の靄に隠れたそれに巻き付けた。太陽に掛かっていた雲がさつと晴れて、差し込んだ光が靄を透かして、その中身をようやく見ることが出来た。

「氷の……」

「薔薇……？」

千晶が俺に差し出していたのは、溜息が出そうなほど精緻な、透明度の高い氷を削り出して作った氷の薔薇の花束だった。ストールを包装紙とリボンに見立てた花束の中

には、青と白の、密度の違う氷で編まれた纖細な薔薇。

「焦凍」

しんと静かな涼音が俺の名を呼んだ。茫然と促されるまま受け取つた花束を受け取り、薔薇を眺めていた俺はゆっくりと顔を上げて、こちらを見つめてくる真剣な瞳に目を奪われた。ぞつとするほどうつくしい花貌には、幾度も打ち磨かれて研ぎ澄まされた刃物めいた覚悟があつた。

「Eres 私の mind いと a し alm ま gemela. 片割れ 何も持たない私に、私自身の幸せを教えてくれたひとよ。どうしようもない死にたがりに生きたいと思わせてくれたひと」

重なつた偶然の果てに、貴方に出会えたことを、私は心の底から感謝している。

眞剣さの中に熱を帯びていく瑪瑙の瞳。長い睫毛がはためいて、そろりと伏せられた。

視線の先を辿る前に、ほつそりとした指先に片手を取られ、左手の薬指のあたりにやわらかな口づけが落とされる。海外の血を彷彿とさせる、気障で、けれどあまりに似合う行為に、周囲がざわりと色めく。甘くとろめいたアルコールのような声に吹き込まれた熱に煽られたように、頬のあたりがかつと熱を持つのを感じた。ストール越しに感じ

る氷の冷たさに、反対の手から電流のような痺れが全身に伝播する。

中世の騎士が誓いを立てるような行為から顔を上げた彼女の襟ぐりから覗いた、見覚えのあるチエーンネットクレスが影の中できらりと蒼く光つた。

「Te amo completamente de mi alma. . . .君のこれから輝かしい人生ぜんぶを、どうか私と共に歩んでほしい」

私にあなたの人生を頂戴。

——それは、星合千晶、クリスティアナ・I・スターフェイズという人間が心の底から望んで「欲しい」と、初めて口にした瞬間だつた。痛いほど切実な想いのこもつた、祈りにも似た願いだつた。

「悪い」

だから、ぼろりと零れた音は完全に無意識だつた。嬉しさと悔しさと感動と後色んな感情がごちゃ混ぜになつた内心の大嵐ぶりに比べて、その呴きは静かだつた。ひく、と

繫がつた手が怯えたように揺れる。

えつ、と文字に書き起こしたら濁点がついていそうな蛙の潰れたような声でギヨツとする緑谷を視界の端に捉えながら、捕らえられたままの手を逆に今度は轟が丁重に持ち上げた。

「此処に嵌めたいモン、俺も持ってきてねえ」

するりと撫ぜたのは左の薬指の根元。本当なら急造で自分も水で指輪を作つて嵌めたいところだつたが、千晶ほど纖細な個性での作業に向いていないことを自覚していたので、相手を傷つけかねない無謀には挑まなかつた。

「……だから、あとで一人きりの時にあらためて仕切り直させてくれ」

考えるタイミングが同じと分かつて、少し笑つてしまつた。まさか先に逆プロポーズされるとは思いもよらなかつた。男として少し、いやかなり悔しいが、それ以上に嬉しかつたのだ。

確かに、今。星合千晶が、自分を丸ごと欲しいと乞うてくれた。それは、彼女自らこの世界に居たいと言つてくれたも同然で。今自分と恋仲でいてくれるのは帰れないからで、元の世界に帰れる手段が見つかつたら、握つたこの手が離れていくんじやないか——内心で押し殺していた不安を吹き飛ばすような威力が、その一言に詰め込まれていった。同じ気持ちでいてくれたことに、これ以上ない喜びを感じる。

どう言おうか、なんて何度もシユミレーションしては頭を悩ませていたのに、実際に言うとなつたら、言葉はするりとつつかえることなく零れ落ちた。

「……結婚しよう、千晶」

きよど、と目を丸くした彼女は、くしやりと表情を崩した。

「は、ふは。やっぱり締まらないなあ、天然さんめ」

瞬きで零れ落ちた一粒の涙が、彼女が他人の目も憚らず飛びついてきたことで碎け散る。至近距離にぼやける視界の中で、腕の中に納まつた体温を逃がさないように強く抱きしめた。

浮いて彷徨つていた最後の欠けひとつ。最後のピースをパズルに填め込むように、かちりと何かが噛みあう音がしたような気がした。

炉には白いアザレアをくべてくれ

ヒーロービルボードチャート三位、半冷半燃ヒーロー・ショートと、海外で密かに、けれど根強いファンを世界各地に持つ国際派ヒーロー・ネレイドの婚約報道は全国と搖るがすにとどまらず、耳ざとい海外メディアもこぞって取り上げた。

ラテンの血全開で成された逆プロポーズの詳細はその場に偶然いた雑誌記者により全文がそのままそつくり書き起こされ、1月11日、ショートの誕生日に合わせて開かれた婚約発表の為の記者会見までの数日のニュースやメディアを賑わせた。

逆プロポーズが行われたその夕方にお茶の間を騒がせてから、たつた数日しか経つていないにも関わらず、ショートが所属する事務所主導の記者会見は、こうなることを予見していたかのように万全の態勢で行われた。まさかの両名の隣にデデドン、と効果音が着きそうなほどの威圧感（物理）で構えたのは往年の大英雄、オールマイト（最初の数分だけ頑張つてマッスルフォームで記者陣を出迎えた）とエンデヴァー。2世ヒーローでも知られるショートはともかく、何故ネレイド側にオールマイトが？ と困惑する記者陣に、「私のかわいい娘だからね!!」とカミングアウト。まさかの元未成年後見人スクープで、ネレイドが成人した今は正式に養女として戸籍登録されているという新たな事実

に、ライターとカメラマンの腕が火を噴いた。

ビッグヒーロー同士の婚約を祝つたのは、同じく前線で活躍するヒーローから大ベテランまで目白押しだった。二人の親友の緑谷と麗日は自分のことのように感激のあまりカメラの前で大号泣し、それをなぐさめながら八百万と飯田が披露宴の友人代表は任せてくれ！と張り切つた。その他のクラスメイトたちからも祝いのメツセージが事務所あてに届いていると報告するショートのささやかな笑顔を使つたオンライン記事の閲覧数はあわやサーバーダウンする寸前まで伸びた。その記事の伸びに隠れて、ネレイドのバディとして有名だつた心操の「……星合、おめでとう。どうか幸せになつてくれ。轟、頼んだぞ」と不器用な笑みをこぼしたインタビュー記事は、密かに存在していた心操×星合派だったファンを大号泣させた。

挙式や披露宴の日程を問うインタビュアーに対し、どちらも詳細な日程は未定だと答えた。

『まだ宿命の敵連合との戦いは終わつてしませんから。あの時代のクラスメイトたちが集結するイベントなんて、連中には格好のネタでしょう。晴れの日まで連中とやり合う気はないので』

『……ただ、この話をすると白無垢かウエディングドレスかでオールマイトとエンデ

ヴァーの譲れない戦いが勃発するのが難点ですね』

『轟家の嫁入りは代々和式だ、それだけ和装が似合うなら、白無垢も問題なく映えるだろう』

『だからエンデヴァー、一世一代の大イベントなんだよ? 二人の好きなようにしたらいいじゃないって言つてるよね? 強制良くないよ?』

そこから発展する口論に、冷や汗を流したインタビュアーが……どうやつて収めてるんですか? と問うた瞬間、につこり、といい笑顔で「お義父さん方」と有無を言わせない声音でびしやりと諫めた。途端に口を閉じる二人、という会話の流れもまた笑いを誘つた。

その三ヶ月後、桜の咲き乱れる季節に、都内の有名な神社で二人は神前式で挙式し、三々九度の盃を呑み交わした。一般に公開はされなかつたものの、五つ紋付羽織袴の轟に寄り添う、白無垢に綿帽子姿の千晶は、桜の中で大層美麗だつたと、長らく千晶の姉がわりだと自負していたミッドナイトは語つた。その後旧友たちや知人だけの披露宴は大賑わいだつたとも。

そして時は流れ、七月。
スペインはバルセロナ。数百年経つても未だ未完の大聖堂で、ひとり千晶は佇んでいた。

結い上げた黒髪は引きずりそうなほどに長い纖細なレースのヴェールで覆われ、膝から優雅に床へと広がるマーメイドラインの無垢のドレスに、聖堂を彩るステンドグラスの鮮やかな色が落ちている。トランペットとも称されるシルエットラインが紅やエメラルドグリーン、バルセロナブルーに染まつて床の上を泳ぐさまは、金魚が尾ひれをひらめかせるさまに似ている。首元のレースチョーカーから鎖骨、胸元にかけて透かしの入つた華を象つたレース地は、千晶の身体に残つた傷を曖昧に覆い隠し、首や胸元を彩る刺青を上品に透かせた。レースに縫いこまれたビーズが細かい光を乱反射させている。ウエディングドレスの宿命である背中が大きく開いているのは致し方ない。背中の酷い火傷跡や刃物傷、銃創はコンシーラーやスキンを張ることで、間近で無遠慮に眺めなければ気付かないほど偽装されている。

かつてネレイドの最初のコスチュームをデザインした、中学時代の旧友が千晶の為だけにデザインし作り上げたドレスを身に纏い、人気のない大聖堂でひとり、千晶は祭壇前で天へと延びる塔の天井を仰いでいた。

不意にステンドグラスの高窓から差し込む光が翳り、その彩度を落とす中、千晶以外

に人気のない聖堂内に、少年のような、それでいて老齢さをはらんだアルトが響いた。

「……そうか。お前は、その答えを選んだんだな」

数秒の沈黙の後に、周囲をあちこち見まわすでもなく、泰然と頭上を眺めていた千晶は、そのままうつすらと笑んで見せた。

「ええ。……呆れた？」

それに、姿の見えない男の声はいいや、と合いの手を打つた。

不安定な音程が、高く広がる聖堂の天井を跳ね返り、パビリオンの中をざざなみのように広がつて消えていく。口笛の内容は聞き覚えのあるものだつた。モーツアルト作、不朽の名作オペラ『魔笛』。それに、千晶は声の正体への確信を強めた。

「いいや。めでたいってだけさ。これでお前は”俺”から永遠に解放されるつてわけだ」

「どうかな。私は確かに救われたけど、私の中の絶望が完全に消えるわけじやないもの。全部ひつくるめて今の私があるんだから。救われて消えるほどヒトの絶望が儂いものなら、とつくに貴方は”死んでる”でしよう。だから、私の中の貴方は死なない」
きつぱりとした英語の言葉の端が消えないうちに、静かな聖堂を突き破る勢いの哄笑

がとどろいた。

「ふ、ははははは!!　こいつは一本取られた!!　そうだ、おまえという人間は最初からそ
うだつた！　全くお前の言う通りさ兄妹、希望が人間の足を動かすように、絶望と未練
は人間を生かす。だからこそ俺は二度目の大崩落を望んだし、おまえはこうして誰とも
連れ添わないはずだつた己を変えたんだ」

「……そうね。私の、もうひとつの中身さん」

中央の身廊と両脇の側廊を隔てる列柱は、天井近くで複雑な彫刻の織り込まれたアーチを描いている。その一角に不自然な影が落ちた。人影とも呼べない大きさのそれはするすると窓や壁を這つて、ついには祭壇の向こう、鐘楼の窓下に設置されたキリストの磔刑を表した彫像の肩元に現れた。

「お前はついに、他でもないおまえ自身の為に祈るんだ。有象無象の為に自分自身を切り売りしてきた、奇跡の嬰児みどり、運命に搾取され、翻弄され続けた泡沫うたかたの聖女さんよ。もう自殺の為の銀のナイフはいらなくな？」

からかうような軽く謳う口調に、千晶は影をぎろりと睨みつけた。

「そんな大層な名前を付けないで。私は私でしかありえない。愛するひとのために消えたりなんかしない。私はただの、星合……いいえ、轟千晶なのだから」姿の見えないそれが、影の中でわらつたように、千晶には思えた。

「じゃあな、兄妹。^{クリス}いいや、轟千晶。再び“俺”を受け入れるような未来を掴むなよ——

|

フツ、と一瞬だけ、聖堂内の蠟燭に灯る炎、照明の一切が搔き消える。一陣の風に煽られたかのような現象を残して、概念的な観測者たる悪魔はここを去つたようだつた。

「——ええ、絶望王。^{Fallen}人界で漂白し続けるあなたに、いつか穏やかな眠りが訪れますよう」

サグラダ・ファミリアは正式名称を日本語に訳すると、聖家族贖罪教会という名の力トリック教会だ。生まれ育つた世界と同じ名前、似た街並みの故郷^{クリスティアナ}で随一の人気を誇るモニュメント、聖家族が眠る墓を擁するこの巨大な建造物は千^{クリスティアナ}晶にとつての原点であり、ひとつ心の拠り所だつた。

サグラダ・ファミリアの建造物はそのものが巨大な一つの楽器だ。捧げられる合唱、演奏はパビリオンを通じてバルセロナ上空から全域へと音を届ける。天に近いここならば、声を届けたい世界の向こう側へ、声は届くのではないか。かつて大崩落で異界と現世が交わつたように。

そんな思いで、未だ慣れない我儘をダメもとで言つてみたのだ。ハネムーンではサグ

ラダ・ファミリアに寄つて、祈りを捧げに行きたいと。断られることも考えての我儘だつたが、恋人は二つ返事でうきうきと（いやあれお前以外には仮頂面にしかみえないからなという峰田のツッコミが入った）スペインを経由する旅行計画を立て、しかもドレスを作つてくれた旧友と結託して、こうして一人祈りと報告を捧げる機会を作つてくれたのだ。

するりと膝を折つて傅き、両手を組み合わせる。
か。

——ハロー、ハロー。ステイーブン。クラウス。聞こえていますか、届いています
か。

こつり、と石造りの床を靴音が叩く。近づいてくる足音が隣で止まつたのに、瞼を開けば、すつくと立つ夫がいた。こちらの視線に気づいた彼がふわりと微笑み、立ち上がる私のドレスの裾を踏まないようにながら、むき出しの肩と、腰元に手を添えた。

「——私は、このひとつ、この世界で生きていくね」

た。七月七日。奇しくも星降る夜、私が教会の前に捨て置かれた夜と同じ日のことだつ

Extra 01：銀の弾丸（×名探偵コナン）

タブラ・ラサで構わない

FBIで、ひとつ有名な話がある。鏡に映らない者には用心せよ。FBIアカデミーに限らず、正式に捜査官として配属された後も、口を酸っぱくして捜査官の間で語り継がれるそれは、お伽噺のような、それでいてすぐそばの日常に忍び寄っているようなホラーのような凄みをもつっていた。それが途切れることなく語り継がれていたのは、ひとえにFBI捜査官が、その特殊な任務の中でそういう存在と遭遇することがままあるからだ。

鏡に映らない者には用心せよ。奴らは、生き血を啜る魔怪である。ドラキュラやカーミラといった世界的に有名な古典的ホラーの中のフィクションではなく、実際の民間伝承に語られる不死者・吸血鬼であると。

どう考へても科学で立証できない、理解の及ばない怪現象が起きた時は、速やかにとある機関に出動要請を申請しなければならない。いくら厳しい基準をクリアし、知識と武力を備えた捜査官であろうと、犬死にしたくなれば絶対に手だししてはならない、手に負えない領域外の相手だと。それがFBI内の暗黙の了解だつた。

その機関とは、ヴァチカンに本部を置く“牙狩り”と呼ばれる、吸血鬼専門の武闘組織。人外の化け物に対抗するために、一般人の括りを大いに外れた戦闘能力をもつ精銳を数多く有し、全世界に支部を持つ千年の歴史を持つ秘密特務機関である。

全世界に潜む吸血鬼を見つけ出すため、FBIで語られているような伝承を用いて、牙狩りはあらゆる諜報・警察組織と秘密協定を結んでいる。吸血鬼と思しき目撃情報と引き換えに、不死者の撃退・殲滅を行い、時には人界を護るために必要と判断されれば、裏稼業でもある牙狩り独自の情報網から得られたテロ組織などの情報共有も行う、Win-Winの関係を結んでいた。とはいえ、アメリカに忠誠を誓う公的な司法組織のFBIと、キリスト教系の宗教的側面の強い巨大秘密組織が表立つて共闘戦線を張ることはなく、多くがシークレットナンバーによる連絡が殆どだ。

ただし、ごく一部の例外を除いて。

「死なれては困るわ」

「だ、誰だ!?」

誰もいない、気配すら感じなかつたその場に、艶やかな女の声が突然響いた。

動搖するスコッチと同じく、俺も口にこそ出しあしなかつたものの、素早く周囲に目を走らせる。埃が積もつて曇りきつているヒビの入つた窓辺に、溶け出るようにな意に

影が落ちた。その陰から滲みだすように、ひとつの人影が像を結ぶ。

見覚えのある女の顔が浮かび、思わず目を瞠つた。

「クリスティアナ・I・スターフェイズ……！」

「やあ、相変わらずの悪人面だね。潜入中に人のフルネームを呼ぶのは感心しないけど、昔のよしみで見逃そう」

背中を壁に預けて優雅に佇んでいたのは、ブルーグレイのファッショナブルースーツを着こなしたラテン系の美女。数年前、まだ俺が正式なFBI捜査官としてアメリカにいた頃出会つた、優秀なヴァンパイアハンターが其処に居た。彼女もまた吸血鬼を追つて世界中を飛び回る人間だが、何故日本に居る？

「ライ……知り合いか？」

「ああ。組織の人間じゃなく、俺の所属先で出会つた人間だが……何故君が」

「私が何者か、それを論じる時間は無いと思うけれどね。

スコツチ、貴方の命を狙う組織の追つ手が5キロ圏内まで迫つてゐる。説明する時間が惜しいので悪いけれど、私が貴方に差し出せるカードを提示しよう。死ぬか、私の手を取つて亡命するか。選ぶといい」

前振りゼロで提示された選択肢は両極端で、俺もスコツチも思わず息をのんだ。

「！」

「亡命する場合は、時折私の手伝いをしてもらうことになるけれど、その代わり衣食住は保証するとも。なんなら私が持っている人脈、情報屋との伝手、全て自由に使って良い」「なに……？」

それは、破格の条件と言つていい。手伝いの内容が気になるが、それを差し引いてもお釣りがくるほどに、世界に名だたる歐州の“思考の怪物”的情報網は値千金の価値がある。裏社会は緣故……コネを重視する。あらゆる闇の職業は繋がつていて、人間関係と伝手がモノを言う。牙狩りはその職務の性質上、世界の正義の為に動いてはいるが、裏社会で暗躍する組織だ。我々からすれば組織に直接潜入しなければ得られない裏の職業同士で交わされる情報を、自分の足で出向いて、相手との関係性を一から構築する手間をすつ飛ばして得られるとなれば、誰もが喉から手が出るほど欲しがるに決まっている。望んで許されるなら、その許可を俺にも貰いたいものだ。……彼女に対する前科があるから、到底無理だろうが。

「何者かは分からぬが……俺にかなり有利なのは、分かる。……N O Cとバレて後が無い俺に、何を望む？」

「対価は日本警察との貸しの強化と、潜入捜査官としての優秀な働き。狙撃もやつてもらいたいけれど、殺害までは強要しない。死なない程度の威嚇射撃で構わない。後は、黒ずくめを徹底的に潰すために、実際に潜入り、コードネームを得られたほどの人間の

アドバイスが欲しい、といったところ?」

ルビーのようにとろりと赤い瞳が細められる。神造の美貌に春風のような無邪気な微笑みを携えて、目の笑わないチエシャ猫のような印象を二人に与えた。

しかし、その対価は情報網の価値と、組織に追われる身であるNOCを匿うという、身中にいつ爆発するか分からぬ火種を抱え込むのには到底釣り合うとは思えない。殺害までは強要しない、という曖昧なオーダーも気にかかる。

「君が交渉に出向くとは……それに、組織を潰す、と聞こえたが。いつから牙狩りは犯罪組織も肅清対象に入れた?」

そしてなにより、世界中のあらゆる情報を集めはしても、直接吸血鬼に関わっていなければ、どんなに悪名高い犯罪組織であろうとその超人的な力を行使することの無かつた牙狩りが、本格的に組織壊滅に動いているという事実に、嫌な予感がした。まさか、組織幹部か……あるいはボスに、吸血鬼がいるのか?

震えそうになる声を押し殺しての俺の問いに、クリステイアナはきよとんと眼を瞬かせた。涙みを添えていた花貌が一気に、年相応の若い女性のそれになる。

「あれ、聞いてない? 私、ヘルサレムズ・ロットに本拠を移したんだけど」「…………聞いていない」

「そう……じゃあこれも知らないか。秘密結社ライブラ」

「！　ライブラだと！」

スコッチが泡を吹く勢いで、それでも声量は押さえて叫ぶ。ライブラ。その名前は知っている。黒の組織でも最近聞くようになつた噂だ……つい半年前の紐育大崩落で、突如世界トップクラスの大都市を失い、一転してあらゆる闇がうごめく犯罪都市が爆誕し、アメリカの国際的地位は失墜。異世界の超常的犯罪が世界に流れ込んで、世界が阿鼻叫喚の火の海になると思いつきや……戦々恐々としていた世界や俺たちF B Iの予想に反し、漏れ出した超常は極めて少ない。

黒の組織もH Lの異界武器や魔術、魔導科学を取り入れようと下つ端を何人か送り込んでいるらしいが、何度送り込んでも数日のうちに音信不通、行方は霧の中に埋もれてしまつてているという。構成員の死体で情報が洩れていなか確かめようにも、厳しすぎる二重門のセキュリティチェックのせいで、やつとH L入りしても時間が立ちすぎているのとありとあらゆる狂騒にまぎれて、手掛かりひとつ掴めない……そんな有様だと。

そんな中、ヘルサレムズ・ロットであらゆる謀略をくじき、外へ異界の余波が及ばないようにしている秘密組織があるのだと、ジンがふとした時に苛立たしげに零していた。それがライブラ。世界の均衡を護るという使命に相応しい、天秤の名を冠した秘密結社。すでに世界中のあらゆる犯罪集団の耳にも届いている、厄介な目の上のタンコブについての情報はその結社名のみで、ひとたび構成員の情報が出回れば、億の値が付い

ても可笑しくないとまで言われている。

だが、そうか。もし彼女がその結社の構成員ならば、チリひとつ情報が漏れださないのも領ける。

「あのライブラに、君が？」

「Y e s、まだまだ発足したてで、信用のおける腕利きが少なくてね。基礎は出来たけれど地固めが甘い。H Lには日本のヤクザや極道も紛れ込み始めている。個人での日本警察のコネは弱いから、今から関係強化の為に挨拶に向かう予定なんだよ。誰か有能な人材はいないかと探したら、組織内のものめ事で余波を食らった潜入捜査官が居ると聞いて、こうしてやつてきたわけ。

優秀な捜査官を借り受けるのは気が引けるけれど、再び公安に戻るにしても、ほどぼりを冷まさなきや動きづらいだろう。黒の組織についてはぶつちやけついでだ。今はライブラが動くほどの価値はない。奴らも手探りなのか小手調べのような動きだけど、大本が大きな黒い染みなら、近々 H Lに大きな花火を携えてくる。闇夜のカラスを潰せば、牙狩りとしても世界中の治安維持組織に多大な恩を売れるしね」

「……なるほど」

彼女らしくない、相手に利の有りすぎる取引だと思つたが……今回は時間制限もあつて、彼女の牙狩りという職務をあまり知らない初対面の人間に取引を持ち掛けた関係上、珍しく手の内を見せてくれた。

そういうことならば、納得がいく。彼女が日本に来ていたのはライブラの足固めのため。情報網と天才的な頭脳を以て、将来的に潰す予定の組織について調べている過程で、スコッチという日本警察所属の捜査官がN O Cとバレたことを突き止めたのだろう。

この場所に来れたのは……それこそ思考の怪物に、俺の選びそうな建物を特定されたとしか思えない。彼女なら、スコッチとよく一緒に行動していたライガ、F B I の赤井秀一だと特定するのは朝飯前だろう。そして俺を知っているのだから、そこから行動予測は十分に可能なことを、数年前の共闘で思い知つていてる。

とはいって、彼女の交渉手腕をもつてすれば、スコッチを助けなければならないというわけでも無い。それでも彼を助けようとするあたり、冷酷さの中に非情になりきれない人間臭さが垣間見える。

「…………さて、そろそろ霧で誤魔化すのも限界だ。貴方の選択はどちらだ？」
ゆえに、スコッチがどちらを選ぶかだなんて、分かりきつたことだつた。

陽溜まる幽靈

重苦しい曇天だつたのが、廃ビルを出た時には霧雨に天気が変わつていた。此処がロンドンなら傘をさす必要すら感じないだろうほどの細かな雨の中、足早に進む彼女の背を見つめる。うつすらと霧が立ち込める灰色の街の中、黒塗りの、厳つい顔の男が乗つた車がやたらとすぐそばを通り過ぎるが、そのどれもが堂々と歩道を歩く俺には目も留めず、俺たちがさつきまでいた方向に消えていく。

「……よくわからんが、凄い能力だな」

ぱつりと呟いた俺に、胡乱げな視線が前からちらりと寄越される。少し歩く速度を落とした彼女と半歩差の距離感で並び歩く。

俺の死亡偽装工作をするからと残つたライと別れた後、近くに車を停めているとばかり思つていて俺は、少し歩くと言つた彼女に仰天した。もう数キロ圏内に迫る追つ手の目を、徒步でどうやつて搔い潜ろうというのか。危なすぎる橋にさすがに苦言を呈そうとした俺に、黙つて彼女が小さな四角形の手鏡を向けた。

丁度、俺が鏡の中の平凡な見つめた目の男と目を合わせるような角度で。

映つてゐるはずの自分

それは何よりも雄弁な答えで、実際に窓や古びたショーウィンドウにも、自分とは似ても似つかない顔の男が不安げな顔をしているのが映るのだから、もう訳がわからん。突如目の前に垂れた蜘蛛の糸に半ばヤケクソで縋つたは良いが、既に前途多難な気配をひしひしと感じる。

「……後できちんと説明するよ」

「良いのか？ こういう特殊技能はマジックと一緒にタネを隠してなんぼのもんだろ？」

「内容を話したところで、真似できるような代物じやないから構わない。それに、さつきの反応を見る限り貴方は“牙狩り”に関してはあまり詳しくなさそうだし」

「はは……スマン、教えてくれると助かる」

「それも後で。往来で気軽にいい話じゃないからね。とりあえず、私を中心とした一定距離範囲内に居る人間、ありとあらゆる光学機器の類から君の姿が別の人間に見えるように歪ませて錯覚させていると思つていてくれればいいかな」

「さらりととんでもないことを言つてないか？ ……ありがたいけどな」

あのライが「彼女に任せれば、たとえ組織の追つ手だろうと逃げおおせるのは容易だ」と太鼓判を押した意味がようやく分かつた。なんだそのファイクションみたいなチート技。

黒の組織の図抜けた科学力でも実現できなさそうな、アリバイの存在意義に真っ向から反抗する、完全犯罪を可能にしてしまいそうな……いや、その気になれば成し遂げることも可能な能力に眩暈がする。

俄かには信じがたいが、組織の人間らしき車が堂々と歩く俺の真横を素通りしているのと、視認出来る限りのモノに映る自分の姿を見ていると、信じるしかないというか、なんというか。さつきの「霧で誤魔化すにも限界がある」という言葉から推察するには、この季節外れの霧によつておおよそ日本とは思えない様相を呈している街も彼女の術中のかも知れないと思うと、どんなでもない人間に目を付けられたとひやりとする。今は（多分）味方でいてくれているからいいが、うん、怒らせないようにしよう。組織の追っ手より手強く、全然逃げ切れる気がしない。

「……ちなみに、一定範囲内つてのは？」

「800ヤード」

なるほど、狙撃も不可能、と。

その後、何の妨害もなく街を出て、辿り着いたのはこの日本の中枢・霞が関。日本警察との関係強化に向かうと言つていた彼女の言葉通り、彼女の後を追つて着いた先は俺

の所属でもある警視庁本部庁舎だった（実質日本警察トップの官房長とは交渉済みらしかった）。

アポイントは勿論取っていたらしく、冴えない男に扮したままの俺も含めてあつさりと応接室に通され、ほどなくして白馬警視総監が現れた。たっぷりと蓄えた口髭と人の良さそうな顔の白馬警視総監と、かたや20半ばに届くかといった若いクリスティアナの絵面は違和感バリバリだったが、二人の話し合いは終始和やかだつた。……内容は全く和やかじやないが。

世界の安寧を護る鍵と言つてもいい秘密結社が交渉役に選んだのがこの年若い女性だということを、俺はその場で身を以て知つた。これでも組織の幹部に登り詰めるために、交渉の手管は潜入前にみつかりと仕込まれた。表でも通じるビジネスマン的な交渉術だけにとどまらず、脅し、恐喝などのあくどい方面も。

だが彼女は若くとも一流の交渉人だった。端的に言えば、契約以上の要求を飲まされたが、それを上回るほどの利益を得る結果になつた、といつたところか。

警視庁とライブラの基本契約はヘルサレムズ・ロット入りした日本の非合法組織に関する情報提供・共有だ。彼女はその上に「異界産の武器・薬品・生体兵器・動植物など勝手な持ち出しを条約で禁じているモノをヘルサレムズ・ロットの外に持ち出そうとす

る、あるいは世界崩壊に繋がる悪事の実行・企画・帮助など、世界に多大な影響を及ぼす行動を取つた日本国民の捕縛・討伐」を上乗せした。

それだけでなく、彼女の補佐役もどきとして隣で大人しく座つてゐるだけになつていた俺の幻術を解いて、N O Cとバレて現在死に物狂いで逃走中のはずの俺の一時的な引き入れの申し入れも追加だ。あの時の警視総監の驚きっぷりといつたらない。

こうやつて並び立ててみれば、中々に無茶苦茶な要求だ。だが、俺を組織から匿い、事が終わるまでは一時的に彼女の部下人質になる代わりに、俺を通じて世界でも五指に入る情報網を得られるとなれば首を縊に振らざるを得ないだろう。世界のどの警察・国家諜報機関よりも先んじた情報を得られるチャンスがぶら下がつていると聞いて、断る馬鹿は居ない。加えて、俺がN O Cだとバレる遠因になつたという、日本警察内に潜む内部工作員と、警察庁と警視庁でもめ事を起こして、工作員に俺のことをゲロつた奴の名前が載つたリストをトドメに譲渡され、交渉は無事（？）終了した。

「元々日本警察に渡すアメはあるの工作員リストだつたんだよ」と彼女は言う。確かに俺が自殺したり組織に殺されたりといつた勧誘失敗時でも十分に効力を持つアメだ。結果的にはあの要求を飲ませるトドメになつたわけだが、確かに俺という存在を抜いたとしても、交渉を成立させうるだけの価値がある。

日本警察としては、非合法組織員であつたり犯罪者であつても、立場的にも心情的にもライブラに討伐を許可したくはないところだが、野放しにすればどれほどの被害を叩き出すかを懇切丁寧に説かれれば頷かざるを得ない。ここ最近黒の組織も含めて犯罪係数が上昇しつつある日本に、これ以上厄介な火種を持ち込ませるわけにはいかないのだ。

この若さで、確実に相手に要求を呑ませる材料を揃え、巧みな話術で誘導する手腕には恐れ入った。流石は境界都市の調停者だ。恨みを買わず、お互いに実利のあるものにすることで、相手に裏切るという選択肢を最初から失くさせる交渉術。

彼女の思い通りに事は進んでしまつたが、かといって彼女を排せば組織全体に大きな取り返しのつかない損失を被るとなれば、戦う前に戦意を喪失させるようなものだ。強硬に見せかけて、政治家ぱりの交渉手腕。

警視庁の後はもうひとつゼロ、公安警察のひとつである法務省直下の公安調査庁（通称公調）などの機関にも出向き、関係締結が全て終わる頃には、すっかり日が暮れていた。

東都のとある高級老舗ホテルのハイクラスの一室に到着した瞬間、精神的な緊張が解けてどつと疲労が押し寄せてきた。生きるか死ぬかという状況から、NOCという常に気を張つていなきやならない状況下から脱せたからかもしれない。それでも長年の習

慣で室内に盗聴器や隠しカメラが無いか確認していると、スーツのジャケットを脱いでハンガーに掛けていたクリスが苦笑した。

「ここは牙狩りの息の掛かったホテルだからね、防犯性は保証するよ」

「そうなのか……というか、牙狩りって組織はそんなに顔が広いのか」

「歴史が長いからね」

そう前置きして、クリスは牙狩りについて語ってくれた。曰く、吸血鬼は空想の怪物ではなく、現代にも潜む現象だと。驚異的な再生能力を持つ不死者であり、その姿は光学機器では捉えられない。人間の生き血を糧とし、血を吸われた人間は屍喰らいとなる。それを狩るための血を持つ人間が集まつたのが牙狩りというヴァンパイアハンターの組織で、ライブラはその下部組織に当たるらしい。何で本職から離れたことをわざわざしているのかといえば、それはかの境界都市に空いている異界と繋がる穴の向こうには吸血鬼が住まい、その穴を通じてこちらに侵攻してくる可能性が高いから、ということだった。

あらゆる物理的な攻撃が効かないというトンデモ存在に対し、牙狩りが持つ攻撃手段について尋ねると、クリスは軽く靴底で床をタップした。瞬間、キンと音を立てて真っ青な氷柱が部屋のど真ん中に出現する。

「な……」

「私たち牙狩りは属性を持つ血液を用いた技——血法を行使する。吸血鬼の細胞にナノレベルで侵食・破壊する血液で攻撃・防御をすることで、本来ダメージを負わない吸血鬼にやつとまともな手傷を負わせられる。私はちよつと例外で、水や氷、風といった複数属性が操作できるけれど……基本的に人間が持つ血液は一属性と決まっている」

彼女が不意に左手を握りこむ仕草をした。途端、中指に嵌めた銀色の指輪から真っ赤な液体がブワッと空気中に広がる。何事かと目を瞠る俺の目の前で、赤い液体は彼女のブルーのシャツもスラックスも汚すことなく、そのとろりと赤い帶を細い手のような形に変え、少し離れたところにあるグラス二つと、備え付けの冷蔵庫からペリエの入った小さな瓶を抱えて戻ってきた。手慣れた手つきで瓶の王冠を外して、グラスに注いでくれた水を貰い、半ば茫然としながら口にする。毒の気配など無く、ただの炭酸水だつた。

「昼間の霧や幻術も、その血法？ つてやつなのか」

〔Ex^そth^通a^トc^トr^トy〕

ふわふわの絨毯の上に突如生えた、水色を塗つたかのような真つ青な氷柱はあまりにミスマッチだが、幻の類ではなく、それははつきりと冷氣を漂わせている。改めて今の状況に冷や汗が出てくる。俺は、武器や自分の拳を使わずとも人を簡単に殺められる力を持つ組織の虎口に飛び込んじまつたのだと。

だが——今も組織に潜入している優秀な幼馴染の事を思えば、泣き言なんていつていられない。あいつはきっと、ライや噂づてに俺が死んだと聞くだろう。ボロを出すような下手は打たないだろうが、ひどく心を痛めそうで心配だ。折角命拾いした命だ、早く情報を集めて組織を一網打尽にしなければ。

「ま、貴方の新しい身分証が届くまでの数日は日本で地盤作りをするけれど……HLに渡つてすぐには仕事は回さない。しばらくはあっちの雰囲気に慣れてもらうので、よろしく」

「え？」

思わず驚きの声を上げた俺に、貴方を侮っているわけじゃないけれど、と呟いたクリスは長く長く、細い溜め息をついた。ジャケットを脱いでラフな格好になつたスタイルの良い美女の、愁いの籠つた溜息を吐くさまは非常に絵になる。

「あの街はテレビが報道している内容よりずつと危険だ。慣れていないとちよつとした無知やうつかりなんていうスナック感覚で簡単に死ぬ。危険度で言えば、黒の組織のやつていることなんて児戯に見えるレベルの、簡単に世界が滅びかねない存在や陰謀が渦巻いている場所だ。

強すぎる正義感は身を滅ぼす、気の緩みは取り返しのつかない厄ネタを引き寄せるだろう。何かと人間界からかけ離れた場所だ、HLに関する基礎知識・常識の類を頭と体

に叩き込んで慣らしてからじやなきや、長くは持たないよ。優秀な人材をみすみす死なせるつもりはないし、貴方だつて拾つた命を捨てたくはないはずだ」

「そうか……分かつた、よろしく頼む」

「慣らす、といつてもそんなに構えることはないけどね。ウチの構成員と組んで、観光案内も兼ねたレクチャーをうけつつ、普通の人間として生活してもらうだけ。それが済んで、貴方が本当に世界の為に動ける人間と信用出来たら——ライブラの生命線、数億ゼーロの価値を持つ情報網の一部を解禁しよう」

「一部?」

「貴方が望む情報を吸い上げられる部分だけで充分でしよう? ライブラの情報網はあまりに広い。あまりに広すぎて——その全貌を把握するのが難しいほどに。リーダーだけ、副官だけ、私だけが知っている、それそれが独自に保有する情報ルートも存在する。必要以上に手を出せば、やたら時間を浪費するだけでなく——組織が壊滅した後、貴方を公安に返せなくなってしまう」

「知りすぎて、というやつか……」

「そう。私の情報網の一端に触れるだけでも、貴方の脳にも億の価値が付く。ライブラに入る事、その情報網を扱うこととは、多大なリスクが付き纏うことになるのと同義だから」

煌びやかすぎない照明の光を反射させて、血の色にも見える蘇芳の瞳が鋭く細められた。とはいってもそれは一瞬で、すぐさま溜息と共に閉じられた。

「現地に飛んでもいいのに脅すのはほどほどにしようか。緩みすぎも構えすぎも良くないし」

「ああ……」

「これから驚きすぎで身が持たないくらいの世界に飛び込むなら、せめて今ぐらいは、ちょっととした休暇だと思つてゆつくりしてほしい。あの組織でコードネーム持ちとなれば、相当な負荷が掛かつていただろうし」

そうやつて微笑む彼女は、裏社会に属する人間とは思えないほど、とても穏やかな顔をしていた。声音から、心から自分を労わつてくれているのだと分かる。四六始終氣を張らなければならなかつた組織では得られなかつた、人の暖かさだつた。

——ああ、そうだ。俺はまだ、彼女に何も返せていない。

「——ありがとう。本当に」

あの場所に現れてくれて。死ぬか行方をくらますかしかなかつた俺に、選択肢を与えてくれて。

多分彼女が現れなければ、もつと早く追つ手が到着していただろう。そうなれば、同じNOCだと知つたライに疑いが向くのを避けるために、同じ公安警察で幼馴染のバ

ボンにも魔の手が忍び寄らないように、唯一自分の素性を知る手掛かりになる携帯ごと撃ち抜いて自殺していただろうから。それがたとえ打算によるものだとしても。

「俺を助けてくれて、ありがとう」

それでも、今俺はここで生きている。それを可能してくれたのは、他ならぬ彼女だ。なんだかんだで言えていなかつた感謝の言葉を伝えて、しつかり下げていた頭を上げた俺の目に映つたのは、目を丸くして、ぽかんと口を半開きにした彼女だつた。凜とした表情しか見たことが無かつただけに、少し間の抜けた表情は、ああ年下の女の子だもんなと当たり前のはずの事実を思い出させた。

ぱちぱち、と長い睫毛をはためかせて瞬きを繰り返した彼女は、数秒の空白を置いて、どういたしまして、と少しだけ眉を下げて笑つた。困り笑いにも似たその表情は、作り物めいた綺麗すぎる顔を人間味があると感じさせるものだつた。どうしてそんな表情をしたのか聞いてみたい気持ちもあつたが、声に出す前に差し出された白い手に意識が逸れた。

「そういえば、まともに自己紹介をしてなかつたと思つて。私はクリスティアナ・I・スター・フェイズ。秘密結社ライブラの經理と渉外担当です。よろしく」

「ああ！ 俺は諸伏景光だ。これからよろしく頼む、クリス」

差し出された白い手を握り返し、互いに笑いあつた。

これが、俺が日本の安寧を守る警察官から、世界の均衡を護るライブラの構成員になる、その始まりの話だ。組織よりも危険で刺激的な毎日への、その序章に過ぎない——最初の一歩だった。

そして俺は、遠くない日に、彼女のあの困り笑いの意味も知ることになるのだが——今俺には、そんな事知る由もなかつた。

たくさんの中前とひとつ的心臓

「あー、ヒロ、ちょっと
うん? どうしたクリス」

黒の組織から脱出し、公安から一時的にライブラに異動したスコッチこと諸伏景光は、デスクで書類仕事をしていたクリスに声を掛けられ、手にした端末で眺めていたライフルリストから顔を上げた。

FBIの捜査官・赤井秀一の700ヤードに及ぶ射撃能力には及ばずとも、景光ほどの超長距離射撃を精密に行える技量の持ち主は世界中探してもそうはない。精密射撃と速射、狙击のための場所取りが得意で、血の気が多いライブラのガンスリンガーたちの中で、「待ち」も根気よくこなす。

長距離から放たれる弾丸は相手を殺すことなく、けれど確実に無力化させる。ついつい力加減を誤つてやりすぎてしまうメンバーが多い中、敵を殺すことなく生け捕りにしたい時、もしくは接近するのが難しい敵に対し、景光の技術はライブラにとつて重要なものになっていた。

人当たりも良く、すぐに狙撃部隊の面々とも仲良くなり、スナイパーが複数配置される任務にあつては、スナイパーだから分かる視点で、任務のブリーフィングでもステイーブンやクリスティアナが思いつかない、興味深い意見を遠慮なく出していった。

そういつた得意分野の違いも含め、異界産の火器類を用いて、遠隔射撃などの離れ業をこなすK・Kに次ぐスナイパーとして、景光は早くもライブラの核構成員としてライブラに馴染みつつあつた。

ライブラ構成員の武器類を一手に担う武器庫アーセナルのパトリックから送られてきた新しい入荷品をひやかしつつ、予備の弾倉を注文カートに入れた景光は、座っていたソファーから立ち上がり、クリスティアナのいるデスクに近づいた。そんな彼を見上げたクリスティアナは、緊張したような少し強張った顔で、ひと呼吸を置いて口を開いた。

「バー・ボンが酔いどれ鴉の目から逃れたそうだよ」

「は……」

他の構成員も出入りしているのを慮つて、言葉遊びのようなワードで繋がれた一言に、景光は硬直した。

「んだそれ、酒がカラスから逃げたつて、意味分かんねーぞクリス」「このバ——カ。クリスがあえてそう言うつてことは、何かの暗号なんでしょう」

「俺様の頭から降りろこの雌犬!!!」

案の定、先ほどまで景光が座っていたソファアの対面にチンピラ感満載で座り携帯ゲームを弄っていたザップが何言つてんだお前という顔を隠しもせず声を上げたが、その言葉はあえなく途中でくぐもつた呻きに変わった。

希釈を解いてザップの顔面を容赦なく踏み潰したのは、景光と同じ出向組のチエインだ。むぎゅむぎゅと音を立てて靴底をザップにめり込ませ、捕らえようとする腕が足に絡みつく前に軽々とジャンプするチエインに怒り心頭のザップ。ライブラでも比較的若い年代に入る彼らのやり取りを横目に、景光は苦笑した。

バー・ボンが酔いどれ鴉の目から逃れた。

つまりは、景光の幼馴染で同じ潜入捜査官、そして組織でもペアだつたバー・ボンこと降谷零が、酔いどれ鴉……黒ずくめの組織の監視から、ようやく逃れたという知らせだつた。

NOCとペアになり、しかもNOCと気付かなかつた愚か者。バー・ボン自身も内通者あるいは裏切り者の可能性があると警戒されて、監視が付くことは容易に考えられた。コツコツと築き上げた功績はマイナス評価へ転落。表向きはライによつて殺されたスコッチの死から半年と数か月、ようやくバー・ボンの監視と謹慎が解け、多少は信用回復がなされたという吉報だ。

この半年間、ずっと待ち望んでいた報告に、ふつと肩の力を抜き、仰ぎ見るようすに顔を上げて目を閉じた。よかつた。心からの安堵に、肺を空っぽにする勢いで長い溜め息をつきながら景光はその場にしゃがみこんだ。

「そうか……良かつた……」

「長かつたようで短かつたね」

「ああ……」

「というわけで、久々に日本出張行くよ」

「こちらの感慨を吹っ飛ばすようなセリフが、直属の上司から出てきた。

景光を勧誘したのがクリスということもあって、景光への仕事はステイーブンからではなくクリスを通して振られていた。構成員の陣頭指揮を担うのはもっぱら番頭のステイーブンと秘書のクリスティアナのどちらかなのが、景光の場合は日本文化や景光の諸事情に詳しいクリスが直属の上司扱いになっていた。これまでも、何度かHL内外でのクリスティアナの交渉の場に付き添つたり、スナイパーとしての仕事を振られている。

「えつ!?　いいのか!？」

「良いもなにも。むしろ半年待たせて申し訳ないって感じだけど」

思わず声を上ずらせて期待と驚きに目を輝かせる景光に、「流石に逃水で誤魔化すに

も、監視の目がキツイ状況じゃリスクが高すぎたから」とクリスは溜息を吐いて、遠くのデスクで聞き耳を立てていたらしいステイプンが苦笑いし、ボスでもあるクラウスは胃のあたりを押さえて冷や汗を流していた。

あんまり気に病むとまた胃潰瘍になるぞ、ボス。2メートル近くある巨体にかなりの強面に似合わず、真摯で妙に心配性な彼に景光は氣にするなど笑いかけた。

半年は長く辛かつたが、仕方のないことだと理解していた。監視の目がある中で会いに行くのは、諸^{スコツ}伏^チ景光^チにとつても降谷零^{バーボン}にとつても自殺行為だ。その間にできることをしようと、景光は歯がゆさをこらえながら様々な「稽古事」をライブラの仕事の傍ら続けてきた。クリスティアナや構成員たちに仕込んでもらった変装術や演技、出てしまいがちな人間の癖を変えるコツ、齧つた程度だが幻術や魔術での視覚や感覚、聴覚の攪乱方法。これで景光がHLに来る前のように、幻術が解けてしまうから一定以上クリスティアナから離れられない、なんてことはない。

何故景光が半年間という短い期間で幾つもの技術を習得できたかといえば、普段生活する傍ら街中に異変がないか見張っている諜報担当の構成員たちと、そのぐらいの技術は持つといて損は無いよな、という話になつたからだ。構成員の誰かが気を利かせたらしく、クリスティアナやKKにその話は洩れていて、その日のうちにあれよあれよと「稽古事」が増えることになった。それも超一級のヒューマーの師匠を揃えて。HLの住

人、しかもヒューマーとくれば、大方訳アリだ。普通なら学べないような知識も、ライブラなら専門家が何気ない顔でゴロゴロいるのだから怖ろしいと景光は思う。

と、いうわけで。

「帰つてきた……！」

成田空港国際線ターミナル。セキュリティや襲われる危険性も鑑みて、またもやライヘルツ家が出してくれたプライベートジエットで、再び故郷に帰つてきた。14時間に上るフライトを終え、タラップを踏みしめるたびに頬を撫でる風が湿つたものではなく、からりと乾いた涼やかさに景光は目を細めた。

ちなみにもうすでにしつかり変装済みだ。「諸伏景光」の特徴と限りなく乖離させつつ、クリスティアナの隣に立つていても不審がられないような見た目に変えていた。どんな外見にするかはライブラの連中とワイワイやりながら決めた。

地毛が黒髪ストレートだから、松田みたいな癖毛をイメージしつつ、今時のツーブロックの明るい茶髪にチエンジ。目は日本人によくある焦げ茶色だ。顔は無精髭を生

やしてないと学生に間違えられるくらいの童顔だつたから、あえて変装時は冒険しようとステイーブンやハマーミたいな色っぽさのある顔立ちを選んだ。

服装はクリスに同行して登庁もする予定だから基本的にスーツだ。とはいってもよくある凡庸なリクルートスーツじゃなく、クリスと並んでも悪目立ちも見劣りもしない程度の、黒地に銀の細いストライプが入つた小洒落たファッショングースーツだ。

普段の俺なら無精髭のせいであまり決まらないし着もしないタイプの服だが、ちょっとチャラめのアラサー設定だとしつくりきていた。スーツだといざという時動きにくいんじやと思ったが、袖を通してみたらそんなことはなかつた。きちんとしたテーラーによるものだと着心地が全然違う。普通の会社員を表向き名乗つてているステイーブンやクリスティアナがお高めのスーツでも汚れとか破れとか気にせずガンガン足技で戦つてるのが地味に不思議だつたのだが、こうしてみると納得だつた。なんでもクラウスの実家が愛用するテーラーで、色々物騒な要望も通るらしく、俺も色々懐に銃やら武器を仕込んだり使いやすくしてもらうよう頼んだ。

外で名乗る名前も決めた。「檜山満」。日本人だが親の仕事の関係でアメリカで育つて、大学卒業後も紐育に留まつていたらHL化してしまい、そのままHLの調査会社でクリスの部下として働いている設定だ。ライブラとしての取引の場合は、クリスのボディーガード兼補佐役として動く。クリスの広すぎる伝手で、この見た目の経歴や偽造

身分証も発行済み。ここまでやるのかと首を傾げたら、今後H L外に俺を連れ出すときはほぼこの設定で行くからとのことらしい。これからも連れ出してくれる予定があつたのに驚いたが、クリス一人だと何でもできる分無茶をしそうだから、恩人の助けになりたい俺としては願つてもない話だ。

もはや見た目も設定も普段から遠くかけ離れた別人状態だが、完成した変装時の姿を見て、K・Kやチエインが良い笑顔でサムズアップしてくれたから、不自然さは無いと思う。……俺が動搖して、演技でボロを出さない限りは。

「行こう、檜山」

「はい」

黒髪を風になびかせながら、颯爽と歩き出すクリスティアナの後を追随する。専用車で入国ゲートまで向かい、プライベートジエット使用者が使える専用ターミナルに入る。他の一般客に会うことなく、待ち時間ゼロで入国手続きが行えるのが新鮮で、思わずキヨロキヨロしたいのを必死で抑えた。プライベートジエット使える奴の関係者なのにお上りさん丸出しはちょっととな。

今回の渡航でスナイパーライフルみたいな大きい武器はあまり持ち歩けないから（スースに似合わなき過ぎるし、咄嗟の時に取り回しがきかないし）、パトリックが空輸

でH.L.外に技術的でも規格的でも持ち出せる限界ギリギリの重火器を先んじて日本に送つてくれている。使い慣れたものばかりだからありがたい。だから今の手持ちは、銃身を限界まで圧縮して、見た目は完全にただのボールペンにしか見えない、持ち物検査にも引つかからないし使用者以外使用不可という魔術的な仕掛けが施された自動拳銃2丁だ。これならスーツの胸元や裏ポケットに忍ばせていても全く不自然じやないから、今回の任務にはうつてつけだ。

一抹の不安もあつたが無事に検査を潜り抜け、エスコートしてくれたコンシェルジュの見送りを受けながら専用ターミナル入り口の車寄せに出ると、停められていた一台の真っ赤なスポーツカーの前に、あまりスポーツカーが似合わなさそうな一人の女性が立つていた。

「お待ちしておりました、お姉さま、檜山様」

「わざわざすまないね、氷室」

「いいえ、私には勿体ないお言葉です。こうしてお姉さまのお出迎えが出来て光榮ですわ」

きつちりと45度のお辞儀で出迎えてくれた氷室という女性は、大和撫子然とした品のある顔立ちでゆつたりと笑った。彼女のエスコートでクリスは助手席に乗り込むか

と思つたが、後部座席に二人して通された。長旅でお疲れでしようから、のことだつた。驚くほど静かにスピードを上げ、赤い車は空港を後にする。

「良い車だな。フェアレディ乙か」

幼馴染も元同僚も自分の車を持つて愛用していたせいか、自然と車に詳しくなつたが

……この車もその過程で知つていた。国産車メーカーが誇るスポーツカーのひとつ。クリスティアナやザップが使う血法の艶めいた赤にも似た、見る角度によつて色を変える鮮やかなカーマインレッドに流線型のシャープな車体。長いストレートの黒髪を一つに束ねて肩に垂らした、スースよりも着物が似合い、運転するより同乗するほうが似合う和風美人の氷室のチヨイスとは思えないが、それでも美しい車だ。

そう洩らした俺に、氷室はくすりと笑つた。お淑やかに、艶やかに。それでいて得意げに。

「お姉さまにお似合いの車でしよう？」

「懇意にしてる財閥の方からプレゼントされたんだよ、日本に来るときはこれを足に使えばいいって」

勿体ないほどの贈り物だよ、とクリスが溜息を吐いた。何でも、クリスが海外に居る間は保管もメンテナンスも全部財閥が受け持ち、常に最新モデルの車とオプション、防弾仕様に交換してくれているのだとか。しかも車はこれだけじやなく、プライベート用

に白のロードスターという別メーカーのオープンカーまで用意されているのだとか。尋常じやない気に入られよう、流石に俺も乾いた笑いしか浮かばなかつた。

「でもなるほどな、クリスの車なら納得だ」

「でしょう？ 赤い貴婦人、お姉さまにこれほど相応しい車は他を置いてありませんわ」「持ち上げすぎだよ。私には身分不相応だと思うけど」

クリスは不貞腐れたようにぼそぼそとそう言つたが、俺としては氷室と同意見だつた。忘れそうになるがクリスはまだ23歳という若さだが、その手腕や堂々とした立ち振る舞い、大人びた見た目も相まって、年上のはずの氷室と同い年かそれより上に見える。サングラスをして運転する姿なんか、とても様になるになるに違いない。この車を贈つた人物はセンスが良い。

「そういうお姉さま、鈴木相談役がもし時間に余裕があればお会いしたいと仰せでしたわ。園子さまも」

「そうだね……車とか色々預かってもらつてるし、最近会えてないしな……分かつた、時間を作るよ」

「後はパトリック様からお預かりした武器類ですが……すでにホテルに運び込んでおります。檜山様、確認をお願いしますね」

「ありがとうございます、氷室さん」

クリスは身体そのものが武器だから、K・Kのように954血弾格闘技で銃火器を使う場面以外は武器は必要ない。だから今回持ち込んだのはほぼ俺用の武器だ。

「そして、これがお姉さまから頼まれていた調べものの報告書ですわ。ご査収下さいませ」

「助かるよ」

信号待ちの間に、氷室がクリスに差し出したのは分厚いファイルだつた。横からこつそり覗かせてもらつたが、英語でみつしり文字が並んだ報告書だったので、後で俺が読んでも当たり障りのない部分だけ読ませてもらおうとすぐに首をひっこめた。あんなもの車の中で読んだら酔いそうだ。車酔いと情報量過多で。

氷室の快適すぎる運転技術で何度も眠り込みそうになるのをこらえつつ、夜の東京をドライブすること小一時間。東都にある牙狩りの息が掛かつているというホテルに到着した。

「檜山様のご友人の降谷さんが登庁される日が分かりましたら、すぐに連絡いたします」「何から何までありがとうございました、氷室さん。よろしく頼むよ」

「いえ、お姉さまの為ですもの」

フェアレディZをホテルの地下駐車場に停めてから帰るという氷室さんは、深々と頭を下げた。

「それではお姉さま、檜山様。何かご入用があれば我々人狼局と水晶宮親衛隊にご連絡下さい。お休みなさいませ」

「うん、おやすみ、氷室」

「気を付けて」

ホテルに踏み入る俺たちを、あのキツチリしたお辞儀で見送る氷室。ホテルの自動ドアの向こうをもう一度振り返った時には、車も氷室も忽然と消えていた。

近づく足音、響く銃声

ホテルは相変わらずグレードの高い一室が用意されていた。アメニティからウエルカムサービスまで充実している。前回のように幻術が解ける危険性から、スウェイートルームの別々の寝室を使う、なんてことはせず、今回は流石に別の部屋だが……それでも、同じ階に他人の気配を感じない。

なんでも牙狩りの構成員はこういつた息の掛かったホテルで割と好待遇になるらしいのだが、ステイ一晩いわく、日本でのクリスマスのもてなしぶりはぶつちやけ異常にくらいらしい。なんでも過去に日本のロイヤルファミリー……つまり天皇家や日本の牙狩りにまつわる事件で多大な恩を売ったせいだとかなんとか。

そもそも吸血鬼の実在、それを狩る牙狩りや、おそらく世界規模の諜報機関としては最上級のスペックを持つ人狼局の存在こそ俺にとつては信じがたい驚きだったが、それらが日本にも存在すると聞いてさらにびっくりした。そりや牙狩りの職務が吸血鬼に関連する事柄のみ関与するわけだから、警察でも上層部のごく一部しか知らんのは分かるんだが……日本の牙狩りは半分くらい現存する陰陽師とか、ファンタジーが過ぎる。

リアル陰陽師とかワクワクするけどな。存在の否定が頭に浮かばず、ステイーブンやクリスから説明を受けて、あつさり「あ、いるんだ」って感想が浮かんだ辺り、俺も随分H.L.に馴染んだもんだ。なにせ幻術使いとか魔導師とか PSI^{サイキック}保持者とか魔女とかがゴロゴロ周囲にいるせいか、どうも感覚が麻痺している。

古代日本の朝廷に仕えていた陰陽師集団が、世界的組織である牙狩りに吸收されたつて経緯から、日本の根幹と言える靈地の要所を押さえて靈的なバランスを調節しながら、吸血鬼やあやかしなんかを調伏するために、日本の牙狩り本部は京都にあるらしい。東京にも天皇家を守護する部隊のための支部があるらしい。

今回は京都まで出向く用事は無いが、東京支部にクリスは用事があるらしい。俺も面通ししておくと良いと言わされたので、同行する予定だ。多分、俺がライブラを抜けて公安に戻った後のこととも考えて、もし吸血鬼らしい影があつたらすぐに助力を請えるようにという彼女なりの配慮だろう。ぶつちやけ俺のライブラ用のスマホは世界各国の諜報員や警察関係者、あと何故か俺自身も気に入ってくれた数人の富豪と連絡先の宝庫状態だ。

牙狩りへの顔出し以外にも、ライブラのスポンサーである財閥や大企業と数件の面会予定がある。かなり多忙なクリスにしてはかなり緩めに予定を入れているのは、ゼロが

組織の目を搔い潜つて警察庁に顔を出すタイミングでこちらも警察庁に向かうからだ。最悪、俺たちが日本を発つ前の日に来てもらうよう零の上司に指示を出してもらう予定だが……果たしてどうなるか。

鋼が擦れる音がする。世間に一般的に出回つているライフル類とはワケが違う、異界産の化け物級に使いづらくて気位の高い相棒を素早く組み立て、配置につく。右耳に嵌めたインカムから、聞き慣れた声が凜と響いた。

『——これより任務を開始する。警戒態勢^テ_コン2、分かつていると思うが一般市民や建造物への被害は最小限に、かつ全員取り押さえるぞ』

この街のどこかで、黒髪を靡かせながら赤い目で街を見下ろすスーツの少女が頭に思い浮かぶ。わざわざスコープで探すなんて野暮はしないし、その必要もない。

彼女は自分の事をただの秘書だとたまうが、ライブラの誰もがそれを認めないだろう。確かに、クラウス^{ボス}のような眩いほどの光を、善性を持つわけじやない。ステイーブンほど狡猾なくらいの人心掌握術心得ていてるわけじやない。

だが、彼女には確かに人を率いるための力……安っぽい言い方をすれば、カリスマ性

があつた。指揮を執る涼やかな声を聞くと、心が静かに奮い立つ。頼られれば嬉しいし、支えたい、役に立ちたいと頑張る気も起きるというものだ。今宵集められた人員は、クラウス以上にクリス個人に従う人間で構成されている。

戦略にあまり造詣の無い俺でも分かるほど、的確に無駄なく配置されている人員。數かれた包囲網に隙は無い。構成員はクリスが今回の為に選んだとあつて超一級揃いだ。ライブラや牙狩りの構成員で超一級の優秀な人員となれば、たとえ不測の事態が起きたとしても各自がそれぞれに最善に向かつて判断・行動ができる。打ち合わせ無しの同時行動。指示が無ければ動けなくなる集団より、行動はバラバラでも最終的な統率が取れた軍団の方がよほど優秀だ。

何でもアリが許されてしまう無法地帯ホムグラウンドではなく、人の法で統治される法治国家だからこそ、俺たちライブラの活動は誰にも知られてはいけない。最小限の人員で、確実な仕事を。難しいことじやない、いつもやつてていることだ。ちよつと今回は、派手なドンパチを控えるだけで。

夜でも明るい街並みの中、静かに影が蠢いている。俺とクリスとは別のルートで日本入りしたライブラの仲間たちや、日本にいる、組織を超えてクリスを慕う部下や協力者たちが、雑踏にまぎれ、普通を装いながらも全員配置についた。

ターゲットはとあるチンピラ集団。何がどうやつてライブラの目を掻い潜り、二重門

のセキュリティを突破して遠い日本まで条約で禁止されている異界武器や魔導生物を持ちだせたのかは気になるが——今は些末な問題だ。今は、とりあえずこの国に厄介なブツを持ち込んだ連中の無力化が最優先だ。

『さあ、馬鹿どもに思い知らせてやろう。ライブラを敵に回した恐怖を。我々をあまつさえ出し抜いて今なお高笑いしている——その罪を』

「——了解」

殺さず壊さず、^生_{ステイプル} A L I V E ^け_{O N L Y} に。

義 兄そつくりの口調で宣言された恩人からのオーダーに、射撃体勢で待機する俺は、スコープを覗き込みながら口端を吊り上げた。

コツリ、と高いヒールが足音一つ立てた瞬間、倉庫内はたちまち蒼い氷に包まれた。魔導生物の入った超合金製のコンテナごと、全て氷漬けにする。古びた廃倉庫に転がるチンピラ共は苦悶の呻きを零しながら身体の殆どを氷漬けにされ、脚や腕を撃ち抜かれて氷の中を赤で汚していた。

『——こちらアイン、B11からB9に逃走中だつたターゲットの沈黙を確認した。既に回収部隊が到着して事後処理中だ。……これで全部か?』

「ええ。持ち出された旧型マネキンタイプの生体オートマタの台数もあつてゐるし、一番厄介だつたブースト系のドラッグの流出の心配もなさそう。氷室から聞いてるウスラ馬鹿どもの頭数も、その一人を加えればピツタリ。作戦終了ね」

『お疲れさん』

万が一、在り得ないとは思うが念には念を入れて、一応通信を傍受されていたり盗み聞きされていた時の為に取り決めていたコードネームである^{（アイン）}1を名乗つた諸伏景光の声に、私もお疲れ様、と返した。

倉庫内に音もなく転移してきた日本支部から借りてきた術士たちが、片付けるべき下手人たちとここに在つてはならない荷物をテキパキと転移させていく。取りこぼしも微塵の痕跡も残してはならないため、彼らは真剣に取り組んでくれていた。回収した荷物は後日、日本支部で凍つたままストレス発散のサンドバックになつてもらい、誰にも再利用できないレベルに粉微塵にする予定だ。下手人はライブラの目を欺いた手段について懇々と尋問を受けてもらう。世界の転覆一步手前までやらかしかけていたのだ、一思いに殺してやる慈悲など無い。

ともあれ、日本に来た理由の一つが無事に片付きそうだと、やれやれと溜息を吐きながら、肩の力を抜こうとしたその時……取り逃がしの無いようにと索敵の為に張り巡ら

せたままの血法のレーダーが反応した。はつとかすかに息を呑むのが聞こえたのか、ヒロが「どうした?」と怪訝そうな声を出す。

引つかかつたのは一つだけ。速度からして徒步だが、妙な緩急をつけているところを見ると、かなり警戒した足取りだ。狙いは――この倉庫だろう。警察に嗅ぎつかれた? それにしては早すぎるし、この倉庫で起きていることを少しでも知るなら、多数相手に単身で挑みはしないだろう。今回はカーチエイスも爆発も繰り広げておらず、むざむざ一般人に通報されるような悪手は取つていなければ。

いや、高速で考えを巡らせるよりも先に、今すべきことは。

「水晶宮式血濤道」

地面に着けた足裏から伝播するように、あらかじめ撒いておいた水にほんの微量混ぜた自身の血液を介して、血法を発動させる。スマーケでも焚いたかのように倉庫内にうつすらと立ち昇る薄い霧に、術士の数人が何事かどちらを振り返る。気にするなど軽く手を振つた。

『何があつた』

「何者かがこつちに向かつてきている。まだこつちの撤収作業が終わつてないから、とりあえず逃水の霧で攪乱して時間を稼ぐ。

総員、撤収作業を急げ。証拠は出来る限り残すな。撤収出来次第、プランDに則つて

各自その場から離脱せよ』

複数の声が了解の声を返す中、今は取り繕うことなく地声で喋っているはずのヒロの、涼やかでどこか艶のある特徴的な返事が聞こえなかつたのが気に掛かつて『アイン?』と呼び掛けた。ここまででは予想外ではあつたが、十分想定内の範囲だつた。HLのように厄介事がドリフトして急に飛び込んでくるような要素が薄いだけ、たかが一人の乱入など対処は簡単だ。

『……零……!!』

そう、感激とも驚愕とも取れない囁きを聞くまでは。

素早く彼のいる位置とUnknown反応の位置を事前に叩き込んでおいた頭の中の地図に書き起こす。……十分暗視スコープで捉えられる位置取りと距離だ。パトリックが張り切つて用意したスコープ類だ、可視距離はヒロの射撃可能距離をフルに活用できる距離数のモノを選んでいるはずだ。おそらく、私の為に威嚇射撃をしようと敵影を捜して、その結果今回の出張のメインイベントご本人を見つけてしまつたらしい。

OMIC^{オーマイガ}、と私は顔を手のひらで覆つた。

「うわ、ダブルフェイスか。どつちの顔で來てるか知らないが、ブツキングとは恐ろしい嗅覚だ。撃つてないだろうね、アイン」

『撃てるわけないだろ……！ 撃つたら間違いなく気づかれるぞ……！』

「……、君も随分こつちに馴染んだな……」

真っ先に出てきたのが、大事な戦友を傷付けたくないという諸伏景光個人の私情ではなく、ライブラという現在の立場を優先した発言に、思わず感慨深げに、余計な一言が転がり出た。透けて見えるのは相手への洞察力や危険察知能力への手放しの信頼だ。

は？ とインカム越しに聞こえた焦りと不審で上擦った声に、アホなことを考えている暇はないと気を取り直す。

「いや。偶然とはいえ奇跡的な巡り合わせだが、バー・ボンなのか降谷なのか分からぬ以上、君を迂闊に接触させるわけにはいかないし、ましてや彼みたいな切れ者相手にこの倉庫で『何かあつた』と悟らせることが自体悪手だな。援護はいらないから君も離脱してくれ。逃水の範囲外にスナイパーがないとも限らない」

『リーダーを一人にさせたくない所だが……むしろ俺がいた方が危険か。分かつたよ』
「じゃあまた、安全圏のパーキングで落ち合おう」

当たり前のように寄せられる信用が心地よい。少々切迫した状況なのに、悠長にも軽口が叩けるのは、多少の事では動じなくなつてしまつた自分の胆の太さと、血法による霧の結界への絶対的な信頼があるからだ。

降谷零にもバーボンにもH・Lへの渡航歴はない。警察庁内での牙狩りに関する情報の浸透率は、他の諜報機関の例にもれず、鏡に映らない化け物はすぐに上司に通報しろ

という迷信レベル。牙狩りたちの人外な技術に関する知識もないだろう。事前の調べで分かつた彼の性格を加味すれば、非科学的な分野への知識も無さそうだ。下手に観光地と認識される危険を減らすため、報道規制が掛けられるジャンルである幻術や魔術の類が実際に存在することすら知らない、可能性の内に含めもしない、「外」の世界では珍しくもない現実主義者だ。

こういうタイプは、かえつて常識の知識が邪魔してくれるお陰で欺きやすい。慌てず騒がず、術者が全員日本支部に転移したのを確認してから自分も離脱し、その上で逃水を解除すれば、問題なく逃げ切れる。すぐ近くに路駐せず、倉庫から距離の離れたパークリングに愛車を停めて正解だった。

〔みもり水守さま、撤収準備が整いました〕

「……ああ。先に支部に飛んで待っていてくれ、後で別ルートで伺うから」「御意に。……お気をつけて」

若紫色の羽織を着た白装束の集団が、ぞろり揃つて頭を下げる。その瞬間、かすかな光を残して倉庫内に残つていた氷漬けの貨物や下手人たちと共に搔き消えた。不可視の人狼とはまた違つた消え方を見守り、自分以外誰も居なくなつた倉庫を一度見渡した。髪の一筋、氷のひとかけらなど、些細だが勘織られかねない要素一つ残つていないと確認を終えると、血法で2階部分に相当する高さにある換気窓まで飛び上がる。倉庫

スペースをぐるりと見下ろせるような形で作られた回廊に降り立ち、老朽化して立て付けの悪い窓を手袋を嵌めた手でこじ開け、窓枠に飛び乗る。ふわりと夜風に煽られて、ダークスースの上に羽織つた京紫色の羽織がはためいた。袖を通していな羽織がずり落ちないよう、胸の前で結ばれた鬱金色の組み紐の房飾りが揺れる。薄い色のついたサングラス越しに周囲に誰も居ないことを確かめてから、再び血紐を出して、某蜘蛛男のように別のビルに紐の伸縮する反動で飛び移るのを繰り返し、夜の街を跳ねるよう

に、その場から離脱した。

その羽織の胸元と背骨の上には、小さな金の菊花紋が染め抜かれていた。

にじむ透明を b l e u と呼ばうか

日本に滞在して2週間ちょっと。仕事ばかりじゃなく、ヒロキ・サワダと浅井成実セイジと
いうクリスの協力者で知り合い（俺からしたらクリスの恩人仲間になる）にドライブが
てら会いに行つたりという完全オフの日も挟みながら、そろそろHLに戻らないとヤバ
いと思い始めていた頃、ようやく俺たちが待つていた知らせが飛び込んできた。

「ヒロ」

氷室が案内してくれた東都外れのホテルではなく、新東都内にある由緒正しい知る人
ぞ知る老舗旅館。もちろん牙狩りの息が掛かつていて、由緒正しい日本建築だが、実は
セキュリティは物理的にも魔術的にも万全、牙狩り関連の会合や密談、お偉いの迎合に
も使用される場所なので、狙われる運命にあるクリスや俺としても安心安全の旅館の一
室で朝食を取つていた中での知らせだった。

仕事的に他の客となるべく顔を合わせないように、出張時は基本食事は部屋で取る。
素朴だが丁寧な仕事が感じられる朝食は、旅館が提供するものにしては量が控え目で、
丁度良い膳が運ばれてくる。正直腹いっぱいになりすぎるのも残すのも困るので、こう

いつたささやかな気遣いは有難かつた。

「君の幼馴染に、会いに行こうか」

朝の光が差し込む窓辺を背にして、血の氣の薄い白皙の整つた容貌の中、切れ長の蘇芳が透明な光を放っている。まだ口紅も引かれていないが、素のままでも蠱惑的な唇がにんまりと笑つた。

霞が関、警察庁。半年ぶりの霞が関だ。あの時訪れたのは隣の警視庁だつたが。……少し複雑な心境に、茶色に偽装した目を細める。クリス経由で聞いた話じや、俺を引き入れる際に渡した工作員リストによつて警察内部に潜んでいた工作員は駆逐され、組織の妨害を受けつつも多少の情報を入手し、組織への反撃の一手中になつたと聞く。嬉しくもあり、複雑でもあつた。

外来からの訪問者用の許可証を受付で受け取り、ほどなくしてやつてきた案内の職員と合流してあまり踏み入れたことの無い警察庁舎内に足を踏み入れた。

「例の件については、用意はいつでも整つております」「分かった。誘導でき次第通信を入れてくれ」

「お心のままに」

クリスと案内の職員——正真正銘警察庁職員なのだが、同時にクリス個人に従う日本版私設部隊の「燕」でもある男と小声で打ち合わせをしている内容を耳に入れながら、そのすぐ後ろをついて歩く俺は不審がられない程度に周囲を警戒、観察していた。もうこれは潜入捜査官としてのクセみたいなもんだ。セーフティハウスやライブラのオフィスなど、ごく一部の安心できる場所以外の……特に他の組織の中に入る場合は、特に。日本人ではあまり見かけないすらりとした長身美脚のクリスが、ヒール音をほとんどさせていないにも関わらず颯爽と廊下を歩くのをすれ違いざまに見惚れていく職員は多いが、それ以外の悪意の籠った視線は感じない。

「こちらになります」

燕の男が指し示したのは、警察庁のかなり奥まつた場所にある、何の変哲もないドアだつた。何の部屋なのかを示す立て札も何もない、下手をしたら立地的に倉庫か資料室かとスルーしてしまいそうなドアを、男が独特なリズムで小さくノックをしてドアを開けた。ちらりと見えた感じだと、密談向けの小部屋らしかつた。

「失礼します」

先陣を切るクリスの後ろを、なるべく目立たないように一礼して入室する。チャラそ うな見た目だが、クリスという印象強いラテン美女の隣に立つにはやや覇気も存在感も ない男、それが檜山満だ。

俺たちを見てさつとソファーから立ち上がったのは警察庁警備局警備企画課のお偉いさん、つまりゼロの上司と――

「ご足労感謝します、はじめまして……警察庁警備局警備企画課の降谷零です」
きりりと表情を引き締めた、幼馴染だつた。

「はじめまして。クリスティアナ・I・スターフエイズです。こちらは部下の檜山満とい
います、どうぞお見知り置きを」

一年ぶりにまともに顔を合わせる幼馴染の姿にうつかり涙が出そうになるが、早くも
化けの皮が剥がれそうな俺を察知したクリスが釘を刺すように話を向けてきたおかげ
で、感傷とは裏腹に口から「よろしくお願ひ致します」と地声とは似ても似つかない声
が返答した。

……それにしても、この前の隠密任務でスコープ越しに見た時も思つたが、スコツチ
として最後にゼロを見た時より、随分痩せたようになる。ちゃんとメシは食えてるの
か、身体を休められているのか甚だ不安になつた。

そんな思考を変装のマスクの下に潜めながら、軽く握手を交わし、席に着く。さあ、こ
こからが本番だ。

ゼロに会いに来た俺たちだが、今回の警察庁訪問の用事はそれだけじゃない。俺の生

存を隠匿するために上層部との繋がりに留まっていたのを、今回の訪問を機に、ライブラ、及び牙狩り日本支部は警備企画課と正式に協力関係を結び、契約通り俺が収集した黒の組織に関する情報を公安に流し始める事になる。今の今まで情報提供が出来なかつたのは、警察内部の工作員の影響を取り除いて、内部告発によるごたごたが収束するのに時間を要したことと、俺への情報網の使用許可が下りたのがごく最近だからだ。

この取引は牙狩りの長い歴史の中でも異例も異例になる。血界の眷属の絡まない、牙狩りの視点から見れば世界にごまんとある、たかが犯罪組織の肅清に世界秩序の裏の番人である牙狩りが関わるなど、これまでの沈黙の撃破の勢いだ。ライブラとしても、HL外で暗躍する組織など、本来歯牙にもかけない存在だろう。

だが、ライブラが静観できない理由が出来てしまつた。俺のNOCバレ時点では「保留」程度の評価だった組織が、まだ重要度はかなり低いものの、警戒観察対象に入った訳。

A P T X 4 8 6 9
アボトキシン

したら体内で毒が検出されないという、科学技術で神秘の域に片足を突っ込みかけている毒薬の存在を、人狼がキャツチしたからだ。

その毒薬の存在を突き止めたのは本当に偶然だった。

ライブラ同様、黒の組織も正確な構成員の人数は掴めず、全世界の各界に構成員が入り込んでいるというあいまいな情報以外、長年潜入している捜査官でも掴み切れない規模をもつ。そして、ただの反社会勢力にしては、目的も行動原理もさっぱり分からぬ。自分が属する派閥の幹部から仕事の連絡が下りてくるか、派閥に属していない末端も末端な連中は派閥の構成員から使い捨てのようない形で駆り出される。任務の真意を悟らせない、完全なトップダウンかつ個人主義的な命令系統だつた。探り屋としてコードネーム持ちになるほどの評価を受けたバーボンですら、組織の目的には肉薄どころか推定できぬほど情報が秘匿されていた。つまり、組織の生命線に繋がりかねない重要情報ということだ。

組織を潰さんとする、俺たち潜入捜査官がこれまで辿り着けなかつた目的。壊滅の大好きな進歩になる鍵になるその情報。ようやく情報網の使用許可を貰つたはいいが、さあ調べるぞと意気込んでコンソールに座り、クリスに一通り操作を教わつて数分で手を止めることになった。

潜入捜査官としてのノウハウはあつても、俺にゼロのような、膨大な情報から絞り込んでいくためのスキルが無かつたのに気付いてしまつたのだ。潜入中は有力な幹部を確保する、あるいは壊滅に繋がる重要な情報の入手という明確なオーダーがあつたが、情

報通でもない俺は、どういった方向で探つていけばいいのか、皆目見当がつかなくなつてしまつたのだ。

世界中のその筋の人間や諜報機関が、喉から手が出るほど欲しがる宝の山を前にして撃沈したのだ。ゼロならこの世界に張られた網を最大限に有効活用できただんだろうが……俺のサイバー方面のスキルは3人組の中でも最低だつた。……クリス、引き抜く人選間違えてないか？　と遠い目をしたのはつい一か月前のことだ。

前もつて忠告されていた通り、制限されていてもあまりに莫大すぎる量・範囲の情報網を前にどこから手を付けていいか途方に暮れる俺に、クリスは裏社会の情報のエキスパートとして、そして組織について先入観がないからこそその全く異なる視点からのアプローチを助言してくれた。

俺が組織に潜入していくとも探れる、奴らの手がかり。それは、金の流れだ。

組織の全体像がつかめず、末端を取り込んでトカゲのしつぽ切り程度で組織に大したダメージにならないのなら、時折驚くほど大胆なくせに、慎重で狡猾な実働部隊から攻めるのではなく、組織運営に必要な資金の流れを掴めばいいと。

俺がコードネームを得るまでに、下積み期間として実力を見るために色々な仕事をやらされた。敵対組織との抗争や口封じのための殺人や暗殺ばかり注目されがちだが、

その他にも恐喝、窃盗、違法薬物の取引、ハッキング、他の組織との交渉、情報を得るためのハニートラップ……その他エトセトラ。手広いが、そこらの反社会組織でもやつてそうな事ばかりではある。

その中でもクリスが注目したのは違法薬物の取引、あと武器の流通だつた。恐喝や窃盗は件数が多くて絞り込みに時間がかかり、取りこぼしも多い。もししくじりがあれば組織が下手人の構成員を抹殺して情報源を絶たれかねない危険性も高い。その代わり、薬物取引や武器の流通ルートは、黒の組織外の裏社会の他の職種と必ず関わる。取引相手を殺してしまっては意味が無いからだ。秘密主義の組織でも、外部と少しでも繋がりがあるのなら、クリスの情報網ならそこから逆探知できる。

武器の仕入れに関してはルートさえ構築してしまえば、ある程度自分の組織内で賄えるだろうが、銃刀法のある日本では製造は難しい。むしろ、海外で大戦以前から続けている信頼性のある武器商人から密輸するほうがよほど質がいいし、入手難度が下がる。幹部クラスのスペック持ちなら、スナイパーにしろガンナーにしろ、武器にもこだわりが出てくるものだ。

となると、陸路で密輸できない島国の日本で武器類を持ち込もうとすれば、自然と手段は海路に絞られる。空路は海路に比べると制限も多いしセキュリティチェックが厳

しい。ライブラの武器庫であり、武器商人としては裏社会でも指折りのパトリックとニーカにも知恵を借りた。対戦車用ともいえる威力を持つ戦術超小型核兵器であるナノニユース弾なんてバケモノ弾を仕入れられるほどの彼らのツテは世界中に広がつて、裏社会で有名な武器商人に関してはクリスより詳しい。

あと組織が関わっていた違法薬物に使われる植物の中に、日本の環境で生育が難しい植物を偶然、ラインヘルツの縁グリーンフィンガの指であるクラウスが教えてくれたお陰で、植物・茶葉・薬品系の貨物を扱う輸入業者が怪しいと見た。そこまで絞り込んだ後は、牙狩り日本支部がきな臭い動きがあると睨んでいた海路での輸入履歴のある企業をリストアツプして、情報網の中でも日本にいる情報屋や人狼たちに精査の依頼をした。

もちろん無数にある日本の企業を大小問わず絞り込んでいく手間は半端じゃない。まともに着手したら1ヶ月無休で働いたとしても無理な情報量だつたのだが……俺のあまりの拙さに、コンソールに棲んでいた電腦魔がある日、痺れを切らして声を掛けてきたのだ。

『手伝おつか？　スコッチのおにいさん』

そんなエラーメッセージと共に、開きまくつたウインドウが重なつて いる画面にひょこりと顔を出した幼女にビックリしすぎて、椅子から転げ落ちたのは笑い話だ。

電腦演算人工知能・ムネーモシユネー。

クリスが日本のギフテッド、ヒロキ・サワダと、彼が開発した人類最高の発明と云われる人工知能のノアズ・アーク、そしてライブラの魔術的なセキュリティを担う鍵屋のユリアンの助言を得て完成させた、自立思考を持つ弩級のA-Iだ。

ライブラという世界の命運を握る秘密結社が抱えているあらゆる秘密や情報を蓄積・管理し、サイバー攻撃の最後の砦となるに十分なスペックを有しているとかで、どこかクリスに似た面差しの、桜色の目がくりくりとしてて可愛い黒髪幼女の見た目に反してハイスペックどころかチートスペックだった。

そんなムネーモシユネーという管理人の手を借りて、どうにかこうにか絞り込んだ怪しい企業を調べてもらつた結果……自動車製造で有名な大企業の一つと、名前は売れてないがそことこの研究施設を持つとある製薬会社がビンゴした。しかも大企業の方は社長が黒の組織の幹部で、直接会つたことはないが名前はよくよく知つて いるピスコだつた。政界にも顔の利く財界の大物が黒とか、調査結果を聞いて倒れかけた。アイリッシュとかテキーラとか、俺でも知つて いる幹部との接触記録が残つていたお陰で、

桜山がピスコだと判明した。

そして……もう一つ、黒の組織関連だと分かつた製薬会社が一番資金を掛けている人里離れた研究所に潜入した人狼が特別厳重に監視された部屋に入つて見つけたのが、くだんの毒薬だつた。

体内で毒反応が出ない毒薬なんてものは、完全にライブラ案件ものだ。しかも人狼が毒薬の効能を知るために丁度行われた投薬実験を見てたらバタバタマウスが死ぬ中、一匹だけ苦しんだ後身体が縮んで子どもになつてた？　ハイ完全にアウト。一緒に報告書を読んでいたクリスが、最後まで読み終る頃にはぐだぐだと机につづぶつしてやる気のない声を出していたのが印象的だつた。あの日は他にも重要案件山積みでやる気がマイナスに振り切つていたらしい。確かに、異界の魔導科学でもないのに、人体のプログラム細胞死……アポトーシスを利用した、人間の技術で若返りの薬を作ろうものなら、間違いなく世界がひっくり返る。足のつかない毒薬の時点でかなりの被害が予想される上、若返りの妙薬となれば表世界の因果律が滅茶苦茶になる。人界に及ぼす影響は奴らが思うより甚大だ。

ライブラが公安と手を結ぶのは、その毒薬が世界に流通するのを阻止するためだ。まだ研究段階で上層部に結果は伝わってないらしいが、その薬を研究してゐる若い天才研究者……コードネーム・シェリーはジンが時々監視してゐるらしい。いち研究者でありな

がらコードネームを持ち、あのジンが監視するほどの幹部となれば、彼女とその研究が組織にとつてどれほど重要か、考えなくとも分かる。幹部の中でも冷酷で知られるジンが APTX 4869 の効果を知つたら、間違いなく使おうとしかねない。

世界を転覆させかねないその薬の使用を阻止するためにも、警戒レベルが上がったその日から、定期的にシェリーの元に諜報員が派遣されているらしかつた。いざという時、APTX に関係するデータが組織に渡る前に消去するために。だが、シェリーの頭の中には設計図が保管されたままになる。諜報員が様子を見守つているのは、ジンがシェリーの身を脅かした際の彼女の保護、あるいは……彼女の行動如何によつては、これ以上の被害を押さえるために、彼女の暗殺も視野に入れて、だ。

「……以上が、我々が掴んだ組織の極秘情報です」

時々クリスに補足してもらいつつ、この一ヶ月で突き止めた情報のプレゼンを終える。紙媒体で出力したその資料を必死に目で追つているゼロの表情は蒼褪めていて、眉間に深い深い皺が刻まれている。多分、こんな深い情報までどうやつて探つたんだ、とか、こいつら本当にただの調査会社の人間か……? と疑つてゐるところだろう。そりや、数年かけてコードネーム持ちになつても知り得なかつた、日本に潜む闇のありか

を此処まで探し出されたら、探し屋の名が泣くというか、捜査官としてのプライドがズタズタになるよなあ。

最近うつかりライブラの日常に慣れてきていたが、改めてクリスのを規格外ぶりを思
い知る。

「短期間でこれほどとは……。貴方たちは……一体……」

ゼロの真っ直ぐなブルーグレイの視線を受けた俺とクリスは、さつと目配せし合つ
た。

「ミスター・フルヤ。先ほどは調査会社の人間だと自己紹介をしましたが……あれは嘘で
す」

「……でしようね。情報の真偽はこちらでももう一度確かめますが、これほどの情報を
集められる人間がただの調査会社勤めとは思えない。奴らは組織外に自分の正体をそ
うそう悟らせるようなハマはしないし……武器流通ルートと違法薬物ルートから逆算
して組織に繋がる企業を割り出すなど、絞り込みにどれほど時間が掛かるか」

「ご理解が早くて助かります。……では、あの組織でバーボンのコードネームを持ち、探
り屋として認められているあなたならご存知でしよう。我々は、秘密結社ライブラの一
員です」

「な……っ!？」

クリスのカミングアウトに、ゼロの表情が驚愕に彩られる。信じられない表情にありありと出ている。……無理もない、俺がゼロの立場だったら、すぐには信じられん。

「あのライブラ、ですか」

疑わしい、という棘の籠つたゼロの呟きに、場が膠着するかと思いきや。助け舟を出したのはゼロの上司だった。

「実はな降谷、我が公安とライブラ……スターフェイズ女史とは一年前から繋がりがあつてな……。今回、お前が組織からの監視から逃れたのを機に、本格的に協力体制を結ぶこととなつた」

「！……なるほど、ライブラを騙る者ではないと。確かに、あの情報も、世界の均衡を保つべく暗躍しているというライブラなら納得いきます」

硬い声に滲んだのは、探り屋としての矜持だろう。謎に包まれた境界都市の中でも更に実体のつかめない秘密結社。その構成員なら、己の知らない情報をここまで掴んでいても何ら不思議ではない——そう自分に納得させるように言い聞かせてはいるのだろう。

愛国心の人一倍強い、自分の優秀さを良く分かつてはいるゼロからすれば、H.L.にいる人間に、自國の企業に扮する組織の情報を先に掴まれたというのは業腹だろうが。ライに向けていたようなクリスや俺への敵愾心が表面上に表れないのは流石と言うべきか。

「本来なら、我々の職務はH.L.から異界の技術・生物が流出し、世界に不可逆の混沌が侵食し、滅びかねない事象を回避すること。ただの犯罪組織というだけなら、その規模や被害に関わらず、我々が手を出す領域ではない……皆様、各国の治安組織にお任せする領分。そのため保留程度に留まつていました가……そもそも言つてはいられない事態になつてしまつた。未完成でありながら体内から検出されない毒となり、研究が進めば若返りの妙薬の再現となるA.P.T.X.4869は、この世界に存在してはならない毒薬だ」「ええ……そうでしようね。ですが、何故一年経つた今、本気で公安と手を結ぼうと？」「ここまで独自に調べられる情報網と諜報員が居るのなら、今日までに奴らの一部でも潰す機会も力もあつたはずだ」

おつと、顔に出てないだけで敵意満々だつたか。ライブラは既に官房長の許可も取つてゐる協力組織であつて、F.B.I.とはワケが違うつてのに……溜息を全力で吐きたくなつた。隣のクリスは刺々しい言葉にもどこ吹く風で泰然としているが。

「その疑問はごもつとも。だが、我々もH.L.の外の組織にかかずらつていられるほど暇ではありません。なにしろH.L.は毎日のように爆弾事件やらデモやらテロまがいの暴動・狂騒が起きる街。13王の数人が直接ちよつかいを出してくる。A.P.T.X.4869

の一件がなければ、ライブラとして手を出す理由は何もなかつた」

淡々と説得するクリスの声には、同情を誘うだとか敵愾心を突っぱねようだとかいうような、一切の情が含まれていない。事実そのままを冷静に述べているだけだ。

彼女がライブラのために日本警察と手を結ぼうとし、その過程で俺を助けようとしなければ、ライブラが黒の組織を目に留めることなんて無かつただろう。異界武器を持ちだそうとすればそれ相応の報復をしただろうが、組織丸ごとを壊滅させるべく動こうとはしなかつたに違いない。今こうやって、クリスの助力を得られているのも奇跡に等しいのだ。

ライブラで黒の組織に関して動いているのは俺とクリスのみ。当然だ、ライブラの目的にあの組織は含まれない。血界の眷属がらみでもない。クラウスとステイーブンは役職上、俺がライブラに加入した目的が黒の組織を追い、情報を得るためだと知つてはいるが、手出しはしてこない。それでよかつた。これは表……俺たち警察の領分だ。クリスだつて、情報網の提供と助言のみに留めていて、きちんと契約通りに線引きしてくれている。

思考の怪物と言われたつて人間だ。クリスが捌く仕事量は、今まで過労死していらないのが不思議なくらい膨大で、他人に任せることも手伝うことも出来ないほど複雑だ。それにプラスして黒の組織について調べてくれなんて、口が裂けても言えるはずがない。

言いたくもない。そんな泣き言を言うのは、自分が許せなくなりそうだった。

クリスが協力してくれている今この状態は、彼女の気まぐれと温情によつて成り立つてゐる。ゼロはそれが分かつていなからこそ、物怖じせず言えるのだ。ゼロの上司はヒヤヒヤものだらう、ここでクリスの機嫌を損ねれば、ようやく進み始めていた組織壊滅の道が途絶えかねないのだから。公安に協力する予定の「燕」だつて、クリスの意向があるから手を貸そうとしてくれているのだ。今この会話を「燕」の誰かが聞けば、クリスが許そともクリスへの侮辱に激昂するだらう。彼らの忠誠心は古い時代の主従関係に等しいものがある。

「そもそも、あの組織に目を付けたのは、彼をこちらに引き込むための条件として適切だつたからにすぎません」

「……彼？」

胡乱げに片目を眇めるゼロを前に、クリスが横目で俺を見た。それに、俺はしつかり頷いた。

「ミスター・フルヤ。今日この日まで貴方に彼の存在を隠していたことを謝罪します。危険だからとはいへ、半年も貴方に要らない心労をかけてしまつた」

「……いや、クリスが謝る必要はないぞ？　悪いのは俺のことをバラした工作員どもだ

「……は？」
ろ

今までクリスの存在感にまぎれるように、意識的に抑えていた存在感を解き、口調も檜山から俺自身のものに変える。クリスばかりに刺すような視線を送つていたゼロの目が、ようやくこちらを向いた。

檜山の時はこの存在感によるトリックを度々使つていた。ライブラとして人前に立つときのクリスのカリスマオーラは、リーダーとして振る舞つているクラウスに等しいものがある。それを利用すれば、同じ場に居ても俺の印象は限りなく薄くなる。マジシャンが使う視線誘導の応用だ。俺のことを誰かが聞き出そうとしても、クリスに視線が言つてしまつて、俺に関しては外見特徴すらぼやけるぐらいの存在感の薄さになる。死人として扱われている俺が、檜山満として暗躍するには必須スキルだった。

H L の外でこのスキルと認識阻害系の幻術諸々込みの変装の皮を、他人の前で解くのはこれが初めてだ。クリスが G O サインを出したのなら、ゼロの上司もシロ、この部屋にも隠しカメラや盗聴器は届かないのを確認済みということ。躊躇う要素は微塵もなかつた。

「——今まで会いに行けなくてすまなかつた」

被つていた檜山のマスクに手を掛け、声を変えるために使つていていた術を解除。高かつた声が元の地声に変わる。

鋭かつたブルーグレイの瞳が、限りなく見開かれて冬の青空のようなアイスグレーに色を変えるのを見ながら、俺はニツ、と不敵に笑つてマスクを脱ぎ捨てた。

「元気そうで安心したよ…………ゼロ」

あの忌まわしい日を覚えている。忘れるはずがなかつた。

身元が分からなくなるほどに燃やし尽くされた遺体はあいつと同じぐらいの体格。胸元には銃で心臓を撃ち抜いたような痕。近くには見間違えるはずもない、あいつが使つていた携帯が撃ち抜かれて壊されていた。同じフロアに運よく火の手から逃れたアソツの髪や血痕が残つていたことからも、スコツチは無事処分された——あの忌々しいライによつて。間に合わなかつた——その後悔が、この半年ずっと身の回りをついて回つていた。

だから——目の前で起きているこれは、疲労が見せた幻覚じやないかと、自分の脳味噌すら疑つてしまいそうになる。きっとスコツチが……諸伏景光が実は生きていた

るという、自分にとつて都合のいい現実を認めたいと思つてしまふ自分の弱さと、夢から覚めた時の絶望感を認めたくなくて、拒絶してしまいたくなる。

だが、死んだはずの男が俺の前で、見慣れた不敵な明るい笑顔から、拗ねたような、困ったような顔をして、そんな幽霊でも見たような顔をするなよ、と再び口を開いてしまつたら……自分の頬をつねるより先に、勢いよく立ち上がりつて駆け寄つてしまふのは、きつと不可抗力だ。

むんず、と掴んだ男の顔は人肌の暖かさがあつた。青い釣り目に無精髭、一年前とほとんど変わらない諸伏景光がそこにいた。

「本当に、景光、なのか……？」

「おう。お前の幼馴染で元警視庁公安部所属、そんでスコツチだつた諸伏景光だ」

伸ばされた手が、無造作に自分の金髪を撫で繰り回す。その温かさに、目の端がジワリと滲んだ。

生きている。今ここに、確かに、生きているのだ。

「つ、この、大馬鹿野郎…………！」

一年前に大事なものを失つたあの日から、ずっと重石のよう^にに心の奥底で凝つっていた行き場のない感情が、目から零れ落ちる零となつて融けていく。硬く結んだ口の端が、力を入れられずにへなへなと緩んだ。涙で滲んだ視界に映る友人が少し慌てたような表情になつて、そうしてほどけるように苦笑した。あたたかな腕が肩に回る。額とこめかみから伝わる温度が、ただただ嬉しかつた。微かに聞こえた心音に、夢ではないと目を瞑ると、まじりから一粒涙が零れた。ああ、もはや感情の制御が効かない。

この時、ようやくただの降谷零として、感情も表情も取り繕うことなく、本当の意味で泣くことが出来た。

旧友たちの心温まる再会に、温かく見守つていたクリスと降谷の上司は、目配せをして、ただただ見守つていた。

頭上の星をひとつきみに帰す

ゼロと再会した翌日、俺とクリスは空港にいた。人通りの多いロビー……ではなく、またもやプライベートジエット用の専用ターミナル内の、打ち合わせや軽食が取れるこじんまりした待合室に一人、俺はスマホを手にしていた。通話相手は勿論ゼロだ。

『だからそう心配すんなって、これでも色々身に付けたんだぞ? 上手くやるさ』

『それは分かつてるが、あのヘルサレムズ・ロットだぞ? 組織以上に油断が命取りだとティアも言つていただろう』

心配性な幼馴染に俺は肩を竦めた。

『まあそりやな…………一回ヤバい目にもあつたし』

『…………今、何か聞き捨てならないことを呟かなかつたか?』

『いやいや、まさかあ!』

『…………まあいい、ライブラなら下手な潜伏より安全だろう。なにしろ、組織でさえHLでの活動はままならないと聞いている。生半可な人間を送り込んですぐ死ぬ、と。彼女も…………まだ完全にとはいかないが、見てている限り信用できる人間のようだし

な』

「ぶつちやけ百人力だぞ。こんど武勇伝聞かせてやろうか」

『……ああ、また追々な』

「……お前の方こそ、頑張りすぎて倒れるなよ。俺は俺なりに、お前からは見えない情報を探つていくからさ」

『頼むぞ』

「おう。……お、手続き終わつたみたいだ。そろそろ搭乗するから切るな」

『そうか。見送りに行けなくてすまないな』

「なに、またちよこちよこ様子を見に行くさ。じゃあな」

『ああ』

電話を切り、機内に持ち込む手荷物を手に、カウンターで手続きをしてくれていた氷室とクリスに駆け寄つた。本来なら氷室と俺ですべきだつたんだろうが、ゼロから電話が掛かってきたのを見たクリスに、良いから喋つておいで、と送り出されたのだ。小走りでやつてくる俺に、クリスが苦笑している。

『お待たせしました』

「ああ、行こうか」

「お姉さま、檜山様。いつてらっしゃいませ。またお会いできるのを我ら一同、楽しみに

しております」

「また何かあつたら頼むね」

「はい」

専用ターミナルで氷室とは別れ、搭乗口から車でプライベートジェットのある滑走路まで当たり障りのない会話をして移動し、タラップを登つてジェット内に乗り込んだ。

「おかえりなさいませ！」とやたら大きい声で出迎えてくれたラインヘルツ家が誇る特殊執事コンバット・バトラーにへらりと笑いかけつつ、シートに腰を下ろす。

「本当に良いの？　せっかく再会できたんだ、休暇ついでに君だけもう少し日本に残つても構わなかつたのに」

「良いんだよ。十分休めだし、顔が見れただけ十分だ。これ以上いたら戻りがたくさんりそうだし」

「君がそれでいいなら、とやかく言わないけど……」

シートに座るなり、すかさず執事からサーブされたペリエで喉を潤しながら何度も尋ねてくるクリスに気にするなど笑う。これからは集めた情報を流すために何度も日本に足を運ぶ機会もあるだろうし、これが最後の別れじゃない。

「今の俺は、ライブラ所属の諸伏景光だからな」

窓の外は抜けるような青空が広がつていて、フライト日和だ。約15時間のフライト

を経て、HLのあるマンハッタン島最寄りのニューアーク・リバティー空港まで飛ぶ。今日も今日とて、あの境界都市はキノコ雲型の霧の結界に包まれて薄曇りの空なのだろう。2週間の不在が、あまりに長く感じた。

HLの「外」は相変わらず平和で、あの都市でライブラが担う役目の重要性を思い知る。俺たちが守りたい日本や世界が平和なのは、ライブラが水際で異界の浸食を食い止めているからだ。……そのことに、今の俺は誇りを持っている。たとえ表向きは死人扱いで、遠く日本からも組織との戦いの前線から離れていても、あの場所で俺なりに日本の為に、組織壊滅の為に出来ることがあるのだから。

そういう思いを込めてにかりと笑顔をクリスに向けた。そんな俺の顔を見て、通路を挟んだシートにゆつたりと身を預けていたクリスは蘇芳色の目をぱちぱちとしばたとかせると、得心がいつたようにゆつたりと微笑みを浮かべた。

「……そうだつた。帰ろうか、ヒロ」

「おう！」

世界の均衡を守るべく暗躍する、秘密結社ライブラ。この物語は、そのライブラにひよんなことから加入することになつた、一人の日本人警察官の戦いと日常の記録の一

188 頭上の星をひとつきみに帰す

—ほんの
一部にすぎない。

貫かれた鼓動を数えて

夜も深まる午前3時、自分以外誰も居ないライブラの痛いほど沈黙が支配する夜のオフィスに、バイブ音が鳴り響いた。緊急事態かと慌てて居残り仕事をしていたクリステイアナ・I・スターフエイズはさつとスマホの画面を見て、あからさまに嫌な顔をした。

たつぶり数回分コールするのを眺めてから、切れる気配のない着信に没々通話ボタンをタップする。スピーカーから漏れ聞こえたのは、滅多に掛けてこない特徴的な男の声だ。

『久しぶりだな』

「…………今何時だと思つてるんですかねえ……」

『そつちは深夜3時か、その割には声がしつかりしているが……徹夜かな』

「寝てるところ叩き起こされてたら、出ずに電源落としてるわ」

『それは良かつた』

今の会話のどちら辺に安心する要素があつたのか。言葉に混ぜた棘を感じ取れない

ほど鈍感でもあるまいに。苦言を呈する元気もなくなり、椅子に座つたまま大きく身体をのけぞらせた。その間も空いた左手から出した血の手でカリカリと始末書の処理を進めていく。雨に濡れそぼる霧の街を逆さに眺めながら、「……で？」と続きを促した。

「こんな夜更けに掛けてくるんだから、何か用件でも？」

『声が聴きたくなつた、と言つたら、ど』

ピツ。

最後まで言い切らぬうちに、通話終了のボタンをプツシユする。慈悲は無い。今自分の顔を鏡で見たのなら、くつきりと青筋が浮かんでいそうだ。減らない書類と連日の徹夜による睡眠不足でイラつきやすくなつていても手伝つてているのだろう。いつになく短気な自分を、残つてゐる自分の中でも冷静な部分が考察する。

頭の隅に浮上してきた、とある島国で準備させていた「万が一」の事態も本人があの能天気な状態なら起ころまい、と折りたたんだ携帯を書類の山にぽいと放り投げようとしたが、その直前に再び携帯が震えた。「B e r e a u □ s S h e p h e r d D o g」……ビュロウ シェpherd事務所の黒犬。本名でも良かつたが、誰に見られるか分からぬのもあるからと、本人が見たら苦虫をかみつぶしてたつぶり味わつたような顔をしそうなあだ名で登録している。

たつぶり5秒待つて、緩慢に通話ボタンを押した。

『ひどいな、切らなくてもいいだろう』

「そんな馬鹿なジョーク飛ばす余裕があるなら大丈夫そうね」

今度は向こうが一瞬沈黙した。

『……流石だな、もう掴んでいたのか？』

「まあ。FBIが動いたつてくらいだよ、耳に挟んだのは。あとは勘。滅多に掛けてこないのに時間も憚らずこんなタイミングで掛けてきたのが良い証拠。その様子だとライとは名乗れない状況まで来たようだね、シユウ？」

『ああ……ジンを捕らえようと罠を張つたが、事前に察知されてしまった』

「そう。貴方は狙撃の腕と頭脳は優秀だけど、どこかしら詰めが甘いもの。そもそも潜入なんて向いてないんだから、かえつて好都合じゃないの」

折角のチャンスがフイになつて残念ねとか、潜入失敗して残念ねなんて慰めは言つてやらない。そんなことは思いすらしないし、この男もそんな言葉を求めて私に掛けてきたんじやないだろう。そんな甘い慰めは、元ガールフレンドのジョディか組織に入るため利用した恋人宮野明美さんに求めてくれ。……当たり屋で始まる恋つて凄いな、色んな意味で。

そもそも、赤井秀一という男はとことん潜入捜査に向いていないと思うのだ。確かにアメリカの正義と秩序の担い手であるFBIとは思えないほどの悪人面とロン毛に黒

すぐめという格好は組織のカラーリ的に随分馴染んだだらうが、情報を探し出すには社交性皆無だし、肝心なところで詰めが甘い。単独行動が多いから、周囲が連携取れずに思いがけないヘマに繋がるのだ。今回もそのパターンに違いない。ある程度有能じやないと何年経とうがコードネームを貰えないからとはいえ、あの男を潜入捜査官に選んだ人選が本気で謎だと思う。

『フ……君にはそう見えるのか。興味深い』

「貴方は組織の内側に潜り込むより、組織の目を欺き通して、奴らにとつて予想外の一発逆転を撃ち込む鬼札の方(ジョーカー)がお似合い。仲間から隠し事が洩れるなら、いつそ秘密裏に動いた方が良いと思うけれど」

私の酷評にも、シユウはくつくつと笑うだけだつた。

人間の根本的な性格は中々変えられない。口の堅さも、ある程度意識してコントロールできる面もあるが、長年の癖というものは抜けにくい。ちょっとした気の緩みで口を滑らすなんてことも大いにありうるだろう。人間とはそういう生き物だ。一番良いのは、大事な情報はたとえ味方でも、本当に必要で無ければ無闇に教えないことだ。H-Lでは本人が知らないうちに情報を抜き取る手法なんて山とあるのだし、余計に。隠し事をしているのでは、と相手に不信感や疑心暗鬼を与えないよう、与える情報の取捨選択が腕の見せ所だが。なにしろ、疑心暗鬼に陥った人間がどんな狂氣を生むか、それは人類史

でも魔女裁判などの忌まわしい事件が証明している。

あまり回っていない頭で、つらつらと思いつくままに言葉を並べ立てていると、成る程な、と少し面白そうに電話の向こう側で笑う気配がした。

『ジョーカーか……ふむ、参考にさせてもらおう』

「ハイハイ

『ほとぼりが冷めたらいい酒を持つてそつちに行く。3人で呑もう、君のつまみが久々に食べたい』

「じゃあ異界産のドギツいのをワイナリーにたつつぶり準備しておくわ』

言外に潰す、と圧を込めて放つた言葉に、FBIきつての切れ者と名高い男も動搖したようだつた。

『それは君以外がちょっと飲んだら即座に氣絶するレベルじゃないのか……?』

「飲んべえの狼も酔う度数だから否定はしない』

色も青かつたり紫だつたり、アメリカのキャンディーよろしくいろいろ色が混ざつてるものまで。HLに出回る酒というのは人界以上に多種多様で、中には内臓を直に焼くような馬鹿みたいな度数の酒も色々ある。流石に喉が爛れるレベルの酒を提供するつもりはないが、HLにはたとえ酒に強いヒューマーでも潰せる酒なんてゴロゴロ転がっている。

私の場合、毒耐性が付いていて水に変換できる血液という特殊体質のせいか、アルコールを毒判定してさつきと無毒化ののちに分解してしまうため、どれだけ強い酒を呑もうがさっぱり酔えないのが残念だ。

お陰で、この男がFBIに私を引き込むために仕掛けてきたレディー・キラーを涼しい顔で躲せたのだが。……参加したことないけど、何でも飲み比べで決めるウワバミの穴倉とも呼ばれる『バッカーデイオの秤』に参加したら、多分出禁になる自信がある。『狼……？ 男か？』もう一人も、連れていけたらいいんだがな』

『レイ？ まあ彼は潜入中だし……さつきと組織を壊滅させたら出来るでしょう』

『……ああ、そうだな』

「……貴方らしくない発言だね、なに、まさか酔つてるの？」

『そうかもしけん……』

「おいFBIしつかりしろ、逃走中だろ飲んでんじやねえよせめて帰国後に酒盛りしろ」

何やつてんだコイツ、と叫び出しそうになつた。

だが、聞こえてきた次の声は、らしくもなく弱々しさをはらんでいた。

『……ありがとう、ティア』

それは何に向けた謝意なのか。

聞くのは野暮な気がして、溜息を吐く代わりに嫌味で返す。

「その呼び名は許可していないわよ、ダメ男」

＊＊

「クリス!!」

「どうした、ヒロ」

「どうしたの、そんな血相変えて」

数年後のある日、顔を真っ青にしてオフィスに慌ただしく飛び込んできたヒロに、次の作戦についてステイーブンと打ち合わせをしていた私はきよとんとした。普段はほんわかしているが、スナイパーとしてはすぐこぶる冷静な部分もあると知っていたからこそ、ここまで取り乱すような案件とは何なのか。緊急事態か、と思わず身構える。

ぜえはあ、と肩で息をしていたヒロの息が整うのを待ち、ゆるゆると顔を上げたヒロの顔には、焦燥が浮かんでいた。ライが、と途切れ途切れに呟いたヒロに、私は目を丸くする。……シユウ？

「ライ、赤井が……！　組織に殺されたって……！」

突然の訃報に一瞬息が止まりそうになるが、動搖はすぐに波のように引いていった。混乱するより先に、確かめなければならないことがあるからだ。

「アカイつていうと、クリスの知り合いのFBIで優秀なスナイパーつていう、あのミスター・アカイか?」

「ああ……」

珈琲のカップ片手に目を丸くするステイーブンとヒロの会話に入り込むように、私は努めて冷静を保とうと意識しながら、声を絞り出した。

「…………ヒロ、その情報元は?」

「あ、警視庁にいる『燕』の茅^{ちがや}經由でメッセンジャーのデイアンからと……あと日本に飛んでたFBI捜査官から……」

「…………そう」

今、HLは朝の9時。日本とは14時間差……つまり向こうは夜10時頃だ。

ヒロの口から出た情報源は、FBIの捜査官はともかく、前者は私の知る限り不明確な事実を伝えてくる面々ではない。だから、赤井秀一が組織に殺されたというのは恐らく信憑性が高い。……だが、あの悪運の強い、殺しても死ななさそうな男が、私の耳にヤバい状況にあると知る間もなく殺されるだろうか。……ああ、クソ。あとで情報を集めないと判断がつかない。

溜息をついて、すこしだけ頬を引いて俯くと、ぎゅう、とぬいぐみのようにヒロに抱きしめられた。それを解くことはせず、大人しくされるがままになる。ぐす、と粘膜

の擦れる音と、かすかにふるえる体温の中で、溜息にもならない息を鼻から逃がして、瞼をおろした。

蘇るのは、いつかの夜のこと。シユウがライという酒の名前を捨てた日に、珍しく時差も気にせず非常識な時間に電話を掛けてきたあの夜のことだ。こちらが秘密裏に、もし彼が窮地に陥った際に手助けできるよう燕の援軍を待機させていたのを悟つたらしいシユウの素直なお礼を聞く前の話題。私の作つたつまみが食べたいと、何気ない会話に混ぜてきた可愛らしい我が侶だ。組織に潜入する前、牙狩りとF B I の合同捜査の打ち上げで一度だけ振る舞つた手料理を、彼は大層お気に召したらしい。……その後、まだ交際中だつたはずのジョディがレシピを聞いてきて大変だつた。

最後に電話を掛けてきたときは、確かにヴエデッドとローストビーフを仕込んでいた時に掛かつて来て、自信作だと言つたら、君の自信作なら、さぞ美味しいんだろう。次会う時は是非食べてみたいもんだ、と笑つていたくせに。……次、は結局訪れなかつた。

……駄目だ、鼻がつんとしてきた。

込み上げてきそうになる何かを喉奥で押しとどめて、額をヒロの胸に預ける。後ろから伸びてきたステイブンの手が、不器用に頭を撫でた。

「(……あんまり長いことゴーストしていると、食べたいって言つてたローストビーフ、貴方の分だけ作らないから)」

心中で、憎まれ口をたたく。しぶとく生き延びていると信じ込んでいなければ、あつという間に膝が砕けて立ち上がりやすくなリそうだつた。

本当に死んだのか、それとも密やかに生きているのか。海と濃い霧に遮られている私たちでは詳細は掴めない。けれど、周囲を長々と悲しませるのは馬鹿の所業だ。遠いあの夜の電話で話をうつすらと思いだす。殺しても死ななさそうな男だ。組織に対する切り札、ジョーカーが立ち消えなど許さない。4人で祝杯を擧げるなんて温かい夢を、私なんかに想像させたのだ。叶えず一人死ぬなんて、ゆるさない。言い出した責任は取つてもらわねば。

「(だから早く帰つてきなさい、シユウ)」

▼A f t e r W o r d

人物紹介という名の補足祭り。やたら長くなつたのはごご愛嬌……。

▼クリスティアナ・I・スター・フェイズ
色々暗躍するライブラのナンバー3。本編を読んでいない方向けの詳しいプロフィールは後記。

主人公のはずだがぶつちやけ今回のようなDC側サイドの話だと、スコッチにもっぱら語り部を取られている気がある主人公（重要）。

スコッチ視点だと分かりにくいが、随所で燕と連携を取つていたところからお察しで
きる通り、ここぞとばかりにライブラや牙狩りに刃向かう異分子排除に取り掛かつてい
た。警察庁の別の局の中にH Lからチンピラが異界産の物品を持ち出して日本に持
込むのに手を貸したクズがいたため、燕にはその人物の確保を依頼していた。このあた
り降谷さんの前でクリスが大捕り物するシーンを書こうかと思いましたが、自分で書い
ていてあまりに解釈違いになつたのでカット。

人体実験のショックから立ち直つて世界各国の支部を回つていた時に日本支部に所

属していた時期があり、その時に売った恩が原因で「水守」と呼ばれる。あまりに誰得なオリジナル要素過分過ぎる上、別のジャンルとのクロスオーバーになつてしまふので詳しい内容は自重した。日本支部からの扱いがかなり好意的なのは日本を一回救つている所為。おそらくこのネタを降谷が知つたら愛国心ゆえに最初の失言をした自分を思い返してへコむ。

降谷零が桜（警察シンボルは桜を元にした旭日章）ならクリスは菊（天皇家のシンボルは十六八重表菊紋章）。

前回スコッチを（たとえ交渉という所用があつたとはいえ）北米からはるばる来てまで助けたのは、牙狩りとは無縁で異常者扱いの自分を知らず、なおかつ裏切る可能性が限りなく低い立場にある優秀な人間が味方に欲しかつたため。無意識下の欲求の為、クリス本人も周囲と同様に打算部分だけが理由だと思っている。

だが案外スコッチが情に厚くて、聞いていたカタログスペックより潜在能力や伸びしろが大きかつたのですつかり気に入りつつある。打算とはいえ命を救えてよかつたと思う反面、狂騒と背徳の街であるH.L.には致命的に合わないので連れてきてしまつた事に後悔と自責を抱いている。何かと気にかけているのはそういうたつた理由もある。

スコッチはいずれ組織壊滅後には公安に返す予定なので、少なくともそれまではたとえどれだけボロカス侮辱されようが公安と共同戦線を破棄するつもりはない。あまり

に優秀なので日に日に返すのが惜しくなつてなんかない、……ないぞ？

日本有数の財閥である鈴木家とも交流があり、次郎吉に気に入られている。恐らくコナンとのエンカウントがあるとしたら園子経由だと思われる。

もしクリスとスコッチが純黒に参戦したら、車軸に取り付けられた爆弾半分を上から紐なしバンジーよろしくダイナミック飛び降りしながら凍結させていつたり、ラストの観覧車ゴロゴロをコナンの伸縮サスペンダー同様、最大規模の籠目（ザップ）でいう赫縮縛・血で編んだ細かい伸縮自在ネット、原作サップは網を引っ張つて瞬間的にだが1トンはあるパワードスースという名の金属の塊が降ってきたのを静止させた）で引っ張つて止めてほしい。スコッチはキュラソーという重要な組織の手がかりを握る幹部を確保（最終的には潰される前に救い出すことになる）するべく公安・燕と連携して暗躍してほしい願望。誰か書いてくれ。

クリスの愛車、フェアレディZとロードスターはTwitterで「折角DCで成人済み主人公なんだし、秘書嬢に似合う車つてありますかねえ……」と何気なく呟いたらフオロワーさんがこれどう？と教えてくれた車があまりにドンピシャだつたので使わせて頂きました——！　ありがとうございます!!　赤と白というチヨイスがまた良い……これに乗つてカーチェイスする秘書嬢とか考えるだけで最高オブ最高。

▼スコツチ（諸伏景光・檜山満）

順調にH.L.に馴染み、H.L.ならではの手法で変装やハッキングなど諸々のスキルを磨いて組織潜入時よりかなりパワーアップした。最近ようやくデーターベースの一部を弄る許可を得たので、組織に感づかれない程度に少しずつ探りを入れ始めている。自分の脳にも億の価値が付いたので普段通りに見えて、H.L.を出歩く際は結構ドキドキハラハラ。一回だけ敵対組織にライブラの一員と知られて、本気で死んだ方がマシかもしれないと思う目に遭いかけたが、絶対敵殺すマンに変貌したライブラの皆さまにより未遂で救出された。五体満足つですばらしい。

ライブラのやり方（殺しも止む無し）に最初は葛藤したが、相手をころさないと躊躇つこだつたり本気で世界が終わりかねない案件がゴロゴロしているので、組織時代同様一旦割り切つたらちよつと楽になつた。彼もぶつちやけ潜入に向いてない優しすぎる人。

チエイン同様、協力組織からの出向組のため、核構成員だがクリス直属の部下扱い。少しずつクリスの立場や過去を知るにつれて、なんだかほつとけなくてK.K.同様に仕事がある時だけ呼び出される勤務タイプなのに自主的にクリスの仕事の手伝い（延長線でステイブンからのお使いとか）をやり始め、半年経つた現在はメインメンバーにクリスの補佐とも認識されている。新人構成員にはライブラの補佐官は二人居ると勘違

いされるほど。

本編でクリスが行方不明になつたらS A N値チェック。赤井ほどは荒れないがムネーモシユネーと連携して全世界を洗い出しまくりそう（十分荒れている）。

レオ同様愛想のいい顔でフランク（ただし口は堅いし強情だが）なので友達やら人脈が広い。きっと数年後に入つてくるレオとは波長が合う。ザップに対しても、最初はお巡りさんらしくクズのロイヤルストレートを奢めていたが、あまりの直らなさにザップはこういうもんか、とやや諦めつつある。ステイーブンつてゼロに似ているよな、と思つたのは内緒。

▼降谷零（バーボン・安室透）

スコッチ死亡でS A N値が削れていたけどどうまいこと仮面を被つて監視期間を乗り切り、今回スコッチ生存を知つて色々回復した人。前回の話でクリスが逃走で廃ビル周辺を攬乱の霧で覆つており、彼も方向感覚を狂わされて足止めされていたため、足音でうつかり幼馴染自殺の切っ掛けとなるルートがへし折られている。なので赤井との確執は原作よりマシだが、元々あまり仲良くもなかつたのでどうあがいても殴り合い宇宙の観覧車ファイトは防げない。よくも騙してやがつたなF B I！

スコッチ生存を知つて感動の再会をした後、自分の醜態を思い返して冷静になればなるほど恥ずかしくなつてきて不機嫌さを醸し出して誤魔化そうとするものの、クリスがライブラのナンバースリーで経理関係を一手に担つており、牙狩りが吸血鬼対抗のために存在する裏社会の均衡の番人であり、ライブラも牙狩りから派生した組織だと色々爆弾を落とされて（。。。）ポカーンした。トドメに情報戦を左右するほどの影響力を持つていてことを知つていた「欧州の思考の怪物」だと知つて色々納得。それと同時に自分がどれだけヤバい言動をしたのか後で冷静になつてから気付いてめちゃくちゃ頭を抱える（最悪の場合、幼馴染を人質にとられたまま破局して自分がN O Cだと情報を漏されかねなかつた）。

自分とスコッチのためとはいへ一年間知られなかつたり、世界一の危険地帯に幼馴染を連れていかれたことにモヤモヤしたりするも、スコッチを強引にでも助けてくれた（よりによつてライに助けられずに済んだ）ことには感謝している。これ以上ない心強い協力者だが、たとえ犯罪者でもH Lで自国民を殺すこともあるため、ライブラという組織の在り方には複雑な思いを抱いている。

だがバー・ボンとしてH Lに潜入させられたり、クリスやスコッチが日本に出張に来たりなどで親交を深めるにつれ、誇りを持つて仕事をしているが時には冷酷にもなれるトリップルフェイスで、他人においてそれと言えない内容の仕事で、ついでにワーカー・ホリツ

クで、あまり赤井の事は好きじゃないと共通点が多いのに気付き、HLのスコツチのセーフハウスでクリスの作った酒やつまみを食べてぐだぐだ愚痴大会をするぐらいの仲になっていく。彼ぐらいの捜査官となると心を赦して相手以外が作った食べ物つて飲み食いしなさそうなので。あとクリスも靴脱いで武装解除するくらいには気心知れているといい（エスマーラルダにとつて靴を脱いで寛ぐのは最上級の親愛表現だつたらいいという捏造）。

ザップとは根本的に反りが合わないし、ステイブンとは表面上当たり障りなくビジネスライクに交流するが、内心で同族嫌悪。

本来ティア（あるいはドイツ読みだとクリスティーネになるのでティーネ）と呼ぶのを許しているのはクラウスやラインヘルツ家などごく一部の身内だけに限っていたが、バーボンの近くにベルモットことクリス・ワインヤードがいるため、クリスの愛称で呼ぶと色々弊害が起きてしまうからという理由でティアと呼ばせてもらっている。のちにこの愛称で呼ばれるのを赤井には許可していないのを知つてざまあとバーボン顔で愉悦の笑みを浮かべるくだりがある。

倉庫街での抗争についてはバーボンとして組織の命令で探りに行くが、もぬけの殻で拍子抜けした。どう報告したのかは彼のみぞ知る。リアリスト（というか自分の知識の外の事象や非科学的なものは信じないタイプ）なのでライブラの暗躍にはもちろん気付

いていない。おそらくH L潜入したらリアリストを改めなければならない人その①。

▼赤井秀一（詳しい出会い・関係性は前回参照）

クリスとは組織潜入前のF B Iエージェント時代からの知り合い。頭脳の切れっぷりがクリスと同レベルなので、H L成立前の北米支部にクリスが出向していた時はことあるごとに捜査に巻き込んでいた。F B Iからはあの赤井も認める相棒認定された。クリスがやたら赤井に当たりが強いのは前回を参照。

赤井が一方的にクリスをおちよくつてているバディに見えるが、実際は暴走する赤井をまともに宥められるストッパーでもあつた。恐らく人魚姫本編で墮落王の魔法陣転移事故でクリスが行方不明になつたと聞いたらS A N値が確実に削れる人。何気ない愚痴を聞いてくれる友人兼ストッパーを失くして、原作通りの無理無茶をやらかす。ちなみに沖矢昂の姿でM H A世界帰還後のクリスとばつたり会つた瞬間にスターフェイズの伝家の宝刀・観察力Aで正体をあつさり見抜かれる。そして隠れる気あんのかと怒られる（例・少年探偵団のストーカー行為、純黒でのカーチェイスとスナイプ）。もつと忍べよF B I。

▼声がでかいラインヘルツ家コンバット・バトラー

アニメ2期にも登場してくれた、あのうつかり脳抜きされてしまった彼です。経験は浅いけど既に有能。ラインヘルツ家の客人であり最早身内認定のクリスをお嬢様と呼ぶ。

「newpage」

「オリジナルキャラクター」

▼氷室

クリスティアナ親衛隊もとい過激派その①（笑うところ）
ルーガルーズ フロムノーウエア
 人狼局特殊諜報部日本支部所属の「不可視の人狼」。

この時間軸では25歳（人魚姫は英雄の夢を見るか？　本編開始時で27歳）。日本版私設部隊「燕」の一人。日本における嬢の情報網を担う一人。「氷室」は人狼局での任務中か「燕」でのコードネーム。コードネームに氷を用いている時点で崇拜具合はお察し。本名は常盤千代。ときわ　ちよ名前の由来は菊の異称・千代見草より。

黒髪ストレートのロングヘアに青みがかつた黒目。潜入時は希釈に関わるため髪は纏めている。大和撫子の体現と言わんばかりのお淑やかな容姿。洋服より着物が似合うお嬢様。口調もそれに見合うものだが、クリスの敵に対してはにこにこしながら懃懃

無礼で舌鋒鋭く、かなりの毒舌家にチエンジする。

エグジステンディールト
存在希釈

の精度はチエインには遠く及ばないが、潜入能力や人の心の懐にするりと入り込む手際などは超一級。人狼局日本支部は国内のテロ組織への潜入も多いが、汚職捜査の依頼も多いため、各種省庁、公安警察にもよく潜り込む。また旧華族のお嬢様という立場のため、政財界にも顔が利く（勿論人狼という事実は家ぐるみで秘匿している）。某お国漫画の祖国様こと菊さんとも交流がある。

クリスより2歳年上だが、何故かクリスティアナの事を「お姉さま」と呼んで盲信レベルで慕う。外見は大人びて見えるクリスと人種的に幼く見える氷室では大体同一年かクリスが上に見られるので、真相を知らない人間でも大抵騙される。

優秀な人間ほど裏切りが続発する事態に、人事面でほとほと困ったクリスからアジャア・特に日本の諜報・警察組織でライブラに引き込めそうな能力・人柄の人間は居ないかと半ばダメ元で相談され、頼られたのがあまりに嬉しくて勤務外の諜報を色々頑張った結果、公安警察内の足の引っ張り合いで黒ずくめに身バレし、処刑カウントダウンが始まりそうなスコッチという人材を発見した功労者。むしろ自分がHLに馳せ参じたかつたが、チエインに劣る自分の希釈能力ではクリスに迷惑をかける可能性も否定できないと自己分析し、クリスがあまり干渉できない日本での諜報で貢献しようと頑張る健気（？）な乙女。

▼警察庁の「燕」

実はゼロの上司、警備企画課課長の友人。裏でかなり頑張った人。

【自己解釈・捏造設定】

・日本の牙狩りは京都に御所があつた時代から陰陽師や天文方として天皇家に仕えていた術者や人狼たちの異能集団が前身で、ひつそり活動を続けていたのを牙狩りに接収された形（全力捏造設定）。そのため攻撃系よりも吸血鬼やあやかしを封印する方に長けている。吸血鬼退治だけでなく、見えざる者やあやかしにまつわる事件、騒ぎの調停、日本という神靈国家の地鎮も職務とする。天皇家に類する組織として、桜の代紋を用いる警察などの司法機関と対極となる菊を象徴とする。

・術士（P S I、サイとも）

B B B 1期アニオリ設定のサイキッカーたちが所属する機関「L H O S」に所属する超能力（P S I）保持者たちのこと。あるいは所属していないが超能力を持つ者たちのこと。それぞれ超能力の種類は多岐にわたるが、アニメでは大男を破裂させるほどのサ

イコキネシスやH L内を飛び回るテレポーターが登場していた。日本の牙狩りは発生機序が特殊だつたため、術士が多数所属している設定。

・ 燕^{つばめ}・ 燕隊

水晶宮式に従う牙狩り日本支部所属の者たちを纏めて呼ぶ名。つまりクリスの私設部隊の日本版。クリスが呼び掛けて作った物ではなく、構成員たちが勝手に集まって勝手に組織したファンクラブ（ガチ）あるいは支援組織。陰陽師・人狼・P S I 保有者など職種・階級は多岐にわたる。一部外部組織の人間も所属しており、諸伏景光も京都本部に顔を出した際に半ば強引に所属が決定した。

日本支部非公式の団体だが、日本支部上層部がクリスを「水守」と崇めているため、ほぼ無言承認されている。氷室もこの隊でのコードネームであり、支部では本名で所属している。クリスが氷室の名前で呼ぶのは便宜上便利だから。

あくまでクリスに協力するために設立されたものであり、ライブラの味方ではない。クリスが大切にしているからライブラに有用な情報を集めているというスタンスを徹底している。クリスの周辺を嗅ぎ回る者を許さない者が多く、おそらくコナンや赤井さんにはかなり風当りが厳しいと思われる。

燕として活動する際は、若紫の地に金糸で「菊水紋に燕」があしらわれた腕章・羽織

を使用する。それ以外の服装は自由。これはクリスが羽織る、伝統的に宮家に連なる者のみ使用が許された京紫に十六菊の紋の入った羽織を着ているのに倣つた。
 まじつく快人の小泉紅子も一応所属。日本の数少ない土着系の魔女（ガチ）で牙狩りとも縁があつたため。クリスとはお茶する程度の仲。

・演算人工知能ムネーモシユネー

ノアズアークはヒロキの制作した人工知能であり、その神髄はプログラミングや演算能力にある。個人資産のため牙狩りの機密性の高い情報を与えるわけにいかないので、日本が誇るギフテッド・ヒロキやその人工知能ノアズアーク、ライブラの鍵屋・ユリヤンの助言を得てクリスティアナ・I・スターフェイズが作成・完成させた。

こちらは急成長する電腦世界でのライブラの情報を記憶・保存・保護の目的で作成。H Lの超常科学や魔術的なハッキングも防御できるほどの常に進化するセキュリティシステム構築能力を持つ。閲覧権限はライブラトップ3とギルベルト、スコッチ（ただし一部）のみに制限されている。収録されている情報があまりに膨大なため、基本的に利用するのはクリスとギルベルトとスコッチ。ノアズアークと根底のプログラムが似ており、機密事項に触れない程度でならば情報共有が可能。ノア同様1年で人間の5年分成長する。

一定の成長を経てノアズアーク同様、人間の自我のごとき自立思考を持つが、命名の元ネタの影響か、年相応の無邪気な幼女のような口調。人間の姿を取る時は、5歳ぐらいのクリスに似た黒髪桜色の目の幼女。ちよこちよこクリスの私用のスマホやパソコンに侵入して作り手（母親）の様子を見守つてニコニコしている。ゆえにクリスのスマホやパソコンをハッキングしようものなら逆探知してハッキング返ししようとするほど。

あと実はライブラが構成員に支給しているスマホはムネーモシユネーが作成するセキュリティプログラムが必ず組み込まれているため、構成員のスマホなら自由に行き来・閲覧可能。つまり裏切り行為のやり取りがスマホ上に残っていたらその時点でその構成員はアボン確定という鬼畜仕様。この事実はスターフエイズの2名しか知りえない重要機密。

命名はギリシャ神話の記憶と学問の女神から。

▼裏話

「近づく足音、響く銃声」は前回の「タブラ・ラサでも構わない」でクリスという異物によつて歪められた、本来あつたはずの「スコッチの自殺」ルートの再演というかオマージュになつていきました。いつの間にか。ニアミスを書こうとしたらなんか物凄く意味

深になつてしまつた。大体は暴走する捏造設定の所為です。

夜の人気のない場所（廃ビル／古倉庫）での交渉に、降谷零／バーボンがその場に現れなければつつがなく事が終わつた、という状況設定の類似性。しかもどつちも降谷零本人は自分が事態を悪化させたことに全く気付いていないという。

死人が出でないのは古倉庫におけるスコッチ役であるクリスが一筋縄で捕まるような人間でなかつたから。というかエンカウントしても恐らく問題なくあしらえたと思われる。どうあがいても人外相手に張り合えるライブラ相手に暴力で勝てるわけがない。相手に気付かれることなく血の針相手に打ち込んで、たとえ背後をとられようが身動き取れなくされようが相手を全身冷凍出来る御仁なら、おめおめ捕まるはずもなく。大体そんな感じのロールプレイになつていた夜でした。

今回タイトルに使用したお題はお題屋さんたちの秋の夢の競演こと秋の夜長「夜長文庫」で作られたセットお題「導火線／血の色をした謎は」からお借りしました。このセット題、ウイスキートリオで連想されたお題なんですよ……他のお題も最高なんですよ……つらい……「ラブレター フロム ビヨンド」とかこのシリーズの為に在るようなお題にしか思えないしもつと使いたかつた……（遺言）

とりあえず書きたい要素をほぼ今回で書ききつた（あえて書きたいとしたら赤井さんの変装パレぐらい）のでネタ切れです……どうするかな……。

ウイスキートリオと秘書嬢の親愛度は最終的に3人とも気心知れた友人レベルで止まる（赤い彗星のみすでにやや矢印出ていますが）、IFルートでくつつくもの楽しそうだなあと。金髪碧眼褐色ベーブエイスでハイスペックの安室透と黒髪赤目色白のミステリアスな雰囲気醸し出しているおっぱいのついたスパダリの秘書嬢が並んでるとかもう視界の暴力だと思う。

グツドエンドの逆算

——死なれては困るわ

もう逃げ場が天国にしかないと覚悟してリボルバーを握ったあの日、引き金に掛けた指を解かせたのは、唐突に割り込んだ声だった。薄暗い廃ビルの中、ネオンのささやかな光の中で浮かび上がる白磁の横顔はあまりに美しすぎて、いつそこわいほどで。血の色をした目でじっと見つめられた瞬間に、ライの目を盗んで引き金を引かなければと焦っていた俺の頭は真っ白になつた。それを確認した後、自分に付いてくるかどうか、選択肢を与えてくるのだから抜け目がなかつた。

——組織と公安が貴方を捨てるなら、その心臓は私が貰い受けましょう。貴方は死ぬには惜しい。

人智を超えた技術で組織の目と追っ手を躱し、警視総監とクリスが話をつけている最中もどこか現実感が無くて、ホテルで盗聴器も隠しカメラもない安全地帯だと意識した瞬間、張り詰めていた糸がブツンと切れた。彼女もそれを察してくれたのか、ソファ上で今後の事をゆっくり話してくれた。

組織が壊滅して身の危険がなくなるまでの間、身の安全とライブラでの情報収集を対価に公安から出向という形で、裏社会に密かに噂される秘密結社・ライブラに所属が決まって、助けてもらつた礼を言つて握手を交わして。色々会話をしながらルームサービスで腹を満たしたら、それまでの緊張感の反動か、いつの間にか寝入つていたらしい。次に目を覚ますと翌日の朝で、しかも自分がマスターべッドルームで一人寝かされていることに気付いた時、茫然とした。

流石老舗ホテルのスイートルーム、ベッドの寝心地は最高で、久々にぐっすり眠れて身体はすこぶる快調だった。スナイパーで、ライフルを持ち運ぶのに、フェイクのためには本当のギターも入れたギターケースを背負つて移動となるとかなりの重さになる。ただでさえライフルと予備のマガジンや手入れ用の工具だけでも合わせたら5キロは軽く超える。そしてギターケース自体とフェイクのギターも合わせればかなりの重さになる。だから慢性的にあつた肩こりさえ嘘のように消えていたのには驚きを隠せなかつた（後で知ることになるが、俺の血液に干渉して血流の流れを良くして疲労回復促進をしていたらしい）。そしてなにより、本来このベッドを使うはずだつた人間を差し置いて寝ている事態に慌てない訳がなかつた。

慌てて寝室を出れば、リビングのソファードでパソコンと向き合いながら書類仕事をこなしている恩人がいて。昨日は掛けていなかつたPCメガネをかけ、パソコンの傍らに

処理済みらしい書類の山と、俺の今後に必要な手続きに必要な書類を終わらせていて。それを見て、俺がぐつすり休めるよう、万が一組織の追っ手が届かないか警戒して徹夜してくれていたのだと気づいたら、かすかに残っていた疑念や警戒心は消えた。

それからライブラの仕事を通してクリスティアナという一人の人間を見ていく中で、仲間にさえ畏れられる切れ者ぶり、冷徹さに身震いした。

でもそれ以上に、彼女はさみしいほどに独りぼっちで、俺よりも4つも年下の女の子が懸命に生き足搔いているのだと知った。頭のキレも冷徹さも仲間を守るために必要なライブラの負の側面で、それを纖細なクラウスの代わりに、スタッフエイズ兄妹が背負っているだけのことだと、彼らもクラウスと同じくらい優しくて、ただただ感情を隠すのが器用で得意なだけなのだと悟った。

そんな姿が幼馴染と重なつた。責任感が強くて周りへの気配りが上手で、仕事も料理もそつなくこなすハイスペックで、だからこそ一人で抱え込んで、弱いところを隠して。どうして放つておけるだろう。

最初は、ただ命を救つてくれた恩返しがしたかつただけだった。でも段々と彼女が背負つている重荷を減らせればと一心で、クリスの書類仕事を俺に出来る範囲で手伝つたり、仕事の前の必要な武器や物資の調達やらの準備、ステイブンからの「おつ

かい」を自主的にこなすようになつた。そのうちにいつしか「クリスの補佐」という認識が構成員の中で広まつていて、クリスの仕事には殆ど俺がバックアップに就くことになつたりと、セット扱いされるようになつた。

たとえこの思いが吊り橋効果だとしても、一時的なものだと揶揄されても、恩と尊敬が恋愛感情にすり替わつたものだと指差されても。俺はいつしか、クリステイアナの事が好きになつていた。

＊＊

「な、クリス、心遣いは嬉しいんだけどさ」

「この生地はしつくりこないな……肩幅が日本人にしては大きいから、あまり厚地だと膨らんで、余計ずんぐりして見えるのかしら。ミスター、次はあそこの棚のミッドナイトブルーの生地を」

「畏りました」

「話を聞いてくれクリス、檜山の顔に似合うのを作るのは分かる、でも素顔の俺の分までオーダーメイドで作ることないぞ!? ホントに!」

「い、や、だ」

「クリス……」

ドイツはベルリンのとあるテーラー。ドイツで公爵家の爵位勲を持つラインヘルツ御用達のその場所で、仁王立ちするクリスは真剣にとつかえひつかえスーツ生地を肩口に宛がわれてすっかり困り顔のスコッチを睨むような鋭さで見つめた。

「檜山用は仕事用。でも折角男前なんだから、良いスーツのひとつ持つていて損は無いと思うの」

「お、男前……」

顔を褒められて照れたような表情をしたスコッチだが、すぐにはへによりと太めの眉が垂れた。

「檜山のはライブラ^{ミス}ト^{レス}の外交担当の隣に立つ以上、良いスーツじゃなきや見劣りするのは分かるけどな、でも俺自身のためのスーツにオーダーメイドなんて不相応だろ!」

「ちつとも不相応じやない。むしろ貴方はもつと着飾ることに頓着して。勿体ないつたらないわ、顔もスタイルも素敵なんだから。日頃何かとお世話になつてお礼。受け取つてくれないなら仕立てても無駄になつてしまふことになるけど」

「……、ああもう、分かつた……」

天然褒め殺しか、これだからラテンは怖いとスコッチは頭を抱えた。

スコッチ、諸伏景光がクリスティアナの補佐として動くことに決まった時点で、スツのオーダーは必然的だつた。クリスティアナが担うのはライブラの人脈と經理。世界有数の富豪や政財界の大物と会う回数は多い。その時、傍に控える以上はクリスの顔を立てるためにも、相應の服装が暗黙のドレスコードとして求められる。それは理解していたが、まさか誰かに着飾つているのを見せる必要のない諸伏景光の素顔に似合うものまで仕立てようとするのは予想外だつた。

「……というわけなんだ、ステイブン」

『なんだ、良かつたじやないか』

「どこが……いや嬉しいけどな、”檜山”より俺のスーツのほうが真剣に選んでもらえてるつてのも光榮だけど……身に余るつていうか

『ヒロ、連れてかれたテーラーは?』

「え? ○○つてどこだが」

『ならなおさらだ、そのテーラーはラインヘルツ家筆頭に牙狩りや高級官僚を相手に商売してる、オーダーメイドは一見お断りのテーラーだ。そこにクリスが連れてついた時点で、君はもうクリスにとつて大切な”身内”だ。仲間でも中々連れていつたりしない。俺に言わせてもらえば、わざわざ閉店後に来店予約をして対応させるなんて、滅多にないことだ。愛されてるな』

「……っ！」

『スーツも既製品じゃ物足りないから、わざわざ手間暇かけて絶対似合うのを作ろうとしてると思ったら、可愛いだろう？』

「おう……」

背筋の伸びた初老のテーラーと話し込んでいたクリスが視線に気づいて振り返る。ほわりと小さく笑んだクリスに、景光は火照りを感じる片頬を押さえながら、小さく手を振り返した。

* *

年月は経ち、組織ももう間もなく壊滅作戦に取り掛かるというところまで情報を集め、追い詰めに掛けた頃のこと。俺はいつものように事務処理に追われているだろうクリスを手伝うためにオフィスに足をむけていた。

だが、その足はオフィスに繋がる中華風の扉の前で止まることになる。

「馬鹿だよ……言えるわけない、今更公安に返したくない、だなんて」

ほんの少しだけ空いたドアの隙間。俺のかみさまが頭を抱え、項垂れた頭の先を膝近くまで寄せて、死んでしまいそうな声音で呟いた。静かなライブラの事務所の高い天井

に跳ね返つて、融け消える。オフィスに繋がるドアに掛けた手がじわり、手汗を滲ませて滑りそうだ。

ヒロとレイに顔向けできない。

そうやつて呻くのを、盗み聞きしてしまつた。

みぢり、という音が、自分の掌の中から聞こえた。知らず力を込めていた手は深く爪痕が残つていた。

——もうすぐ戻れるね、ヒロ

組織が壊滅したら、俺は、諸伏景光は姿を隠す必要がなくなる。名前を偽つて行動することも。勿論、各国の諜報組織が協力し合い、隙の無い布陣を敷く予定の掃討作戦でも、莫大な規模を誇り世界各地に飛んでいる組織の人間を一網打尽にしきれない部分はあるだろう。残党がいる限り命の危険は付き纏うが——絶対に表で素顔を晒せない、というレベルからは脱する。

そうなつたら、この契約は终わりになる。クリスと公安が取り決めた、組織が壊滅するまで諸伏景光をH.L.に構成員として迎え入れ匿い、その代わりに情報を提供する、という契約。ライブラ結成当時の、人員が本当に仕事量に見合つていらない少数精銳ぶりとは打つて変わつて、今は情報収集担当や狙撃部隊もできた。クリスやステイブンなど

核構成員のマルチぶりは変わらないけれど、末端はそれぞれ役割を専業化できるまで、その人数を増やすことが出来たのだ。俺がいなくとも狙撃手は他にもいるし、まあクリスの補佐が居なくなるが、彼女なら一人でこれからも大量の仕事をこなしてしまうんだろうという予感があつた。つまり、俺が必ずライブラに残らなきやならない理由は、とても薄い。

ついこの前の掃討作戦のための作戦会議が終わつた後も、そうやつて、さびしいなあと何でもないような調子で社交辞令みたいに言うから。残りたいなんて言えないと、泣きたくなるのを、潜入中から慣れっこになつちまつた、仮面の笑顔を浮かべてこらえたつてのに。

なのに。

気付けば、握つたままのドアを勢いよく開け放つていた。乱暴な開け方に中華風の扉が悲鳴を上げて、音にか、俺の気配にか。顔を素早く上げたクリスの顔が驚愕と悲愴に塗りつぶされていく。

「ヒロ、きいて——」

夕焼けを切り取つて煮詰めたような赤い瞳がはつきりと揺れる。血の気が引いた面に、普段なら血流操作で表れることの無い隈がくつきりと浮かんで、憔悴した表情をさ

らに悲痛に染めた。その表情にぎりつと奥歯を噛み締めた。

「ごめ、なさ」

叱られるのを怖がる子どものように、ぎゅっと頭を抱え込むように身体を縮こめた彼女に、俺は手を伸ばして。

「ごめんな」

ただ一言を呟いて、幼い怖がり方で怯えるクリスを抱きしめた。

「え？」

「馬鹿だなあ、俺も、お前も。お互の為だと思つて取り繕つて、無理して」

お互いを思うがあまりに「これが最善なんだ」と心を殺そうとして、苦しんで。

気付けなかつたことに心が痛む。怒つていると怯えさせたことに申し訳なく思う。けれどそれ以上に、残つて欲しいと思つてもらえたことが嬉しかつた。

仕事とプライベートを、公と私情を完全に切り離して、時には非情なまでに振る舞えるクリスティアナが、公私混同した我儘を、4つ下の少女らしいことを少しでも考えてくれたことが、なによりも俺には嬉しかつた。

強張つたままの腕の中の身体を、怖がらなくていいよという想いを込めて、ぽんぽんと優しく叩く。

鍛えていて、外人女性としても高身長の部類に入ると言つても、その肢体は狙撃手の

自分のそれより華奢だ。人外めいた身体能力を秘める、しなやかで重い筋肉が詰まつて、いたとしても、まだ25歳なのだ。この背中が背負うものは潰れそうなくらい重くて、しかも誰にも荷物を預けられないくらいに複雑で。少しでもその背中が潰れてしまわないようにと出来る限りで支えたかったのだ。今までも、そしてこれからも。

だから、世界のあらゆる悪意の矢面に立つ彼女に、もう少し傍にいてと頼られたのが何よりもうれしかつた。

ああ、俺のかみさま。いとしいいとしい、俺だけのかみさま。

「クリス」

返事はない。じつと抱き込まれたまま身じろぎしない彼女に構わず、言葉を続ける。

「俺がもう少しクリスの傍で支えたいって言つたら、失望するか？」

クリスの肩口に額を預けながら呟いたら、俯いていたクリスががばりと顔を起こした。な、とかは、とか、言葉どころか単語未満の呟きが落ちてくる。

ああでも、降谷や風見は怒るかな。日本を守る公安失格だつて叱るだろうか。むしろボコボコにされるかもしれない。……それでも、良いと思つていてる自分がいる。

公安は自分の身分が潜入先にバレたら、国の為、家族の為、情報の秘匿のため、自決することが求められる。公安警察官はそれを覚悟して任務に望む。あの時の俺もそうだつた。あの時の行動に後悔はない。

ただ……あのまま死ねば、降谷が俺を追い詰めたと、ずっと思いつめることになつただろう。ライ、赤井も口は悪いが案外いいヤツだから、もしかしたら降谷を気遣つて、俺を殺しただなんて言つたかもしれない。ただでさえ相性の悪いあいつらの仲を拗らせるような未来もあつたかもしれない。

だから——クリスに命を拾われたことを、俺は心の底から感謝している。感謝と今向けている恋慕は別物だが、公安の「俺」はあのとき死んだとも思つている。

なにしろ、俺のN.O.C.バレの原因は実働を担う“作業班”トップである警視庁公安部の内部からの密告だ。公安は国を守るためならその手口がいかに非道だろうと、躊躇わない。それは理解している。それでも、俺がN.O.C.だと密告したあれは、国の為でもなんでもなかつた。たかが私怨や組織間の因縁の為に殺されかけた身としては、公安部へ以前までの忠誠心は無い。俺が日本警察に情報を流すのは、今も孤立無援の状態で潜入中の親友を助けるためと、クリスの契約があつたからこそだ。戻りたいかと言われば——本音を言わせてもらえるなら、間違いなくNOを出すほどに、今の俺は「ライブラ」だつた。

「なんで……」

「大事なものが増えたんだよ」

ギルベルトさんが淹れてくれる紅茶。

アーチナル

人界異界を問わない武器が所狭しと壁や棚に並ぶパトリックの武器庫。二一力の纖細で丁寧なメンテ。

K・Kのとこのチビたちはヤンチャでかわいいし、出来上がったK・Kの愚痴と家族自慢を差つ引いても、同じスナイパー談義をしながら酒を飲み交わす時間も良い。

クラウスと温室の植物の水遣りするのも気分が落ち着く。

弟みたいなレオやザップと通い詰めたダイナー。

ブローディ＆ハマーと特別恩赦の日に名画を鑑賞した貸し切りの美術館。

大道芸で稼いだツエットと散歩した旧セントラル・パーク。

ふと気づけば希釈して俺の肩にいつの間にか留まっているチエインの、小鳥のような重みだと、時折肩に登つてくるソニツクにクツキーを餌付けしたり遊ぶ和やかな時間だと、ステイプンと遅めのブランチのために、グローサリーであれこれサンディッチやコーヒー豆を試行錯誤したりする時間だと。

そして俺のためだけに似合いの一着を作ろうと柳眉を悩ましげに寄せて、俺の視線に気づいて笑うクリスが。

この理不尽で犯罪渦巻く霧の街での何気ない日常と狂騒が、いつの間にか大事になつてしまつた。

「公安の俺はある日死んだ。今の俺は、日本もひつくるめて世界の為に命を張るライブラだ」

まだ、何にも恩返しできてないしな、と付け加えながら。

いつか俺は公安オモテに戻るからと、クリスティアナが、ステイブンが、クラウスが、俺に殺しをさせたがらなかつたのには気付いていた。クリスに至つては最初から明言していた。射程距離600ヤード越えの俺と同等の長距離精密射撃の名手はライブラといえどK・Kだけ（というか彼女は金さえければ、たとえ戦場に自分がいなくても遠隔操作で標的を仕留められる）で、俺が出て引き金を引けば済む任務も悉く外されて別の構成員が当てられていた。深手を負つても、すぐに治つてているように動けるが、「外」でどんな暴走が起ころか分からぬ不安定な異界医療は極力使われなかつた。

その心遣いが、もどかしくも嬉しかつた。

俺が日本で警察官に戻れるように心を尽くしてくれた彼らと共に、歩いていきたいのだ。

「貴方は表に戻れる人なんだよ……」

「俺も国の為、任務のためとはいへ人殺しだぞ？ しかも何の罪もない人間すら殺した。警察官として戻つたとしても、この一件が終わつた後の処分は難しいし、サツチヨーで

上方の地位にいる降谷ですらどうなるか

「それでも……」

「俺を返したくないなら、建前を喋るのはやめてくれ、クリス」
ぐ、とクリスの眉根と口元が歪む。秘書としてライブラとして、俺の行く末を慮つてくれるのは良いが、それよりも彼女個人の気持ちを聞きたかった。

どれだけ沈黙がその場を占めたのか。オフィスの壁一面を覆う窓から降り注ぐ光と、霧の海を泳ぐ異界生物のみようちきりんな遊泳飛行を眺めて待つていると、観念したらしいクリスが細い溜め息をついた。

「さみしい」

ああ、さみしいとも……だつてそうだろう、君は私がこの街で裏切られ続けるのに疲れて、誰か信用のできる人材はいなかつて、氷室を探してもらつて見つけたんだ。そして君は、自分の欲望に飲み込まれることもなく、境界線を見誤つて地雷を踏むことも無く、それどころか私の仕事を手伝つてくれて、疲れた時には気分転換に連れ出してくれて、勞わつてくれた。普通の仕事仲間で、友人でいてくれた。それが、どんなにうれしくて、得難いことだつたか。君がいない時にうつかり君がいる前提で独り言を言つて、クラウスやステイブンに微笑ましそうに見られたのが何回あつたと思う？ クラウスにトドメとばかりに「ヒロが来てから君は活き活きしている」とかいわれたらさ、

すっかり君に依存しているのを自覚しない訳にはいかないでしよう？……馬鹿で、愚かでしよう。最初から手放すと決めていたのに、やつと出来た友人を笑つて見送ることも出来なさそだなんて、心底どうかしている。

「こどものようなぽつりとした咳きから、ぽろぽろと小雨が降るように、クリスは嫌に饒舌に、心の内を語つてくれた。よしよしと、撫で心地のいい黒髪を撫でながら、口元は緩みっぱなしだ。

「俺は嬉しいけどなあ。クリスが俺のこと大事に思つてくれてたんだなって知れて。もつと依存つつーか、頼つてくれていいんだぞ？」

「これ以上頼つたらダメになりそだから遠慮する……」「クリスはちょっと駄目になるぐらいで丁度良いと思うぞ……お前らスターフェイズは一步間違えたら過労死しそうで怖い……」

「ええー……」

「と、いうわけで、組織壊滅して諸々掃除が終わつた後にどうやつて公安に報告するか考えないとなあ」

「え」

ぽかんと口を半開きにする俺のかみさまに、にんまりと笑つてみせた。

「組織壊滅まで手伝つてもらつたんだ、俺が返す恩は大きいぞ？ 長丁場になるなあ
まあ恩返しどうこうを抜きにしても、俺がただ傍に居たいだけなんだけど。

「話は聞かせてもらつた!!!」

「!!?」

「えっちょつ、ステイーブンにクラウス、チエインまでいたのか!?」
「すまないクリス、ヒロ、盗み聞きするつもりは無かつたのだが……」

「やつ」

「えーっと、俺もいます……」

「レオまで……」

「ちなみにライブラとしても僕個人としてもヒロの契約更新、いやライブラ残存は大い
に結構。むしろ全力で協力するよ」

「ステイーブン!?」

「おつ、ホントか？」

「狙撃班が昔に比べて余裕が出たとはい、ヒロレベルの長距離スナイプはそういうない
し、まして殺さず確実に無力化できる腕前となると貴重だ。加えて無茶しがちなクリス

のストッパー兼友人なわけだし、協力しない訳がないさ。こちらもどうやつてヒロをこつちに引き込もうか考えていたんでね、渡りに船と言つたところだ」

「うむ、ヒロがこちらに残つてくれるのならば、これほど頼もしいことはない」

「二人とも……ありがとう」

「でもヒロの幼馴染のミスター・フルヤが一番の難敵でしよう……まずは外堀を埋めるとか」

「外堀つて、この場合ヒロさんとフルヤさんの上司さんとかつか？」

「そうだな、ああいうタイプは本人の説得の前にある程度選択肢を潰してからの方が効果的だろう」「じゃあこういうのはどうです、日本のツバメ所属の人狼に協力要請して、公安が探る予定の組織の情報を握つておくとか！」

「そして公安内に恩を売つておき、牙狩り及びライブラとの繋がりは向こうにとつても有益なものと強く認識させる……うん、それでいこう」

「いやそれでいこうじやなくて」

「いいじやないかクリス、黒の組織が壊滅したらヒロが居なくなるつて頭抱えて胃に穴開けかねないくらい悩んでセーフハウスの中行つたり来たりしなくていいんだから」

「ん”ん”つ」

「あつヒロさんが悶えた」
「兄さんの裏切り者……!!」

「ステイーブンはスコッチを応援しているのか？」

「うん？　ああ、まあね。だつていい奴だろう、彼。少年やクラウスに近い光属性っていうか……。まあ、それでも人殺しの経験とか裏社会の組織に潜入してただけあって、あの二人みたいな目が潰れそうなまぶしさじゃないが。逆に僕らみたいなのはその方が落ち着くんだよなあ……。僕らの汚くてどうしようもない部分をうつすら知つても、態度変えずに笑つて接してくれるのには、クラウスとはまた違つて意味で救われるよ。そうじやなきや僕らのセーフハウスに招いて一緒にディナーしたりしないし。まあ、彼が結構自活能力ないのも原因だけど」

「スターフェイズさんがガチ気に入りしてる……」

【チエインとスコッチ】

「結構な頻度でいつの間にか肩に乗つかつてることが多くてビビる」「ヒロは肩幅広いから乗りやすい（グツ）」

「そこか!? まあ、俺に乗る時は凄い軽くしてくれるからいいんだけどな、落ちないか
が心配で……」

「落ちる前に下りるよ」

マイペース同士波長が合いそう（レオも）

（蛇足）

この話に至る前に、実は降谷さんがバーボンとしてH.Lの調査とパイプを作る仕事を任されて、組織には内緒でライブラと連携して外に出しても実害の薄そうなモノだけ出して組織が得る異界技術とかをコントロールする話があるんですが（時間軸的にM.H.A世界にクリスが転移する前でB.B.Bだと10巻より前）、その関係で一応ライブラも降谷さんの素性と性格はある程度知っている（ニコニコしてるけど食えない人）。チエイシさんが外堀埋めるのに全力なのはクリスもスコッチも気に入っているので幸せになつてほしいから。ブンさんが乗り気なのは、応援する気もあるけど色々知り過ぎちゃつたスコッチを完全な身内に引っ張り込んで手元に置きたいからという理由も。

多分この後全力で外堀を埋めにかかるライブラ&日本のクリス親衛隊と、ライブラの情報網を手放したくない公安上層部（掃除済み）の思惑が噛みあつてそのままスコッチ

残留になる。降谷さんは一回力チコミに来る。
遊び

施しの英雄と天秤の淑女（×FGO）

施しの英雄と天秤の淑女

「素に銀と鉄。
礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ』

燃え落ちる街並みの中、雪花の盾を触媒に、魔力を以て召喚陣に火を灯し回す。

召喚陣の上に翳した手の甲が灼けるような熱を持つ。立香の甲に刻まれた盾のような紋ではなく、翼を広げたような、複雑かつ精緻な天秤を模した令呪が滲みだすように

浮かびよ。上がり、赤い光を放つ。
閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

Anfang

告げる。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。」

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば應えよ』

腕に青の線が複雑に走る。体内で蠢き沸く、熱の奔流。制御できないほどの血潮の猛りに、私は吠えるように言葉を紡ぐ。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての惡を敷く者。

汝三大の言靈を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

ひとりわ強い輝きを放つた召喚陣に、ロマンが叫ぶ。

『凄まじい魔力だ、この靈基反応、間違いなく大英雄クラスが来るぞ!!』

青い電流と火花がばちばちと唸りを上げ、私の回路から汲み上げられた魔力がヒトの形を成した。余りに眩しすぎて、閃光が収まるまで直視できないほどに。

「——サーヴァント、ランサー。真名をカルナという。お前がオレのマスターか？」

現れたのは、白髪にそれと同じくらい白い幽鬼のような肌、金の鋭利な鎧に大槍を携え、胸に赤い宝玉をつけた細身の青年だつた。全てを見抜くような碧玉の双眸に射抜かれ、そして彼が名乗つた名前に私は息を呑んだ。じわり、と冷や汗が知らず浮かぶ。カルナ。ロマンの言う通り、数ある英雄の中でも大英雄と言つて過言でない英雄だろう。インド最大の叙事詩『マハーバーラタ』に語られる大英雄アルジユナの異父兄にし

て、最大のライバル。太陽神スリーリヤの息子。武芸を競う場において養父を侮辱され怒り、その場でクシヤトリヤとして迎え入れアルジユナとの挑戦を手助けしようとしたドゥルヨーダナの友として、カウラヴァ百王子のために奮戦した高潔な「施しの英雄」。周囲の謀略によつて本来の実力を全く發揮できない状態に追い込まれた上で、ライバルであるアルジユナに謀殺に近い形で首を射落とされた悲劇の英雄もあるが……「炎」に縁遠い自分が、太陽神の息子たる彼を引き当てるとは、どんな因果だろう。

とはいゝ、この非常事態にあつて、これ以上ない心強い味方でもある。彼に相応しいとは言えなくとも、マスターだと胸を張つて言える行いをしたいものだ。そんな思いを胸に、問い合わせる彼に私は手を差し出した。

「ええ。私があなたのマスター、クリステイアナ・I・スター・フェイズよ。『マハーバーラタ』に名高い大英雄と戦えること、誇りに思うわ」

「……どうやら此度もオレは良きマスターに巡り合えたようだ。見るに、お前は己を悪と知りながら、それでもより多くの命の平穏と幸福のために、時には鉄の理性で無慈悲で冷酷な手段を取ることも已む無しとする気性のようだ。そういうふた在り方にはオレも覚えがある。我が槍を預けるに不足はない」

「苦悩ばかりの人生だつたけれど……施しの英雄にそこまで褒められると、悪い気はしないね」

掴まれた手はひやりとしていたが、その瘦躯に反して力強い。強固に魔力・パスが結ばれるのを感じて、私は口端が吊り上がるのを感じた。

——これが、のちに「私のランサー」と信を預ける、私の相棒との出会いである。

人理焼却、七つの特異点を巡る旅は、生半可なものでは無かつた。

燃え落ちる冬木にて、反転したアーサー王を打ち倒し。

次なるフランスでは、邪竜ひしめくオルレアンを可憐な王妃と旗持つ救国の聖女と共に駆け抜け。

古代ローマでは可憐で暴虐の代名詞たる薔薇の皇帝と共に、数々のローマ皇帝を相手取り。

伝説に語られるオケアノスの大海上では剛毅な大海賊と共に冒険に漕ぎ出し。

毒の霧烟る、どこか懐かしい雾囲気のロンドンでは、反逆のロン・ディウムの騎士と共に、群れる金属の兵隊を退け、ついに敵の首魁と対面しその本懐を聞く機会に恵まれた。静かで冷徹な口ぶりで私の問い合わせに答えた、ちぐはぐな印象を覚えるソロモンとの邂逅。そしてその場で邪視の呪いに掛かり——7日間、人間の悪性の具現であるサーヴァントと戦う監獄塔に魂ひとつで立ち向かう羽目にもなった。

無事監獄塔を脱出し、次なる特異点とされた北米では、私のカルナだけでなく、抑止力として聖杯に呼び出されたカルナもいた。しかも敵には、カルナの終生のライバルであるアルジュナという好カード。オルタとなつたクー・フーリンと彼をオルタ化させたメイヴ女王との戦いは熾烈を極めた。

次のキヤメロットでは円卓の苛烈さ、凄絶さに挫けそうになりながらも、ベデイヴィエールやアーラシユ、歴代のハサンたち、そしてエジプトのファラオの力を借り、神槍ロンゴミニアドを持つ女神に立ち向かった。

バビロニアでは絶望的な状況下でもあきらめないウルクという古代都市の底力、尊敬される過労死王たるキヤスター・ギルガメッシユと共に、イシュタルやエレシユキガル、ケツアルコアトルといった女神たちの助力の元、原初の創世神に牙を剥いた。

——そして、終局特異点、冠位時間神殿ソロモンで、永遠にも思えるほど蠢き沸く魔神柱を、これまでの特異点で出会つた味方も敵も関係なく、縁を紡いだサーヴアントすべてと協力して、一秒間に44本の計算で磨り潰しながら駆け抜け、ロマニの偉大で悲しい決意の元、私と立香は、人理焼却を阻止した。

その他、微小な特異点やハロウインの悪夢だつたり、人理焼却阻止後も5つの特異点を修復するドタバタはあつたのだが……その旅路は、苦難と挫絶、幾たびの喪失に満ち溢れてなお、輝かしい宝物だった。

何故かカルナを始め、本来なら炎に全く縁のないはずの私にばかり太陽系サーヴアント……玉藻前やガヴエイン、ファラオ・オジマンディアスやらケツアルコアトルが召喚されたり（全体的にとてもまぶしい）、立香が召喚したバーサーカーのウラド公には吸血鬼には猛毒のはずの血を所望され追いかけ回されたり、雷の縁あつて召喚した頬光さんには「母と呼んでください!!」と迫られるし。いや頬光さんの母性はまさに理想の母親像ですけど、あんないい人私には勿体ないです……。あと茶々も普段は見た目どおりのお転婆姫なのに、ふとした時に見せる母性に思わず大人しく休ませられるから……母性つよい……。

バレンタインのお返しに男性陣からもらつた聖遺物待つたなしのお返しに身震いはしたもの、どれもこれもが嬉しかつた。流石にカルナが不死の黄金の鎧の一部を鍛え直してピアスを作つて持つて来た時には本気で良いのか、と念押ししてしまつたが、彼の耳輪にも似たデザインのピアスを贈られたのがうれしくて、カルナの要望通りカルデアで二人の時だけは付けていた。特異点でつけていたら失くしそうで怖いし。

そして、セイレムの魔女裁判を乗り越え、冥界のクリスマスを終えたその後、私は得た聖杯の力を使い、元の世界……堕落王に飛ばされるまでいた、HLに帰還することにした。立香やダ・ヴィンチちゃん、マシユ、それに支えてくれた職員たち、そして頬れ

るサーヴァントたちはとても惜しんでくれたし、それ以上に別の世界でまた世界を救う戦いに戻ることを応援してくれた。ライブラとは違った意味で、得難い仲間たちに見送られ、契約していたサーヴァントたちが座へ還るのを見送った後、それでも思い出して残つたカルナのピアスやその他の僅かな荷物を手に、私は聖杯を使用して無事にHLに帰還した。

最早右手に礼呪はなく、ライブラの秘書として以前と変わりない生活を送りながら――それでも、黄金のピアスを耳に下げ、氷を、脚を振るう日々だつた。

――今日までは。

「……超絶高いところからのフリーフォールとか、新宿で終わりだと思つてたんだけどなー!？」

ああここに相棒カルナがいてくれたら『魔力放出(炎)』で颯爽と受け止めてくれただろうに、と遠い目をする。ここにはアラフィフもいないしまして信頼する一番槍もない、無情なる狂騒の街である。氷を外壁にブツ刺して足場にしようにも、建物が遠すぎて不可能だ。

最悪、もう少し地上に近いところで籠目で血の網を張つて受け身を取るほかあるまい、と半ば覚悟したその時、右手に刺すような痛みが走った。瞬間、ここしばらく感じていなかつた身体から何かの力が抜けるような感覚に襲われる。視界の隅で、黄金の粒子がはじけたように見えた。

「——オレを喚んだか、クリスティアナ」

「は——」

「ああ、驚くのも無理はない。オレ自身とても驚いている——だが、同時にこれ以上ない喜びもある。お前の槍として、再びサーヴァントとして現界が叶つたのだから」冷徹に取られがちな、言葉数の少ない言葉回し。コミュニケーションは苦手だと宣つた相棒は、鉄面皮を崩して嬉しそうに碧玉の目を緩めた。

「カルナ!!」

「ああ」

「エツ本当に私のカルナか君!? 普通座に還つたら召喚されてた間の記憶はほとんど引き継がれないんじやなかつたの!?」

「その疑問はもつともだが、今はそれよりも優先させるべきことがあるだろう……抱えるぞ」

「あ、ごめん。ありがとう」

「礼など不要。当然のこととしたまでだ」

カルナに抱き込まれた瞬間、落下が止まる。

本来飛ぶ術を持たないカルナだが、魔力放出スキルの応用によつて飛ぶことが可能なのだ。ただ、大英雄の名に恥じない宝具やスキルの数々のために、かなり燃費が悪いという欠点はあるが……この吸血鬼に対抗するために色々魔改造された身体が秘める魔力量は、カルナの実力を常に十全には発揮させられずとも、使用する魔力を限定すれば、本来の8割なら瞬間に解放できる。魔力放出も短時間なら十分に活用できる。バビロニアの泥の海だつたり新宿の開幕問答無用フリーフォールでは大変お世話になりました。

ビルの上に降ろされた瞬間、がばりと抱き付く。恥など知るか。

「…………また君に会えてうれしいよ、カルナ。私の無二のランサー」

「オレこそ感謝する、マスターが常にこのピアスをつけていたお陰で、こうして窮地の呼び掛けに応えることが出来た」

「…………あ、これが原因?」

耳元で金の精緻な細工に、カルナの胸で輝くものと同じ赤い宝石がちりばめられたピアスが揺れる。愛おしげに目を細めたカルナの指先が耳飾りに触れるのを静かに受け入れた。

「ああ。父より賜つた不死の鎧、『日輪よ、具足となれ』の一部を捧げるほどのマスターなど、幾たびある聖杯戦争での記憶の中でもお前のみ。ゆえに、オレはお前との記憶を持つたまま再び現界が叶つたと言えよう。常に身に付けてくれていたのだろう、そのピアスからは別れた時とは比べ物にならんほど、マスターの魔力が籠つてているのを感じる」

「……君が遺してくれたものだからね、嬉しかった思い出を忘れたくなかったんだ」照れているのを隠すように、ぐりぐりと額をカルナの身体に押し付ける。細い指が私の髪を梳いていくのが心地よかつた。そうか、と上から落ちてくる声は穏やかだ。

「ところでマスター、身体に不具合は無いか？」

「？　いや、これといって」

どうしたの？　と問えば、カルナは無表情のまま眉根を寄せた。

「此処がマスターの生まれ育った世界ならば、本来『英靈』どころか、『座』や聖杯といつた魔術世界のモノは存在しないだろう。お前は世界を跨いだ時の補整で本来無いはずの魔術回路を特殊な血液が代行し、マスター適正も持ち合わせていた。全身に行き渡る回路と自前の魔力炉血管造血細胞をひとつ持つていてる状態でカルデアの電気による魔力サポートを受けていたために、魔力燃費の悪いオレや、他の大英雄クラスと複数契約していくも問題は無かつたが……この世界ではそもそもいくまい」

カヴァーチャ & クンダーラ

「ああ、成る程。そういうことか……言われてみれば確かに。でも座がないのにカルナはこうして現界してるし、令呪はカルデアに居た時と同じだし、魔力バスも直接繋がってる、よねこれ」

本来ならサーヴァントは聖杯の魔力をもつて、令呪を持つ人間との契約で座にいる英靈の分靈の一側面を一クラスのサーヴァントという小さい枠に収めて召喚するもの。あの人理修復の旅が本来の聖杯戦争から遠く離れた状況下とはいえ、マシユの円卓の盾を媒介に英靈を喚んでいた。ならば、座も聖杯も英靈もない異世界にあたるこの世界に、本人から渡された鎧の一部という最高の触媒があつたとしても、カルナという英靈は本来喚べないはずなのだ。分靈とかいう以前に、魔術師（しかし名前は同じだが中身は全く別物）はいても、魔術世界の無いこの世界における大英雄カルナは実在しない神話上的人物であり、向こうの座にいるカルナとは別人物だろうから。

しかし今ここに彼はいる。おまけに、さつきの召喚で痛みが走つたことで薄々わかつてはいたが、右手にはあの天秤のような令呪が三画分くつきりと刻まれている。……毎日回復するのかなこれ。

「ああ。しかも今感じる限りでは聖杯や他のサーヴァントの気配は皆無だ。ゆえに、お前が還ってきたことで聖杯が紛れ込みこの街が特異点化し、聖杯を媒介にお前に喚ばれたというわけでもなさそうだ」

「良かつた……さすがのカルデアも、並行世界でもない異世界はシバで観測できないだろうし、観測できないならレイシフトも無理だし。でも聖杯がないなら尚更、何でカルナを喚べたのか分からぬなあ……？ ちなみに靈体化はできるの？」

「問題ない」

「じゃあカルデアみたいに一時的に受肉してるわけじゃないのか……そういういえば今第二再臨の姿で『日輪よ、カヴァー・チヤンダーラ具足となれ』ありの状態だけど、体感的にそんなに魔力が食われる感じはないなあ。確かその鎧つて纏つてるだけで魔力消費発生したよね？」

「ああ。さつきの魔力放出をした後でも体調が変化せず、オレから見ても今の魔力供給量は十分に感じる。だが、過去に聖杯戦争で呼び出された時の記録を考えても、いくらお前といえどバツクアップなしで出来るのかと云われると疑問が残る」

「じゃあ聖杯に近しいもの、魔力タンク的なものがあるつてこと……？ ……ピアスがそうつてことはないよね、流石に」

「魔力がこもつているとはいえ、所詮はお前のサーヴァントとしてのオレを引き当てるのに使う触媒としての機能しか持たないだろう。他にあの世界から持ち出したものはないのか」

「うーん……同じお返しでもらつたロビンの記念銀貨やビリーの銀の弾丸、ギルガメッシュ王からのウルククルーズで渡されたラピスラズリの腕飾り、ゲオル先生からのベイ

ヤードのたてがみ……他にも食べ物以外で持つてこれそうな貴い物はあらかた持つて来たけども、カルナのピアスほど常に持ち歩いてるわけじゃないからなあ」

「……クリスティアナ。お前がこちらに還つてくる時、聖杯を使ったのだつたな」

「うん」

「その聖杯は特異点もしくは微小特異点で得た聖杯の欠片か?」

「いや、7つの特異点の聖杯や欠片をつつてもいいってダ・ヴィンチちゃんや立香、スタッフたちは言ってくれたけど、私が還つた後に来る査問官たちに、強化で使つた以外の聖杯の数が合わなかつたら変ないちやもんつけられそうだだから、つて悩んでたらキヤスギルが「ならばこれを使え雑種」つて二人の時に、宝物庫から無造作に投げ渡されたやつを…………」

喋りながらふとひとつの可能性に思い当つて口をつぐんだ私に、カルナが怪訝そうな顔をした。

「どうした」

「いや……そういえばこっちに無事に還つてきた時に、見覚えのない金の指輪があつたな、つて。金の指輪つてロマニの件もあるし、セーフハウスで仕舞いつぱなしにしてたんだけど……今思うと腕飾りと似たような装飾があつたような」

「……それではないか?」

「ですよね!!」

となれば今すぐ確かめなければならない。今の今まで放置していたのが怖いほどの大物の可能性が出てきた以上、もう知りませんでしたとはいかない。

ちよつと泣きたい気持ちになりつつも、自宅に戻るべくまずはこの高層ビルを下りようと屋上のドアへ足を向ける。戦闘中だつたらビルの外壁に足場にする氷を刺しながら安全ベルトも何もないフリーフォールで降りるのだが、自分に回り回つてくる請求書を一枚増やすくらいなら多少の手間は惜しむまい。そんな私に手を伸ばし、ひよいとカルナが腕に座らせるようにして軽々と担いだ。

「んっ!?

「この方が早いだろう、セーフハウスとやらはどこにある」

「……向こうです」

「承知した」

懐かしい、と遠い目をしながらおとなしく担がれる。時間との勝負でもあつた特異点では、俊敏Aのカルナによくこうして担がれ運ばれていた。人類の限界を突破している私達牙狩りの戦闘力は英靈たちに負けず劣らずだが、無駄な体力消費を抑える目的で、だ。

オジマンディアス王を召喚した後の特異点では、場合によつては彼のライダーたるゆ

えんでもある宝具の『闇夜の太陽船』^{セケテツボウ}に乗船する栄誉を賜つたものだが……カルナに担がれた回数の方がはるかに多かつた。

鋭く地を蹴り、瞬間的な『魔力放出（炎）』で緩やかに高度を下げ方向転換しながら、不可視の人狼のようにH.L.の霧の空を飛ぶ。カルナの細腕だが筋力Bのステータス通り、落ちる心配など微塵もない安定した担がれ方に、大人しくカルナの首に腕を回して捕まりながら、普段見ることのできない景色に見惚れる。眼下で異形の群れが空を泳ぎ、道路には様々な車がひしめき、歩く人々は人間から異形までより取り見取りだ。

「話には聞いていたが、まさしく魑魅魍魎の街だな」

「特異点並みに理不尽と暴力と狂騒の渦巻くろくでもないところだけどねえ」

「でも、嫌いではないのだろう」

「……うん」

濃い霧が髪をしつとりと濡らしながらも、ゆっくりと空の旅を楽しむこと数分。私はステイーブンのセーフハウスがあるビルの前庭に降ろしてもらうと、カルナが持つている槍を見てハツとした。

「カルナ、靈体化してもらつていい？　うちのセーフハウス、侵入者対策で兵器の類いはセキュリティ引つかるようになつてるんだ」

「承知した。……随分なセキュリティを敷いているのだな」

スウツと空気に溶け込むようにカルナの姿が消えるが、パスが直接繋がつてゐるせいか、姿は見えなくともなんとなく気配で近くにいるのは感じ取れる。幽霊状態の彼を連れて、私はセーフハウスのある階に上がった。

「とはいへ、生体銃とかの身体の細胞をもとにした武器はあくまで人間扱いになるからすり抜け出来ちやうんだけどねえ……ここだよ」

随分前にセーフハウスで実際に起きた惨劇を思いだして遠い目をしながら、セーフハウスの厳重すぎるロックを外してドアを開ける。今日はヴエデットが家事をしに来る日ではないから、カルナの姿を見られることもないだろう。……ステイブンは夕方まで事務所に詰めているだろうし。

靈体化を解いた（念のためか槍と鎧を解いた状態で現れた）カルナと共に、指輪を保管している自室に入る。ほどんど寝るための部屋だし、ヴエデットが掃除に入ってくれるのもあつてライブラに関するものは一切ない、広さの割に物の少ない部屋だ。……オジマンディアス王から下賜されたスフィンクス・ウェヘムメスウト……身體が蒼い宇宙で出来た、仮名コスマ・スフィンクスの幼体、スフィンクス・アウラードが三四、ちよろちよろしている以外は至つて普通の部屋である。未だに大きくなる様子も見せず、仔犬サイズで室内飼いが可能なのは良いのだが、あのオジマンディアス王の背後でEXアタツクしていた成獣の大きさを考えると、とてもじやないがこの街の外では色ん

な意味で飼えない仔たちである。

「太陽王のスフィンクスか」

「うん。未だにオジマンディアス王が込めた魔力を感じるから、私が生きてる限りは死なないんじゃないかなあと思う」

「過保護だな」

君が言うか。

カルナの容赦ない批評に苦笑しながら、机の鍵付きの抽斗の奥から、厳重に魔術で封をした指輪の箱を取り出す。こちらに還ってきた時ぶりにその蓋を開けば、一切輝きを失つていな黄金の指輪が姿を現した。むしろ燐光を放つてすらみえるそれに、嫌な予感は確信に変わった。

「……これだな」

「やつぱり？」

「ああ。指輪になつてゐるが、強い魔力を感じる。お前をこの世界に送り込んだことで大半の魔力を使用してはいるようだが……それでもサーヴァントを現界させるのに十分すぎる量が残つてゐる。偶々特異点で拾つた聖杯の欠片でも、エリザベートやオルタ化したジャンヌダルクがひとつ的世界たる特異点を成せたほどだ。あの原初の王が所有していた聖杯ならば、相当の魔力を貯め込んでいただろうな」

それに、とひとつ言葉を切つたカルナが、指輪の側面に彫られた精緻な細工と、トップを飾る蒼い石……おそらくラピス・ラズリを、全ての欺瞞と眞実を見抜くスキル『貧者の見識：A』の原点になつた鋭すぎるほどの観察眼で見つめた。

「……視たところ、これに刻まれているのは恐らく、サーヴァントの靈基パターンだ」

「え、つ」

「お前が契約したサーヴァント全員はどうかは分かりかねるが、かなりの情報量を詰め込んでいるように見える。細工を施したのはダ・ヴィンチだろう。工学と彫刻に明るく、靈基パターンを指輪に彫り込んで、魔力炉^{聖杯}と簡易召喚陣の機能を同時に持たせるなぞ、幾ら他のキャスターでもそう出来ることはあるまい」

「魔術世界が無いから狙われる心配が無いのはいいけど、なんてもの発明しちゃつてるんですか我が王と万能の人…………！」

異世界でも契約した記録のあるサーヴァントの現界を可能にする指輪とか、カルナの宝具の一部で作つたピアスや、ゲオル先生の宝具である無敵^{ペイヤード}の馬のたてがみで作つたブレスレットにカルデア中の聖人サーヴァントが寄つてたかつて祝福と祈りを込めた本気の護符^{アミュレット}以上のヤバい代物である。魔術協会が知つたら血眼で戦争仕掛けてくるレベルの。いや嬉しいけど！

そういうえば人理修復後に出現した新宿・アガルタ・下総国・セイレム……とあとセラ

フィックスの5つの亞種特異点を巡る最中、ダ・ヴィンチちゃんとキヤスギル、あとその他の、立香が召喚したキヤスターも含め、カルデアのキヤスター陣が集まつて話をしてるところを見たようだ。……これを作ってくれたのかなあ。そう思うと、彼らの想いを嬉しく思うし、同時にしんみりとしてしまつた。遠く二度と会えない場所に還る私のために、神秘の究極に迫る代物を作り出してまで、訪れるかもしれない窮地に備えてくれたのだろうか。

思わず蹲つて膝を抱え込んで叫んだ私に、何だ何だとアウラードたちが寄つてくる。一匹はカルナの傍をウロチョロしているのが目の保養だ。アウラードたちの頭を撫でた後、立ち上がつた私は指輪を光に翳した。

「……着けるべきだよねえ、これ」

「それを想定して作つているだろうな」

覚悟はしてたけど退路が断たれた感じがしますカルナさん……。

おずおずと指輪を右手人差し指に嵌めると、不思議と吸い付くようにぴつたり嵌つた。瞬間、血管走行と同じ軌道を描くように蒼い光が身体の上を走る——血管と同化している『魔術回路』の概念が起動したのだ。

魔術回路と接続された指輪に魔力が回される。すると、指輪から見覚えのあるホログラムが浮かんだ——あの万能の人の姿を映して。

『やあクリス、元気かい？ これを覗ているつことは、無事にキヤスターのギルガメッシュユ王と企てた聖杯への細工は成功し——不幸なことに、君の身に大小なりとも危機が迫つたつことだろう。サーヴァントの誰かが傍にいるかも知れないし、あるいは君自身だけでこの指輪の仕掛けに辿り着いたのかも知れない——今の私にはそれを知る術はないんだけどね』

「ダ・ヴィンチちゃん……」

ホログラム姿の彼女はその不变の美貌に微かな憂いを浮かべたものの、すぐに完璧な微笑みを口元に湛えた。

『まあともあれ、この指輪は立香君と共に最後のマスターとして尽力してくれた君へ、再び世界を救う、終わりの見えない戦いに挑む君へ、我々カルデアからのせめてもの餞別だと思つてくれ。

理論上でなら、君がこちらで召喚したサーヴァントであれば、その指輪に刻まれた英靈を君との旅の記憶を保持したまま、異世界でも召喚できるはずだ。この指輪には君が最後にサーヴァントを強化した時の靈基情報が刻まれている。一応君のサーヴァントたち全員に説明して、異世界で召喚される可能性に承諾してくれた英靈だけ刻んである。まあ全員だけどね？ BBやパツシヨンリップの協力が無かつたら、いくらこの万能のダ・ヴィンチちゃんでもその指輪に数十人単位の靈基情報は圧縮出来なかつただろ

うから、君からも彼女たちにはお礼を言つてくれ。その方が喜ぶだろうから。

勿論、聖杯を提供してくれたギルガメッシュ王と指輪の細工、あと色々加護やら魔術やらマスタースキル（偽）とかを内蔵するのに手伝つてくれたキヤスター陣および技術者系サーヴァントにもね』

「……ちょっと待つてなんかすごい聞き捨てならない追加機能を聞いた気がしたんだけど

思わずツッコミを入れるが、通信機能ではなく録画再生機能のホログラムは一呼吸だけにおいて喋り続ける。製作者一覧作つたら物凄い顔ぶれになりそうな気がひしひしとする。古今東西の知識人たちが集まつて作つた指輪とか絶対チートじゃないですかやだ〜……。マスタースキル（偽）つてもしや Gandalf とか使えるんです？

『英靈の力は絶大だ、それは人間でありながら英靈の域に片足を突つ込んでいる君は重々承知の上だろう。その上でカルデアは君にその指輪を贈ろう。きっと君は世界の為に英靈たちの力を借りるかもしれないけれど、そんな風に縛られなくていいんだ。戦う為でも、正しいことの為でもない。私は、立香くんやマシユ、カルデアのスタッフは、最後のマスターでも秘密結社の秘書でもない、ただの人である君が幸せになるために、その指輪を使つて欲しいんだ。そのラピスラズリが君の人生の邪氣を払い、より豊かな人生へ導いてくれることを祈つてているよ』

「…………」

『わが友、クリスティアナ。君の人生の旅路が、より良く、幸せで長く続くものでありますように。君がその人生に幕引く最後の瞬間に、良い人生だつたと笑えるような未来が待つていてることを、我々は願つていて――』

ぶつん、とダ・ヴィンチちゃんの姿が消え、代わりに月に月桂樹の冠を模したフイニス・カルデアの紋章が映し出される。涙で滲んだ視界でそれを捉えて、とうとう涙をこらえきれなくなつた私はぼたぼたと涙を流した。あたたかな手が背中をそつと撫でる。寄り添うアウラードと一騎の相棒に囲まれ、金の指輪を握りしめて、私はただただ声もなく泣きはらした。

望む未来に星は落ちない

体内の水が干上がるような感覚さえ覚えるほど、涙をこんなに流すのは久しぶりに思えた。

「落ち着いたか」

「……ん」

年甲斐もなくボロ泣きしてしまい、少しの気恥ずかしさもあるが、いつまでも俯いては居られない。ひとつ気分を入れ替えるために大きく深呼吸した私が顔を上げると、蒼く澄み切った双眸と至近距離で視線がかち合つた。

2年の歳月を共にしても、たまにこの神造の美は正視に耐えがたい。いい意味で。顔が良すぎるのだ、彼は。若干心臓が跳ねあがつたのを感じて即座に血流操作し、顔に朱が上るのは阻止した。

が、この朴念仁の相棒はするりと手を伸ばして、親指で瞼の下、涙袋のあたりを親指で撫ぜた。無表情のままだが、どこか愁いを帯びた眼差しが、労わるような手つきが力

ルナの心情を切実に訴えてくる。

「……腫れてしまつたな」

「年甲斐もなく泣いたからね……」

「我慢の必要もあるまい、顔が台無しになるほど感情を爆発させるのも、時として必要だろう」

「ええと、恐らく時には大泣きして感情を発散させるのは人として当たり前で、そういう年甲斐もないと恥じる必要はない、と励ましてくれたのだろう。相変わらず肝心な一言が足りない。」

「台無し……そんなに酷いのか……ああ、化粧が落ちたのかな」

ぐい、とわずかに熱を持つ瞼を擦れば、滲んだアイシャドーやマスカラが手に付いた。ああ、これならメイクが溶けてパンダになつていても無理はない。カルナが酷いと言うのも無理はないだろう。熱を持ったせいか痒くなり始めた瞼を再度擦ろうとしたら、手首を掴まれ止められた。

「擦るな、傷めるぞ」

「痒いんだよ……もう一旦化粧落とそうかな」

「その方がいいだろうな」

カルナに手を離してもらい、バスルームに移動する。確かに目元中心にぼろぼろに剥

げたメイクにうわあと顔をしかめ、慣れた手つきで化粧を落とす。特異点の旅先ではおちおち化粧などできるはずもなく、サーヴァントの数も私達マスター側にも余裕が無かつたオルレンやローマを旅した頃はすっぴんなどいくらでも彼に見せてきたため今更だが、興味深げに背後から鏡越しに見られているのを感じると、どうも居心地が悪い。

「……見てて楽しいものじやないとと思うんだけれど」

「そうか？ オレとしては興味深いが」

「ええ……？」

顔を洗い終えてタオルで拭きながら、鏡越しに胡乱な目を向けると、壁に寄りかかっていたカルナはふつとやわらかな笑みをこぼした。

「しばらく見ないうちにより綺麗になつたと、感慨深く思つていただけだ」

「えつ」

思わず口説き文句のようなセリフにびしりと固まる。

彼とは2年間ずっと旅を共にしてきて、紳もマックスの10だ。マハーバーラタでもその義理高さが人気を呼ぶ彼だが、伝承にたがわず最初からマスターとして素人もいいところの私に正当な忠言はあつても、勝手に行動することはなかつた。

翻訳できるまでになつたのだが……彼も「自分で中で完結してしまつて肝心な伝えるべき一言を言わない」「一言多いせいで無自覚に相手を煽る」という矛盾にも思えるコミュニケーションにおいて致命的な口下手を直そうと努力する過程で、何故か口説き文句に近い甘い言葉が増えた。なんですか。

そもそも嘘や虚飾と無縁の英雄である。言動は素直での的を射すぎているからこそ、忠言が刺さつて相手を逆上させる。ゆえに、必要ないだろうと胸に秘めてしまう部分の言葉を言うようになれば、施しの英雄、聖人とも後生に謳われる徳と慈悲深さが顔を出す。だから心臓に悪い。……嘘に塗れた人間の言葉に騙され続け、曲者揃いの政財界の人間と渡り合う過程で、自分のそれなりに恵まれた、利用価値のある見目を称えるお世辞など聞き飽きた私には、嘘などない、真っ直ぐな好意はより胸に刺さるのである。二人きりでも滅多に見せない穏やかな微笑みつきで言われようものなら、赤面しないではないほどに。

「特異点を巡る旅ではそれどころではなかつたからな……魔力不足で憔悴しきつたお前も見てきた身としては、元の世界に戻つて不足なく、お前らしく生活している様子を見れるというのは喜ばしい。……どうした、何か気に障る事でも言つただろうか」「イエ、離れてる間に免疫落ちたなと思つてただけだから……気にしないで……」

タオルに赤くなつた顔半分を埋めるように隠したまま、ふがふがと返事を返す。私の

回りくどい返事にきよとんと目を丸くしていたカルナはふと視線を動かした後、途端に笑みを深くして、楽しげに喉を鳴らして笑うのだった。俯いて顔を洗っていたせいで、髪の間から覗いた耳まで真つ赤に染まっていたのを見止めたのだと私が気付くまで、あと数秒の事である。

その後、恥ずかしさが極まつた私はバスルームからカルナを追いやりさつさと化粧を済ませ、紐なしバンジーで崩れた髪も整えたところで、靈体化したカルナを伴いライブラの事務所に向かつた。

今日は珍しく非番の日だつたのだが、英靈召喚が出来るようになつたことはクラウスとステイーブンにはせめて説明しなければならない。なにしろ、失踪中に一番胃と心を痛めていたのがこの二人である。英靈の存在は大きい。力もそうだが……なにより個性が強い。古代王とか為政者系とか頼光さんとかキアラとか。今後は自宅に英靈が闊歩することだって考えられる。同居しているステイーブンの承諾は不可欠だし、もし支障が出るなら、複数所持しているセーフハウスに移動することも考えなければならないだろう。……ウエデッドという家政婦を雇つているとはいえ、ステイーブンの健康と精神状態と私の心の安寧のために、出来る限り別居はしたくないのだが。

リトルチャイナタウンの細い路地を抜け、ところどころ塗装の禿げた色褪せた中華扉

を開け、エレベーターに乗る。ライブラに繋がる幾つかの扉のうちのひとつである振り籠は、外観の建物とはそぐわない動きをしながら数分横移動と縦移動を繰り返し、ようやく停止した。

「クラウス、ステイーブン、居る？」

ドアを開けてひよっこりとライブラのオフィスを覗き込めば、デスクでコーヒーブレイクをしていたらしい義兄と視線が合った。驚いたのだろう、ぱち、と瞬きをして私の目より少し薄い蘇芳色の双眸を丸めた彼は、少し高い声で尋ねてきた。

「あれ、クリス。今日は非番だつて言つただろう、どうした」

「ちょっと相談というか報告したいことがあつて……」

「……緊急事態かね？」

ステイーブンとはまた離れた個人のデスクに座っていたクラウスが顔を上げる。パソコンに前のめりで齧り付いていたところを見るに、オンラインで趣味のプロスフェアに興じていたのだろう。それでもこちらを優先しようと、銀縁の眼鏡の奥できらめきを放つ明るいグリーンの目で射抜いてくるクラウスに、私は後ろ頭を搔いた。

「緊急性はないんだけど、今後に関わる重要なことなんだ。聞いてもらえる？」

「無論だ。ギルベルト、クリスにもお茶を」

「畏まりました、クリスさん、今日は紅茶とコーヒー、どちらになさいますか？」

「ありがとうございます、紅茶をお願いします」

すぐに重々しく頷いたクラウスと、デスクの上のラップトップを閉じてマグを手にソファーへ向かってくるステイーブンに向かいのソファに腰を下ろす。丁度ふたりとギルベルトさん以外は出払っているらしく、事務所は心地よい静けさが満ちている。離れた場所でギルベルトさんが紅茶を淹れてくれるBGMに、居住まいを正して話を促してくれる二人に、私はためらいがちに口を遙々開いた。

「……私が墮落王の魔法陣事故に巻き込まれて失踪している間、私が異界ビヨンドとも異なる異世界で、人類史を燃やし未来を絶つた存在と戦っていた、って話したことは覚えている？」

「ああ、過去にレイシフト……だつたかな、タイムスリップ技術を使つて過去のありえないはずの歪みを正すことが出来る研究機関に落とされた矢先に、そのタイムスリップが可能な素質を持つた人間の大多数が内部犯の爆破テロで瀕死の傷を負い、何故か異世界から来たはずのお前がその素質を持っているという状態で、もう一人生き残つた適性者と共に、なし崩しに最後のマスターとして英靈と呼ばれる使い魔と一緒にタイムスリップを重ねた、そうだったね」

「そして一年の歳月を懸けて人理焼却は阻止された。世界は救われた……。そして止

まつた人類の時間が動き出したもう一年の間にも、元凶だつた魔神柱の生き残りが生んだ過去の歪み、特異点の修復にあたり……完全に歴史が修復された以上、もうレイシフト技術はいらぬいだろうと判断された2年間の最後に、クリス、君はこちらに還つてくれることができた」

説明したのは随分前だというのに、大まかな流れを覚えているあたり流石としか言いようがない。

二人の言葉に頷いた私は、遠慮がちに、歯切れ悪く言葉を紡いだ。

「協力してくれた英靈たちは、こつちに還つてくる前に、彼らが還るべき英靈の座に還つてもらつた。……そう思つていたんだけど」

「けど？」

「英靈たちが私に内緒で、もしこちらの世界で身の危険が迫つた時、英靈を召喚できるよう、還る手段にこつそり細工をされてたらしくて。英靈たちをこつちでも呼び出せるようになりました……」

「……なんだつて？」

「それは……慕われていたのだな、流石と言ふべきか」

ギルベルトさんが苦笑しながらも私の前に紅茶を置いてくれた。並大抵のことでは動じない二人でさえ言葉を失うレベルである。一応、二人に乞われて人理修復の旅はか

なり端折つてはいるが全て語つていて。口伝で想像するのは難しいだろうが、英靈の力がどれだけ強大かは何となく察しているだろうからこそ、の反応だつた。

「ちなみに、テロ直後に強制的にレイシフトさせられた冬木で最初に召喚して、ずっと私と戦つてくれた相棒のサーヴァントが今、見えないだろうけど護衛してくれてる」

「……すごいな、全然気配を感じないぞ」

「うむ」

きよろ、と辺りを油断なく見渡す武人の二人も靈体化したカルナの気配は捉えきれないと、ソファーの背を挟んで私の斜め後ろに立つているカルナとは全く違う見当違ひな方向を見ている。

そんな二人を見てか、ずっと黙つて控えていたカルナが不意に口を開いた。

『……マスター、二人さえ良ければ少し話をしてみたいのだが』

「そう? クラウス、ステイブン。二人さえ良ければ話をしたいって言つてるんだけど、どうかな」

「こちらの方こそ、クリスティアナを支えてくれた英靈にはお礼を申し上げたいところだ」

「僕も構わないよ。お前が自慢げに話してくれた大英雄を拝んでみたいね」

一応異世界の存在であり、一騎で都市や国を滅ぼすのも魔力さえ許せば簡単にやつて

のける、いわば戦術級の兵力である。吸血鬼という不死を相手にしている以上、そう簡単に引け腰になることはないと分かっていても、遠慮はするものだ。

そんな私の憂慮を跳ね飛ばすように、二人はあつさり快諾してくれた。その様子に少し笑つたような気配がしたと思えば、ソファーの背を軽々飛び越え私の隣に降り立ちらがら、カルナが靈体化を解いた。淡い粒子を纏つていきなり目の前に現れた黄金の英雄に、二人が揃つて目を剥く。

「——お初にお目にかかる。サーヴァント、ランサー。真名をカルナと云う」

「これがマハーバーラタの大英雄か……！　神話通り聞きしに勝る威容だな……！」

即座に名前を聞いて原典を言い当てるあたり、ステイブンの知識量は相変わらず裾野が広い。そんな明後日の方向の感動をよそに、勢いよく立ち上がつたのはクラウスだ。躊躇いなく一礼する動作には相手への敬意と育ちの良さが漂つている。

「こちらこそ、お会いできて光榮です、施しの英雄。私はクラウス・V・ラインヘルツと申します。この秘密結社ライブラのリーダーをしております。わが友、クリスティアナを支えて頂き、誠に感謝申し上げる」

「礼など不要。サーヴァントとして、英靈として当然のこととしたまでの事」

生真面目に礼を述べるクラウスに、カルナは淡々と返した。その冷酷なまでに変わらない無表情と温度のない突つぱねたような言葉に不安に思つたのだろう、クラウスはさ

らに感謝を重ねた。

「しかし、貴方がた英靈の支えあつてこそ、クリスは無事に帰つてくることが出来た。このH.L.でも類を見ない人類の歴史そのものという困難が立ち塞がり、奇跡のような旅路を重ねてきたと聞いております。上司として、友として、感謝申し上げるのは当然です」

だが、とかカルナが言い返して、エンドレス一方通行に見えるお礼合戦が始まりそうな気配を察知した私は、ひらりと手を振った。

「クラウス、解りにくいけどちゃんとカルナはクラウスの感謝を受け取つてるよ、大丈夫」

そんな私の言葉に、

「む、そうなのかな」と眼鏡を光らせ口をつぐむクラウスと、
「また言葉が足りなかつたか、クリス」と首を傾げるカルナ。

「足りないのもあるけど、君の言動に慣れてない一人にはそつけなく突っぱねてるようになしか聞こえないと思うよ」

私みたいに君の発言を噛み砕いて翻訳した副音声が聞こえてくるぐらい仲が深まつてゐるわけでもあるまいし、と身体はクラウスへ向けて頷きを返しながら、心中でひとりごちる。初対面の紹介では意思疎通に大きな齟齬があるだろう。表情筋を動かさないまま冷ややかに言うものだから、相手はそのままの印象を受け取るに決まっている。

マスターに召喚されたサーヴァント、英靈として、マスターの身を守護し戦うのは彼にとつて当然のことであり、マスターの為に二度目の生で槍を振るうことを召喚された報酬と捉えるような聖人の彼なりの謙遜だ。特別なことではないからこそ、そう仰々しく礼を述べずとも良い、という気遣いが通じないのは、見ている身としては歯がゆいものだ。

「私を護つて戦うのが君にとつて当たり前で、特別なことではないからそう畏まらなくてもいい、そういう意味だろう?」

「ああ。……流石、お前は丁寧にオレの足らない言葉を汲み取ってくれるな」
解釈はどうも間違つていなかつたらしい。ふつと笑みをこぼしたカルナに、クラウスがふむと頬に手を当てた。

「なるほど、そういう意味でしたか。思慮が至らず申し訳ない、我が不徳の致す所」

「いや、今のはクリスの解説がないと分からぬだろう……僕はステイブン・A・スター・フェイズ。クリスの兄弟子だ、どうぞよろしく」

律儀に謝るクラウスに呆れ顔で肩を竦めたステイブンは、カルナへ手を差し出した。差し出された手とステイブンの顔を見比べたカルナが、一拍置いてその手を握り返す。

「お前がマスターの義兄か。^{あに} そうか……常々お前たちの話はマスターより聞いている。

一度会つてみたいと思つていた。世界で最も尊敬する、何より守り支えたい二人だとな

「そうなのか」

強張つた表情をほどいて、きよとんと目を丸くするステイーブンと、とても嬉しそうに凶悪なまでの笑みを浮かべるクラウスに私は顔をそらした。いやその通りなんだけど面と向かつてそんなこと言わなくとも。座りが悪くなるじやないか。私の挙動を見たカルナがそう恥じることでもあるまい、と言うけれど、生憎私は君ほどの素直さは持ち合わせてないんです！

「いいや、お前は言うべきことはたとえ耳に痛い忠言であつても、相手の為を思つてきちんと相手に伝えられる人間だろう。でなければ、オレのような口下手を補うなど出来はしまい」

「ぐつ」

まぶしい。

照れ隠しに卑屈なことを言つたら倍返しで褒め殺しに遭つて、不利属性から不意打ちでクリティカルヒット食らつた気持ちになつた。私のカルナがぐう聖すぎる。……やめて、私のＨＰはもうゼロよ……とサブカル大国日本から来た立香がよく口にしていた言葉を借りながら手で顔を覆う。

「あー、うん」

ぐだぐだな空気を察知してか、ごほん、とわざとらしく咳払いをしたステイーブンは、打つて変わつて鋭い眼光をカルナへ差し向けた。剣呑に閃く蘇芳。空気が一瞬で張りつめたものへ変わり、気温も心なしか数度下がつたような感覚を覚える。長い足を大仰に組み替えて、仮面の微笑みを着けた彼は私の兄ではなく、無法者たちを恐れ震え上がるせる氷の副官として言葉を紡ぐ。

「さて、施しの英雄。異世界の、とはいえ恐らくこちらに伝わっている英雄像とそう変わらないだろう。クリスティアナと最も長い時間を過ごした君を英靈たちの代表として問おう。これから君たちはどう行動するつもりだ？」

「どう、とは。抽象的過ぎて判断しかねるが」

「ああ、すまないね。基本的な行動指針を聞きたいんだ。クリスを気に入つてこつちまで来たぐらいだ、共にいることは決定事項としても、その大いなる兵力を解放する気はあるのか。それは何を指針として判断するのか。世界の均衡を保つライブラとしては、それをハツキリさせておきたい」

ステイーブンの問いは至つて当然で、今一番の問題でもあつた。皆、私が望めば世界を救う手助けをしてくれるだろう。私の指示にも従つてくれるだろう。けれど、私の我儘やエゴで、心と行動が伴わないまま、仕方ないと妥協してくれている時もあるのだ。

だからこそ、私も彼らが何を思つてどう動くことを望んでいるのかを聞きたかった。何より、世界の審判者として問う兄に、私が口を挟む権限もない。

「クリスティアナによつて使役される使い魔であつても、魔力を使いすぎればクリスの寿命は縮み、最悪死に至る。それでなくとも、君たち英靈の力は使い方を誤れば……下手をすれば使い方が間違つていなくとも加減をミスすれば、世界を崩壊させかねないほど莫大なものなのだろう？　君と宿敵のアルジユナが本気でぶつかつた場合、特異点の北米大陸があやうく滅びかねなかつたかもしれないと聞いたしね」

イ・ブルーリパス・ウナムでのことを引き合いに出す義兄は真意を読ませない微笑みを湛える。

圧倒的スケールを誇る金字塔、三大叙事詩に語られる、今なお絶大な人気と知名度を誇る大英雄。インド三大神にして互いに不仲な雷神インドラと太陽神スリヤの息子同士。英雄王より古い、まだ神々の影響が色濃く及ぶ神代に生きて霸を競い合つた武芸の達人にして神の子の二人が、神代が終わり神々の恩恵が薄れた時代の、しかも神々の影響が最も遠かつた未開地である北米大陸でぶつかりあつたのだ。

神代の真エーテルが満ちる頑強で回復力に満ちた環境であればまだしも、神秘の守りが極めて薄かつた大地に神代の破壊力を持ち込めば、生態系をぶち壊しにする破壊力を周囲に撒き散らすのは必至。カルナの奥義『梵天よ、我を呪え』は核兵器レベルの破

壊力であり、ただでさえ『魔力放出（炎）』だけで宝具級の破壊力なのだ。ステイーブンが憂慮するのも当然だ。

神々の茶々が入りすぎた生前と違つて、なんの介入もないアルジュナとの一騎打ちといふ宿願叶つたカルナが若干ハイになつて魔力配分を珍しく考慮せずにごつそり魔力持つていきながら、楽しそうに生き生きと戦つたあの戦いはまさに神話の再現といつてよかつた。エアーズロツクなみの大岩を切斷してその切断面から爆発とかインド怖い。

その時のうかれようを思い出したのか、口調は丁寧なのに圧を感じるステイーブンの言葉に、僅かにカルナは口端を曲げた。

「……耳に痛い話だな」

「強すぎる力は使い道を考えなければ、周囲に被害しか生まない暴威以外の何物でもない。それをわきまえていてるだけだよ、我々は」

「道理だな。……ふむ、オレをマスターが召喚した英靈全員の代表として、と言つていたが。英靈と一括りにしても我が宿阿のような英雄らしい英靈もいれば、反英雄と呼ばれる人間に反旗を翻したものまでと様々なのでな、確証はしかねるが……恐らく、貴殿が心配しているようなことは起ころまい。

我々英靈は本来、契約が終われば現世には留まらず、英靈の座にいる本靈にマスターとの記録を持つて還るのみ。

だが、この世界には英靈の座はなく、本靈より完全に決別した我々は最早、その指輪以外に還る場所を持たない。その指輪が破壊されるようなことがあれば、二度とマスターの元に馳せ参じる奇跡は起こらないだろう。

……だが、オレたちも指輪を破壊されれば、本靈に還つてマスターとの記憶を本靈の記録に残すこともできないまま、主人を失つた使い魔として行き場なく彷徨う、あるいは消えるのだとしても構わないと、そういう意味で、覚悟をもつて『着いていく』と答えた。それほどまでに、我々はクリスティアナ・I・スターフエイズという人間を愛した。人理修復を成し遂げ続していく世界を見届け、今を生きる人間の望みを叶えるべくサーヴァントとして召喚されるよりも、たとえ世界の異物として存在し、他の人間や世界そのものに存在を否定されようとも、クリスティアナという一人の人間の生命の終わりまで、彼女が我々を見限らない限りは、添い遂げ見届けたいと願つたのだ。……英靈一騎だけでもこのような考えに至るのは異なこと、それが召喚された全員というのだから、貴殿の妹は実に英靈たらしだぞ」

珍しく饒舌に語ったカルナの説明を受け、ステイブンは完全に頭を抱えていた。対する隣のクラウスは比較的凶惡ではない微笑ましいという類の笑顔を浮かべているのだから対照的な二人である。ちなみに私もできるなら頭を抱えるかここから逃げ出したい。しつとした顔で褒め殺しにされて嬉しいやら恥ずかしいやら、うつすら察して

いた衝撃的な彼らの覚悟を改めて宣言されて身が引き締まるやら忙しい。

額に手を当てたまま、視線だけを持ち上げてカルナを見たステイーブンは、掠れた声で問うた。

「……つまり、完全に君たちはクリスの味方であり、クリスを絶対に裏切れない、裏切るはずがないと、そういうことだね？　この子の意に沿わないことはしないと」

「英靈によつては、マスターの予想も超えた突飛なことを考える者もいるだろうが……行動、手段の善悪を問わず、その動機は最終的に『マスターのため』に至るだろう。少なくとも、マスターの不利益になることはしない。周囲に少々迷惑はかかるかもしれないが。戦闘においても同様だ、マスターの命に関わる案件でもなければ、指示に反する行いはするまい。それだけの絆を結んできた、マスターの指示の的確さは皆知つている」「オーケー、分かった。それだけ分かれば十分だ。……本当に、仲が良いんだね」

降参だとハンズアップするステイーブンに、無論だとカルナは頷く。

「オレには勿体無いほどのマスターだ。幾度か聖杯戦争に参加し、マスター運には恵まれている方だと思つてゐるが、彼女ほどオレを理解してくれる者は珍しい」

「カルナも口下手を克服しようとしてくれてるからだよ」

「そうか」

私達がのほほんと微笑み合つてゐると、ステイーブンが疲れたようにがっくりと大げ

さな動きで肩を落とした。

「……まつたく、結婚してもいらないのに娘が彼氏を連れてきた気分を味わうことになるなんてね」

「しかしステイーブン、クリスに心からの理解者が増えることは喜ばしいことだ」「いやまあそうなんだけどね？ 兄貴としては複雑なんだよなあ」

軽口を叩くステイーブンからもうカルナを警戒するプレッシャーも緊張も感じられない。仲間に見せる穏やかさだけが残っていた。それを見て、とりあえずは認められたのだとほつと胸をなでおろした。

朽ちゆく献身の宛名

「マスター！ 何をしておるか？ 安静にせよと/oruに！ ちょっと目を離した隙に部屋を抜け出しあつて、悪い子じやなそなたは！」

「あつはい」

前略、クラウス、ステイーブン。お元気でしようか。

今私は、部屋から出がしらに仁王立ちする幼女に声高に怒られています。

「まつたく、ちいと体調が良くなつたらすぐに動こうとするのはそなたの悪いところじや。ええと、わーかーほりつく？ とかいうやつじやな」

「バ、バめんなさい」

マイルームを出て数歩で幼女……もとい茶々に見つかつた私は、そのまま回れ右してベッドの中に強制的に詰め込まれた。ぶりぶり怒りながら定期的にピックに刺したうさぎりんごを差し出してくる甲斐甲斐しさに、私はたじたじになりながら口を開けてそ

れを受け入れる。

少し前、いつぞやのぐだぐだ時空と見せかけて実は魔神柱の仕業だつた明治維新の特異点。そこでの出会いを縁にして、カルデアに私が召喚したのが茶々だ。まあ相変わらず日輪と言われた秀吉公すら頭を抱えるお転婆っぷり、微笑ましくらいの天真爛漫な彼女だったのだが……特異点修復を終えて、色々ズタボロの姿で帰るなり、愛らしい笑顔が引つ込んだ。真顔でドクター・サンソン、ナイチンゲールの前に突き出された時は色々な意味で死を覚悟した。

そして治療が終わるなり、こんな調子で茶々の看病のもと、ずっとマイルームで静養を余儀なくされている。

そういうえば、明治維新の時も沖田さんが吐血した後、屯所でずっと献身的に看病してたわ、この子。日本の歴史には疎いけれど、ノツブ……信長公の姪にして、豊臣を滅ぼした傾国の悪女と民衆に罵られ、両親や子どもを戦や病気で失つた悲劇のひと。だからなのか、病気や怪我で倒れ伏すのをひどく怖がつてゐるよう思える。さつきも、少しお湯を貰いにキッチンに行こうとしただけあの形相。だいぶ良くなつたとはいえ、バビロニアで魔力不足に陥つた指先がまた再発の兆しを見せるような状態だつたのだから、心配しすぎるのも無理もないのだが……。

しかし、茶々の言う通り、じつと同じ部屋に籠つているのは落ち着かない。せめて何

か、端末でもできるドクター やスタッフの手伝いがあればいいのに、茶々が断固として許さない。本を読むのがギリギリセーフって。しかもきつちり時間を測つて。

だから茶々や、時折様子を見に来るカルナや玉藻、古代王たち、立香にマシユ、食事をわざわざ持つてきてくれるエミヤやロビン、ブーディカといった面々と喋るくらいしか楽しみが無い。皆、いい機会だからゆつくり休めと笑い交じりに言つてくれるが、落ち着かないのはしようがないだろう。かれこれ生きている時間の殆どを、戦いや仕事に忙殺されてきた身だ。ぽんと空いた時間を貰つても、逆に何をしていいのかわからなくなる。なにもしない、大人しくしていることに罪悪感を感じるほどに。

さくさくとりんごを咀嚼しながら考え方をしていれば、口の中のものを全部呑み込んだタイミングでぐに、と小さい手のひらに頬を挟まれた。

「まあ、たそなた、胃に悪そうなことをつらつら考えておるな？ 駄目と言つておろうに。頭が回りすぎるのも考え方じやな」

「はは、よく分かつたね。ごめん」

「むむ、そなたの謝罪はいまいち信用できん。というか、謝つたら済むと思つて直す気ないじやろ、茶々にはまるつとお見通しじや！」

「（う、鋭い）」

思わずひく、と表情筋を引き攣らせれば、目ざとく気づいた茶々は鼻を鳴らした。頬

を手のひらでサンドされたまま、ぐにぐにとマッサージするかのようにこねくり回される。ベッドに膝のりになつた茶々は、その幼さに見合わない憂いに満ちた溜息、表情をみせた。

「そなたは頑張りすぎなのじや、マスターの仕事もして、カルデアに戻つたらスタッフの手伝いをして、種火周回も素材集めも欠かさぬ。サーヴァントの小競り合いや我が僕にも付きあつて、いつたいどこにそなたの安らぎ、安寧がある？」

「茶々……」

「妾にまつろうものはみな、滅びの定めからは逃れられぬ。そなたは、妾を焼き続ける炎を恐れぬと言つた。妾は、そなたの滅びまで寄り添うてやろうとは言つた。それは変わらぬ。けれど、今まま休むことを忘れて走り続ければ、妾の炎に焼き尽くされる以前に、そなたは自滅してしまう。捨のように病に倒れ、死んでしまうやもしれぬ。今回の特異点とて、うつかり死にかけたであろう。そなたのその他者への献身は、いつそそなたを蝕む毒じや。毒の効きにくいそなたをじわじわ絞め殺す、死の縄に他ならぬ」

私の顔を茶々が覗き込む。サラサラの長い髪が視界を覆い鎖す。

癪瘍を起こして表情を歪めるのではなく、今の彼女の瞳に浮かぶのは、明治維新でも見せた彼女の破滅的な諦観だった。置いて逝かれることへの、絶望に満ちた恐怖だつた。

「休むことを覚えよ、クリスティアナ。休息は病人に必要なもの。罪ではない。働き者に与えられる正当な報酬じや。何もせぬことが恐ろしいなら、妾がついておる。看病は得意なのでな、任せよ。……何もしなければ己に価値など無いなど、どうか思うてくれるな、妾の愛しい子」

日輪の子を惑わした傾国の美女ではなく、子どもを育て、傍にずっと寄り添つた、母の哀しくあたたかい、微笑みがあつた。

……私は父は、母はない。生まれてすぐに捨てられた。教会のシスターたちは良い人たちだつたが忙しく、風邪をひいても傍にいてくれるひとはいなくて、あまりに寂しくて。でも、わがままなんて言えなくて。親にも捨てられた自分は、誰かの役に立たなければいらぬ子なのだと、そんな恐怖心は根元から染みついていた。

その時の記憶が、感情があまりに鮮明すぎて、眠るわけでも無いのに何もせず一人でベッドに横たわるのが嫌なのを、見透かされたようだつた。なるほど、まるつとお見通し、だつたわけだ。

「そなたの国の歌は知らぬので悪いが、子守唄を歌つてやろう。捨も拾も、この歌が好きでな、すぐ眠れた……悪夢などはあの夢魔に払わせようぞ、だから、今は眠つておれ」
ちいさな手のひらが瞼を覆う。薄闇が広がるけれど、不思議と今は恐ろしくは無かつた。

ああ。秀吉公が茶々だけに優しかつたのが、少しわかる気がする——。

「マースターあ！ 何ぞ面白きことしてして～！ 茶々退屈～～！」

「はいはい、仰せの通りに」

茶々姫。

周囲を駆けまわる、日輪を模した兜に絢爛豪華な着物のドレスを纏つた少女。日輪の子すら頭を抱えた我が伝姫。憎めないお茶目な姫君。

されどそれは私が元気な時の姿で、私が弱つたのならずつとそばに着いていてくれる、母のような人。

数居るサーヴァントと、それぞれの関係があるけれど。手を引き時には引かれて、支え合うこの関係も、奇妙だけれど心地よいのだ。

秘書嬢チーム紹介

独断と偏見に満ちた秘書嬢チームを紹介するぜ!!

※天秤の淑女では第二部突入前に離脱しているので第二部で縁を結ぶサーヴァントは未加入

各クラス先頭（エクストラ除く）のサーヴァントはクラスごとのリーダーというか特に重用されている鯖。

剣：ガヴェイン、ランスロット、両儀式、ラーマ、アーサー・ペンドラゴン、沖田総司、カエサル・ガイウス・ユリウス、ジークフリート、ネロ・クラウディウス「ブライド」

槍：カルナ、クー・フーリン、フイン・マックール、ヘクトール、李書文、ウラド三世〔EXTRA〕、エルキドウ、メドウーサ〔ランサー〕、パールヴァティ、（スカサハ）弓・ロビンフッド、エウリュアレ、オリオン、ビリー・ザ・キッド、新宿のアーチャー、イシュタル、エミヤ、子ギル、アーラシュ

騎：オジマンディアス、ケツアルコアトル、マリー・アントワネット、フラン시스・ドレイク、モードレッド「ライダー」、ブーディカ、ゲオルギウス
術：玉藻の前、ギルガメッシュ「キャスター」、メディア、ジエロニモ、エレナ・ブラヴァツキー、トーマス・エジソン、ナーサリー・ライム、パラケルスス、オケアノスのキヤスター、マーリン

殺：呪腕のハサン、百貌のハサン、ファントム・ジ・オペラ、ジャック・ザ・リッパー、魔小太郎、エミヤ「アサシン」
狂：源頼光、茶々、ベオウルフ、フランケンシュタイン、茨木童子、クー・フーリン「オルタ」、ナイチンゲール、土方歳三

EX・BB、メルトリリス、殺生院キアラ、天草四郎、巖窟王、ジャンヌ・ダルク「オルタ」

【余談】

・基本的に太陽系、王・為政者系、近代に近い英靈が多い。さらに言えば雷系（頼光・金時・モードレッド・テスラ・アルジュナ・エレシュキガル・パールヴァティーなど）も

呼びやすいが今回の人理修復ではあまり影響せず。

・クリスティアナは藤丸立香同様、中立・中庸だが、立香よりも手段を採らず、大局的に必要とあれば無辜の人間を見捨てることも、悪と呼ばれる行為に手を染めることも心情はともあれ行動することを厭わない。これは彼女の人生によつて醸造された変えることの出来ない価値観であり、人類の欲望と悪性を、人外の獸性を見つめ続けた、別世界の救世者としての「綺麗」とだけで世界は救えない」「目の前の存在を殺しても世界を救う」という信念と諦念に依るもの。

そのため、アルトリア・ペンドラゴンやジヤンヌ・ダルクなど理想を説き続ける者、無垢なる真正の聖人などとは極めて相性が悪い。その清廉な在り方にクリスティアナは憧憬を抱きはするが、己のこれまでの所業を顧みて、闇に属する自分がその隣に立つなどおこがましいと忌避するからである。召喚するサーヴァントも程度の差はあれど、目的や結果の達成には清濁併せ呑むことも必要だと理解しているものが多い。

・太陽系が意外にも多いのは娘の魂の属性が陽のため。異世界法則によるものとはいえ水・氷・風・雷と五行では陰の性質を持つ血を宿しながらも、太陽の国スペインに生まれた太陽の女であり、クリスティアナとは「聖油で清められた」、ミドルネームのイグナシオとは「炎のような」を意味する。肉体（血）と精神は陰の性質を帶びているが、本質たる魂は真逆の炎や太陽に縁を持つ。陰陽併せ持つこの矛盾した性質が太陽系サー

ヴァントを引き寄せる様子。まあつまり、珍しがつてているのである。

・（散々迷つたので）Twitterでのアンケートの結果、アルジユナは立香側のサーヴァントに。カルデアでインド大戦するんか……？（戦慄）

・白髪青目に炎のカルナと、黒髪赤眼に水を司るクリスでは正反対に見えるが、実は「他人の為に自分の幸福を切り売りできる施しの精神」「生まれてすぐに母親に捨てられた天涯孤独」「自らの境遇からあらゆる欺瞞・虚飾を見抜く観察眼を得た」など、本質や境遇が非常に似ている点で、触媒なしでいきなり大英雄クラスを引き当てる縁召喚となつた。また前述の通り、陰陽併せ持つ特殊体質であることから、太陽系・神靈サーヴァントを引き当てやすいのも一つの理由である。

・クリスティアナにとつてのカルナとは藤丸立香におけるマシユであり、カルナと一番パズの繋がりが強いため、死後太陽神スーザリヤと一体化したカルナの加護（マシユのマスターへの無毒化スキル的な）があるため、一定レベル（パラメーターで神性C以下）の炎熱の攻撃を無効化する「太陽神の加護・B」スキルがクリス自身に備わつていて、実質、人間が操る炎では傷一つ付けることはできず、むしろ魔力回復に回されてしまう。

物理・概念ダメージを10分の1に減衰させる最強の鎧『日輪よ、具足となれ』を碎いた欠片で鍛えた「落陽のピアス」着用時はカルナの『神性・A』同様、神性B以下まで無力化となる。

実はこれのせいで6章のトラウマでもあるガヴェインのガラティーン攻撃がクリスに一切通らない（ガヴェインは神性適正なし）というアレな状況が生まれたというエピソードがある。神性Bのオジマンディアス王の攻撃は一応通る。

・ちなみにカルナ召喚時の「見るに、お前は己を悪と知りながら、それでもより多くの命の平穏と幸福のために、時には鉄の理性で無慈悲で冷酷な手段を取ることも已む無しとする気性のようだ。そういう在り方にはオレも覚えがある」とは生前仕えたドゥルヨーダナのこと。

・ダ・ヴィンチちゃんはクリス側のサーヴァント全員に「もしもの話だけど、彼女が異世界に帰る時、一緒に着いていけるとしたら着いていきたいか」という質問をし、それに対し全員が是を返し、指輪に全員分の靈基情報を刻むのが決定（人理修復直後）↓この質問で「ちなみにどんな形で異世界にサーヴァントを連れていくのか？」と疑問。r興味を持った鰐（キヤスターや知識人）が聞き返し、嬢の基本武装で常に身に付けられて邪魔にならない装身具の指輪を作る、という計画を明かす↓じやあちよつと一枚囁ませてくれという形で企画・製作班が立ち上がる↓噂を聞きつけた立香側のサーヴァントも面白そうと協力しはじめる、といった形をとつてるので、カルナのように着いていけるかも、ということは知っていても、じやあ具体的にどんな形で着いていくのかまでは知らないからなりするサーヴァントも。なのでカルナの反応がああいつた形になつ

た。術ギルやエレナなど製作班を最初に呼び出していたらダ・ヴィンチちゃんの説明前に自慢話や苦労話、裏話大会が繰り広げられたかもしれない。

ぽかした質問で指輪製作を全員に明かさなかつたのは、カルナのように嘘・隠し事が苦手だつたり、茨木、ジャックなど嬢の話術でうつかり話してしまった可能性がある鯖もいること、またたとえ神代の魔女や世界最高峰の頭脳や技術者が集まつても本当に異世界での英靈召喚が可能かは博打に近い確実性のない話のため、士氣にも関わる以上内輪に留めるべきと判断したため。嬢に明かさなかつたのはサプライズと妙に謙遜癖のある嬢に確実に押し付けるため。

・術ギルのバレンタインお返しはウルククルーズでラピスラズリの腕飾りは弓ギルのお返しだが、7章（あれは生前なので微妙かもですが）や幕間でクラスチエンジしたりしているのでセーフかなと。キヤスターの自分がマスターに贈りたかつたのはウルククルーズだが、万一の時に触媒となりうる残るものを、と考えた時に思いついたのがラピスラズリの腕輪だつたと。ちなみにカルデアに弓ギルは召喚されていない設定。

・セラファイックスには立香・クリスの両名が赴いた。立香側はイベントストーリーの編成、クリスはカルナ・玉藻・ガヴェインを連れて行つたはずが、はぐれた自鯖が何故か書文先生とナーサリーとネロ（ブライド）になつていて??になる。しかも立香・クリスは一人一人セラファイックスの端と端にばらけさせるという難易度ルナティック

モード。

『瑠璃の金環』 〔ラピス・アーニー〕

キヤスターのギルガメッシュが所有する聖杯（ウルクの大杯ではない）を元に、レオナルド・ダ・ヴィンチが企画・設計しカルデアのキヤスター他知識人+ α の智慧を結集して作り出した黄金の指輪。神代の黄金（というか聖杯の一部）を鍊成した指輪に、神代では最高の聖石だつたラピスラズリを使用した指輪。

人理修復後、二部序で語られる「もしものための備え」と同時並行で一年かけて作り上げた疑似的な「座」であり「魔力タンク」であり「簡易召喚陣」であり神代から現代にいたるまでのあらゆる魔術・加護・概念礼装・マスタースキルの詰まつた超級の「魔術礼装」である。ぶつちやけ一種の宝具に近い。

お察しの通り、魔術世界に存在しようものなら魔術協会やアトラス院、聖堂教会などありとあらゆる魔術世界の組織・個人がこれを狙つて血で血を洗う大惨事（誤字ではない）世界大戦になりかねないヤバい代物。そのため、残念ながら護身術にクリスより乏しい藤丸立香には間違つても持たせられない。というか本人も「恐ろしすぎて持ちたくない」と全力で拒否した。

作りはしたものの、一度は別れ、異世界に還るクリスの意志を尊重し、クリスが望む、

あるいは大小問わず身の危険が迫った時でなければ初回起動しないよう設定されていた。危険が生じた時に召喚されるサーヴァントは完全にランダム設定だったのだが、フリーフォール時にほぼ肌身離さず着用していたカルナのピアスという最強の触媒があつたため、カルナが真っ先に駆けつける結果となつた。相棒だからね、当然だね。

でもラピスラズリの腕飾りやベイヤードのブレスレットなども時と場合に応じて（後者は特に呪い関係で滅茶苦茶活躍していた）身に付けていたので、キヤスギルやゲオルギウスも結構出現頻度は高かつた。

一応念のため悪用防止に、初回起動後はクリスティアナの魔術回路・生体パターンがなければ起動せず、ただの指輪でしかないとアフターケア付き。

異世界でもクリスティアナがカルデアで召喚したサーヴァントに限り、召喚可能とする限定的・疑似的な『座』の機能を持つため、指輪に刻まれた靈基情報を元にサーヴァントが召喚できる。一度に召喚できる数が最大6騎なのは相変わらずだが、魔力消費削減のため、6騎を編成しても実際に実体化するのはスターディングメンバーの3騎。これは臨戦状態においての話なので、武装解除して省エネモード（世界に溶け込むために私服姿になつたり）中だつたり、キヤスター陣によつて工房化されたクリスティアナのセーフハウスやライブラ事務所においては魔力消費を限りなく抑えられるため、6騎の限りではない。

とはいへ一度に6騎編成して召喚すると、一度全員召喚を解く＆再編成して再召喚しないとメンバー変更が一切出来ず、その間かなり無防備になるため、基本的にはその場で必要に応じて単体召喚することが多い。

本来なら疑似的な『座』など生み出せるはずもないが、どこぞのチートなラスボス系後輩の『黄金の杯』^{アーケード・ボーグラ}と『百獸母胎』^{ボトニア・テローン}による「根源」接続によつて、召喚可能サーヴァントをクリスと契約した分霊の最終状態のみを保存する、と機能を限定することで改造可能となつた。チート改竄ここに極まれりである。なんでそこまでしたかつて？ これからも可愛そうなマスターさんを虐めるためです。なお情報の圧縮にはその手の突破口であるパツシヨンリップ（立香側）が担当。

（ちなみにB.Bは立香を「センパイ」、クリスを「マスターさん」呼び）

L e r • v e n o c t u r n e

夜の森が燃える。夜闇を紫色の炎が染め上げていく。同時に薄つすらと立ち込め始めた霧のようなものを目で捉える。……ただの霧にしては明瞭すぎるしこの夜の気候条件に適していないし、妙に停滞している。……毒ガスか。

敵襲。

そこまで思考が至つた、わずか一秒にも満たない時間で、私は初日に森を駆け回つて仕込んでいた守りのために地に打ち込んでいた少量の血液、それを薄く地中に張り巡らせることで敷いたセンサーを起動させる。無用であればいいと仕込んでいたものを使うことになるとは皮肉だ。センサーが示す反応は、明らかに学生といふのはずのプロヒーローとの数と合わない。多すぎる。肝試しのために森の道に沿つて待機している生徒から離れたところから、道なき獣道を縫うように移動している人間がいる。その数9人。それらに地中を介してごく少量の血でマーカーを打つ。全てはこの後の布石のために。

その中でも道なき森の中を不穏な動きで移動する誰かがこちらに近づいている。そ

れを感じ取つた私は、木の上へ飛び上がつて息を潜めた。意思を自らの内へ押し込む。気配を絶つ。身体をごくごく薄い水の膜で覆い、幻術をかけて姿を消す。

そうして待つこと一分もせずに現れたのは、腕を拘束具で締め付けられた、開口器を嵌めた異様な風体の男だった。目は明後日の方に向いて虚ろ。歯が奇妙に直線状に枝分かれしながら伸び、地面に鋭く突き立てることで素早く身軽に動いている。……遠目でも、あれは殺し慣れた者の動きだと思つた。容赦なく叩き潰して良い類の、放置すれば他の生徒に軽くない危害の及ぶヴィランだと判断し——私に気づかずに通り過ぎようとした男の頭上に幻術をかけたまま飛び降り——風圧でからうじて反応した男が完全に振り仰ぐ前に、その脳天に踵落としを決めた。接触と共に血液を付着させ、絶対零度の小針で全身を瞬間凍結させる。

男は何が起つたのか知覚するまえに、思考ごと冷凍された。からうじて生命活動ができるレベルの冷凍だが、指一本動かせない硬度の氷であり、細胞レベルでの氷結では急激な体温低下に意識はシャットダウンされる。手練であろうと抵抗不可能な状態にせしめ、私は地面に降り立つと同時に幻術を解いた。

「……ヴィラン連合の襲撃か。ＵＳＪのときより尖兵のレベルが上がつてゐるな」

楽しいはずの合宿をぶち壊しにする闖入者の出現に苛立ちを覚えながらも、思考と手は止めない。センサーで大まかな人間の動きを把握しながら、取るべき手段を思い巡ら

せて、ついに表立つて起動することのなかつた最終手段に触れた。右手の人差し指に輝く金環、黄金の願望機が形を変えた指輪を。

『このような場まで来るのは、穏やかではないな』

「……カルナ」

独り言に応えたのは、靈体化した相棒、漆黒の日輪であるカルナだ。静かな声は苦慮を滲ませて、普段のそれよりも少し低い。一瞬の躊躇と苦慮の後に、私は彼に告げた。

「靈体化を解いて、カルナ。この森は広い……私一人では手が足りない。合宿をぶち壊しにしてくれたおめでたい連中に知らしめなければ気が済まない……自分たちが何に手出ししたのかを、骨の髄まで」

『構わないが……我々の存在を明かして良いのか？　お前の望むところではないだろう』

カルナの平坦な声は僅かに憂慮に滲んでいる。

人類史を彩り、繁栄の中に刻まれてきた偉大なる過去の人間の影法師。英靈一騎だけでも一都市、一国を滅ぼすことも不可能ではない一騎当千の実力者たち。本来は人類の危機に際して呼び出される人類史の守護者たちだ。たとえ一つのクラスという枠に実力を抑えられ、生前に比べればダウングレードしていくとしても、スキルひとつ、振るう技のひとつさえ、人外の臂力や俊敏性、技術に相当する。個性という本来の人間から

離れた進化を遂げたこの世界の人間であつても、戦闘機には敵わないのと同じだ。……あのオールマイトでさえも。それだけ互いには明確で絶対的な力の壁が厳然とそびえ立つてゐる。そもそも、比較するのもおこがましいぐらいに。

だから、英靈の力を人に明かすのを良しとしなかつた。周囲に与える影響が大きすぎるので、核兵器に匹敵する熱量のビーム、その気になれば彼岸から魂を呼び戻しその器を癒やすことも可能な神格の分け御靈。声色、吐息一つ、視線の一瞥で対象の思考を泥酔させ蕩かす鬼の酒氣。どのようにも利用価値のある特殊な能力ばかり。ひとたび知られれば、善惡を問わず利用しようと擦り寄つてくる人間は数え切れないほどいるだろう。周囲へ牙を向きかねないほどの欲望をもつて。……それは、どうしても嫌だつた。友人たちの学生生活を壊すこと、今の穏やかすぎるほどの関係性を崩すのも。

だが、そんなことを言つていられる状況ではない。ガスと炎。あちらは本気で生徒が死んでも構わないと思つて襲撃を仕掛けてきていた。……出し惜しめば、誰かが死んでも不思議ではないほどの状況。

だから私は、なんでもないよう、心配しないでと笑いかけた。

「戦力を出し惜しんで間に合わずに誰かが死ぬより、厭うことはないよ」

『……承知した』

風もないのに木々が揺れる。魔力が風を起こし、その中に金の粒子が結集する。ヒト

の形を取つたそれは、ほろほろと溶け消えるようにして一人の青年の姿を露わにする。闇夜にあつても目を引く白い髪と肌、夜を切り裂く一筋の日輪を顕す金の鎧。涼やかな蒼冰色が、憂いを乗せて私を流し見る。

「——それがお前の望みなら、叶えるにやぶさかではない」

「ありがとう。……多分あの炎は目くらましと生徒の行動を制限させる目的で放つたんだろう。生徒を大回りさせて教師との合流を遅らせ、撤退ポイントに人を寄せないつもりか……まあ、何であれありがたく回復に使わせてもらうけど」

本来なら森を燃やす炎は脅威だが、『太陽神の寵愛』で炎を無力化する私にはただの魔力回復のための餌でしかない。彼女をここに呼び寄せ、宝具を使つてもらうぐらいの魔力は貰えるだろう。もう一人召喚するサーヴァントはどうに決めていた。

この状況で最も輝くサーヴァント。機動力があり、特定条件下での隠密性に置いてはトップクラス。アサシンの語源となつた山の翁ではなく、霧の都市で暗躍した殺人鬼。

「——私たちを呼んだ？　おかあさん」

ジャック・ザ・リッパー。カルデアの基準で初代“山の翁”や最後のファラオ、平安を脅かした蒐集家の鬼と同列に成長する最高クラスの靈基レベル上限を持つサーヴァントだった。小学生くらいの可愛らしい容姿に反して若草色の瞳は純粹が故に狂氣的で、顔には目元の切り傷と頬に縫い傷。腰に吊り下がつた大ぶりのアーミーナイフや鉈などの刃物が、

彼女が普通ではないことを証明している。

「ええ。ジャック。早速でごめんね、宝具『暗黒霧都』を私が指定する人間にのみ展開。そしてその人間たちだけを、殺さないギリギリまで痛めつけて追い返して」

「？ 解体しちゃだめなの？」

「良いと言いたいけど、そうすると今後私が動きにくくなってしまうから。それに、のこのこやつてきた斥候に、とんでもないものに手を出したとボスに報告してもらうためにも殺すわけにはいかないわ。……ジャックには我慢をさせてしまうことになるけど」

『暗黒霧都』は産業革命時代のイングランドを包んだ硫酸の霧を振りまく結界宝具である。霧によって方向感覚は失われ、魔力で生まれた硫酸の霧は呼吸器に一定ダメージを与える。直感B以上のスキル、あるいは魔力を払う魔術でなければ永遠に迷い続けるこの宝具の最大の利点は、効果範囲の広さに反して、霧の中にいる誰に効果を与えるか、与えないかを宝具使用者が判断できるところにある。同じアサシンの酒呑童子のスキル『果実の酒氣』あるいは『千紫万紅・神便鬼毒』は範囲内の人間を平等にターゲットにしてしまうが、『暗黒霧都』ならば、襲撃してきたヴィランのみを迷わせ、肺を冒し、解除するまで退却も許さない。二度とこんな真似をさせないように徹底的に心を折るのには最適だった。

とはいって、久々の戦闘なのに彼女の在り方を否定しかねない「殺さないで」を命令す

るのは、若干申し訳無さもあるのだが……ジャックはぶるぶると小動物じみた動きで首を横に振った。

「ううん！　おかあさんのお願いだもん、我慢する！　殺さない程度に切れば良いんだね！」

「お願い。ああ、あと『解体聖母^{マリア・ザ・リップ}』は使っちゃダメよ。あれは問答無用で殺しちゃうから」

「宝具はだめ、だね。わかつた！　行つてくるね！」

「頼むよ、ジャック」

「うん！」

ヴィランの毒ガスよりもずっと濃い白い闇が広がっていく。元気よく返事をしてぴよこりと跳ねた彼女は霧に紛れるよう森の中へ消えた。ジャックの気配が一気にスピードを上げて遠ざかっていく。

「私たちも行こうか。炎を消しながら会敵したら応戦、生徒がいたら回収して安全な場所まで連れて行こう

「了解した。……飛ばすぞ」

本気を出せば空を音速で駆ける大英雄の赤い炎の外套が光を帯び、私たちは紫炎が森を燃やすエリアへと中空に駆け上がるのだつた。

* *

「解体するね」

白髪に頬と目元に傷のある小さな女の子は、につこりと笑つた。逆手に持つた大振りのナイフが、その愛らしさと対照的で現実味がない。明らかな凶器なのに、あどけない幼女が持つとどうにもちぐはぐで、玩具を手にしているのではと思い込みたくなつてしまふ。

暗闇の中で芽吹いたばかりの黄緑色の瞳がヤヌスグリーンに炯炯と輝いて、濃い霧の中に消える。姿も、気配も。何も感じなくなつた。息がしづらい。炎を呑んだように灼けつく喉が痛みを訴え続ける。

この時トガヒミコは己の失策を悟つた。

あれに出会つてはいけなかつた。せめてあまりに遅くとも、目が合つた瞬間にここから離脱しなければならなかつた。何故数秒前の自分はあの女の子の異常性に気付かなかつた？

そもそもまず、この夜、この場所に自分は居るべきでなかつた。
何故なら——最初にナイフで腕を切り付けられた数秒後まで、あの子の存在を知覚で

きていたのだから。

「此よりは地獄。わたしたちは、炎、雨、力——殺戮をここに」

さえずるような少女の謳う声は奇妙に反響してどこから響いているのかわからない。
目を凝らしても、耳を澄ませても、感覚を精一杯張りつめさせても、どこから襲つて
くるのかわからない。霧が深すぎて、何も分からぬ。

ああ、くらくら、する。

トガヒミコにはそれが恐ろしかつた。今まで大好きな人を切り刻んで、ぐちやぐちや
にして、真つ赤な血で彩つて。その過程、結果が彼女にとつてなによりの愉しみだつた。
その血で自分が「好きな人」に成るのが、なによりの悦びだつた。

そのためには法、ルール、ヒーローや警察の追っ手、自らを「常識」で縛ろうとする
にもかもが邪魔だつた。それらを身を潜めて、血で変装して、息も気配も自我も殺し
て隠れることで撒き続けてきた。

暗殺技術に等しい、気配を断つ術が周囲よりずっと優れていたと自負するトガヒミコ
だからこそ、そして何より、人を切り刻んできたからこそ——あの少女が自分より
ずっと格上で、自分が狩られる立場だと本能で理解した今、身動きが取れないほどの恐

怖に飲み込まれた。

『解体マリア・ザ』

動けない。動けない。動けない、逃げられない。怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、ああ、私の内臓なかみがぐちゃぐちゃになる。勝手に動いて外に飛び出そうとしている。私もある人たちみたいになる。あのナイフと鉈なたでお腹を切り開かれて、血も神経も骨も皮も肉も目も鼻も口も首も腕も胸もお腹も足も指も全部ばらばら、ばらばら、ばらばらに……

脳裏に赤い光が明滅する。ちかちかちかちかちか、ばらばらになつた私の無残な姿が走馬灯のように見えて、ギュッと目を瞑つて襲い来るだろう衝撃に耐えるために歯を食いしばつた、

「あっ」

喉を締めあげていたプレッシャーが一気に緩む。はつ、と反射的に息を呑んで、どくどくどくとうるさい心臓の音を聞きながら目を開くと、幼女の声だけが森の中に響いた。

「ごめんなさい、おかあさん」

「…………え？」

「宝具はつかつちやだめなのに、わたしゃくそく破るところだった。うつかり殺しちゃ

うところだった

ほうぐ。おかあさん。一体何の事……

「だから、殺さない程度に切るね？」

私が最後に見たのは血しぶきと、鈍色のナイフ。えぐられるような重い衝撃。身体中にうまれた熱と痛みを感じながら瞼を閉ざす寸前に……森の暗がりに光る、赤いなにかを見た。

＊＊

「ジャック」

「あっ、おかあさん」

カルナに空を飛んでもらい、ショートカットしてジャックの気配があるところに到着すれば、血で濡れたナイフを手にしたジャックと、セーラー服に何やら物騒な機械を背負った少女のヴィランが倒れていた。ヴィランは遠目で見る限り、致命傷にならない程度の切り傷だけで、腹部を搔つ捌かれているわけでも、内臓が飛び出しているわけでもな

さそうで安心した。まあ中々にエグい絵面ではあるのだが、私設部隊の拷問風景に比べればずつとマシだ。トマティーナも真っ青な、内臓の卸売り市場みたいな血みどろファイバーな惨状と較べている時点で、私の感性もどこか確実にネジが飛んでいるが。

先程、急に魔力を持つていかれる感覚には少し焦った。ジャックの宝具『解体聖母』マリア・ザ・リップスは対人宝具のため、魔力消費はそう多くもないのだが、その効果が問題なのだ。

稀代の殺人鬼、ロンドンを脅かした都市伝説の殺人を再現するかの宝具は、強力な女性特攻を持つ。「時間帯が夜である」「相手が女性、または雌である」「霧が出ている」、この三つの条件が揃っている時に宝具を使用すると、対象の身体の中身を外に弾きだして問答無用で「解体された死体」にする、呪いの宝具なのだ。しかもクー・フーリンのゲイ・ボルクの「心臓に必中」と似た因果律の逆転を引き起こす宝具で、まず解体された死体という「殺人」が発生し、その次に標的の「死亡」が起こり、最後に大きく遅れて解体に至るまでの「理屈」がやつてくるのだ。結果が先に提示され、最後にその結果を引き起こすための過程が後追いで出てくることになる。

条件がひとつ欠ければ致命傷には至らずダメージを与えるだけだが、一つ揃うだけで威力は跳ね上がる。しかもナイフそのものが宝具なのではなく、正体も動機も不明な「ジャック・ザ・リッパーの殺人」という概念に基づく極大の呪いなので、呪い耐性が無ければ距離は関係なく物理的な防御は叶わず、霧の中なら「必ず中る」ので回避は不可。

「ジャック・ザ・リッパーの姿を見た目撃者は居なかつた」という伝説から生まれたスクリ『情報抹消：B』の効果で、戦闘終了後、目撃者と対象の記憶からジャックの外見特徴、声、能力、行動に至る一切が抜け落ちる。

女性限定だが完全犯罪を生み出す最高の暗殺宝具、それが『解体聖母』^(マリア・ザ・リッパー)。

本来なら殺しにやつてきたヴィランに手加減する情けは一切かけないのだが、流石にこの合宿所で殺人が起こつたら色々と不味い。戦闘許可は出ているが、あくまでヴィランに殺されないよう自衛のために発令されたものであつて、ヴィランを殺していいというお墨付きではないのだ。というか、この世界のヒーローは殺人を許されていない。一時的な逮捕が精々だ。探偵と警察が混じつたような権限しか持たない以上、間違いなく過剰防衛になるジャックの宝具を使わせるわけにはいかなかつた。私が英靈召喚出来ることは一部の先生方しか知らないことだし、相澤先生は不可解な状況下で唯一動きの読めなかつた私を疑うだろう。それ以前にこの場で殺人が起ころうものなら、マスコミが黙つていはない。雄英へのバッシングは強くなり、世論はヒーローへの疑惑に一気に傾く。ともすれば自分も、相澤先生も責任を取つて学校を辞める、あるいは刑務所行きの運命だ。それは望むところじゃない。

だからジャックが何を思つてか宝具を使おうと真名解放するのを、令呪で止めたのだ。どうせあと数時間で回復するのだから、取り返しのつかないことになる前に惜しみ

なく一画使つて「強制」した。……間に合つて良かつた。

「おかあさん、ごめんなさい。わたしたち、宝具つかつちやうところだつた」

「氣を付けて……HLと違つて、この世界では殺しちゃだめだからね。でもお茶子と梅雨ちゃんのふたりを助けてくれてありがとう、ジャック」

「うん！」

ナイフに付いた血を払つてケースに収めたジャックの頭をなでると、嬉しそうにニコニコ笑う。この邪氣のない笑顔とか、ナーサリーや立香のところのアビゲイル、サンタリリイ、バニヤンたちと戯れているところを見ているだけだと忘れそうになるが、ジャックは「墮胎された子どもたちの惡靈」が集まつて出来た、いたかもしれない「ジャック・ザ・リッパー」の可能性のひとつなのだ。

「ジャック、先にうちに帰つてて」

「もういいの？ 分かった！ ナーサリーと待つてるね」

ぴよこんと一つ跳ねたジャックが金の粒子となつて融け消える。靈体化ではなく、召喚解除によつて指輪の疑似座を通して自宅に戻つていくのを感覚を通して見送つた私は、倒れ伏しているヴィランを一瞥した。

「このまま置いておいたら失血死しそうだな、焼くか」

「ああ、うん、お願ひカルナ」

「承知した」

カルナが指先をヴィランに向けて振ると、ぽつとオレンジの炎がヴィランの身体のあちこちに灯り、未だに血が流れる傷口を焼き塞ぐ。太陽神の息子であるカルナが操る炎は、本気を出せば周囲をマグマに変えかねないほど高熱だ。だが炎の規模と温度を操ることで、こうした応急処置にもつかえるのだ。……人理修復の旅で、何度私や立香がお世話になつたことか。

痛みにかすかに身じろぐだけで、ヴィランは起きる様子はない。……ジヤツクの殺気を間近で受けて、痛みに気絶したのならしばらくは目覚めないだろう。とりあえず後で回収に来るとして、とりあえず生徒側の現状を知るためにも広場に戻らなければ。

「戻ろうか、カルナ」

「ああ。飛ばすぞ」

魔力放出で空を飛ぶこと数分、森を突つ切つて広場に出ると、相澤先生やクラスメイトたちが負傷したりガスで気絶している子たちを背負つて集まっているところだつた。

「相澤先生！」

「!! 星合、無事だつたか！ ————— その男は、お前の味方か」

「はい。私の個性で呼び出した、大事な英靈です」

「……そとか」

私を担いでいたカルナを見た瞬間視線を鋭くしながらも問う相澤先生に首肯すれば、彼は溜息と共に瞼を降ろした。すぐに気を取り直すところはさすがだ。

「重体の人ははどのぐらい いますか」

「催眠ガスで意識不明が 10 人以上、ヴィランの攻撃で頭を強く打ったピクシーボブ、重軽傷が今のところ 5 人ほど……まだ戻ってきてない奴も多い」

「それならとりあえず今戻つてきている人全員を集めましょう。私に個性を使わせて下さい」

「！ 何か策があるのか」

「英靈の中に弱体解除……毒物を無毒化して傷を回復させられる人がいます。完全に無毒化は難しくても、毒が回るのを少しでも遅らせられるはずです。黙っていましたが、リカバリーガールと警察に、やむを得ない人命救助の場合は回復系のみ英靈の力を他人に行使してもいいと許可を貰つてます」

「わかった」

遠くで救急車と消防車のサイレンが響いている。先生方が通報したんだろう……あ

まり英靈の力は知られたくない、救急隊が来る前に彼女を呼び出して宝具を使つてもらわなければ。負傷者が集められている合宿所前までカルナに担いでもらつて移動しながら、私はホログラムを操作して編成欄にセットする。

「ついたぞ」

「ありがとう！ 周囲警戒よろしく！」

「承知した、敵は近付けさせん」

合宿所前にはシートが敷かれ、その上でクラスメイト達が寝かされていた。森の中でお化け役としてB組の面々が主にガス攻撃に気付かないまま昏倒したんだろう。ほどんどがB組の中、早い順番でスタートしたトオルやキョウカも中に混じっていた。……大した外傷がないのが不幸中の幸いだろうか。もつと早くに気付けていたらと、不甲斐なさに奥歯を噛み締める。

彼らに駆け寄った私を見て、合宿所で補習だつた切島くんたちが顔を明るくさせた。

「星合！ お前無事だつたか！」

「うん！ 私は大丈夫——それより、怪我やガスを多少なり受けた人は一旦この場に残つて！ 私の個性で回復させるから！」

「えつマジか!?」

「星合そんなことも出来んの!？」

「詳しい説明は後で！——A _{セッ}n f a n g!!」

ぎよつと目を丸くする切島くんや負傷者を運搬して戻ってきた所だつたらしい飯田くんや尾白君が驚いているのを横目に、説明をぶつた切つた私は令呪のある右手をぐつと握りしめ、胸の前に翳した。

——英靈指定召喚：バーサーカー

——概念礼装指定：カレイドスcope最大解放

「——来て！ ナイチンゲール!!」

私の叫びに反応した『瑠璃の金環』^(ラビス・アーノ)が、魔術回路が、暗闇を明るく照らす蒼い電流の
ような光を放つ。

「——ええ、司令官。^{マスター}すべての命を救いましょう。すべての命を奪つてでも、私は必ずそ
うします」

黄金の粒子を纏つて現れるのは、赤い軍服に大きな衛生鞄を腰に括りつけ、白い軍靴を履いた女性。人類史において、現代にいたるまで圧倒的な知名度を誇る『クリミアの

「天使」。ピンクゴールドの髪を束ねた彼女は目の前の重症患者たちを診て眉を鋭く吊り上げた。

「ナイチングール！ 早速で悪いけど『人体理解：A』！」

「はい。本格治療を開始します。覚悟は、宜しいでしようか？」

「彼らはガスによる中毒者と、一人頭部外傷、その他大小の傷を負つてゐる！ 貴方の宝具で癒してほしい！」

スキルによつてどこが悪いのかを見定めてもらい、その上で宝具を使用することでより効率化を図る。本来は人型のエネミーの弱点を見抜き、攻撃力と防御力をアップするスキルなのだが、今回は応用としての使い道だ。

召喚直後に矢継ぎ早に指示を出す私に、ナイチングールは手袋をぎゅっと嵌め直しながら微笑んだ。

「適切な指示に感謝を。さあ、緊急治療です!!」

血液が沸騰するような感覚。血液を魔力に、血管を魔術回路として辻褄を合わせた私の身体は、魔力を練つて宝具を放つたびにこの高揚するような、自分の根幹が不安定になるような、不思議な感覚を覚える。カルナや玉藻は私の魂が陽であり、身体と精神が陰の気を帶びてゐるから、その全てを運用する宝具起動時はどちらもが混ざり合つてフワフワするのだろうと言つていた。あまり人間の身体には良くない負担らしいが、魔改

造された身体ではその負担もあまり掛かっていないのが幸いだとドクターが胸を撫で下ろしていた。……懐かしい。

「全ての毒あるもの、害あるものを絶ち！ 我が力の限り、人々の幸福を導かん!!」

両手を虚空に掲げたナイチンゲールの周囲に魔力の波動が満ちる。髪やスカートを揺らめかせるそれは、辺り一面に広がつて打ち寄せるさざなみになつた。

力尽き、と見開かれた赤い双眸が彼女の前に倒れ、蹲る患者たち全てをくまなく見渡す。それと同時に、彼女の背後に彼女の「傷病者を助ける白衣の天使」の逸話と看護師の概念がカタチを取つた幻影が、手にした幅広の大剣を祈るように胸の前に掲げた。

最大捕捉人数100人の対軍宝具、彼女が指差す先、効果範囲のあらゆる毒性と攻撃性は無視され、内包するものを回復させる絶対安全圏――

『我^ナはすべて^チ毒^ン^ゲあるもの、害^ル^ブあるものを絶^{レツ}^ジつ』!!』

温かな緑の光が駆け抜け、患者を包み込むように広がる。溶け込んだ光はやがてガスのみならず身体中の毒素を集め、黒い靄となつて細く細く、クラスメイトや奮戦したヒーローたちの身体から溶け出し立ち昇つた。身体に負つた大小の切り傷や擦り傷も、僅かな血痕を残して元通りに塞がっていく。

「傷が治つてく……」

幻想的な光景に、手も足も止めて見惚れる彼らをよそに、ナイチングールは素早く患者の元に駆け寄つて呼吸や脈を確かめ、テキパキと救助順序を定めていく。カルデアに召喚されたことで現代の医療・看護知識を聖杯から得た彼女は、勿論災害時の救助優先システムたるトリアージも心得ているのだ。数分後に駆けつけた救急隊にバーサーカーらしい食つて掛かるような勢いで状態を報告し、重傷者から搬送させる手際は流石としか言いようがない。まあ、救急隊の人たちはナイチングールの剣幕と知識量に目を白黒させながらも勢いに押されて従つていたが。

私もそれを黙つて見ていたわけじやなく、搬送の手伝いや車の誘導、後から運ばれてきた怪我人の誘導と治療に当たつた。……流石に、障子くんに担がれて運ばれてきた全身ボロボロのイズクには驚いたが。どこもかしこも血まみれ、両腕に関しては無茶を重ねただろう、内出血で紫色に腫れ上がり、右手の指先はぐちやぐちやの方向を向いていた。体育祭の比じやなかつた。泣いているのか錯乱しているのか分からぬくらいの雄叫びを上げて暴れて手が付けられないでの、私の後に般若顔ですつ飛んできたナイチングールが手刀で昏倒させた。

「おい、何しやがる……」

「轟、どうどう。怪しい人じやないから」

急に現れたナイチングールを警戒する轟やお茶子たちをなだめると、向けられた敵意にぎろりとナイチングールが目を向けた。小陸軍省と呼ばれた鋼の精神そのもののようなひと睨みは、バーサーカーともあって非常に心臓に悪い。

「命を救うためです。ええ、命を！ 救うためなら、私は何でもするわ！ ええそうよ、何でも！」

「ナイチングールも落ち着いて、今は目の前の患者の方が大事だろう？」

「……失礼しました」

マスターであり、あの北米大陸の対戦を乗り越え、ナイチングールとの付き合いを心得ている私とならば割と狂化の影響が少ない会話ができるのだが、悪気はあろうとなからうと治療の邪魔をする人間には狂化EXのステータスに恥じないバーサーカーぶりを發揮するのは変わらない。これでもだいぶん丸くなつた方だが。

「マスター、この患者はあまりに重傷です。新しく運ばれてきた患者を含めて、もう一度宝具の使用許可を」

「うーん、それは構わないんだけど。ナイチングール、一回で治せそう？ ここまでぐちやぐちやだと君だけじや難しいと思うんだけど」

「……ええ、マスター。分かります、確かに私の宝具は多数を救うもの。故に彼を回復さ

せるには足らないと、そういうことでしよう」

「うん、だからあのロクデナシを呼ぼう。あの宝具なら対人宝具でレンジも狭いし、継続回復が見込める。一度でダメなら数回に分けて治療するしかないだろう。……星5三騎召喚で宝具2連発となるとちょっと無理をすることになるけど……こんなことでしか手助け出来なかつたんだ、多少の無茶は目を瞑つてね、ナイチングール」

「……重症患者を救う為ですから、今回だけですよ。あの時のような魔力不足にはさせません」

「ウルクの時のこと？……あれは私ももう勘弁したいなあ」

激戦に激戦を重ねたあの消耗戦において、立香と私の指は魔力不足と血液不足で壊死寸前になるほど真っ黒だつた。ナイチングールの手助けがなければ、私たちの指先は腐り落ちていただろう。今の私の指先は真っ白だが、本来の25歳の私の指にはうつすら痕跡が残つている。それほどにあの神代の戦いはなにもかもが絶望的だつたのだ。

「というわけで、出番だマーリン」

「——良いとも。久々に呼び出してくれたね、マイ・ロード。退屈しそうだつたよ」

「ええつ、何もないところから何か白いお兄さんが出てきた!？」

私の一声を待つていたかのようにノータイムで現れたのは、白い長髪に白いローブ、聖剣エクスカリバーを仕込んである木の杖を手にした、絢爛なるアーサー王伝説に名を

連ねる魔術師・マーリンである。耳飾りのせいでウーパールーパーとか言つてはいけない。

人理修復を成し遂げ、理想郷アヴァアロンに永遠に閉じ込められる運命にある夢魔の彼は未だ死んでいない。というか死ねない。死んでいないということは英靈にはなれないため、当然この指輪の疑似座にも登録できないのだが……そこは古代ウルクの底、冥界まで徒步で来た男である。アヴァアロンの抜け道を色々弄つて単独顕現スキルを活用し、向こうの世界とこつちの世界を自由に行き来している。向こうの世界の織物を眺めながら私の旅路も見守るとかいう中々な引きこもり生活を送つているキングメーカーならぬトラブルメーカーな口クデナシである。一応英靈になつたら冠位グラントを与えられるとあつて、性能はピカいちなんだけども。

とりあえずイズクはシートの上に降ろしてもらい、轟たちにもイズクの近くで固まつてもらう。マーリンの宝具レンジが狭いからだ。

いつたい何が始まるのかと不安そうな彼らには後でちゃんと説明するとして、とりあえず治療を優先させる。

「令呪を以て命ずる、ナイチングール、マーリン、宝具を以てイズクたちの治療を」

「治療、開始」

「お任せ、マイ・ロード。……王の話をするとしよう」

カツ、と令呪が光を放ち、令呪の膨大な魔力が二人に注がれる。二画目が手の甲から消えた瞬間に、二人は詠唱を始めた。

「全ての毒あるもの、害あるものを絶ち！ 我が力の限り、人々の幸福を導かん!!」「星の内海うちうみ、物見の台うてな、楽園の端から君に聴かせよう……君たちの物語は祝福に満ちていると。罪なき者は通るがいい」

看護師の幻影が顕現する。光のさざなみが辺りに満ちる。

濃いマゼンダ色の花びらが咲き乱れ、10メートル四方を色とりどりの花の海に変え塔が現れた。

赤い炎に燃える夜闇を搔き消して、降り注ぐのは暖かな春の陽光と満ちる夏の匂い。

誰も辿り着きようのない理想郷。地球という惑星が持つ、魂の置き場所。

僅かな範囲の空を理想郷の空に書き換え、今も彼が幽閉される宙に浮く白い最果ての塔が現れた。

「——『我はすべて毒あるもの、害あるものを絶つ』!!!」

「——『永遠に閉ざされた理想郷』！」

ナイチンゲールとマーリンの宝具が重ね掛けられる。

ナイチンゲールによつてイズク達の身体に蓄積されたガスの毒、不純物は取り除かれ、血を流し続ける傷口は塞がれ、内部破裂によつてぐちやぐちやになつた骨、神経、血管、筋肉はあるべき配列へと導かれる。

さらにマーリンの『永遠に閉ざされた理想郷』^{ガーデン・オブ・アヴァロン}、対人宝具であり最大捕捉7人という強力な宝具によつて、ナイチンゲールの宝具の回復効果を底上げし、自らの宝具でも「味方全体に5ターンの間HP回復状態を付与」の効果で継続回復を行つていく。

それでもまだ、イズクの度重なる無茶によつて変色した腕は癒えた様子がない。自らの変化に驚くお茶子や障子くん達の様子に反して、くらくらする頭を押さえながらも渋面のまま私はさうに指示を出した。

「ナイチンゲール、イズクへ『鋼の看護：A』を」

「はい。……どのような戦い方をすれば、ここまで癒えにくい傷を……これではまるで身体の内部で炸裂弾が破裂したような……」

マックスまで上げたHP回復スキルを使用してもらう。それでもじわじわと癒えていくだけの傷。

戦時病院で尽力し、サーヴァントとなつてからも人間業ではない様々な怪我を見てきた彼女でさえ眉を顰めるイズクの状態に、私はお茶子に問い合わせた。

「……一体なにがあつたんだい？」

「実は……」

話しにくそうではあつたが、お茶子はぼつぼつと森の中で何があつたのかを教えてくれた。

ジャックが殺しかけた女のヴィランから逃げた二人は障子くん、イズク、轟、常闇くん、爆豪の一団と合流。イズクたちも直前に常闇くんの個性が暴走して轟と爆豪を襲っていたヴィランを退けた後、広場に戻るため向かう途中——音もなく常闇くんと爆豪がヴィランによつて攫われていた。あの女のヴィランを小脇に抱えたマジシャンらしき格好のヴィランが逃げるのを必至で追いすがつたものの——奪還は失敗し、黒霧によつて爆豪が連れされた。

……あの女のヴィラン、放置せず縛つて連れてくるべきだつたな。結構なトラウマ製造シーンだつただろうし切り傷も酷かつたので復帰は時間が掛かるだろうけれども。クラスメイトの安否を優先させたことは後悔していないが、微妙に下手を打つた。その場にいれば、むざむざ取り逃がすこともなく、全員無力化出来ただろうに。

僅かに渋面を作つたのを、爆豪の奪還に失敗したことへの憤りに見えたのか……心配げな面持ちの梅雨ちゃんに気付いて苦笑を浮かべた。

「……マーリン、視える?」

「勿論だとも」

周囲に聞こえないよう、小声での私の問いかけに、魔術師の頂点の一人たる夢魔は微笑んだ。

感情を持ち合わせず、夢の中で集めた心の機微を燃料に、人間らしい感情や表情の変化を再現して使い捨てにしているに過ぎない彼は、あらゆる現在いまを見透す最高位の千里眼の持ち主だ。勿論、この場にいる限りこちらの世界で今起きているすべての事象を見通せる彼には、その気になりさえすれば連れ去られた爆豪やヴィランの現在地を特定することなど朝飯前だ。

だがそれを、私は彼らに言うつもりはない。言つたら最後、少なくともイズクは救出に向かってしまう。それはルールを超えた行いだ。ただの感情に突き動かされた蛮勇だ。それを、オールマイトを恩人と仰ぐ私は許さない。

——結局。

生徒41人の内、ヴィランの催眠ガスによつて意識不明の重体15名は、ナイチンゲールの宝具によつて日付が変わる頃に殆どが目を覚まし、念のため検査入院となつた。重・軽傷者11名も入院の必要がないレベルが多く、腕の損傷がひどいイズクと、頭を打つたモモ、B組の泡瀬くん、ガスの中心地にいた鉄哲くんが入院となつた。そして行方不明が1名、爆豪。無傷は私含めて14名。

プロヒーローはピクシーボブが頭を強く打たれて重体。ナイチンゲールの宝具で後遺症は残らないだろうが、こちらも意識が戻らなかつたため入院。そしてラグドールが大量の血痕を残して行方不明。

一方敵は3名の現行犯逮捕。殆どを取り逃がす結果となつた。
最悪の結果で、林間合宿は幕を閉じた。

「……世間は大騒ぎだぞ、マスター」

「……予想はしてたけど、頭が痛いね……」

宝具とスキルの連発で、久々に大量の魔力を消費してふらつく私に、先生方や友人たちは病院を勧めてくれたのだが、人間の医療でどうにかなる不調ではないので、工房化した自宅に戻る方が魔力回復が早いと判断したカルナに連れられ、一人自宅に戻つた。口数の少ないカルナに変わり、マーリンが少し残つて口八丁で先生方に当たり障りのない説明をしてくれたとのことなので多分大丈夫だと思っていたのだが、自宅で色んなサーヴァントに魔力回復が早まるように添い寝されながら、死んだように眠つていた私が翌日の昼過ぎに目を覚ますと、クラスメイトたちから大量のメッセージが来ていた。未読の件数の数字を見てげつそりした。

リビングで寛いでいた巖窟王に淹れてもらつたコーヒーを啜りながら、チャンネルを

変えようとほぼ全部が雄英の失態関連なのを見てぐつたりと呻いた。こつちのメディアや民衆の傾向は最早病気だ。敵の思うツボに悉くはまり込んでいるのに気付かない。

大半が自分の体調を気遣つたり、いくらメツセージを送つても返事のない私への心配の言葉だつたりするメツセージに返信を返していると、エプロンをつけたエミヤがテーブルにトレイを置いた。

「わ、美味しそう」

「食べられそうかね？」

「うん！ ありがとう、頂きます」

さつきから良い匂いがすると思つていたら、皿に乗せられていたのはとろとろのチーズがたつぱりと一緒に挟まれたハムに絡み、目玉焼きがほかほかと湯気を立てるクロツクマダムだつた。隣に添えられたトマトとキュウリのピクルスが彩りを与えている。スープは野菜を刻んでことこと煮込んだミネストローネ。味付けの感じからして、これはエミヤではなくロビンが作つたのだろう。エミヤのはトマト缶や隠し味を使つたこつくりとした奥深い味わいだが、ロビンは材料が少なくとも出来る透明に近いスープで、野菜のうまいを感じるさつぱりとした味わいなのだ。特異点で野営をした時、焚火で作つてくれた懐かしのスープの味に、私の頬も緩む。

「体調はどうだ、マスター」

「皆のお陰で、結構魔力は回復したと思う。久々の宝具連発だつたから、きっと身体が驚いたんだろうね」

「君が縮んでから、あれほど宝具を使う機会も無かつたからある意味当然か……ともあれ、回復が進んでいるのならなによりだ。英霊の事は教師陣から緘口令が敷かれたお陰でメディアは君の功績に気付いていないが、雄英の生徒と云うだけでマスコミが寄つてくるような状況だ。外出はおすすめできない。……今日ばかりは家でゆっくり休んでもバチは当たらないと思うがね」

「……そうだね。そうするよ」

夢幻召喚

教師陣からのオーダーは「本気でやれ」だ。恐らく鋭い先生方の何人かは調整中の『夢幻召喚』をご所望なのだろう。英靈召喚は目立ちすぎる。なにしろ、個性で人手を増やせ、しかも全員（作家とか例外はいるが）戦闘や一芸に秀でた達人ばかりである。悪用を考えられたらキリがない。それなら、まだ英靈の概念を纏う方がリスクが低い。覚悟は当に決まっている。

私は目を閉じて、控えていてくれた彼女に、肉体を委ねた。

「さあ、久しぶりの戦闘だ！ 派手に行こうじゃないか」

雰囲気が一変する。緩やかに波打つ黒髪が鮮やかなマゼンダへ花開くように色を変え、瞳は血の赤から宙の^{ソラ}ような蒼冰色へ。額から斜めに横切る大きな縫い傷が穏やかな花貌を野生的に彩る。薄い霧が晴れる頃、胸元がざつくりと開いた紅のサーコートを纏つた麗人がそこに居た。その出で立ちは普段の彼女のヒーロースーツと酷似している

た。ただ一つ違うとすれば……手慣れた動作で腰のホルスターから引き抜き、くるりくるりと手の中で回してから同時に両手で照準を淀みなく合わせてみせる技量、その手に握られたクラシカルな鈍い金色の二挺拳銃が異彩を放つ。星合千晶の名残を残しながら、それでも別人の気配を漂わせる目の前の友人に、轟は目を見開く。

「な……んだ、その姿は……」

「何、アンタがとつときの左を使つたんだ、ならこつちも全力でお相手するつてのが筋つてもんさ！ そういうことだよ、お前さん。

「ああ、勘違いはしないでおくれよ？ ちよいとこのスタイルは燃費が悪くてねえ。最近調整がついたところさ――出し惜しんでた訳じやないが、何事にも使い所つてもんがあるだろう？」
マスター
 提督はこの戦いに意義を見出した。アタシを纏つたつてのはそういうことさ、光栄に思いな」

朗々とした張りのある声は千晶のものなのに別物に聞こえるのは、普段の彼女とかけ離れた口調と喋り方だからだろう。冷静沈着、穏やかな気風の千晶が豪快で男勝りな言葉遣いをしているのだ。見た目も大きく変化しているのも相まって、余計に別人にしか見えない。まるで――別人が彼女の身体を借りて喋つてているような異物感。頭のなかで翻訳する過程で彼女の喋る日本語は少し丁寧になつてているらしく、英語ならもう少し口調は荒いといつだつたか千晶が言つていたが、それでも彼女のもつ本来の雰囲気とそ

ぐわない。

スカーレットを纏う麗人は青い眼を僅かに伏せ、ココではないどこかを見つめるような遠い目でぼやいた。

「……ああ、ちよいと喋りすぎたね。悪いね提督。さあ小僧、怖氣づいてビビってんじやないだろうね？」

「……その風体については後で聞く。……やることは変わらねえ、倒す、それだけだ」「アツハハ！　いいじゃないか、かかつてきな——満足させておくれよ？」

片眉を跳ね上げ、片目を眇めてスカーフエイスが挑発的に歪む。と同時に腕を伸ばして定めていた照準を外し、銃口を上に向けるように肘を曲げ顔の横に拳銃を掲げた瞬間、その後ろの空間から波紋が生まれ、黒に金の縁取りがなされた大砲——カルバリン砲の銃身が現れる。銃口だけのそれは巨大にして無機質。非現実的な光景のはずなのに、無慈悲に命を奪う機構の物々しさを放っている。

「流石にアタシの船はココでは召喚出来ないけどねえ、弾を込める砲台さえあればいいのさ」

観客の誰かが叫んだ。武器の持ち込みは不可だろうと、闘志を駆り立てるような熱気をにわかに帯びていた場に水を差す発言だと気づかないまま、心のまま沸き起こった義憤を吠え立てる。何故止めないのかと、その場から動く気配のないセメントスやミツ

ドナイト、放送席の相澤やマイクに異議を唱えるが、彼らが対応する前にああ？とぐるり首を巡らせた千晶ドレイクが胡乱げな顔つきでその観客を大観衆の中から迷うことなく見上げた。間接的にマスターを侮辱したにも等しい男に、嵐の王として酷薄に光る青の眼光を飛ばしながら。

「野暮なこと言うねえ、アンタの目は節穴かい？　観てただろう、この子は武器なんざ一
つも持ち込んじやいない。それを見逃すようなタマじやないよ、こここのセンセイたち
は。アタシはこの子のチカラのほんの一部分に過ぎないのさ。銃も砲台もアタシを解
除すれば夢幻と消える。そもそも——この銃口しか無い砲台をどうやって持ち込むつ
てんだい？」

「ぐつ……」

「ええ、彼女は武器一つ持ち込んでいません。身につけていたのは個性発動のために必
要な最低限の品のみ——それも武器ではない道具です。あの銃も個性で作成したもの。
故にルール違反ではありません」

ミツドナイトの援護射撃に二の口が告げない観客に、呆れ返つてため息を鼻に抜けさせたドレイクはまあいいさ、と大仰に肩をすくめた。興味を失くした表情で顔を轟へと戻す頃には獰猛な笑みをその顔に浮かべながら。

「安心しな、情けなんぞ持ち合わせちやいないが——アタシだつて加減は弁えてるさ。」

この子がアタシを選んでくれた理由も。そういうわけで本気で働かせてもらうけど、殺し合いはご法度なんだろう？ 死なない程度に威力は抑えるさ——そら、避けれるもんなら避けてみな、当たつたら碎けるよ！」

「！」

銃口が燐光を放つ。集まつた粒子が収束し、紫や金の魔力光が幾条ものビームとして轟へと真っ直ぐに放たれた。速いがビームゆえに直線的に進むビーム。慣れれば射線の着弾点を予測することは容易い。轟の動きを先読みして放たれる乱舞、氷の一斉射撃よりも避ける難易度は低いそれを、轟はジグザグに避けながら少しづつドレイクとの距離を詰めていく。遠距離砲撃なら、銃口そばにいるドレイクに肉薄すれば反撃し難くなると考えながら。

「撃て撃て撃てええ！」

「（冷静に対応すりや避けられなくはねえ……が、避けるので精一杯だ。狙いが荒いように見えて、実際最短の逃げ道は防がれて反撃させてくれる余地もねえ。砲弾じやなくビームなら弾切れを待つだけ無駄だ、チャージゼロの連射は厄介だ。あの砲撃とまともにやりあつてたらこっちの体力だけ削られてジリ貧は確実。懐に潜り込んで砲撃の邪魔さえ入らなければ、氷結か炎での攻撃が届く）」

「そら、弾薬追加だよ！」

凌ぐので精一杯な己に歯噛みしながらも、じわじわと前進していく轟にドレイクは獰猛に笑う。

最初の砲撃から彼我の距離が半分に到達すると、砲撃に加えてドレイクが操る二丁拳銃の銃口が火を噴いた。絶え間なくリロードされ連射される乱射が正確に轟の足場近くを抉っていく。避けきれなかつた魔力で出来た銃弾が数発轟の足をかすめ、貫通した。

「ぐつ！」

やられてばかりでたまるか、と轟が苦し紛れに放つた炎の渦はビームで相殺されながらも、その執念の一端がドレイクに届いた。サーフィンの裾が炎に舐められ、焦げ跡を残し裾がほつれる。飛び退りながらそれを確認したドレイクは目を丸くした後、呵呵大笑した。

「いいねえいいねえ、流石はこの子が認めた男！　奥の手使つても向き合おうとした人間！　折れない気概、大いに結構！　そんなら出し惜しみはナシだ、派手に使い切ろうじゃないか！　――野郎ども、時間だよ！」

ドレイクは上機嫌にそう笑うと、天に片方の銃口を突き上げ、どこか此処ではない遠くへ呼びかけるように、腹の底から吠え立てた。拡声器など必要ないほどにコロシアム全体に轟く咆哮。その瘦身から放たれた霸氣と大音声がビリビリと空気を震わせ、聞く

者の一切を震え上がらせる。世界一周を成し遂げた偉大なる大海賊、イギリスを大英帝国に押し上げた太陽を落とした女、すべての海を繋げてみせた星の開拓者が、嵐の夜と亡霊の群れを引き連れて嗤う。

砲台の後ろに顕現するは無数の霧で構成された亡霊の帆船。ガレオン船に備えられた砲台が一齊に轟へ照準を合わせる。

「嵐の王、亡霊の群れ！」——ワイルドハントの始まりだ！」

——宝具・限定解放。『ゴールデン・ワイルドハント黄金鹿と嵐の夜』。

21 グラムの無限大

「あれ、なんか校門のところ騒がしい」

「どうしたんだろ」

授業を終え、学校に残つてテストに向けての勉強をしていて普段より帰る時間が遅くなつた。

一緒に勉強していたお茶子やイズク達と学校を出ようとしたり、妙に校門の近くで生徒が一方向を見て騒いでいたり、立ち止まつたりと奇妙な動きを見せていた。……主に女子生徒が。

疑問に思いながらも近づいたところで、その視線の先に居た人物にぎよつとすることになる。

「え」

校門前の通りの端に停まつていたのは黒に金と赤のラインが流線型を描く大型バイク。その側面に寄りかかるようにして立ち、暮れなずむ空をぼんやりと眺めていたのは、白髪をそよがせた細身の男性——カルナだつた。きらり、と左耳の耳輪が揺れてき

らめきを放つ。

しかも一瞬誰かと目を疑つたのは他でもない。

カルナはインド神話の大英雄。知名度、実力ともに英雄王とも並ぶトップサーヴァント。その名に恥じない実力と比例して、魔力燃費が物凄く悪い。常時纏う黄金の鎧、武器の神槍、敵の宝具でさえ溶解させる太陽のごとき魔力放出と、尋常ではない魔力を食うのだ。並みのマスターでは不死の黄金の鎧はもちろん、インドラから賜つた雷光の必滅の槍『日輪ヴァサヴィ・シャクティよ、死に隨え』の維持すらままならないほどだ。私は特殊な体質と指輪からの魔力サポートで問題ないが、戦闘モードではやはり消費量が大きい。カルナもそれは重々承知で、私の負担が減るように普段から動いてくれている。本当にできた相棒である。

なので普段は魔力消費を少なくするために、家にいるか靈体化しているかのどちらかで、家に居ても服に頓着しないからシンプルに黒のVネックにズボンという出で立ちばかりみていたせいで、完全に省エネモード、つまり武装解除してオシャレな現代服を着ているのが見慣れなかつたせいだ。

なにしろカルナは顔がいい。古代インドでは鬚があつて体格がいい方が美形という基準だったので、御者の息子という身分の低さも相まって、瘦せぎすで母がカルナを生んだ動機が不純なために姿が濁つっていて不気味に見えたというカルナは、生前はそれほ

ど異性にもてなかつただろうが、現代の美的感覚では弩級の美形に当てはまる。サヴァントは美形ぞろいだが、神性が高いほど直視しがたくなるような美形度が増すのだ。カルナ・オジマンディアス王・ギルガメッシュ王、あと神性は関係ないがガヴェイントとランスロットが並んだところを見て何回直視できずに腕をひさしにしたことか。目の保養通り越してあれは物理的に痛い。

カルナは太陽神の息子とあつて白皙の花貌である。神の子なのに親に捨てられて貧困層で育つたせいか、サーヴァントの今も少々細身すぎるが、今日の服装は貧相に見えないような厚地のコーディネートだつた。

ファー付きの黒革のショートジャケットにVネック、細身の黒スキニーにごつい男物のブーツ、軽く腕まくりをした細い手首には金のバングル、そして黒手袋。アルジユナに射落とされた首の傷は私の天秤の令呪の金の飾り付きの黒革のチョーカーで隠されている。お前はどこのV系バンドマンだと人目がないなら蹲りたかつた。私特攻過ぎてクリティカルヒットだ。いやあまりに似合いすぎて目の保養ですけども。誰だコーディネートしたの。鈴鹿か？ 玉藻か？ マタ・ハリか？

「うわあ、あのお兄さんかっこいい……！」
「誰かのお兄さんとか、知り合いかな……」

「……カルナ」

「えつ」

思わずぽろりと名前を呼んだ瞬間、完全に他人事だった二人がギョッとした顔でこちらを向いた。

「知り合いか、星合」

「どうか家族みたいなもの……」

「え」

さらに轟と飯田くんが何故か固まつたところで、カルナが不意に顔を上げてこちらを見た。多分魔力バスを辿つて近づいてきたのが分かつたのだろう。視線が迷わずこっちを見てきた。

「マ、……千晶、迎えに来たぞ」

「（マスターって言いそうになつたんだな）びっくりした、どうしたの、急に」

「なに、今日は遅くなるとエミヤから聞いてな。……しかし、勉学のためとはいえ、日没を忘れてまで耽るのはいささか不用心に思うが」

びくりとも動かない美貌は全くの無表情、目つきは鋭く、余分のない直截な言葉は淡々としているからこそ、余計に鋭く感じる。私はこの物言いに慣れているし、「勉強熱心は良いが、こんな時間まで残ると帰り道が危ないだろうと思つて迎えに來た」といつ

たところだろう。言葉の足りなさはだいぶ改善されてきたのに、オブラーートゼロのせいで妙にキツく聞こえてしまう罠。生い立ちの貧しさは私も同等ではあるが、この人の場合ダイレクトに損に繋がっている気がする。何か背後の轟の気配が剣呑になつた気がするんですけど気のせいですかね（遠い目）。

「気を付けるよ。ごめん、迎えも來たしこの人と帰るね」

「あっ、うん！ 気を付けてね！」

「千晶ちゃん、また明日ね！」

硬直から解けた二人と、黙つて手を振る後ろの二人に手を振り、カルナから渡されたヘルメットをかぶる。カルナの後ろにまたがつて腰に手を回せば、手慣れた手つきでエンジンを掛けたカルナはハンドルを握つた。

「行くぞ、しつかり捕まつていろ」

「うん」

軽く回していた手をしつかり腰に回すように腕を誘導され、その通りに従つて細身の背中にびつたりくつつけば、黒の鉄馬が唸りを一つ上げて加速した。密着する恥ずかしさとか散々担がれたり腕の中に庇われてたりしていて今更ですな。恥じらいが無いとは言わないうが。

騎乗：Aのクラススキルは伊達ではなく、バイクに乗っているところなんて見たこと

がないから恐らく初運転だろうに、非常に乗り心地がいい。カルナの場合、マハーバーラタによれば生前は戦車を駆つて弓を主武装に戦場を駆け巡っていたのだ。『無冠の武芸』が示すように剣と槍でも無類の強さを誇り、アルジユナの父インドラから必滅の槍を賜つたことからランサー適性があるのだが、アーチャーやライダーでの召喚も在りうるのだから、騎乗スキルが高く、現代の乗り物だと例外なく乗りこなせるのは当然だつた。

頬を押し付けるようにくつづいていた私は、似たような状況があつたなど記憶を捲つた。

「そういえば、誰かにバイク乗せてもらうの、新宿以来だなあ」

「そうか、生憎オレはその時のことを映像でしか良く知らんのだが……」

「あの時は悪属性で固めたからなあ……善属性が皆連れてつてもらおうと悪いことをしようとしたストライキ、今思いだしても可愛すぎて死にそう」

太陽系サーヴァント、つまり善属性が主力に多い私のサーヴァント、及び立香のサー・ヴァントたちが、可愛らしいレベルで精一杯思いつく悪いことをしていたあのストライキはスタッフが映像に撮つて永久保存版を作つたレベルで可愛かつたのだ。マシユの食事の後の片づけを手伝わないとかなにそれ可愛すぎかよ。カルナはオルタ化すればいけるか、なんてそもそもオルタナティブな一面もない根っからの聖人なのに真剣に悩

んで、悩みすぎて直接私に相談しに来るし。あの時は尊さでベッドに倒れ込んだ。

とはいえる特異点は悪属性でも無ければ息が詰まりそうなほどの悪性の街だつた。H Lとどっこいの犯罪都市が新宿に出現するとか訳が分からなかつた。散々裏社会に属していた私にとつてはあの手の都市は慣れたもので、できれば立香は留守番してもらいたいくらいだつたのだが。

アルトリア・オルタのバイク、キュイラツシェ・オルタの後ろに乗つて、ノーヘルで中央道を速度制限? 知つたことかどばかりにカツ飛ぶように移動し、新宿のバーサーカーと空前絶後の鬼ごっこを繰り広げたのは記憶に鮮烈に残つてゐる。

「……その時のことは映像越しではあつたが、少し悔しい、と葛藤したのを覚えている」「うん?」

「ライダーのクラスでの現界であれば、戦車に乗せることもできたのだが……望んでも得られない話をしても意味がない。だからこうして鉄馬と共に驅れるというのは、得難い僥倖に思う」

「…………」

「クリスティアナ?」

不意に黙り込んだ私の怪訝に思つたらしいカルナが、ちらりとヘルメットのバイザー越しに振り返る。私はそれをポカンと見ながら、半ば茫然とした面持ちで呟いた。恐ら

く意味を履き違えていなければ、彼は。

「カルナさんや」

「？」

「……もしかして嫉妬ですか」

「！」

丁度赤信号にさしかかり、バイクを減速させたタイミングでの眩きに、カルナははたりと口をつぐんで、スマーケの掛かつたバイザー越しにも分かるほど、白皙の頬を赤く色づかせた。

「……む、そう、見えたか。そうか……そう、かもしだん。あまりこの手の感情を覚えたことがないので、良く分からんが……人の機微に聴いお前が言うのならば、りんき惰氣、というやつなのだろう」

ヘルメットのせいでより聞こえづらくはあるが、珍しくもごもごと喋る相棒に、私は深々と溜息をついた。背中に首を預ければ、カルナがおろおろする気配があつたが、こちらはそれどころではない。なんだこのかわいい生き物。

「君つて本当に尊いよねえ…………」

アルトリア・オルタとバイクに乗つてコンクリートの戦場を駆け抜ける姿を見て、何

故か先を越された気分で実はモヤモヤしていて、でも他の特異点でもH-Lでもそんな機会は無かつたから、こうして二人乗りが出来るのが嬉しいだなんて、人たらしにもほどがある。

施しの英雄、頼み事をされれば敵であろうと断らない徳の高い聖人。アルジュナさえ絡まなければ快樂に無縁で我欲とは程遠い人格者が、たかがいちマスターとの相乗りに固執したと聞いて、感慨を抱かずにはいられない。大事にされている、ということは承知していた。過去の聖杯戦争で出会つたことがあるという玉藻やジークフリート、天草、立香の召喚したジャンヌたちからそういう意味の言葉を掛けられたことは数えきれない。マスターに従うことを第一義とするとはい、私への対応は自分が知るそれより、やや過保護なほどだと。

英靈は死後に意識が変わることはほとんどない。英靈は過去の人物の影法師。よほど鮮烈な思い出でなければ、座にいる本靈に影響し、聖杯戦争に呼び出される他の分靈にまで変化が及ぶことは、少ない。カルナの場合はよく話に出てくるジナコというマスターの「誤解されるのは伝えたいことを途中で切るからだ」にえらく衝撃を受けたらしい。うん、私もそう思う。

……私に対して行動が他の英靈の知るものと違うのならば、かつてジナコというマスターの通り、私も少なからず影響を与えているのだろうか。

私の唯一無二のランサー。常に私の行く闇に染まつた道を明るく照らす、日輪がひとり。私の生涯において得難い相棒であり、畏れ多くも兄のように、欠けた己の半身のよう慕わしい、無双の大英雄。

本来なら、人理修復をもつてカルナを始め、共に戦つてきたサーヴァントとは今生の別れになるはずだつた。けれど、彼らは自らの意志で、ダ・ヴィンチちゃんの作った指輪に刻まれることを是とした。まつたく成立系統の違う異世界、本霊から離れ、還るべき座のない世界に私と共に征くことを決めてくれた。その重大さが、自分もその立場だつたからこそ分かる。世界の異物となつてでも、私を選んでくれた彼らは、もう何があろうと手離せない、私の尊い友人たちだ。

願わくは、この身体が朽ち果てるまで共に、どこまでも往こう。あの万能の人が望み願つてくれたように、この人生をより良く、より長く、幸せに生きられるように。マシユの言う通り、私の人生の価値が決まる最期に、幸せだつたと笑えるように。どんなに波乱と苦悩に満ちた旅路だつたとしても、彼らという頼もしい味方がいて、この世界で出来た友人たちがいて、元の世界に帰るべき場所があるのなら、もう、ひとりではないから。

「……きみを、きみたちを愛しているよ」

「……ああ。オレも、オレたちも、そうだとも。クリスティニア・I・スターフエイズ。
我らがマスターよ」

腰に回した手に、そつと片手が添えられる。槍を振るうその手は、手袋越しにもあた
たかくしつかりとしていて、すこし、涙が出そうだつた。

言靈幸ふ森

「ロビンのステップを飲むとほつとするわ」

焚き火に照らされた横顔が緩む。

俺たちのマスター。その細い肩に人理という重い命運がのしかかっている。

人理とは、人間という種が歩んできた歴史の航海図。人類が過去に歩んできた途方もない時間の積み重ね、研鑽そのものだ。まだ正体もわからない敵は、それを燃やし尽くしてしまった。過去、現在、そして当たり前にあるはずだった未来をも。

彼女はこんなバカげた戦いに参加するはずもない人だつた。レイシフト適正だけで招集された数合わせの一般枠ですらない、完全なるイレギュラー。彼女が救おうとしている歴史のどこにも彼女が居ない、莫大な織物のほころびを繋ぎ合わせようとしている。それも、彼女にとつては関係のない、異世界の全人類の存亡をかけた戦いを、だ。メリットは皆無で、考えられるデメリットばかりが山のように積み上がる。たとえこの戦いが勝利に終わつても、未来を取り返すという報酬すら、彼女には与えられないのだから。

人道的にもどるとしても、投げ出すことだつて許されるはずだつた。彼女がマスター

となる義務はなく、義理さえも無かつたのだ。

けれど彼女はマスターになつた。修羅の道を選んだ。

もうひとりのマスターのような底抜けのお人好しでも無いくせに、どうしてそこまでするのかと尋ねたことがあつた。成り行きで否応なく巻き込まれたにしては彼女は能動的だつたし、敵に対する悪態こそ吐けど、弱音も泣き言も、文句の一つさえ零すことはなかつた。

そんな俺の疑問に、彼女は大したことでもなさげに軽く言つてのけるのだつた。

「立香だけに負わせられるわけないわ、こんなにも潰れそうな重圧」

「だから私がちよつとだけ、あの子たちのための緩衝材になる。あの人人が私にそうしてくれたように」

「大丈夫、『ロビンフッド』。名も無き森の義賊だれかさん。世界を救うことは、人類を護り未来へ繋ぐことは、私が選び取つた天命で、逃れることも出来ない宿命だから」

世界を救うという重圧がどれほど重い鎖になるのかを、このお嬢さんは知つていた。けれどそれ以上に、自分が投げ出した後に人類に襲いかかる理不尽な暴力を、抗うことのできない猛威を、未来がないという滅びを、この世界の誰よりも明確に想像できた。できてしまつた。

だからこそ、彼女はマスターとなつた。流されてではなく、自分の意思でその立場を

選び取つた。

そこに生きたいという渴望は無かつた。やれる力があり、そうするべきだからするだけだという意思があつた。出来る限り死からは抗おうとはするが、あくまでその足搔きの原点は死んでは立ち行かなくなるからという、役割からくる責任感に過ぎない。死ぬ時は死ぬだろうという、その年齢で得るべきじやない乾いた達観があつた。

きっと、もうひとりのマスターと自分のどちらかしか生きることが出来なくて、他の方法も抜け道も無いと、二人が生き残る方法が何一つないのだと悟つたら、何の躊躇もなく自分を殺してみせるのだろう。容易に想像できてしまつた。世界の中に自分が居たいという渴望一つ、持てないまま大人になつてしまつた彼女だから。

だから。

絶対にこの旅は負けられない。彼女をこの世界に殺させるわけにはいかない。それは、俺以外のサーヴァントも、カルデア職員たちも願うこと。

「そりや光栄ですわ、マスター」

夢に視た惨劇を想う。語り継がれる英雄譚のような劇的すぎる人生。その半生が悲劇に満ちてなお、この人は衆生に幸せを望むのだ。ありふれた日常を。人間の及ばない技術や存在に脅かされることのない平穏を。望めば望むほど、自らは戦場という最も遠い場所に遠ざかると知つても、その魂をごうごうと燃やし続ける。

目覚めた時に決意した。あんたがマスターだと認めよう。俺の毒や罠という戦法を良しとするあんたを。どこかの誰かさんに良く似た人生を送つてきて、なお折れないあんたを、俺は支えよう。

無念の中死ぬことがないように。

生きて、あんたが会いたい誰かに会えるように。

見返りを求める人間らしい欲すら、誰かから享受する喜びを、ほんとうの意味で知ることの出来なかつたあんたが、どうか少しでもしあわせになれるように。

初めて言の葉に乗せた呼び名に、あんたはちよつと間を置いて、照れながらも花のよう年に相応にわらつた。

光輝救済聖典クルクシエートラ～神の詩～

「貴方だけいて下されば、私は——」

「■■■、お前は神の怒りに触れたぞ」

「知つていたつて受け入れられるものが、こんな、こんな——!!」

ただつ広い荒野、つい先程まで操つていた、こんな結末になつた車輪の取られた戦車、そして青い矢の持ち主からも、遙か遠くまで落ち延びて。膝に抱え込んだ私の大事な英雄は、消えゆく命の灯火の最後を燃やして、満足に上がりもしないだろう片腕を持ち上げようとして、数センチも浮かせずに力を失くした。空よりも蒼い瞳がどんどん濁りを増していくのが、あまりに悔しくて、哀しくて、やりきれなくて。血にまみれた白皙の頬にぼろぼろと涙が滴り落ちながら、己の無力さに血が出るほど唇を強く噛み締めた。

そんな私を見た彼は、喉まで迫り上がつてむせた、自分の血で溺れるような鈍い水音の混じつた浅い呼吸の合間に、ふ、と薄い笑い声を混じらせた。

「泣いてくれるな、青蓮。この有様では、お前の頬すら拭つてやれないのだから……」

＊＊

目を覚ましたら、見知らぬ森の中の、泉の中に立っていた。

もつと正しく言うのなら、薄紅色の蓮が咲き乱れる泉の中に、ひとりわ大きく咲いた青蓮の花弁の中に居た。……花の中に人とは、グリム童話で似たような話を見たことがあるようだ。

萼から花弁の先にかけて、純白の白から夜明けの空のような、忘れな草色に移り変わるほつそりとした花弁は美しい。人一人をすっぽり覆えるほどの花の大きさは少々異常なまでの成長にも思えるが、ここが夢ならばしようがない。

そう、きつとこれは夢だ。

明晰夢、という言葉をご存知だろうか。なんのことではない、自分が夢を見ていると認識して見る夢のことである。今の私がそれだつた。

私は普段、あまり夢を見ない。睡眠時間が少ないというのもあるし、気絶するように深く眠り込んでいつの間にか朝が来ている、なんてことがざらだつたことも関係しているだろう。見たとしても覚えているのは悪夢ばかりで、それに比べて穏やかに見れる夢が増えたのは、マスターとなつてサーヴァントたちの生前を垣間見るようになつてから

だ。今回はそれに似ていて、きっと今回もそうなのだろう。根拠はないが、夢に整合性を求めて疲れるだけだから、それ以上考えずに私は花びらの外へと足を踏み出した。

ぱしゃん。

水面に踏み出せば、靴面から幾重にもさざなみが起ころる。ふわりふわりと弾力のあるゼリーを踏むような、それでいて跳ね返されるクツショーンのような柔らかさを感じながら水の上を歩く私は、はたから見ればさぞ滑稽だろう。いや、天草だって水の上を歩いたという奇跡——実際は本人曰く、無意識に使っていた魔術らしいのだが——を生前成しているのだから、なんとも言い難いのだが。

水晶宮式血濤道、乙の舞“水蜘蛛”。水を凝集させ、表面張力を人体を支えられるレベルまで一時的に上げる技を用いながら、泉の中心から数メートルほどの距離にあるほとりまで歩き、ようやく靴底が地面を踏みしめた。

「これは驚いた」

枯れ木のよくなしわがれた声が響いて、声の方に緩慢に振り返った。目を向けた先には、深くフードを被つた老人が木製の身の丈ほどの杖を胸元に抱え込み、片膝を立てて大きな巖に座していた。全く気配一つさせなかつたその老人に片眉を跳ね上げていると、唯一見える長く伸びた白髪が震えた。

「神の愛し子にお目にかかるとは
「……貴方は」

「なに、儂はしがない世捨て人。リシ、と呼ばれるもの」
仙人のようなものだろうかと思つて眺めていると、老人は節くれだつた指先を持ち上げ、一つの方向を指さした。

〔太陽と水、風の神々の気配をもつ愛し子よ、
青蓮より出でし蓮女。^{うつくしいひと}このまま山を
下つていきなされ。そこに貴方の運命が居よう〕

〔……運命?〕

「然り。その気配を持つならば、かの者と出会うは必定。いずれ巡り合うとしても、神々の詩という定めがある以上、出会いは早いほうが宜しい」

「そう。ありがとうございます」

指し示した方角に足を向け、泉から離れる。足の進むまま、流れるままに歩を進めれば、いつしか周囲の景色は人里離れた深い山中から、むせ返るような熱気が吹く、人の街らしき場所に変わっていた。急な場面転換に意味は無いのだろう。不必要な時間経過を削つてくつつけたような乱雑さが許されるのも、曖昧な夢ならではとも言えた。

肌が焦げるような熱を感じる。むせ返るような風は砂つぶをはらんでいるようで、撫でるというより触られているようなざらりとした感触。

ぱつと目を見開いた途端に差し込む日差しの強さに、一度目をつぶつた。

瞬きをする。もう一度開いた視界には、カルデアの雪と氷に閉ざされた岩山などではなく、それまで見ていた緑と水気に満ちた森でもなく、赤い砂と土の大地が広がっていた。

さつきまでのおとぎ話のような光景とはうつてかわって、人の気配が身近な場所に変わつたためか、ぼやけていた意識が徐々にはつきりとしてくる。

ふとずきりと頭に痛みを覚えてこめかみを押さえる。USAが誇る東海岸の一大都市、眠らぬ街、元NYとは真逆だつた、コンクリートの気配もないだだつ広い赤茶の大**地**。世界各国の影響力から遠ざかるために地球の極点に所在を置くカルデアともまた違う。ただ眼前にあるのは土と、所々に点在する木々と川、石造りの建物ばかりである。通りに面して建てられた屋台に積み上げられているのは、金銀の糸を縫い込み複雑な紋様を凝らした薄絹……インドで女性が纏うサリーのようなものだつたり、水を汲むための甕や壺、細工品や木工品。賑やかしい屋台に目を奪われながらも、ぐいと引っ張られるような感覚を覚えて、私はとある場所に移動していた。

再び目を開くとそこは大観衆がひしめく闘技場だつた。観衆の注目の先には二人の青年。その片方、原始的な造りながら一目で生半可な力では引けぬ豪弓だと見て取つたそれを簡単に引き絞つてみせた白髪の人物に、私はこの不可解な状況の全てを理解し

た。周囲の人間の文化レベルから中東からアジアまで絞っていたが、ようやくこの夢の主に思い至つたのだ。よくよく見れば己の身体は半透明で、観衆の身体が触れても感触は感じずただすり抜けるようになつていた。

ああ、これは。

「——君の夢か、^{生前}カルナ

一応、カルナを召喚する前から、マハーバーラタは読んだことがあつた。流石にサンスクリットの原文は読めないのでアルファベット表記に翻訳されたものだ。教養と暇つぶしにさらつと読んだ程度だが、勸善懲惡であり、終盤のクルクシェートラの戦いでアルジユナがカルナを討つまでの経緯に至つては明らかな神々のアルジユナへの身贋員が過ぎて、出来レース……と苦々しく思いながら読んでいた。

確かにカルナはその不死たらしめる黄金の鎧を失つた状態でも勝てないと神々に戦慄させた上、実力のほとんどを発揮できない状態にあつて、相対したアルジユナやその従者クリシユナを何度も追い詰めるほどの武芸者だ。でもそこまでやるかこの野郎と思ひながら読んでいた記憶がある。カルナが仕えたドゥルヨーダナは生まれたその時から呪いの子、不吉の子として周囲から奇異な目で見られる悪として描かれ、カルナも悲劇の英雄としての側面は強いが、その生い立ちなどには私も共感を覚えていた。だか

らこそアルジユナへの神々の施しが気に食わなかつたとも言えるが。

そんな気持ちは彼を召喚して、改めて叙事詩を開くまで久しく忘れていたのだが——だからこそ、私は彼を召喚したのかもしれない。

イーリアス、オデュッセイアと並び世界三大叙事詩と呼ばれる大英雄譚。ラーマが活躍するラーマーヤナと並びインドが誇る金字塔、マハーバーラタ。偉大なるバーラタ族の物語という意味の聖典である。

その只中に傍観者としてでも自分がいるというのは、なんとも言い難い奇妙さがある。しかも善側のアルジユナに視点が多く置かれる叙事詩において、悪役であるカルナ側の視点から眺めることになるだろうと思うと、余計に。こちらの世界の神話は誰かの創作や語り物ではなく、遠い昔に「実際にあつた」とされる伝記ものだからこそ、カルナやアルジユナ、その他の天属性のサーヴァントが召喚できるのだが……伝説、作り話としての先入観が強い私としては、奇妙な心地になるのは無理もなかつた。

「……君が殺される場面を見た時、平静でいられる自信がないなあ」

これがカルナの夢であるなら、幕引きは必ずカルナの首がアルジユナの矢によつて飛ぶシーンであろう。人理修復において最も頼りにしてきた相棒が実力を発揮できないまま卑怯な仕打ちで殺されるところを見て、夢から覚めた私はどんな顔をしてカルナや

アルジユナに会えばいいというのか。たとえ戦士としてのしきたりを破つてでも宿敵が自分を殺そうとしたのが喜ばしいという、カルナにしてはえらく仄暗い喜びを知つても、だ。結末を知つても、心に小さくないダメージを食らいそうで恐々とする。剛弓を引き絞り的に矢を当ててみせたカルナを、文化的に仕方のないこととはいえ、身分の貧しさを理由に約束のはずの婿取りを拒否する見る目のないドラウ^{お姫様}パデイーを白けた目で一瞥し、さっさとカルナに目を戻す。

カルナはいつも目にしている身に沿うぴたりとした黒タイツ的な出で立ちではなく、古代インドらしい衣服を身にまとつていた。ただ肌面積が広いので、ゆつたりしたつくりの服だというのにより細身に見える。ぴちぴちタイツより服を着ている方が目の置所に困るとは思いもしなかつたが、よく似合っている。

その後颯爽と現れた布を頭に巻き付けた色黒の青年——神性の血でも引いていない限り、人の身ではとても引けそうにない剛弓を引き絞り矢を中ててみせた彼は、目深にかぶつた布のせいで顔が見えないので確証はないが、恐らく伝説通りならばアルジユナだ。ドラウパデイーや彼女の父であるドルパダ王が彼に駆け寄つていくのを傍目に、私は一人ごちた。

「他の誰が認めずとも、私は貴方を、貴方の武芸を称賛するわ。あの日私を、私の生き様を認めてくれたように」

無冠の武芸。そのスキルの名の通り、生前、様々な呪いや制限によつてその真価を發揮すること無く終わつた、誰にも認められることのなかつた弓、戦車、そして槍の、比類ない究極の武芸をカルナは身につけている。このドラウ・パデイーの婿取りでも分かる通り、作中でカルナは身分の貧しさを理由にその武芸を正当に評価されないことがほとんどだつた。

きっと彼の性格ならば、袖にされたことも致し方無しとあまり気にしてはいないうが……それでも彼のマスターとしては、幾度も力を貸してくれた彼を、魅せてくれた槍の武芸をないがしろにされるのは我慢ならない。けれど実体を持たない、目の前の記録を眺める亡靈の声では誰にも届かないだろうから——せめて、この記録をもつ彼に伝わればいいと、つぶやいたのだ。

カルナ。そう声に乗せた呼びかけは、そう大きくは無かつたはずだ。婿が決まり湧く武闘場、アルジユナとドラウ・パデイーに観衆が注目し大歓声を上げる中に紛れてしまう程度の小さな声。

だが、闘技場の隅で行末を眺めていた背中が、勢いよくこちらを振り返つた。

「——!!」

真実を見透かす蒼氷が、はつきりとこちらを捉えて驚愕に丸められる。かち合うはずのない双眸、だのにカルナは、一瞬虚を突かれた顔をした後、真つ直ぐにこちらに向かつ

て駆け出してきた。触れられないとはいえすり抜けられる感覚は気分が良くなくて、人混みに紛れるのを嫌つてふよふよと虚空に浮いていた私めがけて、一目散に。嘘だろ。夢のかたちでサーヴァントの生前の記録を見ることは初めてではなくて、そのどれもが干渉したくても声も手も届かなかつたから、予想だにしない事態に私はカルナが私のすぐ傍に来るまで呆然としていた。少々遅れてカルナの後を追つてくる男は、カウラヴァア百王子の第一王子、ドゥルヨーダナだろうか、そんな明後日のことを頭の隅で考えながら。

「オレの名を呼んだのは、貴方か」

「え、ええ。……私が見えるのね」

私を見上げたカルナの呼びかけは、あの燃える地方都市で投げかけられた最初の言葉と似ていた。お前、ではなく貴方、という敬称に内心首を傾げながら、動搖を押し殺して言葉を返した。すると、何を当たり前のことを、と言いたげにカルナが首をちよんと傾げた。

「見えていなければこうして目を合わせて会話をすることも出来まいよ」

いやはいそなんんですけども。

私を見上げてあつけに取られていたドゥルヨーダナ（仮）も、全く同じツツコミをカルナに繰り出すのだった。うーん、この天然ぶりと勘違いされやすい竹を割つた言葉選

び、出会つた頃のカルナを思い出すわ。ドウルヨーダナがアイタタな感じで頭を押さえ
る気持ちがよく分かる。

＊＊

（力尽きたので裏設定・解説をつらつらと。やや難解なので読まなくとも大丈夫です）

クリスはふと気がつくと、とある聖仙に池の中の蓮から出てきたところを助けられる。戦車の奥義など色々学を受けられた後、下山した先にお前の運命がいると告げられ、忠告に従つて下山。この時点では單なる夢と思っていたため、少々強引な話運び、急な場面転換も多かつた。そのためあまり気に留めず、話に流され従うままだつた。場面転換時に一応「目が覚めている」はずなのだが肉体と魂の分離が進んでおり、クリスにその自覚はなく一連の夢として認識されている。

下山した先にあつた街では気づけば武芸大会を観戦しており、その中にカルナを見つけ納得。カルナの生前を夢に見ているのだと認識。流石に相手には見えるまいと思つてこつそり観察していたら気づかれて驚く。

この後なんやかやでドウルヨーダナに入られて宮殿に招かれ、クリスの持ち前の見識の深さから交流を深める。その中で武芸師範ドローナの的場でアルジユナと知り合う。

あまりに長くリアル過ぎる夢に心配になりつつも流されるままになっていたが、途中で夢ではなく監獄島のように魂だけ連れてこられた。パターーンではないかと気づいたクリスは、特異点としてマハーバーラタが繰り広げられている世界を認識、聖杯を持つ誰かによってマハーバーラタが改変される危険性を考え、ドウルヨーダナ率いるカウラヴァ側としてパーンダヴァ側との戦争に挑んでいく。この特異点の終末が、きっとアルジュナとカルナという大英雄が雌雄を決するクルクシェートラの戦いだと睨んで。

マスターとサーヴァントでない、友人として関係を築くカルナとクリスだが、カルナの言動から強い親しみを感じて？ となる。カルナはクリスから父スリーリヤの加護を感じ（実際は死後スリーリヤと一体化した自分がサーヴァントとなつてから与えたもの）、耳には自分の黄金の鎧と同じ波動を発する黄金にルビーで飾られたピアスを着けていたことから、もしかしたら家族あるいは血縁かもしれないとそわそわしていた。良き友人、同胞としてだけではなく、少しだけ家族愛のようなものが生まれていた。残念ながらどれも自分で与えたものなので見当違いなのだ。

これを見逃さなかつたのは日天スリーリヤで、カウラヴァとバーンドウの対立が深まる中、与えた覚えのない加護を持ち、息子の近くに居るクリスを見定めんとカルナの肉体に憑依して接触してくる。サーヴァントのように使い魔にできるレベルにスケールダウンしている神性とはレベルが違う、神代の正真正銘の最高神の一柱とノーガード対面

を果たす羽目になつたため、流石のクリスもめちゃくちや冷汗かくレベルで威圧された。自動的に加護のバリアが強まつたので、カルデアで目覚めないマスターを心配し肉体の維持に務めていた加護を与えていたサーヴァントが危機だと察して暴れだしかけた。

また男装してカウラヴァの軍師兼戦士として戦場を駆け抜け、二つ名として呼ばれていたサラスヴァティが興味を示して会いに来たりと色々な意味でハードな出会いが待ち受けていた。

神が存在し地上に大きな影響を与える古代インド、神代であるため、神秘の薄れた現代ではあまりパワーのない加護も現実に変化を与えるレベルで大きく影響する。特に肉体の護りがないせいで無防備な魂を保護するため、余計に加護が強まつていた。太陽神ズだと、たとえ大雨が降っていてもクリスが建物から出でくるとそこだけさつと雲が晴れて太陽の光が差す。サラスヴァティの加護は水滴から白く透き通つた蓮が咲くエフェクトがマーリンよろしく歩くたびに出たり胸辺りの高さで出てきたりする（クリス本人には見えていない）

スーアリヤ、シヴァの配偶神パールヴァティ、エジプト神ラー、水天日光・天照大神の化身、アステカ文明に降臨したケツアルコアトル、バビロニア・ウルクの都市神イシュタル、ギリシャ神話のアルテミス、エウリュアレなどとかなり豪華な加護つぶりなので、

加護の証が見えるとぎよつとされる。人によつては眩しすぎてクリス本体が見えないほど。クリシュナ（アルジユナにカルナ謀殺を囁いた親友、ヴィシュヌ神の化身）は目を疑い、神々が定める戦いの結末を「居ないはずの人間」が変えてくるのではと警戒し一触即発の空気になつてまで忠告しに来るレベル。

ちなみにアルジユナの父であるインドラも、息子が気に入つた人の子を品定めするべく、スリヤのようにアルジユナを介して面白半分にちよつかいをかけようと接触を図るが、それを察知したスリヤパパによる妨害の数々により阻止される。おそらくエンカウントしていたら神話でよく語られる「神に気に入られた人間が辿るろくでもない末期」が待ち受けていたと思われるのでファインセーブ。

カルナが正史通りクルクシェートラで謀殺され、ドゥルヨーダナがアルジユナの兄のビーマによつて倒され、カウラヴァー側の敗北で『マハーバーラタ』通りの筋書きで決戦が終局した後、アルジユナは友を保護するべく、捕虜という名目で男装していた（本名は呼びにくいでティアと名乗つていた）彼女を手元に置こうとする。

しかし宮殿への護送中、厳重な警備と捕縛の中、アルジユナの目の前で哀しい微笑みを浮かべて天を仰いだ彼女の身体は、最初からまぼろしだつたかのように消え失せた。

単なる特異点ではなく悪趣味な何者かによるマハーバーラタの再演。誰かの介入によって変えられることを危惧して参戦した自分こそが唯一の異物であり、正史と何も変

わらないままのあまりに異様なひとつの編纂事象、人類記録。「存在しないもの」が物語に干渉しても、修正力によって何も変わりはしないのだと、暗躍した彼女の全ての努力を嘲笑い、厄介なマスターの心を静かに殺すために。

「光輝救済聖典クルクシエートラ～神の詩～」とは

タイトルの「光輝」とはアルジユナの異名「輝く王冠」^{キリティ}と、太陽神の息子であるカルナのどちらも指す。最初は特異点修正のために動いていたはずが、いつしかたとえ無駄だと、行き着く先が悲劇だと知っていたつて、カルナを、アルジユナを「救い」たかつた「聖典」マハーバーラタにおけるクリスの話。同じ貧しい境遇にあつた相棒のカルナを、同じ周囲からの期待と重圧に押しつぶされそうになりながら平気そうに振る舞うアルジユナを、マスターとしての使命感ではなく単なる個人として、救いたかった女の話。しかし待ち受けていたのは無情なる「あるべき結末」だつた。剪定事象とはいえ人類史にはハッピーエンドだが、クリスやアルジユナからしてみたらバツドエンドであり、決して小さくない傷を負うことになつたメリーバツドエンド。

「神の詩」^{バガヴァッド・ギーター}とは親族同士で殺し合う戦いに疑問を懐き、躊躇い迷うアルジユナに、友であり導き手としてクリシュナが「卑小なる心の弱さを捨て、クシヤトリヤとしてのダルマ（義務）を遂行せよ」と説いたもの。この時代の戦士は誰にも屈しないこと、戦いを避ける自己防衛の衝動に抗うことを主な義務とし、地位を守るためにその義務を課して

いた。アルジユナのヒロイズム、英雄的資質^{クシャトリヤダルマ}は王子として、戦いから逃げるなどいうクリシュナの忠言からなるマハーバーラタ中の哲学的意味を持つ部分である。

またマハーバーラタにおいてダルマの言葉が最初に出るのは、決戦の地であるクルクシェートラに言及する場面、神の詩が語られた場所もクルクシェートラであることから、「ダルマの地」「正義の地」「真実の地」とその場面が訳されている。勝者によつて真実が明かされる正義の地、とも読み解かれる。勝利者の考え方、意向こそ正義、真実として世に広まり認知される人類史の通例を考えると、クルクシェートラとは人間の内なる戦い、人の中で繰り広げられる悪徳と美德の戦いの寓話と後世にて解釈されているのも納得できる。神々が定めた行く末しか辿れない、神性の庇護下にある人類が未成熟な時期において、ギルガメッシュによる神々との訣別以降の人類であるクリスにとつては、許しがたい現実だつたとしても。

ハスは泥の中で根を張り、花を咲かせる属性から大地の力を秘め、豊穣、生命力を表す花として世界でも神聖視されている。綺麗な濁りのない水では上手く育たないことから、クリスティアナを表す花として選んだ。今回はアジア・古代インドでの話なので、極楽浄土がハスの形をしている思想から神々がよくハスを台座にしていること、アルジュナの矢筒にもハスが描かれていることからも。

実はハスは宗教でよく聞く「蓮華」のことを指し（レンゲソウの方ではなかつた）、しばしば擬人化されているようで、日本での吉祥天女にあたるラクシユミーなど女神たちが挙げられる中に、アルジュナ・カルナの母であるクンティーも含まれる（エジプトの女神もほぼ全員ハスや睡蓮をシンボルとしているとのこと）。ブツダ（釈迦）は生まれたばかりながら歩き出し、最初に地面に足がついたところからハスが生まれ、北に向かって七歩歩んだ足跡の一つ一つから大輪のハスの花が咲いた、という逸話があることから最初のシーンに取り入れました。ある意味マーリンさん。

古代インドでは最高位の美女のことを蓮女^{バドミニ}といい、ハスのような美しさだ、と形容したとか。

古代エジプトにおいてはハスは太陽が登る頃、早朝に花を開くため、太陽王ラーの化身、太陽の花として大切にされ、王家の紋章となるとともに永遠の命、新しい命の象徴とされた。ナイルの花嫁とも。ラムセス二世（オジマンディアス）の墓所からは白睡蓮と青睡蓮の花の残滓が発見され、クレオパトラが睡蓮の香水を愛用したという話が残っている。

またハスをロータス、睡蓮をウォーターリリーと呼ぶのに対し、インドではハスを色で呼び名を区別しているとか。青いものを「indivara」と呼ぶが、これはハスではなくて実は睡蓮。ややこしい。

西洋の聖なる花は白百合だが、ユリに關してトラウマを持つクリス（本編参照）にとつては、どちらかというとロータスの方が似合うのかもしれない。

ハスは7月8日、睡蓮は7月7日の誕生花（クリスは7／7生まれ）。夏の季語であり、7月頃の七十二候「蓮始開（はすはじめてひらく）」がある。花言葉は雄弁、遠くに去る愛、沈着、休養、優しさ、清純な心、など。

白、という意味のアルジユナと、聖なるもの、というクリステイアナを示唆するロータスに「遠くに去る愛」「清純な心」「神聖」とは中々皮肉な偶然である。クリスにはハスを添えたいと思つて調べたらこんなにしんどい話が出てくるなんて想像するかよ。またアルジユナの異名に「星のもとに生まれたもの」があるのもまたしんどい。

M a t e r i a l

マスター

其は世界を渡るもの。停滞の対極を為す者。

天と地、神に造られた人でありながら、森羅万象を操る者。

果てなき旅路を往くは、星と結晶を名に冠する者なり。

真名：クリスティアナ・I^{イグナシオ}・スター/エイズ（M H A 世界など一部世界では
星合千晶）

墮落王の気まぐれで異世界であるF G O 世界に突き落とされ、気づけば爆破テロ前のカルデアに藤丸立香とともに床でレムレムしていた人。

属性は藤丸立香同様中立・中庸だが、広義には「守りたいもののためには手段の善悪を厭わない」である。どこかの世界では10年分退行してその間の経験を全部引っこ抜かれていたが、F G O 世界で立ち向かう相手の規模のためか、世界を跨いだ際の帳尻合わせという名の補正は「魔術のような効果を生み出す血を全身に流す血管」に「魔術回路」、「特殊な血液」に「魔力」を、「血を作る造血細胞と心臓」に「魔力炉」の概念を貼り付けるに留めていた。そして「異世界を渡ってきた」事実は「異なる時代・世界に

飛んでも意味消失しない適正」としてアラヤが認識し、「レイシフト適正」にすり替わった。レイシフト適正は立香・デミサーヴァント化する前のマシユに次いで95%。

実はとある人物が常に彼女を観てその存在を確たるものにしているため、カルデアからの観測による意味消失を防ぐための存在立証は必要ないのだが、これはカルデア側の誰もあざかり知らないこと。ギルガメッシュ、マーリン、アーラシユの千里眼組も「クリスを常に観ているものがいる」まではわかるが、千里眼の範囲外にいる次元の違う場所にいる術者までは分からないので沈黙を貫いている。多分クリステイアナがそれを知つたら大体予想のつく人物ではあるのだが。

本来は魔封街結社ライブラのナンバースリーにして渉外と経理を一手に担う秘書。クラウス・ステイブンと並ぶ頭脳の明晰さと交渉術により、BBB世界（派生の『銀の弾丸』DC世界）では「思考の怪物」「現代のモリアーティ」と呼ばれるほどの世界中に張り巡らせた人脉、情報網を持つ。世界でも有数の情報戦において多大な影響力を有する一人であり、一度情報が漏れれば億の値がつくライブラにあって、積み上がる黄金より価値ある頭脳と皮肉と欲望を込めて無法者たちの口上に上のほど。ライブラの機密情報を蓄積・保管するコンソールには彼女が作った、BBほどではなくとも世界的に技術で2世代は置いてけぼりにする高性能弩級AIの電腦魔「ムネーモシユネー」が棲んでいる。

また、幻術を巧みに使い足取りを読ませず追手を撒き続けることから「霧の女」とも。その世界中の政財界の重鎮、富豪、情報屋とのコネや情報網を狙う人間は個人・組織を問わず後を絶たない。兄弟子であるステイブンと共にライブラに忍び寄るスパイ、裏切り者を処断する施設部隊を率いる処刑人という立場から（クリスはもっぱら構成員の中からグレーゾーンを選別する役割ではあるが）人類の善性を愚直なまでに信じるクラウスに対して、ライブラの暗部を象徴する。悪をもつて善を護る。たとえその手段が残酷で非道であつたとしても、善だけでは惡意に無力ならば、己の手を汚して心を殺しても、善なるものの為に惡をもつて惡を支配するのがスターフェイズ兄妹である。故に、とある惡のアラフィフを呼び寄せるは道理であり、村人の為に卑怯な手を使つても単身で領主に歯向かつた、とある貌無しの青年と気が合うのは当然ともいえる。

通常一人の人間に宿る血液属性は一種だが、B B B 世界において二人しか居ない複数属性の使い手。しかも、もうひとりは風と火の血液をそれぞれ混ざり合わないよう操作して生きている（この事実だけで同じ牙刈りにドン引きされるレベルの超絶技巧）のに対し、クリスティアナの血液は様々な属性に変化できる「無属性」の血液（属性が無いのではなく特定の属性に固定しない流動的な性質のため、誤解を招きやすいがこういつたネーミングになつた）。

最初は氷属性の血液と判定されたためエスマラルダ流に預けられたが、修行の過程で

この特殊性が明らかになつた後、牙狩り本部のタカ派が吸血鬼に対する新たな反撃の芽として実験施設に拉致し、数年間、クラウスとステイプンに助け出されるまで、実験動物じみた扱いを受け、拷問まがいの研究を受けることとなる。

その際に誘拐と実験を指示した上層部はラインヘルツ家とエスマーラルダ流によつて牙刈りを追われているが、今もクリスティアナをクラウスと並ぶ人類救済と吸血鬼打倒の御旗と見なし、奇跡の具現として無属性の水から様々な属性の血法を操ることから「泡沫の聖女」と狂信あるいは利用価値ある人類の礎として狙つてゐる者が少なからず存在する。

この拉致事件の前後でクリスの性格は多少変わつており、研究の代償にもともと優秀だつたIQが化物クラスに覚醒、毒耐性を身につけてゐる。並列情報処理能力はライブラトップで、もともとの資質であるカメラ・アイ（映像記憶）と合わせて、上記のような思考の怪物と呼ばれるに相応しい頭脳を有する。

今を生きる人間でありながら、1ナノ秒（100億分の一秒）の間に半身の邪神の太刀筋を徐々に見切り、切り結ぶなど、英靈たちから見ても「英雄に片足を突つ込んでいる」ほどの身体能力・戦闘力を有し、在り方は英雄そのもの。ただしこれは褒め言葉では全くない。何故なら英雄は、運命に定められた敵を倒したのなら、守つた人々に異物と見なされ滅ぼされる運命にあるのだから。

だからこそ英靈たちはどうか英雄になつてくれるなと願いながら見守つてゐる。
 ……マスターの気性からして、叶わない祈りだと薄々気づいていても。

▼所持スキル（マスター礼装ではなくクリスティアナ本人が所持する能力）

・耐毒スキル

藤丸立香がマシユをメインサーヴァントとし、彼女に力を貸している英靈の能力から耐毒スキル（？）を得てゐるが、クリスのそれは、希少な血液を生産する彼女を（せめてその血液を途絶えさせない方法が見つかるまでは）死んでもらうわけにはいかないと逸つた牙狩りタカ派が研究員に指示して毒耐性をつけるために死なない程度のありとあらゆる毒を食事や水に仕込んだ果てに獲得したもの。毒によつては耐性が弱いものもあるが、HLで異界産の動物・植物・化合物による毒を扱つたことも多々あるため、人間としてはかなりの耐性を持つ。

ロンドンの肺を侵す魔霧はシナトベの風で薄めたりサーヴァントにスキルを使つてもらい、ちょっと気分が悪くなる程度で済んだ。

・太陽神の加護

強化前『太陽神の加護：B』⇒強化後『太陽神の寵愛：B』

スキルの恩恵を受けるサーヴァント：カルナ、オジマンディアス、玉藻の前、ケツアルコアトル、ギルガメッシユ、ガヴエイン、クー・フーリン

太陽神の寵愛を受ける者が授かるスキル。

施しの英雄カルナ、神王オジマンディアス、水天日光玉藻の前、炎鳥ケツアルコアトルの四騎の太陽神の化身を召喚し、分霊とはいえ英靈として格の高い彼らがその旅路を見守らんと『瑠璃の金環』^(ラビス・アニー)に刻まれることを良しとした、その本来ならありえないはずの寵愛を受けて『太陽神の加護』が変化した。クリス本人は知らぬ事実だが、一度カルデアから異世界へ帰還する際にサーヴァントを全員座に返したにもかかわらず、加護が継続していたことからも溺愛ぶりはお察しである。

スキル効果は神性C以下（落陽のピアス着用時、もしくはスファインクス・アウラードを伴う場合はB以下）の炎に関連する攻撃を一切無効化し、吸収して魔力に変換する。……というものだが、契約し直しの際にどこをどう弄ったのか、実は魔力変換効率がカルデア時代より格段に上がっている。更に「日差し」のある状態では効率が更にアップし、炎を受けずとも日光を魔力変換して少しづつ魔力リチャージ、常時太陽関係・もしくは太陽神の血を引くサーヴァントの攻撃力をアップ（固定バフなので敵のデバフで解除されない）する壊れ性能。その場にいる太陽関係のサーヴァントに影響するため、立香側にいる術とプロトのクー・フーリンにも適用される。

(厳密にはギルガメッシュやクー・フーリンも太陽神の血を引くが、今作では一般的に太陽系サーヴァントと聞いて名が挙がるサーヴァント、便宜的に太陽の力・加護をメインに振るうもの、もしくは太陽神の分け御靈を「太陽系」サーヴァントと括っています) 指輪を作つている間の期間に、もし異世界に付いていくならば血法と召喚の酷使で身体の老化を速めさせないためにも、魔力の継続回復は必須と太陽系で話し合つたらしい。特に日光による魔力リチャージは血液の酷使で身体の老化が早まり、寿命が縮むことを知つたオジマンディアスが付けるべきだろうと発案した。太陽神ラーの化身であり至上のファラオである彼も唯一完璧でない肉体の脆弱さを憂えたことなのだろうか。最早加護よりも祝福に近い。高位英靈、レア度の高い英靈を何騎も率いる際に重宝するスキル。

▼所持アイテム

『ラピス・アニアード 瑠璃の金環』

キヤスターのギルガメッシュが所有する聖杯（ウルクの大杯ではない）を元に、レオナルド・ダ・ヴィンチが企画・設計、カルデアのキヤスター他知識人+αの智慧を結集して作り出した黄金の指輪。神代の黄金（というか聖杯の一部）を鍊成した指輪に、神代では最高の聖石だったラピスラズリをあしらつた指輪。

人理修復後、二部序で語られる「もしものための備え」と同時並行で一年かけて作り上げた疑似的な「座」であり「魔力タンク」であり「簡易召喚陣」であり神代から現代にいたるまでのあらゆる魔術・加護・概念礼装・マスタースキルの詰まつた超級の「魔術礼装」である。一種の宝具に近い。

お察しの通り、魔術世界に存在しようものなら魔術協会やアトラス院、聖堂教会などありとあらゆる魔術世界の組織・個人がこれを狙つて血で血を洗う大惨事（誤字ではない）世界大戦になりかねないヤバい代物。そのため、残念ながら護身術にクリスより乏しい藤丸立香には間違つても持たせられない。というか本人も「恐ろしすぎて持ちたくない」と全力で拒否した。

作りはしたものの、一度は別れ、異世界に還るクリスの意志を尊重し、クリスが英靈を望む、あるいは大小問わず身の危険が迫つた時でなければ初回起動しないよう設定されていた。危険が生じた時に召喚されるサーヴァントは完全にランダム設定だつたのだが、フリーフォール時にほぼ肌身離さず着用していたカルナのピアスという最強の触媒があつたため、カルナが真つ先に駆けつける結果となつた。相棒だからね、当然だね。

でもラピスラズリの腕飾りやベイヤードのブレスレットなども時と場合に応じて（後者は特に呪い関係で滅茶苦茶活躍していた）身に付けていたので、キャスギルやゲオルギウスも結構出現頻度は高かつた。

一応念のため悪用防止に、初回起動後はクリスティアナの魔術回路・生体パターンがなければ起動せず、ただの指輪でしかないというアフターケア付き。

異世界でもクリスティアナがカルデアで召喚したサーヴァントに限り、召喚可能とする限定的・疑似的な『座』の機能を持つため、指輪に刻まれた靈基情報を元にサーヴァントが召喚できる。一度に召喚できる数が最大6騎なのは相変わらずだが、魔力消費削減のため、6騎を編成しても実際に実体化するのはスターディングメンバーの3騎。これは臨戦状態においての話なので、武装解除して省エネモード（世界に溶け込むために私服姿になつたり）中だつたり、キヤスター陣によつて工房化されたクリスティアナのセーフハウスやライブラ事務所においては魔力消費を限りなく抑えられるため、6騎の限りではない。

とはいゝ一度に6騎編成して召喚すると、一度全員召喚を解く＆再編成して再召喚しないとメンバー変更が一切出来ず、その間かなり無防備になるため、基本的にはその場で必要に応じて単体召喚することが多い。

本来なら疑似的な『座』など生み出せるはずもないが、どこぞのチートなラスボス系後輩の『黄金の杯』^{アーレア・ボーカラ}と『百獸母胎』^{ボトニア・テローン}による「根源」接続によつて、召喚可能サーヴァントをクリスと契約した分霊のみを保存する、と機能を限定することで改造可能となつた。チート改竄ここに極まれりである。なんでそこまでしたかつて？ これ

からも可愛そうなマスターさんを虐めるためです。なお情報の圧縮にはその手の口であるパツションリップ（立香側）が担当。（ちなみにBBは立香を「センパイ」、クリスを「マスターさん」呼び）

普段はどこにでも肌身離さず身につけていられる指輪の形をとつてゐるが、展開すると天秤を模したクリスティアナの令呪と十字架がレリーフとして彫り込まれた、背の低いワイングラスのような形状をした、内側が宇宙のような瑠璃色、外側が金色の杯となる。この姿から瑠璃の杯、あるいは瑠璃の小聖杯と呼ばれる。ギルガメッシュが持つていた聖杯で次元跳躍の願いを叶えた後の残り滓なので溜め込める魔力はかなり減つているが、十二分な魔力リソースとして運用できる。

前述の通り、召喚システム以外にあらゆる魔術、加護、概念礼装、マスタースキルが詰まつており、展開時に色々組み合わせを作つて待機させておき、戦闘中にすぐにシングルアクションで発動、というのも可能。

太陽系サーヴァント

カルナ

——オレはマスターの一番槍にして最大戦力。いかに古今東西の名だたる英雄が名を連ねようと、これだけは譲ることはできん。

——オレを喚んだか、クリスティアナ。

レベル100、スキルマ・フォウマ済み、絆10

言わずと知れた一番槍、クリスの最初の英靈にしてメインサーヴァント。

魔力消費が激しく、負担を抑えるため基本的に家にいるか靈体化してクリスのそばにいる。

たまにクリスの帰りが遅いときはバイクで迎えに行つたりする。ほぼ全ての特異点で苦楽をともにしてきたが、初めてスターディングメンバーから外された新宿でアルトリアオルタに二人乗りを先に越され、ちよつとだけ嫉妬を覚えたが、クリスに指摘されてしまうやく気づいた。その後も二人乗りが気に入つたのか何度も迎えに行つたり出かけ先に送つたりと外出頻度が増えた。ついでにエミヤや自宅待機組のおつかいをこなしていく。さすが某マスターのパシリをしていた男。旅先の乗馬体験で馬の乗り方のレクチャー後、二人で遠駆けして心のしこりは完全に払拭された。

マスターに対し、無自覚に独占欲を示しつつある。一度目（人理修復直後）のバレンタインでは父より賜つた宝具の鎧を碎いて作ったピアスを贈り、二回目（バレンタイン2018）は力力才不足を解消すべくマスターや他の鯖と奮戦し、満を持してきちんと

あらかじめ贈り物を用意してきた三度目（ BBB，あるいは MHA 世界）はさらに色んな意味でやばい代物を贈るとはまだ誰も知らないのであった……。

移動の際はエジソン製の黒いボディに赤・金のラインが入った大型バイク『レッドウイング・シユバルツ』を駆る。騎乗 A なので運転は上手い。靈体化すれば済むので電車など公共交通機関に乗る機会は少ないが、恐らく改札でオロオロするタイプ。

着るものにこだわりはなく、家ではだいたい長袖か七分丈の黒いシャツにスウェットの下かズボンを履いたラフな格好だが、外に出るときはマスターに恥をかかせまいとお洒落してくる。身なりに頓着しないがセンスは悪くない人。服選びに困つたら不思議と波長の合う（公式マテリアルより）玉藻にアドバイスを貰っている。本人の容姿と似合う色・服装のせいで大概 V 系のバンドマンかなにかと勘違いされる。

あの黒タイツは服ではなく、恐らく母親がカルナを産んだ経緯が「リシから授かつた神の子を得られるマントラが本物なのか試してみよう」という不純な動機ゆえに生まれた濁りだと思われるが、生前は正午に父であるスリーリヤに沐浴しながら祈る際には濁りが消えたという伝承がある。サーヴァントの今は靈基の一部であり、カルナの意思で晴らすことができるという捏造設定。そのため省エネモード時の彼の身体は白い。腕や足が露出しても問題ない。

武装時と同様、黒・赤・金、彩度の低いピンク系を好む。差し色は目と同じターコイ

ズブルー。たまにベージュ。顔がいいのでシンプル・シックな服装も似合うが、パンク系でも似合ってしまう。革や金属系のアクセサリーが似合う。スタッズとかファスナーとかじやらじやらしていても違和感がない。フォーマルよりカジュアル。かつちり系よりも首周りがゆつたりしている方が好き。細身なので玉藻や鈴鹿は細さをカバーする服選びをしている。ライダーの金時と並ぶと服装的に絵面がかなりいかついことになる。

冬は黒のロングコート・オフホワイトに赤のノルディック柄の入ったマフラー（クリス手製）、赤のハイネック縦セーター、ベージュのスキニー、黒いごつめのブーツなど。モスグリーンの大きめのモッズコートも良い。家ではベージュのざっくり編まれた厚手のセーターやでもこもこになつていてほしい。

玉藻の前

——みこーん！　これはイケ魂の予感……!!

レベル90、スキルマ、フォウマ済み、絆8

ロンドン・監獄島後に召喚された。ロンドンで一目惚れし縁を繋いでカルデアに押しかけた良妻狐。苦悩は多くても大事なところはブレないイケ魂の予感を感じたらしい。出会いがもう少し早ければ私も絆10に……！　と思つたかは定かではないが、アーツ

パを支え、キヤスター筆頭に躍り出る活躍を見せた。

ご主人様大好きを公言するだけあって外出機会が多い。というか秘書の仕事をしているときはクリスがせつかくの若い身空を仕事で尽く潰し、まったく買い物などを一緒に楽しめなかつたため、学生の身分にある今は全力で人生を楽しんでもらいたいと休日になにかとショッピングや映画、スイーツめぐりなどを企画してクリスとともに全力で現世を謳歌している。鈴鹿とは狐耳で献身的でギャル系とみせかけて実は才女など、色々要素が被りまくつてライバル的な関係だが、嬢のコーディネートや遊ぶプランを立てるときは結託している。

流行に敏感でコーディネート上手。外出するサーヴァントの服装チエックをすることも多い。散財しそうとみせかけて、意外とお金の使い所を考える締まり屋。良妻ですもの、節約節約。でも貧相にみえないよう、ちょっと高くても質の良い使い勝手のいいものを選ぶ。流行のアイテムを取り入れるのが上手。獣系なので化学繊維でない本物の動物の毛のファーとかは苦手。自宅では露出が多いが、外出時は変な輩に絡まる時間が惜しいので少し控えめのお姉さん系コーデ。オフショルダーとか似合いそう。

ガヴエイン

——マスター・クリス。本日はどちらへ？　お供いたします。

——いえ、マスターが炎にて傷つかないというのはとても喜ばしいのですが、こう、靈基に刻まれた記録からか少々悪寒がするというか。妙な心地になるのです。

レベル80、フォウマ済み、絆6

キヤメロット後に召喚された。白亜の城門前で渾身のガラティーンを全部クリスに吸收され回復、不夜何するものぞとばかりに男性特攻のエウリュアレとオリオン、そしてロビンフッドにバウられまくつたトラウマが衝撃的すぎて、消滅し本霊に還つたにも関わらずうつすら覚えたままカルデアに召喚された。そのためか絆の伸びがかなり悪い。太陽系の中では一番絆が低い。一応今はその事は和解しているのだが、たまに炎を吸収しているところを見るとトラウマが蘇つて複雑な面持ちになる太陽の騎士。不仲に思われそうだが、アーサー伝説に語られる通り非の打ち所のない騎士らしい忠義を捧げている。『太陽神の寵愛』で『聖者の数字』がより強化され、ことさら輝きを増すアーツ顔のバスター・ゴリラ。日中ならだいたいガラティーンすれば敵は死ぬ。唯一太陽系の中で神性を持たない。

スキルマではないのは召喚時期が遅かつたことと、ランスロットと大騎士勲章を取り合つたため。もつと勲章よこせと据わつた目で立香とキヤメロット王城のシャドウサーヴァントのガヴェインを倒しまくつたことはカルデアスタッフ全員の秘密である。要求量に対してドロップ率が塩すぎる。

顔が正統派王子なので外に出ると必ず道行く女性に二度見される。王やクリスの供をしているならばいざ知らず、円卓だけで出かけると逆ナンにホイホイ付いていつてしまうので要注意。大抵は指輪の中で待機しているが、たまにジャガイモが豊富にあるときは大量のマッシュポテトを生産する。

青・白系の少しカジュアル寄りの服をかちつと着こなす。ポロシャツとか似合いそう。スポーティ系も似合う。蒼銀の騎士であるアーサーと血縁とあつてギフトがなければただただ爽やかなのである。……性癖はまあ生前のトラウマのせいでアレだが。

オジマンディアス

——嗚呼、貴様は本当に。こうも危なつかしくては、うかうかと眠りにも着けぬわ。この王の中の王たる余が導いてやらねばならぬ愚か者よ……。

——征くぞ、支度を疾くせよ。どこへ行くかだと？ 決まつておろう、貴様が生まれた世界のあらゆる名建築、このオジマンディアスの目に叶うか見てやろうというのだ！

レベル90、スキルマ、フォウマ、絆8

キヤメロット後に真っ先にやつてきた、セリフが途中で切れるが首は落ちない系ファラオ。

クリスがサーヴァントの中でも人一倍敬意を持つて接し、敬称、敬語を使うサーヴァントの一人。クリスはオジマンディアス王、太陽王、我が君などと呼んでいる。（ちなみにもう一人の敬意をもつて接している賢王のほうはギルガメッシュ王、キヤスギル、我が王と呼んでいる）

勇者の素質があり、自らの矮小さを知り、身分を弁えながらも真っ直ぐに物申す女。実際世界を救い続けたクリスを彼はひと目で気に入つたものの、キヤメロットではストーリー通り偉大な太陽王として振る舞い君臨した。ダイナミックピラミッド落としを敢行後、上機嫌で召喚に応じた。太陽の灼熱を固めたようなクリスの赤い瞳を気に入つてゐる。

が、血法そのものが細胞劣化を早め魂を削り続ける戦い方であり、更に魔術回路を血管に、魔力炉が心臓と造血細胞に設定されているため、無茶な魔力の使い方をすれば更に寿命をすり減らすスピードを早めると知つた瞬間、本気で激昂しクリスを怒鳴りつけた。思わず彼女のすれすれに神罰の光が降り注いだほどの怒りである。けれどある意味当然のこと。完全な肉体と地上のあらゆるものを持手に入れた絶対者であつても避けられない死を嘆き悲しんだ彼ゆえに、死に突き進む召喚者の愚行は許せなかつた。

それでもなお歩みを止めないと宣言する己のマスターを彼は処断できなかつた。落陽が地平線の彼方に沈み消え行く瞬間のように儘くも力強く、炯々と輝く赤は、あまり

にまつすぐ過ぎた。

ゆえに、彼は聰明でありながら不器用で愚直なマスターを導く太陽であると今回の現界を定義する。間違いを犯さぬように導き、見守れば良いのだと、本来の彼ならありえないほどの恩寵を授けながら。

異世界に帰るから契約を解除する？ ……フハハ、それも良かろう。しかし——貴様が仰ぐべき太陽は再び昇るであろう。そう満足げに玉座に君臨しながら笑った太陽王の言葉通り、異世界で太陽神は再び降臨する。

上記の経緯から、大抵クリスのそばで靈体化しているか自宅で寛いでいる。たまに学校まで押しかける。旅行の際は異世界の建築を見てやろう！ と世界遺産や文化財指定の名建築などを見て回るツアーリーになる。クリスを立香やマシューを含め自分の娘息子のように想つている太陽系のフリーダムパパ。

省エネモード時は黒をメインに白・金のシンプルな服が多い。差し色はピーコックブルーやブルーシャンブルーなど彩度があまり高くない深みのある青系。自宅では黒いシャツを羽織つただけの前を完全にオープンにしたどこぞの世界での服装のことが多いが、外ではホワイトデー礼装のような白いジャケットにピーコックブルーの巻き物をゆるく巻いて黒縁メガネをかけたインテリなアパレル社長風の格好などかなり目に良心的な格好。

ケツアルコアトル

——ムーチョムーチョ！ 私、貴のこととつても気に入りました！ これからどうぞよろしくね、素敵なマスターさん？

レベル90、フォウマ、紺⁷

バビロニア後に召喚された南米の女神。翼ある蛇。太陽神であり金星の女神であり、文化、風の神とも言われる。

太陽、風という親和性の強い縁と、古い宇宙からの客人でありアステカの最高神の柱と、彼女が去った後のアステカを滅ぼしたラテンの血脉の遙か子孫という因縁による結びつきが強い。とはいえた態度はだいたいFGOのバビロニア～マイルームボイスの彼女である。興奮したときのエセ外国人じみた片言とおおらかで流暢な口調とやたら静かなマジギレモードを使い分ける人。

自らが悪神との戦いに敗れ、アステカを追われる原因となつた酒はもう嫌と思つていたが、たとえ異界産の喉が焼ける度数であろうと自前の毒分解の体質からアルコールで全く酔わないクリスと静かに盃を掲げ合うのが好き。クリスも無茶に飲ませないので、本音が出るレベルで前後不覚まで陥ることが少ない。

思考基準が神のそれであり、人間と同じ尺度でものをとらえないため、残忍な判断を

取ることもある。マスターであるクリスのことをバビロニアの一件から気に入っているが、クリス個人そのものを、というよりは「このマスターを形作った人間という種族の成長」を愛している。オジマンディアスや玉藻のような神の化身ではなく神靈そのものであるため、クリスを気に入っている視点もかなり大局的で人の親愛に拠るものではない。でも他人の目からはデレデレにクリスを甘やかしたがるスキンシップの激しい南米系お姉さんにしか映らない。よく雄英校門前まで迎えにくる過保護勢の一人扱い。目立つし大きいのでヘッドギアは外しているが、顎下の宝玉や特徴的な髪型はそのまま。シンプルな格好が好き。181cmと高身長でスタイル抜群のため、パンツスタイルが多い。エスマーラルダの修行の影響で脚長に成長した175cmのクリスとは目線が近いので嬉しいらしい。

その他クリス側サーヴァント

エミヤ

——ああ、なんたることだ。折角教育が進んできていたところだというのに……しかしマスター、成長期の姿でそのやせ細りぶりは見るに耐えない。とりあえず当分の拠点は確保できた、ならば次は食を満たすべきだ。いいかね、情報収集が先ではない。食が

先だ。早急にその身に栄養をつけさせねば。……ナーサリー、ヘンゼルとグレーテルの魔女ではないぞ、私は。

レベル90、スキルマ、フォウマ済み、絆10

冬木クリア後に召喚された初期メンバー。娘の信頼も厚いみんなのオカン。娘からは普通にエミヤと呼ばれている。

アーチャー二枚看板の一人。転移後に縮んでしまった娘を一番心配した人。人理修復後、娘がFGO世界に残るのを得策とは考えず、抑止の守護者としての経験から、同じクリス側のサー・ヴァントで守護者である殺工ミヤと共に、彼女が抑止に殺される危険性も鑑みて、出来る限り早く異世界に帰ることを願い、本人にもその危険性を打診していた。人理焼却中から5つの亞種特異点をめぐるまでの旅はアラヤが機能していない、あるいは人理継続のために利用価値があると様子見されていたとしても、完全に異なる血の系譜と力を持つ彼女という異物を、アラヤは見逃さないと確信して。

BBB/MHA世界転移後はもっぱら自宅待機し、家事に一手に引き受け日夜勤しむ主夫。圧倒的世話を焼き。本人は口ではなんやかや言いつつも楽しそうにしている。弁当や食事の準備をする関係上、クリスの動向を一番良く知っている。多分クリスのライセンのトーキ履歴で上から5番目の中には彼との個人トークが必ず入っている。
せつかくカルデア時代から娘の貧血回避＆魂の消耗（造血スピードより消費スピード

が勝つて收支が合わない無理をすると自動的に寿命が削れる) 阻止のためにも食事量の少なさをコツコツ改善させていたのに、体が縮んで15歳時の一番まともに食事を取れず栄養失調気味で、胃の容量も小さい時点に強制的に巻き戻されて涙を飲んだ。でも食べる楽しみは覚えたままなので、幸せそうな笑顔で自分の料理を食べててくれる嬢を見るのが何よりの楽しみで癒やし。休みの日は一緒にキッチンに立つて料理をしている。エミヤがバレンタインのお返しに贈った料理道具セットは大事に使われており、時々手伝おうとするナーサリー・ジャックが使うことも。

省エネモードの服装はカルナに似て黒・赤系のシンプルな服装に、黒もしくは赤のエプロンを着けている。着回し上手。

ロビンフッド

——え、お嬢さん、アンタその綺麗なツラして毒とか罠とか偏見ない感じ? ウソでしょ!?

——オレは危険物係じゃないんですけどねえ!? 斥候がいざというとき耳使えなくなつたらどうしてくれんだよ……

レベル90、スキルマ、フォウマ済み、絆10

エミヤより少し遅いがオルレアン前に召喚。ガラじやないんですけどねえと言いな

がら、エミヤと共にあくの強いアーチャーズを率いてきた弓リーダー。イー・バウで道中の高HP・高防御のエネミーをぶつ倒し続け、キャメロットではエウリュアレ、オリオンと共にガヴェイン絶対殺すマンした緑の賢者。

毒や罠を多用してたとえ卑怯と言われようが正面切って戦わずに勝ちたいタイプだが、マスターが嫌悪を示すどころか全力で賛成してきたときには思わず面食らった。顔に似合わねえ。でも夢などでクリスの人生を垣間見て、本意でなくとも闇討ち暗殺騙し騙された世界に生きた己のマスターに生前の自分を重ねてからは、全力でサポートしようと決意。そこから糸がガン上がりした。自分のような英靈に聖杯使うなんざ趣味が悪いと言いながら、高レアを召喚しても頼りにされるのが嬉しいツンデレ。

生前の経験から野営の知識が豊富で、オルレアン時など野営に慣れていない立香やマシューのサポート（クリスは吸血鬼退治の一環で経験は多少ある）や狩猟、野営料理に長けていた。カルデアでも時々料理をしていた。

基本自宅待機か用事がなければ指輪に引っ込んでいるが、敵連合が出てきてからは単独行動スキルのあるアーチャーらしく、霊体化して情報収集や罠の仕込みなど有事につでも出撃できるよう準備に余念がない。隠れマスターがチ勢。面倒見がいいので子ども鯖の面倒をみたり、エリちゃん・ネロブライドの手綱を引いたり（不本意）、レジスタンス組でのんべんだらりしたりしていることも。

俺はいいですわ、と周囲に見える形で供をするのは他の目立たがりに任せ、現世に干渉せず、あくまでサーヴァントとして他人に己の存在をさとられず暗躍することでクリスに貢献することを望む（この方針は同じ初期勢であるハサン先生・小太郎などアサンシング勢も）。人前に出ない（出ても誰かのコンビニに付き合つたり程度）のでシャツやパークーにジーンズ姿がほとんど。パ○ラコラボロビンいいよね。

クー・フーリン（槍）

——オウマスター、シユミレーターか？ 種火か？ まあなんにせよ付き合うぜ、なにしろ身体が動きたがつて仕方ねえのよ。

レベル80 宝具5 スキル6／6／6 フオウマ 級10

クリス側。槍の全体宝具ならばカルナが筆頭だが、クー・フーリンは単体宝具とケルト神話の大英雄の逸話に名高い継戦能力から重宝されている。初期槍にしてカルナと共に双槍。

本領発揮のランサークラス、しかも今回は気風の良い、自害令呪を気にしなくていいマスターなのでかなりご機嫌。わしやわしや頭を撫でくり回すのが好き。立香からは兄貴、槍二キと呼ばれている。クリスは最初クー・フーリンと呼んでいたがカルデアで勃発した愛称呼びブームとオルタニキ召喚に際して（槍の）クーさんと呼んでいる。

太陽神ルーの息子たる光の御子なので太陽神の寵愛スキルの恩恵に与れる。當時攻撃アップが付いている（固定バフ扱いで敵スキルで解除不能）ので強くて倒れない。矢避けとガツツと礼装でゾンビ並のしぶとさを見せるため、高難度クエストではしんがりを務めることが多い。初期槍はカルナと冬木後召喚のヘクトール、オルレアン後に召喚したウラド三世（槍）で乗り切っていたので仲が良い（？）

BBB・MHA世界ではほぼ現界している。どこぞの世界のように魚屋でバイトしてたり釣りしてたり、自宅で酒盛りしたりと現代を謳歌している。ウワバミ通り越してワクのマスターが作つたつまみを片手に酒盛りするのが何よりの楽しみ。服装は大体公式で出てるのを想像してほしい。レザージャケット着たらスタイルの良さがバリバリに引き立ちそう。

たまに学校前までバイクで迎えに行つたりする気のいいあんちゃん。個人的に爆豪・切島あたりと波長が合いそう。

クー・フーリン（狂）

――お前の敵はどれだ。

レベル90、フォウマ、絆6

北米神話大戦後に召喚。このあたりからクリス側にオルタ系鯖が集中するのは暗黙

の認識だつたが、メイヴの欲望で生まれた反転したクー・フーリンが 靈基登録されるとは思つていなかつたのでカルデアスタッフ一同仰天した。

基本的に娘は脳筋戦法を取らないので（無駄な火力・被害を好まない）何でもかんでも戦闘に駆り出されることはないが、再臨で矢避け解放後はここぞという時の火力役として投入される事が多い。

ほとんどしゃべらないが絆が深まるごとにマイルームに居座つてゐる時間が増えていく。担ぎ方は後ろ向きに俵担ぎか小脇に抱えられる。娘からはオルタのクーサン、もしくは他にオルタ鯖が近くにいなきときはオルタと呼ばれている。立香からはタニキ。

他の自分たちよりも「槍^{武器}」であり「サーヴァント」である意識が強い。

お前はただ敵を指し示すのみで良い、全て俺が廻殺してみせよう。

北米神話大戦での彼より氣だるげ感は薄れ、戦いに楽しみを見出す享楽な性質は他の自分よりも低く、ただ召喚者の前に立ちはだかる邪魔者を排除することを一義とする。

B B B・M H A世界は世界観的に尻尾を隠さなくとも奇異の目を向けられることは無いが、B B BでもH L以外の場所での外出時は絶対に現界しない。その他獸耳、獸顔、超巨体など現代社会からやや逸脱した身体特徴を持つサーヴァントも同様に厄介事の火種にならないよう現界を避ける。

彼の場合、秘書娘に乞われてもしない限りは、滅多に指輪の座から出てくることはな

い。セーフハウスの嬢の自室に嬢が居るときだけ、短時間に出てくることはある。サー
ヴァント時にフードを被っているため、稀な省エネモード中は黒いパーカーを着てフー
ドを深々と被っている。下は黒のスウェット。人前に出ることなどほぼ無いため、服は
その組み合わせのみで事足りている。必要なら英靈正装のスーツや礼装のアウトレイ
ジの衣装を靈基を弄つて編めばいい、という考え。

ジークフリート

——マスター。少し休憩を挟んだらどうだろうか。少々根を詰めすぎだと思うのだと
が。

レベル90、宝具5、フォウマレベルマ、絆10

オルレアン中に召喚した初セイバー。ハサン先生や小太郎と共に竜を狩りまくった
カルデアのドラゴンレイヤー。どこかの時空で宿敵として戦った記録もあって、カル
ナと並んでフランスを駆け抜けた姿はどこか嬉しそうだつたらしい。もちろんオルレ
アン修復後、シユミレーターでめちゃくちゃ勝負した。

オルレアン中に召喚したのでボロボロになるのは避けられたが、召喚陣を回さなければ
抑止に呼ばれていたのは薄々感じていた。すまないと謝るたびにすまなくないと
ノータイム（途中から容赦なく言葉を被せつつ）で切り返す秘書嬢に根負けして、以降

すまないの数は激減した。嬢は言葉より行動で示せ派だから仕方ない。

ただチエイテピラミッドで本編にかすりもしていないのでマスターへの謝罪のためだけに空にぼんやり影送りならぬ影法師のかたちでスタート地点に戻つてもらうとやり直しを告げるすまない発言にはクリスもせやな、と色々疲れていたため肯定した。

FGO序盤あるあるなセイバー難民でもあつたので、沖田やランスロット、ガヴェインなどが召喚されるまでの初期は力エサル共々非常に頼りにされた。ウルクのムシユフシユは槍で竜特攻が効くので毒針狩りが捲つた。

とても紳士。抱えるときはお姫様抱っこしそうだが流石に戦闘中はカルナと同じようく腕に座らせるような感じで担ぎそう。無茶苦茶する嬢を初期から見ているので若干心配性。オルレアン後にカーミラが召喚されたときは即座に背後に嬢を庇つた（バーサク・アサシンとランサーの吸血鬼組がオルレアンでかなり危ない発言をしていたため）。すまないのくだりやらなんやら色々乗り越えたので絆も固い。戦友。無茶振りしそぎなければ冗談も乗ってくれる。

ジークと一回気紛れで呼んでみたらアポ鯖が盛大に反応（立香のジャンヌとジークフリーは動搖、アストルフォとカルナは懐かしそうな表情、天草がニコニコしながら雰囲気はドロドロしたのを垂れ流してそれはダメですマスターと却下してくる）したのでシェイクスピアが嗅ぎつけて悪ふざけをする前に封印。以降、本人の許可をとつて北欧

神話のウォルスンガ・サガで同一人物とされるシグルドからとつてシグ、と呼んでいる。B B B・M H A世界では主に指輪の中で待機していることが多い。ハイネットクのグレーの縦セーターとかとても似合いそう。カルナと並んで立つとあまりの顔面偏差値に周囲がざわざわする。ただ弱点の背中は服で隠せないのでM H A世界の個性の関連で身体特徴に合わせてオーダーをできる店で背中が空いた服とか買つてもらつてそう。第三再臨の竜っぽい見た目は迫害されることはないだろうが、やたら目立つので自主的に第二再臨姿など翼や角をキヤストオフした状態で過ごしている事が多い。

ランスロット（剣）

——はい。必ずや、貴女の願いを叶えると誓いましょう。

レベル80 フォウマ、スキル6／6／8 級6

ロンドン後召喚。少し前に召喚された沖田と共にセイバー難民だつたクリス側のセイバー戦力増強に貢献。なおフルフェイスのバーサーカーの方は、冬木の後立香が召喚している。

スターでバリバリクリティカルを叩き出し、Aチエインでアロンダイト大回転する、華やかな円卓にあつて最強、理想の騎士と呼ばれた男。マシユという突然の娘が出来ておろおろした、どうわが鳴き声のお父さん。

正義を愛し、女性を敬い、邪悪を憎む。正道を好み、卑怯な振る舞いを許さず、誇り高くあろうとする騎士道の体現者。しかし、常に一線引いた態度のため、親愛的な付き合いが濃い沖田やジークフリートに比べ、非常に淡々とした主従だった。

マテリアルが更新されるたび、キヤメロットで再び主に歯向かつてでも正しさに殉じたランスロットの光の側面しか無い高潔さに目を潰される思いで、何で私の方に來ちやつたかなとクリスが苦笑するレベル。クリスからしてみれば、魔術師ほどではないが、十二分に正道から外れた己の人生の所業は、ランスロットが忌み嫌う惡そのもの。円卓の騎士との相性はただでさえ悪そうなのに、その中でも性格的に相容れなさそうなのが来た、キヤメロットまで時折思つていた。キヤメロットでもギフトを受けていないランスロットの状態を知り、なおかつギフトを得てもその一点はブレない在り方に、むしろその思いは強くなつた。立香やサーヴァントの負担を減らすため、罷や邪道も躊躇わないのでクリスを見て、ぽつりと「困つたお方だ。私のマスターであるならば、正々堂々となさつてほしい。……いえ、失言でした」とランスロットがぼやいたのも、彼女の心にヒビを入れる一因だつたのかもしれない。

だからだろう、立香のアルトリアを遠くから眺めて、合わせる顔がないからと近寄らうとしないランスロットが「……ただ、王に私という罪人を裁いてほしい。聖杯にかける願いと言えば、それだけです」と呟いたのに「救われたいんだ」と冷たく意地の悪い

言葉を投げかけてしまったのは、

忠義を捧げた王に不貞を働いて、円卓の崩壊を招いておきながら逃げた彼が、聖杯という奇跡に求める願いが贖罪とは。

世界のために友人であろうと殺すのもやむ無しとし、裏切りに悲しみながらも己の所業の罪深さを受け止め、許されたいなど逃げ出すことを許さないクリスには、その願いは酷く傲慢に聞こえたのだ。罪をつまびらかにして裁かれたいとは、裁かれていない自分が抱く引け目から救われたいのだという叫びにしか聞こえなかつた。しかも彼は、今なら聖杯など求めずともその願いを叶えられるというのに。二度と謝ることも言い訳も出来ない自分と違つて。

高潔な騎士が手違いだらうが自分の召喚に応えて、今もなお従えているという違和感も、己と似て非なる立場にありながら、もだもだと悩み続けるランスロットに同族嫌悪の感情を抱いたことも、無垢なる湖の聖剣を捧げられるにはあまりに相応しくない、曇りすぎた己という卑屈さとランスロットへの引け目も含んだつぶやきだつた。

レイシフトでカルデア以外の場所へ行くことも可能とはい、季節感のない閉鎖空間。グランドオーダーの規模に対してもマスターは一人だけ、カルデアが48人のマスター候補を揃えて、チームで当たろうとしているところからもたつた二人で対応できる規模ではないのは明らかで、その重圧は同じ世界を救うという目的でも比較にならな

かつたのか。気丈に振る舞い続け、溜め込みに溜め込んだ鬱憤が噴出したようなものだつた。言葉のトゲを剣としてランスロットに向けたクリスの表情は、ごつそりと色が削げ落ちていた。

急に態度が氷点下に落ちた主に困惑するランスロットを放置して、賢者タイムではないが自己分析から自己嫌悪に陥つてクリスはマイルームに籠もる。心配したカルナやロビンらの励ましをもつてしても閉じこもつたままのクリスを見かねたセイバーオルタ（アルトリア顔のオルタ系は全員クリス側）がランスロットを遠慮なくどついてクリスの不調の理由を聞き出して、「ではお望み通り裁いてやろう」とシミュレーターで遠慮なくボコボコにした。シミュレーターが壊れる勢いで暴れる二人に何事かと駆けつけた立香とアルトリアが理由を聞き、渋面に。とはいえ立香のサーヴァントではないので令呪で止めることもできいため、ロマンにクリスの部屋にシミュレーターの映像を中継を頼み、モルガーンをブツパしまくるオルタを見て驚かせ、思わず常識人で責任感の強いクリスにやめさせるよう仕向けた。

困惑する一同に「貴様の不義はこれを持つて以降、不問とする」と暴君オーラ全開でランスロットに言い放ち、クリスにカメラ越しに「マスター、この通り、貴様が思うほどこの男は清廉潔白でもないぞ。なにしろ王の妻を搔つ攫つて行くような男だ。方法はともあれ、正義と信じる道のために畜行をやむ無しとする貴様と、然程変わりはしな

いだろうよ」とランスロットの痛いところをオルタらしく容赦なく抉つて立ち去り、その後マイルームで互いの過去と黒歴史暴露大会からの和解を経て、ようやく紺3以降が解放された（それまでどれだけ出撃しても上がらなかつた）カルデアでは（笑い話にするためにあえて）ヒトヅマンスロット事件と呼ばれている。絶対に越えようとしなかつた主従の一線が消えた日でもあつた。

その後、クリスはランスロットに一つの願いと意思を託す。

——私の行いは報われるものではない。人界の存続、人類が人類らしく歩んでいく未来を護るために行う蛮行は決して良き功績として認められはしまい。それでいい。そもそも、私たちの代で、吸血鬼を完全密封し、その脅威を退けるなど遠い幻想だろう。いかに人類の枠から踏み出したものであれ、私たちに待つのは後進が先に進むための道を切り拓き、さらなる一步を踏みしめるための血と屍の礎となることだ。

だから。

もし私の行いが、世界と人類を守るという免罪の義理すらかけ離れた虚実の悪となつたその時は、遠慮なく私を斬るがいい。

騎士に騎士の中の王と謳われたアーサー王から理想の騎士と呼ばれたひとよ。
Lanslot du lac
湖の騎士よ。

聖地にて一度は忠義を誓つた獅子王の行いを正すため、二度の反旗を翻した正義の騎士たる貴方に斬り伏せられるなら、悪となつた私の末期には、さぞふさわしかろう——

その後、キヤメロット後に召喚されたガヴエインとは傍に仕える騎士としてどちらが相応しいか、騎士勲章を賭けてバチバチにライバルしたりしている。ランスロットは勲章を食うわりにはスキルが自己完結していくなおかつスキルマにしなくとも効果が高いので勲章に余裕が出なければスキルマの道のりは遠い。

なお、ランスロットの趣味であるチエスでの勝敗は五分五分。

Fate以外の世界では省エネモードでクリスの身辺警護に当たることが多い。宝具による手にした武具の宝具化、変装とステータス偽装は恩恵が大きい。ただし筋金入りのフランス人というか、恋が燃え上がるとすさまじい行動力を発揮したりする逸話もあり、美女に目がないのでそういうた場所では逆ナンされたりナンパしにいつたりとわりとポンコツなお父さん。困つたお方はお前の方だよとクリスあるいは誰かが突っ込むのはお約束。

エルキドウ

——マスター。僕だけ何故か少々先んじて来てしまったようだから、北の魔獸の一団を壊滅させてきたのだけど、魔力に支障はないかな？ テンションが高い？ そうかな。そうかもしれない。

レベル90 フオウマ、スキル8／6／8 級7

バビロニア攻略前に召喚。英雄王の唯一の友、人と神を繋ぎ止めるために神々に生み出された变幻自在の泥人形。意思持つ神造兵装、自然と調和・一体化する大地の分身。天の楔。

大地の魔力さえ在れば崩れること無くあらゆる形に復元可能、ステータスすら弄くれる彼は、カルナとは別の意味でクリスと相性がいい。なにしろ、クリスの魔力はその器に流れる血液。その血液は水、氷、植物、雷など、自然と密接な関わりを持つため、魔力も魔力パスもそちら寄りに変質している。もし起源を持つていたら「森羅」となるほど。

加えて複数の神々から太陽の恩恵を受けるクリスは、エルキドウにとつて心地よさを感じるマスター。逆もまたしかり。もともとどこかの世界線で「人でないマスター」を初めて持つた「サーヴァント」なのだから、マスターの多少の異質さは彼にとつてさしたる問題ではないのだろう。

兵器として人間への振る舞いを突き通すエルキドウに倣い、クリスのエルキドウへの

扱いも人を扱うそれではない。だがそれは尊重していないことではなく、また迫害や差別とは無縁。神の兵器を扱う人間として驕らず、謙遜せず、機械としてのエルキドウの本来の存在目的、理由に沿った運用だけを心がける。むしろ無用な配慮や過剰な心配はかえつて、完璧である神が作つた、完成されている神造兵器たる彼を困惑させるだけだと感じ取つているからである。これには親友も何も口出しせず満足げ。

もともとB.B.Bの異界由来の謎技術で高性能A.Iを作つて、意思を持つているような挙動をするA.Iに最重要機密を守らせているような人間なので人のかたちをした泥人形だろうと、良くも悪くもヒト扱いしない（エルキドウの身が危ないとかいう遠慮がない）（そもそも人類史最強クラスのギルガメッシュと、ヒトの姿にスケールダウンしてようやく同等レベルまで落とし込める神様お手製のアクティブモンスターに、復元できなない魂以外で心配無用な上、むしろ相手の心配をしないといけないレベル）

上記の理由から、人生や性格において共通点が多く縁召喚となつたカルナとは違い、性能的な意味で非常に相性がいいエルキドウだが、彼にとつて好ましい性格（博愛精神に満ち、全体主義であり、それでいて自分を第一として考えるもの）のうち、社会的立場や役職などのしがらみとしての価値はあれど（これを認めているから死ぬわけには行かないと思つてゐるわけだが）、ひとつ命としての自分を価値なきものとして扱い、自己評価が極めて低い点においてはその眉根をわずかに寄せる。

耐久系のサーヴァントのため、槍のクー・フーリンと共に高HPエネミーを相手取る事が多い。

スキルマじやないのはLv6以降の愚者の鎖の要求量がエグすぎるため。

Fate世界以外ではマスターからの起動呼び出しを指輪の中で待つていていることが多。MHA世界では神性持ちが居ないので宝具の神性にスタン効果が有効活用出来ないが、星の数が増えるほど好戦的というかここぞという時に言うことを聞いてくれないアクの強さがあるサーヴァントの中で、星5ながら鎖で殺さず捕らえる戦法ができ、邪神やら神性存在やらヤバイ存在もぱこぼこ出てくるHLにおいては身長体重可変で、ステータスを弄つて耐久アップなどができることもあり、なにげに活躍の場が多い。

マスターを担ぐ際は大体巨鳥など飛ぶものに変化したりして最適な形に変容する。省エネモード時はわざわざ人型を取らず、鳩や無機物などに変化してクリスにひつついて行動する。人の姿で護衛が難しそうな有事の際、アサシンとは別の意味で優秀な護衛と言える。

なお、絶対魔獣戦線にも同行し、初っ端からエルキドウVSキングウという傍から見ているとどっちがどっちなのか混乱しそうなバトルが起こり、イシュタル登場時には不意打ちで討とうとするなどアクティブモンスターっぷりをみせつけた。

ジヤンヌ・ダルク「オルタ」

——さあ、精々しぶとく生き汚く足搔きましよう？ どうせ死後も共に煉獄に落ちる身ですもの、貴女の魂の最後の一片が燃え尽きてなくなるまで、ええ、どんな地獄にも付き合うとしましょう。

——この旗は我が魂の咆哮、勝利のために振るう呪いの旗。私の半身、殺意と憎悪を煮詰めたこんな女を選んでくれた、私のただ一人のマスターの道を焚き拓くや一撃を喰らいなさい。

レベル90 スキルマ、フォウマ、絆9

贋作英靈後に召喚。復讐の念に染まつた黒い竜の魔女。殺意と憎悪を羊水として産み落とされた、反英雄のアヴェンジャー。巖窟王と並び、黒き怨念を以てマスターのために呪旗を振るう復讐者。

オルレアンにて敵対時、相対した二人のマスターを見て、虫唾が走るもうひとりの自分と心の綺麗なマスターちゃん（立香）を見て嫌悪感を見せるものの、クリスに対してはその矛先は不思議と鋭くなかった。オルレアンの道中で見た惨状から憤る彼らに対し、クリスの目に宿るのは怒りではなく、憐れみでもなく、ただ淡々とした敵意だけだった。そこにルーラーとして召喚された彼女は底知れない闇を感じ、「ふうん。アンタはそこの二人に比べてちよつとはマシな目をしてるじゃない」と呟く。本人は否定するだ

ろうが、間違いなくそれは共感であり親愛の情だつた。

オルレアンの時点で、交わした言葉は少なくとも、互いにシンパシーを感じていたのか、憎めないものとして見ていた節があつた。そんな中、贋作英靈イベントにてボスとして登場した際、「だつて……私に愛される要素なんてない！ 魅力なんてない！ どうしようもなく捻くれた小娘よ！ あるのは吐き気がするほど強い力だけ！ でも、しようがないでしょ!? 私にはそれしかない！ 復讐に駆り立てられる私には、それしかない！」と彼女が本心を吐露した時、クリスは自覚する。ああ、鏡を見ているようだと。

それは痛切な悲鳴だつた。

愛されることも、求められることもなかつた自己への卑屈。それに付いて回る、他者に対するどうしようもない劣等感。唯一手にしていたのは、欲しくもなかつただ強いだけの力。それでも誰かに求められたいという渴望。

それでも消えない、不信感と憎悪。

あまりに見覚えのある感情だつた。

あまりに突き刺さる慟哭だつた。

どれほど功を成し、どれほど命を救おうと。決して報われることのない己の面影を見た。

イベント後、すぐに召喚を果たした彼女にクリスは根気強くつきまとつた。
傷を舐め合う馴れ合いではなく、哀れみからくる同情心でもなく、ただ傍にいたかつたとクリスは語る。

そんな彼女にジャンヌ・オルタも最初は拒否をするものの、口先だけの安い慰めが最大の侮辱と心得ており、立香と違いまっさらな光ではないクリスの、闇の中光る星のような淡い輝きは落ち着くものだつた。拒否もどんどん形だけ、口だけのものになり、絆4になる頃には傍にいるのが当たり前になるほど。

そして、絆5手前でクリスの恵まれない幼少期や研究動物扱いで監禁された時期を夢で垣間見て、ジャンヌ・オルタもクリスに感じていた同族感を理解する。自然を操り、宗教的観点から神の敵たる吸血鬼を滅ぼす泡沫の聖女として祀り上げられたマスターに、自分の原型となつた世界で一番嫌いなもうひとりの善良な自分を同一視しながら。

復讐者として生きても不思議ではない過去ながら、自己愛を捨てて人類のために貢献する、もうひとりの自分にも似た部分を憎らしく思いながらも、それでも、ある意味人間らしい葛藤を捨てはしない己のマスターを手放すことは一度も考えなかつた。

共に炎で焼かれるのが嫌なら離れなさいという忠告に、ひとりじやないなら怖くないわと強がりでなく本心として言い切つた、得難い者だと知っていたからだ。炎を引き出すために、研究者たちに赤く燃える焼きごてで背中を幾度も灼かれた彼女らしい一言だつた。

我が蛮行は必ずや地獄に落ちるに相応しい。けれど、竜の魔女が一緒なら、煉獄も怖くはないと綺麗に笑い飛ばしてくれた稀有な主だと。

ジャンヌ・オルタは決意する。

罪を贖うために存在するのではない。救われたいから存在するのではない。

このどうしようもない物好きなマスターに勝利を与えるために、今回の現界を定義する。

もし敗北して、何も報われないいうたかたの夢と成り果てようとも、恐れはしない。

傍らには、うたかたの聖女というレツテルを押しつけられた、ただの小娘であるマスターがいるのだから。

ただまあそれはそれとして、彼女はコツコツと努力を欠かさない。

元にしたあの女がポンコツ脳筋なんだから、地頭が残念なのはしようがない。頭脳労働はもうひとりのいけ好かないスカした態度のアヴァンジャーに任せるとして、最低限

文字は綺麗な字で書けないと。マスターが最高の頭脳を持つなら、それぐらいの教養がないと恥ずかしいでしょう。

新宿では社交界での経験値が高い男装したクリスに完璧にエスコートされながら踊り恥ずかしいやうれしいやら。スマダリパワーここに極まれりで、農民出身のジャンヌ・オルタはくらくらしつぱなしだつた。文字の次はダンスとマナーね、ええ、ものにしてみせますども。

Fate以外の世界では気ままに過ごしている。指輪の座で休んでいることもあれば、セーフハウスや外に出て省エネモードでクリスに連れ添つたり、靈体化して見守つたり。新宿で披露したハイブランドで固めたワンピースとジャケット姿はお気に入りらしい。新宿でキュイラツシエ・オルタを駆つてマスターと二人超高速ドライブをしたセイバー・オルタに対抗して、「竜の魔女」スキルが竜種にも騎乗できる最高ランクの騎乗スキルなのも相まってバイク運転も検討している。「あいつがスピード狂なら、そうね、こつちはマスターが乗りたくなるような運転を目指してやろうじゃないの」とどのつまり、ヒロイン力の高いツンデレ。

クー・フーリン（術）

立香側。冬木ではぐれサーヴアントとして立香とクリスに出会つた時、初見で所長の状態を見抜き、片方は戦闘ド素人丸出しで魔術師らしくもない一般人と盾の少女、片方は何気なく突つ立つてゐるよう見えて、かなり距離が離れてる時点で自分に気づいて、いつでも反撃可能なように自然体の構えで警戒中の女と、槍の時に死合いたいレベルのサーヴアントというちぐはぐな一行と見極めていた。マスターとして指揮能力、戦闘力など諸々のスペックとしてはクリスが上だが、戦力バランスとドライド姿での現界ともあつて、導くものとして立香の一時的なサーヴアントになることを申し出る。

いい尻だつたのでマシユ同様触ろうとしたが、避けられて手首を捻り上げる手前の寸止めで無言の笑顔で威嚇された。

冬木で諸々の立ち回りを見ていい女認定しており、消滅間際に「今度はランサーで呼んでもらいたいもんだ、ああ、次はお前さんのサーヴアントになるのも良いかもな。俺は結構色んな聖杯戦争に呼ばれてきたが、良いマスター、良い女。良い戦い。この3つが揃つて、なおかつ俺が最後まで悔いなく戦えるつてのは中々無かつたんでな。そういう点では、アンタとでも上手くやれそうだ——」と言い残す。……それがフラグとも知らず。

果たして、キヤスタークラスの彼はカルデアに戻った直後の立香に召喚され（プレボ
鯖だから仕方ない）、その後立て続けにクリスがランサークラスを引き当てるというど
こぞの王様が見たら大爆笑必死の愉悦案件が起きた。「これはひどい。「あの時のキヤス
ニキの表情の抜け落ちっぷりはしばらく夢に見るレベルだつた」と立香がぼやいたほ
ど。

とはいえたマスター自慢といざこざが起きるのはクー・フーリン同士の間だけで、彼と
クリスの間柄は至つて平穏。ランサークラスの時より年嵩の年齢での召喚ともあつて
落ち着きと思慮深さがあるが、たまに底知れない目を向けられているのを察知する。そ
ういった場合は槍と狂のクー・フーリンが威嚇しているので今のところ問題は無い……
はず。

魔術師として未熟な立香と、異世界人ながらも、もともと幻術を扱えるほど魔術素質
があり、世界からの概念付与で回路を持つているクリスに北欧の秘術たるルーン魔術や
ガンドなどを教えたのはこの人。

クー・フーリン（プロト）

立香側。槍と術に比べて召喚されたのはちょっと遅かつたが、召喚後的第一声でクリ
スにめちゃくちや驚いた顔をされたのが印象的だった。なんということはない、元の世
界のクズのロイヤルストレートをキメた銀髪褐色猿ことザップと声帯がそつくりだつ

ただけ。「……あいつの声ってつくづく良かつたんだな」という意味深な一言から驚いた理由をクリスから聞き、女好きぶりにちょっとフェルグス叔父貴を思い出すのであつた。多分女癖の悪さはどつこい。恨まれなく後腐れなく、といった点ではフェルグスに軍配があがるが。

クリスと直接話すことはあまりなく、槍と術の会話で直接話さないのにやたら彼女のことを知つてゐる状態。自分のマスターである立香とは友人のような気さくな関係を築いてゐる。術の暴走のあおりを食らつて止めに走らされるのは大抵プロト。

ベディヴィエール

立香側サーヴァント。キヤメロットでの功績を認められ、今回のみ英靈として存在を許された。

誠実にして清廉、アーサー王の執事役として他の円卓から誰も異議を唱えるものが居なかつたほどの忠義ある人格者。キヤメロット後、カルデアに召喚された瞬間ボロ泣きした立香とマシユを受け止めおろおろしながら、こつそり涙を拭つたクリスと笑いあつた。

生真面目で朴訥な紳士であり、誰かを支える執事役だつたこともあり、本職が秘書役であるクリスとは波長が合う。主のために難事を切り開き、煩わせぬよう雑事をこな

し、環境を整える。人の輪の中心に居るよりも、そこで輝く主の姿を、片隅に佇んで落ちていた笑みを浮かべて見守る——そんな気質を備える二人。

主従ではないが、ベディ、レディ・クリスと呼び親しみ、バレンタインデーには親愛の贈り物を交わした仲。そんな仲睦まじい二人の様子を遠目から眺める職員には、銀と黒、翠と赤という正反対の色彩の長身美形が並ぶ図として目の保養にさせていたとか。2年の旅路を経て、クリスが英霊たちを座に返した後、聖杯を用いて異世界へ帰る彼女を、一抹の寂しさを胸に抱えながらも、友の幸福を願い、立香と共に見送った。

アルジユナ

マスター・立香が召喚した弓兵。ロンドン修復後に召喚された。が、初見でもう一人のマスターであるクリステイアナを見て動搖するなど所々気になる点も散見された。北美大戦ではレベル的な問題とレイシフトに編成時点で弾かれ（敵側サーヴアントのため）カルデアに残留。ちなみに北美大戦のアルジユナはクリスに対して特に大きな反応を見せなかつた。

時空神殿での魔神柱狩り競争、人理修復後、両マスターの計らいでクルクシェートラや北米大戦で果たせなかつた令呪ガン積みで極限まで生前に近づけた状態で全力での一騎打ちの他、シュミレーターでの手合させなどを経て一応互いの確執・執着は落ち着

きを見せてはいる。が、クリスティアナへの接触は極力回避している様子。様々なサーザントが理由を尋ねるが、彼の口からその理由が語られたことは未だ無い。

▼剪定異聞特異点「光輝救済聖典クルクシェートラ」クリア、及び幕間「得られざるサラスヴァティ」クリア後解放マテリアル

——ああ、今は遠き私の友よ。唯一、この私が授かることの出来なかつた、掌から零れ落ちるように消え失せたひと。

——あなたがあの人の生き写しのようであることが、ただ、嬉しくて。どうしようもなく、憎たらしいのです——。

カルデアに召喚されたのは実は「光輝救済聖典」を経由したルートのアルジユナ。「在らざる者」であるクリスティアナがカルナとのパスを利用されマハーバーラタ世界に夢を経由してレイシフト（下総国と同じ原理）した世界線を辿つてはいる。彼にとつてクリスは生前にカルナとはまた違つた意味で執着した人物。それが今度は女性として生を受け、マスターとしてカルナをメインサーヴァントに数々の英靈を率いていたためめちやくちや動搖した。同時にバーラタの記憶が無いにもかかわらず一番槍として傍にあるカルナへの嫉妬と困惑が強かつたのもこのため。

また、生前の己の所業への引け目と、自分を覚えておらず見てくれもしない友の面影

がつらく、カルナと信頼を築き睦まじく過ごすクリスを見たくないという思いからクリスを避け続けていたため、光輝救済聖典後までクリスはアルジユナに避けられ続ける理由を聞けないままだつた。

クリスからしてみれば最初のサーヴァントであるカルナの肩を持つのはごく自然なことで、裏切りを嫌う彼女が、マハーバーラタにおいて「カルナを殺す」宿命にあるアルジユナに靡かないのは当然のことなのだが、あらゆる祝福を神から与えられていた授かりの英雄たる彼にとつて、王子でも完璧なアルジユナとしてでもなく、ただのひとりの人間として善も悪も認め受け入れてくれた（と思つている）クリスはたとえ敵側だったとしても、取り返しても傍に置きたいかけがえのない友人であり、護るべき心の拠り所だつた。

カルナをクルクシェートラで謀殺し、ドウルヨーダナがアルジユナの兄のビーマによつて倒され、カウラヴァア側の敗北で決戦が終局した後、アルジユナは捕虜という名目で男装していた（本名は呼びにくいでティアと名乗つていた）彼女を手元に置こうとする。

しかし宮殿への護送中、厳重な警備と捕縛の中、アルジユナの目の前で美しくも哀しい微笑みを浮かべて天を仰いだ彼女の身体は、最初からまぼろしだったかのように消え失せた。彼女にとつて夢の終わりに過ぎない終末だつたとしても、アルジユナに与えた

衝撃は計り知れず、唯一の理解者を失つた彼の心に深い傷を残すこととなる。

人理修復が為されれば剪定事象として人理には残らず、消え行くさだめの記録と記憶。奇譚のあつた剪定世界の授かりの英雄がどんなに心の底から望み、手を伸ばしても得られなかつたただ一人、唯一である。

サラスヴァティとはメルトリリスの靈基に含まれる一柱であり、インド神話に語られる水や風などの自然、音などの「流れるもの」を操る河の女神である。ブラフマーの配偶神でもある。また、ペルシア神話におけるアナーヒターと同一視される。このアナーヒターは金星神で、バビロニアではイシュタルと習合、他地域ではアルテミスなどとも同一視されている。

光輝救済聖典、バラタにおいては、ドウルヨーダナやカルナの友、軍師としてカウラヴァ側についた彼女の戦い、指揮を觀て敵味方が女神の名になぞらえ賞賛した呼び名である。

その他サーザント

葛飾北斎

——イヤサ、こいつは驚いた！　南蛮人でこれほどまぶしい面の美人を拝んだのは初めてだよ！　ちょっと待つとくれ、ぜひその艶姿あでうがた、おれに描かせておくんな!!

カルデア未召喚サーヴァント。リアル過ぎる初夢の狭間で出会つた、べらんめえ口調な江戸っ子フォーリナー。

出会つて真っ先に謎のタコにひつきりなしに付きとまとわれ、元気に会話する立香と応為に反してクリスは道中ずっとテンションガタ落ちだつた。地味にSAN値減少（小）をターン毎に受けていた。正体的に仕方ないが。それでも一時的狂気に陥らないだけ流石は鋼の精神力である。ととさまで悪気は皆目ないが、描きたいという欲を優先して自重もしないあたり強心臓。クリスのサーヴァントである鈴鹿に追い払われてもめげない。鈴鹿の語彙力がどんどん無くなつてこのタコ！ とひねりもない罵倒を引き出すレベルでしつこかつた。

ととさまがクリスに目をつけたのは、後世に名を轟かすほどの名画を紙へ書き上げ、どつかの邪神と融合したことでアップした觀察力と勘で、クリスが只者でないどころかフォーリナーで召喚されても可笑しくない存在と察知して、描きたくて描きたくてしようがなくなつたから。

ただし、もし彼の画力でクリスを描こうものなら、それはクリスを「永続的狂氣」に叩き落として「彼女」じやなくさせるほどの、人物画とは思えない、本人すら気づかなかつた真実を写し取つた恐ろしいものが出来上がる。

深淵の邪神と混然となつた境地で描かれる非ユークリッド幾何学的画風のせいでは

なく、そこに映し出されたものに、クリスティアナという人格は粉々に打ち砕かれる。 彼女が彼女として在るために、決して見てはならなかつたものを、気づいてはならぬものを、「自分」を守るために無意識に目をそらし続けていたものを——彼は人の心臓のまま、描いてしまつたのだから。

この場合、ありとあらゆる人やサーヴァントの手による処置を施そうとも打つ手なし、回復の見込みはない。人一人狂つただけでは終わらない。強制バッドエンド。

なお、第一第二再臨時の応為本人が描いた場合は、北斎が自分より美人図に優れていったと言わしめるだけに普通に素晴らしい美人画を描き上げる。

……なお、クリスはその職務上、生まれのわりに目・舌が肥えていて、クラウスやドグ・ハマーなどの感性鋭い仲間が傍に居たことからも審美眼も光るものを持つ。生粋の西洋人である彼女があの時代の人物画の自分に美を感じ取るかはさておき、画が発する素晴らしいものという波動は感じ取れるだろうが。

融合した邪神が海に眠るものであり、北斎のスケッチの中には人魚や水虎などが描かれていたこともあり、初夢との縁もあって召喚には十分なものが揃っている。

初夢の狭間が終わる頃、北斎からはクリスを描けなかつたことを大層惜しまれる。クリスに召喚されるのを嬉々として座で待っていたサーヴァントは他にも（玉藻・オジマンディアスなど）いたが、クリステイアナは諸事情から「フォーリナーを召喚できない」

制約があるため、絶対に北斎はお呼びがかからない。立香ならワンチャンあつたが、そこは座からの誘いも邪神の侵食も「画を描き続けたい」という一念にて跳ね除けた偏執狂、クリスにこそ執着する北斎は果たして、カルデアにはたどり着かなかつた。
もし万が一の可能性を掴んで召喚されていたら、北斎からの圧倒的矢印（ただのモデルになつてほしい好奇心）と応為からのアプローチに辟易としながらも、エミヤと共に生活力ゼロの葛飾親子の世話をなんだかんだ焼いていると思われる。なにしろ、生活力ゼロで目を離したらすぐにゴミ屋敷に周囲を変えてしまうタイプの人間は、どこかの不可視の人狼を思い起させて、クリスにとつて懐かしさすら呼び起こすのだから。

蒼穹のヴァリアシオン（×グラブル）

星屑めいた絶対零度の花びら

エルステ帝国の謀略によつてアウギュステに眠る星晶獣・ポセイドンは暴走状態にあつた。

島ごと沈めると豪語し、その冗談のような言葉を実現できる星の民が残した怒れる大いなる兵器を、グラン率いる騎空団総出でなんとか戦闘に持ち込み、溜まりに溜まつた鬱憤を晴らせたはいいものの、今度は休眠状態を叩き起こされた上に、空の民に強制的に屈服させられそうになつたことに対してへそを曲げてしまつたのだ。

アウギュステ列島が水に沈み、空の底、奈落に墜落して大勢の島民が犠牲になつてしまふのをどうにか防いだところでこれだ。アウギュステはその正式名称をアウギュステ列島特別経済協力自治区といつようによく、どの国の領土にも属さない自治区である。「海」がある島としてリゾート地として全空に名高く、傭兵を国軍に匹敵するほど雇えるほど潤沢な財源は、アウギュステに軒を連ねる観光者向けの商店からの税収がほとんどを占めている。

ポセイドンはリヴァイアサンと同じ水を司る星晶獣であり、水神の名を冠する通り強力な星晶獣であることは先の戦闘の激しさが物語ついている。一応鎮静の兆しを見せたとはいっても、ポセイドンが荒ぶつたままでは海は荒れたまま、漁業も海水浴もろくにできない状況がつづくだろう。それは島民の生活にも無視できない被害をもたらすことは容易に想像できてしまつたグラントちが、どうポセイドンをなだめるか頭を捻つていたその時、コルワがその場の空気には似つかわしくない明るさであつけらかんと笑つた。

「あら、適任がいるじゃない」

天の声にすがるようにグラントちがコルワを見返すと、彼女はにこにことある方向を指さしていた。その場の全員がその指先が指示する方を辿る。

その先、頭痛をこらえるように額に指先を押し当てていたクリスが苦々しく呟く。

「コルワ」

「前に言つてたじやない、水神を鎮めたことがあるつて」

「……確かに龍鎮めはやつたことはあるが、はたしてあれが星晶獣相手に通用するか……」

いつだつたか、酒の席でその場の流れで肴にした昔むかしの話を持ち出してきたコルワに、クリスは頭の奥から鈍痛が響いてくるような気がした。愉快犯的な彼女の笑みを

見たのも原因だろう。

どこか楽しげなコルワの言葉を否定するどころか、ほとんどの団員にとつて寝耳に水な爆弾発言を落としたクリスティアナにその場がざわついた。

「竜、だと？」

「ドラゴンはドラゴンでも、ファフニールみたいな四足歩行じやあなくて、蛇に手足がついているような、リヴィアイアサンに似た龍だけどね。地鎮を司るような龍の水神が、龍脈……国の大地全体を巡る魔力エネルギーの通り道の異常で荒御魂化して、今回のポセイドンのように暴走状態に陥ったのを、その国伝統の神楽舞と同化した歩法での封印術を使いながら舞を奉納する機会があつたつてだけさ」

「だけつて」

竜と聞いて片眉を跳ね上げて訝しげに問うパーシヴアルに、こともなげにクリスティアナは過去の経験を語る。

が、その内容は口調ほど簡単でないのを、かつての自国の動乱から容易に察せたランスロットが苦笑した。邪竜ファニールほどでなくとも、最強種と呼ばれる竜種の暴走を殺さず止めるなど、生半可なことではない。

「ポセイドンが怒っているのは、空の民に無理やり従えられそうになつて、侮辱されたと思つていいからでしよう？ なら、ポセイドンに対して尊重と畏敬を示して、空の民に

はポセイドンの庇護と恩恵が必要だと考え直してもらえば良いの思うの」

「なるほどな……クリスの舞は、人間にはまだ見守る価値があると考え直してもらうための、頭を冷やすきつかけになつてもらうつか」

「……ものすごくまともそうなことを言つているが、コルワ、君は単に以前作つた巫女装束を私に着せたいだけだろう」

頭痛を堪えるように頭を片手で押さえたまま、渋い顔で唸るクリスに、ぐりんとコルワが勢いよくクリスに向き直つた。

「ええそうよ、だつて貴方の舞が見たくて作つたのに、舞つて見せてくれるどころか、袖すら通してくれなかつたじやない！ この私が作つた服を、よ!?」

「必要に駆られてやつた一度つきりの舞を、ガイースやアンスリアみたいな本職もいる前でなんて恥ずかしくて出来るわけないでしように」

鬼気迫つた表情でクリスににじり寄つたかと思うと、興奮したように矢継ぎ早な言葉を紡ぎながら、掴んだクリステイアナの両肩をがくんがくんと前後に揺らすコルワ。それでもクリステイアナの表情は呆れ返つたままだつた。

「その本業二人が見たいつて言つても見せてくれなかつたでしよう!?」「……する必要がないなら、進んでしたいものでもないし」

クリスが消極的なのは理由がきちんとあつた。

なにしろ、龍鎮めの舞を舞つたのは彼女の体感でもう5年以上前のことになる。それ以降きちんと練習を積んでもいい一度きり披露しただけの舞を、踊り子として生計を立て、真剣に踊りに向き合つている者たちの前で踊るのは、流石に失礼だろうと考えていたからだ。

確かにクリスが扱う氷の蹴術・エスマラルダ式血凍道は、氷の上で足を振り上げたり、空中で技を放つことも考慮しているため、不安定な足場でのバランス感覚を重視している。ゆえに修行の中にアイススケートやバレエ、そしてエスマラルダの本拠があるスペインのお国芸であるフラメンコでバランス感覚、体幹、足さばきを学ぶ。

それらの基礎的なトレーニングを欠かしたことがないからこそ、龍神鎮めの儀を急遽代理で頼まれ、国の危機ともあつて断ることも出来ず、なんとか形にして役目を終えることが出来たのだ。

日本は八百万の神々が治める神秘的な成り立ちを持つ国だが、その中でも位の高い国津神である龍神が静まらなければ、土地に巡る龍脈が暴走し、地震の多い日本はさらに未曾有の大地震に多く見舞われ、壊滅的な被害を負つただろう。

鎮めの儀を担つていた巫女血筋の継承者が事故で急逝したため、代役を務めるための条件である水の素質を持ち、水上に立つことが出来て、なおかつ踊りの基礎があるとは

いえ、他國の人間であるクリスに土下座しかねない勢いでプライドの高い神官たちや日本支部の上層部が頭を下げてきたことからも、その逼迫した状況を物語つていた。

いくらガイースの剣舞に付き合え、フラメンコやバレエが踊れるとは言つても、龍鎮めの舞は神舞い、あるいは巫女舞とよばれる神事。門外不出の奥義であり、神に捧げる大事な舞踊だ。生半可なものを見せるわけにはいかないと、時々思い出したようにねだつてくるコルワやガイースたちの懇願を断り続けていたのだ。

……だが、この状況は妙にデジヤブを感じていたのも本心だ。ただ、水神の名を冠するとはいえるセイドンは星の民に作られた兵器。封印の側面を持つ神舞いとはいえ、通用する保証は何処にもなかつた。だから黙つて他の方法がないか考えていたというのに、とクリスは遠い目をした。

「ティーネ」

そんな女子二人の舌戦のスピードに置いていかれている周囲だつたが、その二人に待つたをかけた人物が居た。

クリステイアナの愛称でもほんの数人、特に親しい人間にしか許していらないその愛称を騎空団の中でも呼べるのはただひとりと一匹。クリステイアナを姉のように慕う团长、グランだつた。

あまり大きくはない声での呼びかけだつたが、肩を揺さぶるのをやめたコルワから解

放されたクリスティアナは、少々不服そうな顔で弟分を見下ろした。可愛がつているグランに彼女がそんな表情を向けるのは珍しいことでもあったが、グランがこれから言うであろう言葉を薄々察しての表情だつたのだろうと他の団員が察するまで、数秒も無かつた。

背に腹は変えられない。打てる手が現状思いつかない以上、どんなに姉貴分が嫌がついていても、やつてみてもらう価値はあると団長として団長命令を発動したグラン。そして土下座しかねない勢いで頭を下げる今回の騒動の遠因ともいえるユーリのダメ押しもあり、がっくりと肩を落としながらも肅々と従つたクリスティアナが嬉々としてコルワに引きずられて着替えに戻ること30分ほど。ポセイドンの様子を伺いつつ待機していたグランたちに、すいと滑るように近づく影があつた。

「団長、お待たせ！　準備整つたわよ」

コルワのやりきつたと達成感あふれる笑顔の後ろ、静かに佇む人物の姿にグランたちは息を呑んだ。

アウギュステの一年中温暖な気候、リゾートに相応しい抜けるような青空に対比するような、白と鮮やかな緋色のコントラスト。上質な布で軽やかに織られた白衣はくえと、踊ることを前提に作られたためか巫女袴に多いスカート状ではなくズボン状になつた紺袴。

その上に羽織るのは千早ちはやと呼ばれる薄手の祭祀用の羽織だ。胸元は朱色の胸紐で緩やかに結ばれ、袖裾には白絹に桜や梅の図柄が桃色や朱色で丁寧に刺繡され、シンプルな巫女装束に控えめな華やかさを添えている。

緋袴には白い裳が結わえられ、裾にかけて萌黄や緑青、瓶覗色と淡い色の細長い布が縫い付けられていた。引きずつてしまいそうな長さのその裾が砂で汚れないよう、着替えや化粧を手伝いに行つたユエルとソシエがゆつたりとまとめた裾を手にしていた。

クリスが居た世界の日本における伝統的な巫女装束に加えて、彼女は天の羽衣とも呼べそうな、透けるような薄手のヴエールを頭に被つていた。薄い金属板を打つて作られたティアラ状の天冠を額に付けており、天冠から伸びる雨垂れのような金属飾りがシャラシャラと揺れる。同じく祭祀用の頭飾りである花簪などの髪留めを用い、長いウエーブを描く黒髪はうなじの後ろでひとまとめに結わえているため、普段よりすつきりとした首周りが、紅を刷かれた頬、地肌の白さと相まつて清廉とした色気を醸し出していた。

そしてコルワやソシエたちによつてより美貌を引き立たせるよう化粧を施されたクリスは、衣装の莊厳さと合わせて、神がかつた美しさを静かに発していた。

「わあ……!!」

「おおく、すっげえキレイだぜ、ティーネ！」

「ビィくんの言う通り、美しいな……」

感動の声を上げるルリアやビィ、カタリナ。その隣で言語野がやられたらしいグランががくがくと首を振つて同意している。そうだろうそうだろうと出来栄えに領くコルワがあたりを見渡せば、神々しさに当てられたのか若い団員は顔を赤くしながらぼうつと見惚れている者も決して少なくはなかつた。あのパーシヴィアルやジークフリート、ユーステスでさえ軽く目を瞠つてゐる。

純粹な褒め言葉を受けたクリスは、垂れ下がるヴェールを避けつつにこり、と目を細めてルリアたちに微笑んだ。目元に引かれた紅が細められ、眦に得も言われぬ色香を添えている。普段よりも静かな、神造めいた微笑みにノックアウトされた団員が倒れる音が砂浜に響くが、その場の誰もその音を聞きとがめなかつた。気にする余裕がなかつたというのが正しいだろう。カタリナやルリアさえ笑顔に当てられて顔を赤くするが、すうつと滑るようにクリスが前に出るのを見て目をしばたたかせた。

歩く、というより鳥が舞い降りてくるようなその動きに怪訝に思いながらカタリナがクリスの足元を見れば、その足元は数センチほど地面を離れていた。その理由をすぐに悟つた——クリスの足元に、いつも見かける靴はなく、赤い刺青の入れられた素足がさらされていたからだ。

「行つてくる」

グランとパーシヴァルの間をすり抜け、一言呴きながら、ポセイドンの待つ青い海へとふわふわと宙に浮きながら滑空していくクリスティアナを、二人は重々しいうなずきと共に見送った。

波打ち際でユエルとソシ工が持っていた裳から手を離せば、ひらりと水面に白絹が扇のように広がった。緋袴から伸びる細い足首が白波をかき分けたのはほんの数歩、血法を発動したクリスティアナは地面と同じように水面に立つてみせた。それに驚くポセイドンの前まで進み出たクリスティアナは、しとやかに、朗々と言葉を紡いだ。

「ポセイドン。大いなる海を司る海神の名を与えられた星晶獣よ」

「……何の真似だ、人の子。空でも星でもない……虚空より至りし……異郷の民」

「……眠りを妨げた挙げ句、畏敬を忘れた人間の暴挙、謹んでお詫び申し上げる。今回の無礼に値するものとは思えないが、せめてひとつ、僭越ながら我が舞を奉納させて頂きたい」

「——舞……だと？」

「神には感謝と畏敬を持つて供物や神樂を捧げるもの。なれば、神を称するポセイドン、貴方に舞を捧げてもなんら可笑しくはありますまい」

しゃり、と羽衣をかき分けて胸の前に閉じたまま掲げた檜扇、その留め具から流れる白から濃い青に変化していく五色の垂布を捧げ持ち、鮮やかにクリスティアナは笑つた。

「かつては国を支える龍の水神すら鎮めた我が舞、とくと御覧じろ」

りいん、と足首に嵌めた金環に繋がる鈴が、澄んだ音を波間に響かせた。

くつきりと赤い唇が、静かに開かれる。閉じた檜扇を顔の前にかざし、目を薄く閉ざした静謐な佇まいはいつそ飲まれそうな静けさに満ちている。

「日天よ、^{スリヤ}我が舞を照覧あれ」

ここではない遠い世界、異世界で出会った太陽神の息子、人類史そのものを守るための旅で相棒と呼んだ最高のサーヴァントを思い浮かべながら呼びかける。ピアスは衣装に似合わないからと着けてはいないが、太陽の光を受けて燐然と輝く黄金と瑠璃の指輪が僅かに温もつたように感じた。陽が傾き、陽光がオレンジに色づく刻限。蒼い海は紺青に色を変える中、呼びかける声に答えるように、クリスの周囲にホタルに似た淡い

燐光がふわりふわりと立ち上つては消えていく。
 「**弁財天**よ、我に力を授け給え」

奇妙な夢の果て、神代のインドで邂逅した流体、風、歌舞音曲、ありとあらゆる「流れれるもの」を操る河の女神に祈りを捧げる。電子の海にて出会つた蜜の女王、嗜虐的でいじらしいアルターエゴのサーヴアント・メルトリリスを象徴する鉄の棘足、その細い切つ先で渦巻く水を踊り、どろどろに経験値化した敵を吸収するドレイン能力の源泉、メルトリリスがもつ女神三柱のハイ・エツセンスのうちの一柱でもある。

その女神の恩恵は、波こそ高くないとはいえ荒ぶつていたさざなみを、クリスの周囲に波紋状に広がつた青い光が打ち消し、水面に白く透き通つたまぼろしの蓮華を咲かせ始めた。何処からともなく聞こえてくる笛や琴の音にポセイドンやグラントたちは音の発生場所を探ろうとするが、海全体からその気配が感じられ、星晶獣の気配を感じ取れるルリアや、魔物さえ鎮められるリラの名手であるアンリエットさえ首を傾げさせた。

静かな海辺を切り裂くように澄んだ笛の音が響き渡ると同時に、勢いよく檜扇を開いたクリスがとんと見えない水床を裸足で打ち鳴らすように踏み出した。尾を引くよううに裳と羽衣が風をはらんで棚引く。かるやかな脚さばきのたびに胸元の菊結綴が揺れ、踝に嵌められた華奢なアンクレットが跳ねるように打ち鳴らされた。

指先、つま先に至るまで神経をはりつめたようにスラリと伸ばしながら、一挙一動は

なよやかにしてたおやかだ。静かに、時には大胆な動きでくるりと衣装の重さなど無いかのように回る度、檜扇の動きに合わせて水面から立ち上った水流が静謐な舞に躍動感を添えた。水面から生まれては宙で消える燐光は妖火のようにゆらゆらと立ち上りながら幾重にも重なり合い、白い千早や羽衣を透かし、美しくも幻想的に舞を彩っていく。

この世界の舞は多くは華やかなものが多い。ガイースのようなアラビアン風の衣装に身を包んでの息を呑むほど鋭い剣舞、アンスリアのような魔法の炎を用いて踊る情熱的な舞、そしてディアンサたち五花の巫女のようなアイドルにもにた舞。

それとは対象的な、静謐さとびりりとした緊張感が伴う、雅やかな舞はこの世界の者たちにとつて新しいものであつた。

陽が落ちてゆき、海辺がうつすらと夜の色になじむ頃。燃え落ちるような太陽の光から、空に輝く月から落ちる虹色の月光に移り変わりながら照らされた神舞いは、名残を惜しむように溶け消えていく笛の音とともに幕を閉じた。

舞が終わるまでの短くはない間、その場に居た誰もが言葉を発せず、神秘的な光景にしばらく魂が抜けたように飲まっていた。

奇妙な静寂を打ち破ったのは、唸るように低い声を轟かせたボセイドンだつた。

「……見事なり。貴様のその舞と後ろの者共の不屈の執念に免じて、島を落とすことはやめてやろう」

苦々しげな表情ではあつたが、それまでの威圧するような荒々しさは消え、苦しげでもあつた途切れ途切れの声に怒気はない。アウギュステのビーチはいつもの穏やかさを取り戻していた。一か八かの作戦が功を奏したことに、グラントたちはほつと安堵のため息を漏らした。

「厚情、感謝致します」

「二度はないと覚えておくがいい」

無言で薄衣を被つた頭が垂れる。平伏したままのクリスを一瞥してルリアへと視線を向けたポセイドンに、ルリアもそろそろと波打ち際に近づいた。ポセイドンの鋒先から光が集まり、手のひら大の光の玉が生まれたところでふよふよと空中を漂い、ルリアに吸い込まれていった。普段なら鎮まつた星晶獣が光の断片となつてルリアに吸收されたところで終了なのだが、普段とは違う流れにルリアとグランが首を傾げた。そんな二人の前で、ポセイドンの視線が砂浜に向かつて戻る途中だつたクリスに再び差し向けられた。

「……虚空の民、名は何という

「は、え、クリスティアナ、ですけど」

舞が終わつて肩の力を抜いたところで再び話しかけられ、疲労で少し曲がつていた背筋を伸ばしながらクリスが返答すると、ポセイドンは数秒沈黙した後、フン、と鼻を鳴

らした。疑問符を頭に浮かべて呆気にとられる人間たちに構うこと無く、水神は目を細め、再び鉢を今度はクリステイアナに差し向けた。ルリアのときと同じように生まれた光の玉はクリスの手元にたどり着くと、蒼い大粒の鉱石が嵌め込まれたブローチになつて、ころんと掌に転がり落ちた。

「?」

「持つていくがいい。水を操り冷氣を生むその血、無より水を生む我ならば消耗を補えよう」

「!」

ブローチはポセイドンの額を飾る天冠と同じ鈍い金で、貝殻や水流を模した彫刻が施されている。ブルシャンブルーの美しい鉱石からはポセイドンが発している鬪氣と同じ水属性の波動を感じた。つまるところ、これはポセイドンの加護付きのブローチ、ということだ。

血法の弱点を見透かしたようなポセイドンの言葉に、ブローチとポセイドンの青い目を交互に見返し、数秒の空白の後、クリスはぎゅっとブローチを握りしめた。

「ありがとう、ポセイドン」

「見事な舞の礼だ。その技量、みすみす死なせるには惜しいゆえな——」

言いたいことは言つたとばかりに光の粒になり、ルリアに流れ込むように消えたポセ

イドン。それを最後まで見守っていたクリスは、お疲れと快哉を上げて駆け寄つてくる仲間たちに、ひらりと片腕を掲げて砂浜へと戻るのだつた。

「見事だつた。流石は俺の秘書かしんだ」

「だから家臣は無理だつて……うん、まあ、ありがとう」

「いやほんとに美しい舞だつたぞ」

「歩くたびに華が咲いて、光と一緒に踊つてるところなんか夢みたいだつたよなー！」

「うむ。……しかし、あれだな」

砂に引きずつてしまふ裳は早々に取り払つてコルワに預け、ナルメアが甲斐甲斐しく差し出してくるタオルやジュースを受け取りながらクリスが舞の疲れを癒やしていると、フェードラツへの（元含む）騎士四人が話しかけてきた。

口々に褒められて困ったように照れ笑いを浮かべるクリスだが、不意にジークフリートが言葉を切つたのに首を傾げた。ことりと首を傾げる動作が薄絹を被つたままということもあつて小動物じみてみえるな、と周囲が明後日の方向に思考を飛ばす中、その羽衣をちよいと身を屈めながらめくつたジークフリートが、クリスと目を合わせて破顔した。

「この衣装だと余計に、天女のよう何処か遠くに連れ去られてしまいそうだな」

「そういうところだぞジークフリート……」

兜を脱げばたちまち街の女を虜にする美丈夫がさらりと発した、口説き文句じみた褒め言葉に、んん”つ、と喉元で照れをこらえながら苦言を呈したクリス。何故か流れ弾を食らつたヴエインとランスロットが身近で身悶え、パーシバルが呆れたように深い深いため息をつく。その様子に不思議そうにきよとんとしてみせるのだから、この三十九男は罪深い。

情熱の国ともいわれるスペインで生まれ育つたクリスはラテンの価値観から熱烈な口説き文句は周囲で日常的に飛び交っていたので慣れているし、義兄が仕事上ハニートラップで情報を集めてくることもあり耐性がついている。自身もライブラの窓口として社交界に顔をだす機会も多かつたため、上つ面だけの薄っぺらい褒め言葉など聞き飽きてすらいた。逆に、そういうた耐性がなければ、ジークフリートの言動は相手に口説かれていると勘違いされてもなんら可笑しくないだろう発言だった。過去に美女（特に人妻）を見たら敵であろうが助けたり口説いたりする某湖の騎士という前例がいたこともあり、ジークフリートにその気が全くない单なる褒め言葉として受け止められた。

だがしかし、そうか。

薄絹が風に煽られて飛んでいかぬよう、絹地の下で額を飾る天冠と繋がつてているため

に、未だ脱いでいない半透明の羽衣の裾を手でたぐり、クリスは心中でつぶやいた。

天女、とは中々馴染みのない言葉である。緋袴ではあるが、羽衣を被つて笛の音とともに舞う姿は、どちらかというと牛若丸の伝説をクリスに思い起こさせる。弁慶の薙刀をひらりひらりと躲す薄幸の美少年。牛若丸と聞くとどうしても首級を上げたがるライダーが思い浮かんでしまうが、この場合クリスが生まれ育った世界の日本に伝わる伝説の方の少年である。

流石に見かねたパーシヴアルがガミガミとクリス以上にジークフリートへ苦言を呈している中、ふと何かを思いついたようにぱちりと瞬きをしたクリスは、薄衣の下でにまると笑みを浮かべた。眦とくちびるに引かれた紅と、銀を撒き散らしたように頬をきらめかす汗の粒で普段よりいつそう蠱惑的な雰囲気を纏っていたクリスは、そうだなあといたずらっぽく声を上げる。

その声にん？ とジークフリートたちがクリスに目を向ける中、彼女は顔が見えるよう羽衣の前を手でたくし上げ、うつそりと眦を細めて艶然と微笑んだ。小さな野花が集まつて綻ぶような、ささやかな普段の笑みとは違う。目を奪う艶やかな大輪の花が花開くような、意図的に自らの容姿の有用性を理解して利用するような、計算された女の笑みが周囲の視線を惹き付ける。

「わたしを天女と言うなら、何処かに飛ばされないよう掴んで離さないでくれるかい？」

普段、気にかかる策謀の兆しに対しても周囲に黙つて単独行動を起こしがちであり、その道中に断ろうがなんだろうがほぼ強制的に着いて行かされる羽目になる、戦友とも悪友ともつかない男への、普段の意趣返しも含めたささやかな言葉遊び。

色気を伴つた笑みと相まって、普段なら口にもしないような口説き文句で返してみせたクリスに4人が言葉を失い、誰かがなんとか硬直から解かれて言葉を絞り出そうとした、矢先――

「クリスさーん!!」

「ああ、ルリア。今行くよ」

大手を振つて名前を呼ぶルリアに反応し、一瞬で普段どおりの雰囲気に立ち戻つたクリスがさつさと踵を返して立ち去る。

残された四人がどんな反応をしていたか。それは怪訝に思つた他の団員から声を掛けられるまで、硬直から暫くの間立ち戻れなかつたとだけ、一部始終をニヤニヤと眺めていたカリオストロは呟くのだった。

＊＊

(おまけ・ポセイドンがブローチをくれた理由)

後日、事件の余波による家屋の倒壊の復旧作業が進む中、クリスティアナは島の図書館を訪れていた。蔵書数はそれほど多くないこぢんまりとした図書館だったが、埃一つ被つていない本や棚が、管理者や司書の几帳面さを物語っている。そんな中、島の歴史や伝説にまつわる本が集められている棚の前に居たクリスは、本の一つを選び取つて抜き出した。索引と目次をめくり、めぼしいものがなさそうなら戻してと、とつかえひつかえを繰り返していた彼女は、目当ての名前を見つけてページを繰つた。

——ボセイドン。

——海界を支配する気高き星晶獣。無から水を生み、さらに水場を住処とする魔物を創りだすことが出来る。

神舞いを披露した後、加護の籠もつたブローチを渡してきた星晶獣のことをきちんと知るべく、クリスティアナは島の守り神である星晶獣のページに目を通す。無から水を生み、というところで、あの時の『消耗を補える』とボセイドンが言つた意味に納得した。

クリスが扱う血法は魔法とは根本的に異なる。魔法は魔力と呼ばれる人間の中に流れる生体エネルギー、あるいは自然の中に満ちるものに指向性を与え、魔法として炎や水、風をゼロから「生み出す」技術である。

しかし、血法は属性の血液を術式によつてその属性の持つ力に「変化」させ、あるいは

は「干渉」する技術。ルーツとしては石を黄金に変えうるなど、等価交換を基本ルールとする鍊金術に近しい。

だからこそ大技になればなるほど血液の消費量は増大し、比例して失血死のリスクも高まる。

だが、血法は自然法則に従い、属性血液に近しい触媒があるとその難易度や消費量が少なくて済む利点がある。クリスの場合は、凍らせる範囲が雨や霧などの水気には含まれていれば、普段よりぐっと負担が少なくて済むのだ。

ポセイドンがどうやってその事を知っていたのかは不明だが、ポセイドンの「無から水を生み」という能力は、クリスとしては非常にうれしい効果である。

そんな中、文章をさらに読み進めていたクリスは、はたりと文字を目で追うのをやめた。もう一度引っかかった部分に目を通す。

——人と語らうことを好む珍しい星晶獣であり、星の民からは、水辺とそこに住む生物全ての管理を任されていた。

……この一文を見て、なんとも言えない気持ちに陥った。この文の人が星の民を指すのか、それとも空の民も含まれるのかは謎だが、人間と語らうのを好む穏やかな星晶獣を、あそこまで怒り狂わせたのもまた人間だということが。

せめてルリアの中で静かに眠り、時折出てきて話ができるれば、と思う。星晶獣の中に

は団員と交流……というかちょっかいをかけるのが好きなものもあり、ティアマトやユグドラシルなどはわざわざ人間スケールまで縮んで艇の中を散歩していたりする。
さびしかつたのかな、とクリスティアナは本を閉じながら、午後の光が柔らかに差す
室内でぽつりと呟いた。

肌になじむ懊惱

我が相棒、パーシヴァルは王の氣質を持つ男である。理想の国を作るためと、若い身空にこうして様々な島々を渡り歩き、難事を切り開いていくのを、旅路を共にする中で見てきた。絵空事と笑われそうで、とても尊い理想を実現するために、研鑽と行動を欠かさない男。いずれは、必ず国を率いる王となる人。だが、彼は王である前に騎士である。弱きを助け悪を挫き、正義と主君に忠義を捧げる騎士なのだ。

自分にとあてがわれたグランサイファーの自室。多くの団員たちがやれ依頼だの買物だのに艇^{ふね}を空けている時を見計らつてシャワーを浴びた私は、タオル一枚を身体に巻き付けただけの姿で脱衣所からぺたと間抜けな足音を立てて、姿見の前に立つ。濡れてしんなりとしたブルネットの先から滴り落ちる水滴が、肌を滑り落ちて艶めくマガボニーの床に丸を描いていくのに構わず、鏡の中に映る傷だらけの身体を眺めた。

タオルに覆われていない鎖骨まわりから伸びる赤い入れ墨が、白い肌と対比して鮮やかに紋を浮かび上がらせている。それよりもっと目を引くのはうつすらと筋が入つ

て割れかけている腹筋と、すんなり伸びた長い脚、その胴、背中、つま先に至るまでのあちこちについた傷跡だ。切創、銃創、火傷の痕。引き攣れた皮膚はそこだけ色が違う。足裏は幾度も技を使うために針を踏み続けて内出血で青黒く滲み、足の指の皮膚は手のそれよりも少しばかり黒ずんでいる。氷のエスマラルダを修めた者が修行中に誰しも通る、凍傷で壊死一步手前まで進行した名残だ。血流操作においては天賦の才があり、内出血だらうと循環不良だらうと血液を操って取り繕うことなど造作もない自分が、わざとそれらの名残を残しているのは、単なる戒めだった。己の力に溺れ、驕らないようにと。

とてもルリアのような天真爛漫で感受性の強い少年少女には見せられないひどい代物ではあるが、背中の屈辱的な暴力の痕とは違つて、足のそれは死に物狂いで磨いたエスマラルダ血凍道の修練の証であり、誇りを示す勲章だつた。

血は繋がつていなければ義兄とよく似た、鮮紅色の垂れ目と濃く、きりりと釣り上がつた眉。顔はハニートラップに使える程度には整つていると自負はしているが、服の下は自分でも女としてどうかと思うような傷だらけの身体。

五歳のときに教会でエスマラルダの適性を見出されてから20年。そして諸々の異世界渡航含めてのプラスアルファの数年間。いつも異世界渡航が終われば飛ばされる前の時間軸の身体に戻されるため便宜的に25歳を名乗つてはいるが、体感時間として

はその年齢以上の年月のほとんどを、戦いに費やしてきた。傷の数だけ修羅場を潜り抜けてきたようなものだ。

……私という人間の醜悪さの証左でもあつた。

正義のためのはずなのに、正義を守るために取る手段は限りなく悪に近い。大義はあれど、どう取り繕つたつて私はただの人殺しである。

悪をもつて善を守る。私にとつてなによりもかけがえのない人を守るためだけに、さして執着もない世界を救うために手を血に染めた。裏切り者、スペイを直接手にかけはしなくとも、数多く居る構成員の中から限りなく黒に近い者をあぶり出し、肅清に加担している時点で同罪だ。

汚れ仕事を請け負つたことを後悔したことはない。友と呼んだものを自分の手で氷漬けにして私設部隊に引き渡し、死ぬよりも辛い拷問にかけさせた罪から逃げる気も毛頭ない。私が生きるために、殺したのだ。彼らの命を背負つて私は今ここに立つている。あの異界都市が消え、吸血鬼の脅威が減れば、すぐさま自らの罪を認めて自首しようかと考えるほどには、許しがたい蛮行でもつてライブラを守り、世界を救つてきた。

他の誰でもない、私自身に、私のすべて、なにもかもに、私は絶望している。

パーシヴアルの家臣への誘いを有耶無耶にして保留にし続けているのもそのせいだ。

戦闘能力だけでなく、並外れた頭脳、情報網を求められることは数多くあつた。何も

持たない私は、命の恩人であるクラウスとステイブンを支えるために、組織の補佐を務めるために必要なあらゆるものを持ちた。そうでもないと自分に価値など無かったから。自分の身も守れないお荷物にはなりたくないが、世界の盾となる彼らの支えになればと思った。そのために怪物じみたものに変容してしまった頭脳を活かせるなら、実験動物扱いされた地獄の数年も無駄では無かつたと認めることができた。でも、私の信念、私の覚悟を、認めてくれたのは。能力だけを見て欲するのではなく、私という人間が欲しいと言つてくれたのは、パーシヴアルが初めてだつた。

たとえ私の犯してきた罪を知らずとも、ある折に呴いた「正義も悪も大差ない。立場が違うだけだろう」という言葉が妙に心に刺さつて、私が勝手に救われたのだ。不必要に自分を貶めなくていいのだと言われた気がして、嬉しかつたのだ。

……それでも、パーシヴアルの理想の国に、彼の隣に家臣として立つ自分が想像できない。闇にどっぷりと浸かってしまった自分では、いつ元の世界に帰るともしれない自分では、やはりあの赤い王の信頼する家臣にはふさわしくなかろうと思つてしまふのだ。

「——い、おい、クリスティアナ。入る、ぞ……」

苛立つたような声が不意に耳に入り、はたと我に返つて振り向けば、ぎよつと朽葉色の目を見開いたパーシヴアルが自室のドアを開きかけた体勢のまま固まっていた。ぱちり、と瞬きをした拍子に、瞳から冷たい滴がこぼれ落ちて頬を濡らし、鎖骨にぶつかって弾けた。

ノックの音も呼びかけも、あまつさえ近づく気配すら気付かなかつた不覚を取つた事にしまつたと思うよりも、今のタオル一枚しか身に纏つていらない己の姿を思い出して私は青ざめた。

普段徹底して露出を控えている自分にとつて、身に纏つているのがタオル一枚という裸にも近い姿を見られたことにに対する羞恥ではない。そんな可愛げなどではない。常の堅物なパーシヴアルなら顔を真つ赤にして、即座に踵を返すところだが、それを忘れてじつと見つめている場所が、最も醜く残つた火傷痕、爛れ引き攣つた背中だと気づいたからだ。

これまでこの傷を見て浴びた侮蔑、興味本位の探る目、遠慮のない氣味悪がる声を思い出して顔から血の気が引いた。

「パ」

「……おい、クリス。その火傷痕はどうした、誰に付けられた、言え」

「え、あの、ちょ、パーシヴアル、落ち着いて」

カツカツと鉄靴を鳴らして歩み寄ってきたパーシヴアルの声は聞いたこともない低さと鋭さだった。詰問されるようなおどろおどろしいトーンに面食らい、思わず胸の前で片手を掲げて制止しようとするが、構わず彼我の距離を詰められ、睨めつける視線の鋭さに押し黙った。頭の先から爪先まで、市場で目利きをするような、感情を挟まない確認のような目つきが肌の上を這う。常から刻まれている眉間のシワがさらに寄つたのを見て取つて、気まずさに目を伏せた。

居心地の悪い空気に肌を冷やすこと数呼吸分、パーシヴアルが静かに口を開いた。

「……かなりの古傷とはいえ、お前ほどの技量の女が背中に深い火傷を負うなど相当だろう。しかも燃え盛る火に灼かれたのではないな？　何度も焼きごてを押されたような痕だ」

大きな手が頬を滑り、髪から滴つたものではない水氣で濡れた目元を指の腹で拭われる。自然と見上げる形になつた精悍な面差しは、憂慮で険しく顰められていた。

「お前を害したのはどこの下郎だ。消し炭にしてくれる」

見上げた先の朽葉色の瞳に、怒りの炎が燃え上がっている。自分のことのように憤怒を示す姿に、本当に実行しそうな苛立ちの籠もつた声に。私は瞬きを繰り返した後、湧き出る感情のまま、ふふ、と笑みを零した。笑うつもりはなかつたのだが、心配されて嬉しくて、少しまず痒かつたのだ。

「!? 何故笑う、俺は本気でだな……」

「いや、うん。流石はパーシヴァルだなと思つて」

「は?」

「これを見て気持ち悪がるどころか、真っ先に心配してくれるところが君らしい」

「……」

途端にスンツ、とチベットスナギツネのような（こつちである動物のようなんとも言えない真顔の例えが思いつかなかつた）真顔になつたパーシヴァルに己の失言を悟つたが、どこが彼の瘤に障つたのか分からずうろたえる。と、ばちつと目の前に火花が走つた。無防備だつた額を指で弾かれたのだと遅れて思考が追いつく間に、思わず軽くのけぞり、額を押さえた。

「!! つ、いつた」

「お前というやつは、ほんとうに、……いや、何も言うまい」

「ええ? ……まあいいか、とりあえず着替えたいから出てつてほしいんだ、け、あ」手を離したり後ろにのけぞつたりしたのが良くなかったのだろう、巻き付けていたタオルが不意に緩んだ。胸元でゆるく折り込んでいたタオルの端が、身じろぎのはずみで外れ、ぺろりと前に垂れ下がる。タオルの端をとつさに掴んで生まれたままの姿を晒すのは免れたものの、眼の前に立つていたせいで大きくはだけた胸元を、不可抗力で目の

当たりにしてしまった戦友の白い肌がボツ、と火が吹き出そうな勢いで朱に染まつた。生睡と声にならない悲鳴を飲み込んだらしい喉から、音になりそこねた声の残滓が尾を引く。

「~~~~ツツ、早く服を着ろ馬鹿者!!!」

バサーツ、とパーシヴアルが肩に掛けていた上着を顔めがけて投げつけられ、視界が塞がる。その間にドアがけたましく閉まる音と荒々しい足音がものすごい早足で遠くに去つていくのを感じながら、私は大きな上着を顔から引っ剥がしてため息をついた。

「人を痴女みたいに言わないでほしいんだけどな」

露出狂の趣味はない。

そんな独り言を受け止めてくれる相手もいないので、手触りの良い布でつくられた上着を軽く畳んで、皺にならないよう椅子の背に掛け、また誰かに侵入される前に衣服を手早く身につける。そうして革のブーツに足を通すころ、不意にとあることに気づいた。

「……そりゃ、何の用で来たんだ？」

傷を見られた上にあのラッキースケベで顔を合わせるのは少々気まずいのだが、投げつけられた上着を返さなければならないし、私に用があるなら聞きに行つたほうが良い

だろう。

そう思い、上着を腕にかけた私は、パーシヴァルの気配が遠ざかっていった方向に向かつて部屋を出た。

その頃、色々悶々と考え込むパーシヴァルの赤らんだ頬を見咎めて、艇に戻ってきたヴエインやランスロットにからかわれているところに出くわし、パーシヴァルの反応から色々とフェードラツへ組に邪推されてニヤニヤされることなど、つゆとも知らず。

「全く……危機感というものが無いのかあいつは」

知らず口をついで出る悪態に覇氣はない。顔の半分に当たた手から、覆った頬が熱を持つているのが伝わってくる。

本来なら嫁入り前の同年代のうら若い女の着替え途中に、断りを入れたとはい踏み入った時点ですぐに踵を返すべきところを、背中の尋常ではない火傷の痕を、彼女の壯絶な人生が見て取れる傷だらけの四肢を見て、踏み込んだのは自分だ。タオルが外れかけ、きわどい場所ぎりぎりまでうつかり見てしまった胸元とて、自分の行動に大いに遠

因があるから責められない。

つまるところ、ずっと早鐘を打ちっぱなしの心臓をどうにか宥めすかし、目に焼き付いてしまった眼福からくる煩惱を払おうと、身体の内のエネルギーを八つ当たりじみた怒りに転換させているだけなのだ。思考を明後日に飛ばしていなければ、引き締まつていながら柔らかそうな印象を与える白肌がむわむわと頭に浮かび上がって、顔以外の場所に熱が集まりかねない。

顔の熱を冷ますためにグランサイファーの甲板に足を向ける。団員の殆どが出払ったグランサイファーは、いつもの喧騒が嘘のように静まり返っている。廊下には窓から温かい陽光が差し込み、飴色の木床に光の波を描いていた。

ふと、パーシヴァルは歩みを止めた。

「(だが、あれならば色々と納得がいく)」

パーシヴァルやクリスティアナよりずっと年下の少年、グランが率いる騎空団は、星の島、空の果てにあるイスタルシアを目指し空の航海を続いている。道中、団長やルリア、カタリナといった古株の面々の気質からか、立ち寄った島の村人からの依頼や困りごとを解決するべく色々と依頼を受けることが多い。路銀や対価の釣り合いを目当てにせず、時には慈善で手を差し伸べる稀有な彼らの志に賛同するようにして、騎空団に所属を決めたものも多い。パーシヴァルやクリスもそういった経緯でこの艇に参加し

た。

数多くこなしてきた依頼の中で、荷物運びは特に多い依頼だ。持ち逃げされる可能性は否定できないが、そういう場合は騎空団の信用に関わる上、違反を繰り返すようなら全空の秩序を維持する秩序の騎空団が黙つては居ない。魔物が多い島などでは陸路より遙かに安全で多くのものを運べるため、騎空団への依頼は絶えない。

とはいって、騎空艇が停泊できない山間だつたり、開けた場所のない地では商隊を護衛したりといふパターンも多く、そういった依頼では日数を跨ぐため、森のなかで野営することも多かつた。

となると、必然的に川などで水浴びをして身を清めることもある。老若男女入り交じる騎空団なので、そういう場合はいくつかのグループに分けて、水浴びをしない面々は水浴び場が直接見えない距離に離れつつ、覗きをしそうな不届き者は持ち場を抜け出していないか何人かで常にマークしながら、川の周辺を警戒するのを繰り返すのがルールだ。

が、そのことに関してパーシヴアルはつい数日前、カタリナから相談を受けていた。

同性であつてもクリスティアナが誰かと共に水浴びをするのを頑なに（とはいへ角が立たないようのらりくらりと理由を並べ立ててだが）拒み、いつの間にか身奇麗にしているのだが、なにか事情を知らないか、と。

まつとうに考えて、同性のカタリナですら聞けない理由を自分に訊くのはお門違いではとパーシヴアルは一瞬思つたものの、騎空団に所属してからの年月よりもずっと長い時間を共に旅していた身だからこそ、なにか知つてゐるのではと望みを掛けたのだろうということに思い当たつて、喉から出かけた苦言を飲み込んだ。そうしてそのまま首を横に振つた自分にそうか、とカタリナが肩を落としたのは記憶に新しい。

「ま、まあクリスのことだ。何か訳ありなのだろう……グランがあれだけ慕う人格者だ、我々を嫌つて、という訳でもないだろうしな。すまない、妙なことを聞いてしまつた」クリスを心配してのカタリナの言葉に気にするなど返したもの、そのことが心にずっと引っかかつたままだつた。

何しろ、グランサイファーに乗るまでの数年間、共に旅をしていても、パーシヴアルがクリスの身の上について知つていることはごく僅かだ。殆ど知らないと言つても良いほどに。

出会いこそ、諸国漫遊の途中で訪れた、のどかな村を襲つた魔物のスタンピードにくわし、まともに戦える者が居ない村人たちを守るため、お互いよそ者ながら奮戦した、というものだ。

それだけならこのご時世では悲しいかなよくあることだが、魔物の大群に対してたつ

た二人という圧倒的劣勢ながらも互いの機転と火力で戦況をひっくり返し、消耗を強いられながらもなんとか防衛を成し遂げ魔物を倒し終えた後、クリスティアナが戦いを終えて自分とパーシヴァルに必要な処置をした後、休まずにそのままの足で傷ついた村人たちを重症のもの、身体の弱い子ども、老人、妊婦を優先して治療して回ったのを見たからだ。

大した傷でもないのに先に俺を治せとわめく男にも怯むどころか理路整然と論破し、暴言を浴びせられながらもその男もきちんと治療して回った胆力と正しさはもとより、治療すべき怪我人の家族が行えるよう、理解し実践できるまで手ほどきに付き合う姿に、安い後も怪我人の家族が行えるよう、理解し実践できるまで手ほどきに付き合う姿に、安い言い方をすれば感動したのだ。言動から滲み出る、自分にまだない知識を感じさせる知性と、それを行動に反映させている女の旅人は、理想の国を作るために様々な島、村を漫遊するパーシヴァルには、是が非でも家臣に迎えたい理想的な人間だった。

家臣への勧誘は断られ続けているが、パーシヴァルの理想を聞いても一笑に伏すどころか「貴方なら出来そうね」と穏やかに肯定したクリスと縁あつて、二人で歩んできた旅の日々は心地よかつた。クリスティアナは互いのプライベートな事情は弁え、あれこれと深く立ち入つてくるような厚顔さは見せず、ウエールズの三男と知つても色目ひとつ使わなかつた。パーシヴァルを一人の騎士として、一人の個人として、身分関係なく

対等に接してきたのが気楽だつたのかもしない。

戦術のことで意見を求めれば、自分では思いもつかなかつた、はつとさせられるような案が出てくる頭の柔軟さ、見識の深さも興味深かつた。自分のことを話すよりも相手の話を聞くほうが楽しそうにする聞き上手であつたし、旅の途中で訪れた村の、戦争や魔物のせいで親をなくした子どもたちにピアノや琴などその場にある楽器を使って音楽を爪弾き、聞いたこともないおとぎ話や冒険譚、伝承を語るのが上手い語り上手でもあつた。

自分より2つ年下の、庶民とは思えない教養の高さ、立ちふるまいから、自分に似た上流階級特有の気品さを感じるのに、妙に世渡り上手で類まれな戦闘能力を持つアンバラヌスさから、よほど訳ありなのだろうと思つて、旅立つた理由も、旅をしている目的も深く訊くことは無かつた。

だが、あの火傷痕をみれば、大体の事情は察せてしまえた。

背中に幾度も真っ赤に熱した焼き^{マサニ}ごてを押し付けられたような痕が重なつてできた火傷痕の色濃さから、その皮膚の爛れた程度、深さ、それに伴つた激痛を推し量れてしまつた。パーシヴアルの愛剣のように炎を纏つた武器で傷つけられたわけでもなく、土地を焼く炎に服ごと皮膚をあぶられたのでもなく、人為的な悪意に無理やり屈服させら

れた上で、人を人とも思わぬ行為を繰り返した下衆の仕業なのだと。傷跡の周囲に走る皮膚の引き攣れを加味すれば、成長期という一番回復力の高い時期に受けた傷にもかかわらずあれほど残るほど、慘憺たる目に遭つてきただろう、と。火傷以外にも体中に走る刀傷、銃創、それらの暴力に対抗するために酷使した足の損傷ぶりを見れば明らかだつた。

かつてフェードラツへの黒竜騎士団に所属し、今も様々な国の姿を見てきたパーシヴァルでさえ一步気圧されてしまうような、クリスティアナが文字通り血反吐を吐いて手にし、積み上げた人生の証。

クリスの口ぶりからも、これまで何度も醜いだの何だと、口さがないを言葉を囁かれ、白い目を向けられてきたのだろう。彼女の性格を考えれば、良好な関係を築いてきたグランたち騎空団の団員たちに知られた後の反応を恐れ、気遣つたに違いない。そんな輩は居ないとは思うが、想像するだけで胸を押しつぶしていくも不思議ではない。傷を見てしまつた自分を見返す鮮やかな紅色の目は、隠しきれない動揺と怯えでゆらぎ、常に大きく崩れない表情ははつきりと分かるほど青ざめていたのだから。

「……何度、泣いたのだろうな」

彼女が自分の闖入に気づいて振り返る寸前、姿見越しに見たその表情は、驚くほど空洞だつた。どこにも焦点の合わない、星の消えた蘇芳は暗く翳り、感情を映さない美貌

は人形のようには生氣を感じさせなかつた。人とはあんな顔も出来るのかと驚くほど、絶望という言葉が似合いすぎる姿だつた。振り返りざまに生氣を取り戻した彼女の頬を伝つた涙が、泣いているというのに、確かに彼女は生きた人間だと、見ているこちらをほつとさせるくらいには。

だから、彼女にあんな顔をさせた人間がどうしようもなく憎らしく、今すぐ消し炭にしてやりたいほどの怒りに震えた。あんな顔をしないで済むように、元気づけてやりたかったのだ。得意の話術で（といつても今回は無意識だろうが）上手いように斜め上に話をはぐらかされてしまつたのには気づいたが、あまりに年相応の少女のように、可憐に笑うものだから、気勢を削がれて追求する気になれなくなつてしまつた。

……だからだろうか、妙に庇護欲が湧いてしまつてむず痒い。

そうやつて甲板の縁に寄りかかつて頬杖をついて悩みこんでいたのが良くなかつた。

「？？？」
「？？」
「？」

即座に後ろを振り向けば、不思議そうな顔で首を傾げるランスロットとヴエインが立つていた。

「！」
にゅつと背後から湧いて出た気配と声に、ごまかしきれないほど派手に肩が跳ねた。

「ききき貴様ら、いつの間に」

「いや、今さつき。珍しくパーさんが一人で黄昏れてるからどうかしたのかなって」

そう語る二人は鎧姿ではなく平服で、手には中身がこぼれそうなほど詰め込まれた紙袋が抱えられている。気配を察知出来なかつたことにもそうだが、声に出したつもりがなかつた声が独り言として零れていたことに舌打つ。

「で、誰が泣いてたんだ?」

「……貴様らには関係のないことだ」

「いや、気になるつて! 誰か落ち込んでるなら元気づけてやりたいしさ」

「そうだぞパーシヴアル、口ぶりからして騎空団の誰かだろう? ……というか、何か顔が赤くないか、お前」

「!」

「……え、まさかパーさん、パーさんに限つて無いと思うけど、誰か泣かせた上で顔赤くしてんの?」

どう曲解したらそんな発想に至るのか。駄犬ヴエインの当たつているようで全くの見当違いな、ともすれば変態扱いするような言い草にひくりと口元が引き攣つた。ランスロットがあーあ、と苦笑するような、それでいて展開を少し楽しんでいるような質の悪い中途半端な笑みが余計に瘤に障る。

「駄犬……貴様、よほど命が惜しくないと見えるな……」

「あつちよつとまつてパーさん、俺が悪かつた、悪かつたから剣抜こうとするのやめよう!? 俺今丸腰だし折角の買い出ししてきた食材が駄目になっちゃうから!!」

「まあまあ、パー・シ・ヴ・アル落ち着けって」

「貴様も貴様だランスロット……!!」

腰帯に提げていた愛剣の柄を掴み引き抜きかけたその時、甲板と船室を繋ぐドアが開いて、よく通る声が俺の名を呼んだ。

「パー・シ・ヴ・アル！」

ぎつ、と反射的に身体の動きが止まる。

ほんの小さなヒール音を鳴らしてこちらに駆け寄つてくるのは、先程上着を投げつけた相手だつた。腕に畳んだ俺の上着を掛け、小走りで駆け寄つてくるクリスはきちんと身なりを整えてはいたものの、急いだのかしつとりと髪は濡れたままで、化粧こそ施していないが、湯上がりの上気した頬が妙に艶めかしい。ほお、と傍らの二人も意味深なため息を吐くほどだ。先程の失態も手伝つて、ようやく引いていた頬の熱がぶり返しそうなのを、氣力で抑える。

「さつきはわざわざ訪ねてきてくれたのに色々ごめん、何か用があつたんじゃないかと思つて」

「……気にするな、というかきちんと髪を乾かせ、風邪を引くぞ」

「あ、忘れてた。まあ大丈夫だよ。上着もありがとう」

「ああ」

「それで、何か用だつた?」

「……大した用じやない。が、少し前にもう少し上等な魔石や布がほしいと零していただろう。良さそうな店を見かけたから行つてみてはどうだと伝える予定だつただけだ」

ことりと首を傾げるクリスから視線を反らし、何気なさを装つて嘯いた。

魔石や布を欲しがつていたのも、店を見かけたのも本当だが、訪室したのは別の理由——カタリナからの相談事を、遠まわしに訊ねてみるつもりだつた。

だが、その理由も分かり、この場にランスロットやヴェインという第三者がいる以上、無闇矢鱈にトラウマを言いふらして引っ搔き回す真似をしたくないがゆえの、眞実と嘘を織り交ぜた言い訳だつたのだが——

「ほほう」

「へえ」

視界の隅でニヤニヤと意味深な笑みを浮かべる二人に、パーシヴアルはこめかみが引き攣るのを感じた。絶対に良からぬ事を考えているとすぐわかる、生暖かい視線と表情に苦言を呈そと口を開きかけたものの、ぱつと表情を明るくして腕を掴んできたクリ

スの声に邪魔をされた。

「本当? それなら今から都合が良かつたら案内してくれないかな?」

「は、ああ、構わないが」

クリスの勢いに押されて頷けば、小さくガツツポーズ、なんて彼女らしくない分かりやすい喜び方をした。

「上質なパワーストーンを手に入れたら、君やグラン、ルリアたちの護りになるようなルーン石を作ろうと思つてたんだ。このあたりの空域は鉱石が特産の島が多いと聞いていたから期待してたんだけど、パーシヴアルのお眼鏡に叶うとなれば確実だろうしね」

急いで準備してくる! と子どものように浮ついた足取りで船内に戻つたクリステイアナを見送つていた俺は、後頭部に突き刺さる生ぬるい視線に後ろを振り返つた。

「うん、クリステイアナつてたまに何考へてるか分かんない、ジークフリートさんっぽいとこあるけど、いい子だもんな! 応援してるぜ!!」

「そうだな。彼女ならパーシヴアルともお似合いだろう。頑張れよ」

「貴様ら、言わせておけば好き勝手に…………っ!!」

妙にいい笑顔でサムズアップした二人に掴みかかろうとするも避けられ、数分後、クリスが再び甲板に戻ってくるまでの間、いい年した男三人での追いかけっこは続くのだった。

竜殺しと不死殺し

流転する胎児

みなしごもそうでない子供も分け隔てなく、クリスは音楽や物語を語つて曇った幼子の笑顔を増やしていた。

物静かそうな顔に似合わず子どもが寄つていっても嫌そうな顔一つせずに相手しているのを、共に旅を始めた当初は意外に思つたものだ。

偽善ではないかと問いかければ、迷いも動搖もなくそうかもねとあっさりとした返答が返つてきて、こちらの方が虚をつかれた。

振り返つた赤色は透明な色をして笑つていた。

私は、かつて私がされたかつたことやされて嬉しかつたことをやつてゐるに過ぎないのさ、と。

「されたかつたこと？」

「孤児だつたからね」

（二人で諸国漫遊してた頃のパーシヴァルとの会話。）

霜凍りて音無と成る

冬が歩いてくる。周囲の景色を振りまいた冷氣で白と青に染めて、霜に凍る地面をさりさりと音を立てて忍び寄つてくる。

死が歩いてくる。人の形をした死が、倒れ伏す赤髪の男を背に、こちらへと。見下ろす蘇芳色の縁取りは炯々とみどりに染まって、目玉さえ凍りついたように銀のヴエールで覆われていた。

「私はそれほど御大層な身分でもないし、他人に講釈垂れるほど上等な人間でもない。

ああ、でも心が狭いともたまに言われるんだよ……こういつた時に。

と、いうわけで。——何も感じず惨めに死ね。我が王を害したその罪、その不敬。万死に値する」

青が、息も音もなにもかもを飲み込んでいく。

ダイヤモンドダストすら舞う中で凍てついた双眸を向ける彼女を、誰かが氷妃と畏怖を込めて呼んだのだつた。

(パーさん不意打ちで攻撃されて激おこ、家臣になるのを腹くくつたクリス)

竜殺しと不死殺し

「すごい剣よね」

「お前の十字架には負けるさ」

力クテルグラスを手にした竜殺しの英雄は、素顔を覆い隠し身体を覆うベイルアーマーは脱ぎ捨て、シンプルな装いで騎空艇のバークウンターに座っていた。くるりと回したグラスの中で、琥珀色の液体と丸い氷が波間を描く。

武装を解いているのにも関わらず、愛剣だけは肌身離さず持ち歩く彼を、彼がこの騎空艇に合流した当時は呆れた目で見る者も居たが、クリスティアナは相変わらずだと苦笑一つに留め、苦言を呈することは無かつた。

立場は違えど、気持ちはよくわかつたのだ。使い慣れた武器とは、もはや切り離せない体の一部のようなものだ。クリスティアナにとつて両脚、そして技を使うために履いている出血針が仕込まれたブーツがそれに当たる。身体から離せば落ち着かないし、それを誰かと共にいる時に許すということは、それだけで何よりも信頼の証になるだろう。殺伐とした世界に身を置いてきた者同士、そこには確かに通ずるものがあった。特にジークフリートが国を出る羽目になつた背景には、フェードラツへの執政官・イザベラの謀略があつたことも考えれば、一時的とて剣を手放すなど以ての外だらう。

「邪竜ファフニールを斬り、その血を浴びた魔剣か。……持つてみても？」

「構わんよ。……ただし、持てるなら、な」

ふ、と緩んだジークフリートの表情は、酒気を飲み干してもさして代わり映えしない。面白がるような挑発的な聲音に一瞬ちらりと赤い瞳を向けたものの、すぐさまその視線は大剣に落とされた。

壁に立てかけられた、身の丈を優に超すであろう大剣。漆黒と紅色を塗り固めたようなその柄に、華奢な指が添えられる。

一拍置いて、ぐつ、とクリスティアナの花貌に陰が走る。眉間に寄せられた皺が、その大剣の重量を物語つていた。

使い手としてその重量が如何ほどか知つていただけに、暖かく見守つていたジークフリートは、大剣の切つ先が床からゆつくくりと時間を掛けて離れていくのを見て目を見張つた。両足を踏ん張つて、無理をして持ち上げているわけではない。その証拠に、剣先に震えはまったくない。軽く前後に足を開いて、自然な構えを取る女は魔力での身体強化など使わずに、その細腕で持ち上げてみせたのだ。

どうして驚かずにいられるだろう。しかも、男のドワーフでなんとか持ち上がるかどうか、という重量の剣を、片腕で持ち上げたというのだからなおのこと驚きだ。

流石に船室内なので大きく取り回したりなどはしなかつたが、ふむ、と何やら上下に僅かに振つてみたり握り方を変えているクリスティアナに頬杖を付いたまま、大きく目

を見開いて珍しく固まるジークフリート。その視線に気づいて、クリスティアナはうつそりと目を細めて、艶然とした勝ち気な微笑みを浮かべた。

「私が何なのかな、知らなかつたわけじやないだろ？」

Anamnesis is over the roses

e.

早朝のウェールズ城は静かだつた。

朝露をはらんだ涼しい風が、吹き抜けのバルコニーから流れ込んでは頬や髪を撫でていく。白と青のコントラストが美しい白の廊下を歩いていた私は、ふとある場所で足を止めた。見上げた先の壁に掛けられているのは、豪奢な額縁に入っている肖像画。柔らかな陽光の中にしとやかに座す、長い赤髪を肩に流した美しい妙齢の女性が、こちらに微笑みかけていた。

「……綺麗な方ですね」
「……気づいていたか」

ぽつりとつぶやけば、中庭と地続きになつた側廊の柱の陰から、金髪の眼光鋭い美青年——このウェールズ城の主であるアグロヴァルが姿を現した。振り返りざまそれを見た私は、「気配には敏感なもので」と冗談めかして愛想笑いを浮かべた。ぴくり、とアグロヴァルの鉄面皮が僅かに歪むのが、朝の淡い陰りの中でもよく見えた。

先の事件で浅くない傷を負つた彼は、初めて顔を合わせたときのような絢爛な蒼銀の鎧と鎖帷子を着込んではおらず、だらしなく見えないようデザインされたゆつたりとしたシヤツと羽織という簡素な、それでいて質の良さそうなラフな佇まいだつた。シヤツの襟や袖ぐりから覗いた包帯が痛々しくはあるが、初対面の相手を威圧するような王者の風格と得体の知れなさを何處かに捨ててきたように、紅蓮の瞳は理知的な光を宿して凧いでいた。それこそが、あの赤い王が愛し尊敬した、長兄の素顔なのだろう。

こつり、とゆつくりと歩を進めてきたアグロヴアルが隣に立つと同時に、漸う口を開いた。

「ヘルツエロイデ・ウエールズ。我らの母だ」

「ああ、やはり。パーシヴアルから、素晴らしい方だつたと聞いています」

「そうか。……確かに、誰よりも優しく崇高であつたが、ゆえに愚かでもあつた」

悔恨のにじむ声。けれど氷のように凧いだ面差しは感情を伺わせないものだつた。

パーシヴアルから聞いていた母との思い出、そしてその最期を知つていた私は沈黙を貫いた。隣国の戦火で溢れた難民を受け入れた彼女。ありふれた日常、平穏による幸せを愛した人。人を助けることに理由を定義することなく困窮した人々に手を差し伸べ続け、その善良さで人々に慕われ続けた姿は、我がリーダー……クラウスと重なる。

「母に会いたい一心でかような凶事を起こしたが……パーシヴアルやお前たちに止めら

れて、目が覚めたようだ。世話をかけた」

「いいえ。貴方が無事でよかつたです、アグロヴァル殿。……それに、会えない人に会いたくなる気持ちは、私にも痛いほど理解できますから」

「ほう。貴様にもそんな人間がいるのか」

「ええ、沢山います」

「これまでの奇妙な旅路で、遙かな異世界で出会つてきた人々の顔が思い浮かぶ。

「……一番会いたい人は、ヘルツエロイデ様に似ている気がします」

「母上にか」

「ええ。お人好しで、人を疑うことを知らなくて。人を助けるのに理由などいらないと、躊躇いもなく手を差し伸べてしまうような、どうしようもなく眩しい人です」

まぶしいからあこがれた。

心の美しさに、あかなりたいと願つた。

だから、彼の優しさにつけ込もうとする不届き者を退ける役目を、選び取つた。

価値のない自分がようやく役に立てる、誇りと信念を抱いて、隣に立つたのだ。たとえ、その手段が彼に誇れるものではなくとも。

「……ああ、確かに、似ているな」

瞑目したアグロヴァルが、ほのかな笑みを口端に浮かべた。

マテリアル in グラブル

旅人がたどり着いたのは、果てしない蒼が続く空の世界。

空の果てを目指す少年、理想の国の建国を夢見る青年。

二人との偶然の出会いを境に、冷たくもやさしい、不器用な旅人はまた、大いなる運命の激流に巻き込まれることとなる。

「冰妃」クリスティアナ

S S R 水 バランス ヒューマン

25歳 170cm

趣味：読書、洋裁、吟遊

好き：珈琲、料理

嫌い：裏切り、自分自身

奥義：ニウエウス・カルケル・アブソルート

絶対零度の白冰瀑。

クリスが指定する対象範囲を冬に染め上げる大寒波を発生させ、一切の生命活動を断

ち切る氷獄に変える技。纖細で頑強な氷の檻の中で、人間も魔物も等しく氷の十字架となつてその場に墓標のごとくそびえ立つこととなるだろう。

絶対零度のエスマーラルダの血と魔術要素が組み合わされて生まれた、永遠に熔けることのない氷獄。

威力を調整することによつて即死から動きを止めるレベルまで自由に調整できる。

氷結による1Tのスタン効果、自身へのクリティカル確率中アップ付き。

アビリティ：

天泣：敵全体に水属性ダメージ／防護力15%DOWN／ダブルアタック・トリプルアタック確率DOWN

アグアセロ：効果中（3T）自身の奥義ダメージ+20%／味方全体に連続攻撃

確率上昇効果（15%、+で30%）

ファタ・モルガナ（逃水）：味方全体に回避付与（1T）

サポートアビリティ：

天秤の狩人：自身の残りHPが少ないほど攻撃力UP／被ダメージ時の奥義ゲー

ジ上昇率UP

半歩分の時間稼ぎ：一度だけ戦闘不能にならずHP1で耐える

本名、クリスティアナ・イグナシオ・スターフェイズ。

異世界の境界都市にて、異界からの影響力、邪悪を退けるため日夜戦う秘密結社ライブラの敏腕秘書。

玲瓏な顔立ちに、たおやかな所作は気品を感じさせる。見目に違わず冷静沈着で幅広い知識を有する才媛。

不死者である血界の眷属を倒すため、人外に片足突っ込んでいる戦闘力を持つ牙狩りの一員であり、その中でも汎用性トップの血法を自在に操る天才ゆえに、攻防補助治癒となんでもござれの万能型。

あらゆる属性への変化を遂げる「無属性」血液という特殊な血液から複数属性の血法を操る点から、グラブル世界では操る武器、血法によって属性変化する。

エスマーラルダ式血凍道（格闘）→水

水晶宮式血濤道（弓）→水

斗流血法・シナトベ（槍）→風

954 血弾格闘術（銃）→光

古代ルーン魔術など魔術→闇

異世界渡航で学んだ古代ルーン魔術や強力な魔術を一小節か二小節でドカドカ発動させるので一対多が得意と思わせて、一騎打ちもチーム戦も平均以上にこなしてみせ

る。戦力として有用性が高く、色々な所からスカウトが来る人材。

カリスマ持ちだが、それはあくまで軍師的なものであって、君主的な性質ではない。生まれながらにして誰かを支えるための才能があり、自分がリーダーの器ではないことも重々承知。

異世界渡航は過去に何度も経験しており慣れっこではある（「としては BBB → FG O → MHA → グラブル」）が、今回は世界体系も世界のスケールも違う空の世界のため、少々浮足立っている。

最初はグランの故郷であるザンクテインゼルの森に落ちる（メインストーリーの数年前）が、グランとの交流後、強制的に別の島に飛ばされ、一人旅を続ける。その中でとある村を襲つたスタンピードをきっかけに、諸国漫遊中のパーシヴアルと知り合う。

常識は妙にすこんと抜けているものの、秘書として培つてきた観察眼、交渉術、経理、世界各国の支部を転々としながら培つたラインヘルツ家仕込みの社交術に幅広く深い知識、困つた人間にはきちんと事態を精査した上で、行き詰まつた状況を開拓する案を提示してみせるなどの敏腕ぶりに唸つた。パーシヴアルに家臣勧誘される。半分は空の世界で生きているなら知つていてははずの当たり前の常識が抜けているのが心配なのもあつたが。だがクリスは様々な理由から申し出を辞退する。が、色々縁あつてグランの騎空団に参列するまでの数年間、旅を共にする。

赤毛、良いところのお坊ちゃん、責任感が強い、困っている人を放つておけないと、クラウスを想起させる要素が揃っているので郷愁を覚えつつも、パーシヴアルの正義感はクラウスほど潔癖でもないので息がしやすい。

戦友のような距離感での旅を続けているが、実はパーシヴアルの人間性はかなりクリスの好みど真ん中（異性のタイプ：真っ直ぐな人、裏切らない人、顔は綺麗系もしくはハンサム系。なお意外なギャップに弱い）生い立ち故に心の壁があまりに頑強すぎるが、その壁さえ叩き壊せば一気に落ちる。

グラン・ビィとは兄弟のような距離感。ルリアはその他人事とは到底思えない境遇とグランと魂を分け合っている点からも非常に可愛がっている。星晶獣を操る力を持っているとはいえ戦いとは無縁な普通の少女としての生活を送れるようになると、服を作つたり料理を教えてり、ルーンで作つたお守りを持たせたりと甲斐甲斐しい。イオも自分が知つてゐる魔術で教えられそうなものは教えたりと、ルリアとはまた違つた可愛がり方をしている。

親に見捨てられた捨て子であること、特異的な属性血液から牙狩りの強硬派の命令で師匠の元から拉致され、実験動物扱いされ拷問を受けた経験から、非常に自己評価が低く、道具的な意味でしか自分に価値を見いだせないでいる。異世界渡航を経て多少緩和されつつはあるが、自己愛の低さは変わらず。武器である血液も許されるならそつくり

入れ替えるといと願うほど憎んでいた。「信じるために疑い続ける」と言つてのけるほど
の極度の人間不信だが、ライブラの秘書として交渉役として活躍するために不信感を押
し殺し、交渉事が得意そうに振る舞い演じきつている。

(B B B世界では) 正式な公的免許は取っていないが、異世界で医術を勉強したことあり
医学薬学に詳しい。牙刈りとして血法という自然界に存在する力を発生させる技術
をふるう過程で必要なため、数学、化学、生物学にも強い。

孤児ながら兄やリーダーを支えるために交渉術から社交術、ダンスや音楽など幅広い
教養を高いレベルで身につけていたため周囲からは天才と目されがちだが、捨てられた
自分がクラウスたちに相応しい人間になるために、と無価値な自分に傍にいるための価
値をつけようと努力した結果。器用なだけで天才ではない。